

「ピアノ遊び」を通した
子どもの主体的な表現形成要因の研究

—14 年間の追跡データの分析を通して—

奥 村 直 子

「ピアノ遊び」を通した
子どもの主体的な表現形成要因の研究

—14 年間の追跡データの分析を通して—

Study of Children's Self-Directed Expression
Forming Factor through "Piano Play"

— Through the analysis of 14-year data—

奥 村 直 子

目 次

図一覧	v
表一覧	v
はじめに	1
第 1 章	先行研究と研究目的	3
第 1 節	先行研究	3
1	問題の所在	3
2	わが国の研究の現状	6
3	先行研究の成果と課題	9
第 2 節	研究の目的	10
第 3 節	論文の構成	11
第 4 節	用語の操作上の限定	12
1	「遊び」について	12
2	「ピアノ遊び」について	12
第 2 章	研究方法	14
第 1 節	フィールドワーク選定の理由	14
第 2 節	フィールドワークの対象と方法	16
1	対象の選定	16
2	データ収集期間、方法、内容、方針	16
(1) 期間	16
(2) データ収集の方法	16
(3) 内容	17
(4) 「ピアノ遊び」のレッスン方針	17
3	倫理的配慮	17
第 3 節	分析方法	18
1	分析方法の妥当性	18
2	分析手順	19
(1) GTA の手順	19
(2) GTA における用語の説明	21
(3) 分析の適用性と妥当性	22
第 4 節	対象の概要	26
1	観察対象児 Y 家族	26

	(1) 家族構成と居住環境	26	
	(2) 観察対象児	26	
	1) 対極者: 第1子A子	27	
	2) キーパーソン: 第2子B男	28	
	(3) 母	28	
	(4) 父	29	
	(5) 住居見取り図	30	
	① 2000年11月 図1	30	
	② 2006年7月～2007年10月 図2	31	
	③ 2007年11月～2008年2月19日 図3	32	
	④ 2008年2月20日～10月8日 図4	33	
	⑤ 2008年10月9日～2009年12月 図5	34	
	⑥ 2010年1月～8月 図6	35	
	⑦ 2010年8月～2013年8月 図7	36	
	⑧ 2013年8月 図8	37	
第3章	分析結果	38	
第1節	特性化	38	
1	事例1 2000年11月14日 場面1	39	
		場面2	41
2	事例2 2000年11月20日 場面3	44	
		場面4	47
3	事例3 2006年8月4日 場面5	49	
4	事例4 2006年9月6日 場面6	52	
5	事例5 2007年6月27日 場面7	55	
6	事例6 2007年8月29日 場面8	59	
		場面9	61
7	事例7 2007年9月25日 場面10	63	
8	事例8 2007年12月19日 場面11	66	
9	事例9 2008年2月13日 場面12	68	
		場面13	72
10	事例10 2008年2月20日 場面14	77	
11	事例11 2008年2月24日 場面15	79	
		場面16	82

1 2	事例 1 2	2008 年 2 月 27 日	場面 1 7	86
1 3	事例 1 3	2008 年 4 月 9 日	場面 1 8	91
1 4	事例 1 4	2008 年 5 月 21 日	場面 1 9	93
1 5	事例 1 5	2008 年 6 月 26 日	場面 2 0	95
1 6	事例 1 6	2008 年 11 月 19 日	場面 2 1	98
1 7	事例 1 7	2009 年 3 月 4 日	場面 2 2	102
1 8	事例 1 8	2010 年 1 月 27 日	場面 2 3	105
			場面 2 4	107
1 9	事例 1 9	2013 年 12 月 4 日	場面 2 5	110
第 2 節	概念の生成			116
第 3 節	カテゴリーの生成と「ピアノ遊び」の 3 つの段階			123
1	カテゴリー I【ピアノで遊び、表現する意欲】			125
2	カテゴリー II【ピアノ技術の競合】			126
3	カテゴリー III【憧れを抱いて努力する充実感】			128
4	カテゴリー IV【共に歌い弾く楽しさを享受】			130
5	カテゴリー V【囚われず表現し、思うがまま演奏する喜び】			131
6	「ピアノ遊び」の 3 つの段階			133
第 4 節	カテゴリープロセス図とストーリーライン			134
1	「ピアノ遊び」を通した主体的表現形成のプロセス図			134
2	ストーリーライン			136
	(1)【ピアノで遊び、表現する意欲】			136
	(2)【ピアノ技術の競合】			136
	(3)【憧れを抱いて努力する充実感】			137
	(4)【共に歌い弾く楽しさを享受】			137
	(5)【囚われず表現し、思うがまま演奏する喜び】			138
	(6)コアカテゴリー【あるがままの自分を表現する喜び】			138
第 5 節	理論仮説の生成			140
第 6 節	理論仮説の妥当性の検証—ピアノ指導者とのカンファレンス			141
1	ピアノ指導者とのカンファレンス実施状況			141
2	カンファレンス結果			141
	(1)カテゴリー I【ピアノで遊び、表現する意欲】			142
	(2)カテゴリー II【ピアノ技術の競合】			146
	(3)カテゴリー III【憧れを抱いて努力する充実感】			147

	(4) カテゴリーⅣ【共に歌い弾く楽しさを享受】	149
	(5) カテゴリーⅤ【囚われず表現し、思うがまま演奏する喜び】	152
	(6) コアカテゴリー『あるがままの自分を表現する喜び』	155
	(7) 全体のフィット感	159
第4章	考察	162
第1節	本研究の成果と課題	162
1	本研究の成果	162
2	本研究の課題	166
おわりに	167
引用文献	168
参考文献	171
資料	176
資料1	フィールド観察記録一覧表	177
資料2	カテゴリーⅠ【ピアノで遊び、表現する意欲】	180
資料3	カテゴリーⅡ【ピアノ技術の競合】	183
資料4	カテゴリーⅢ【憧れを抱いて努力する充実感】	187
資料5	カテゴリーⅣ【共に歌い弾く楽しさを享受】	191
資料6	カテゴリーⅤ【囚われず表現し、思うがまま演奏する喜び】	193
資料7	備考:親のかかわり特性表	195
謝辞		

図一覧

図 1	住居見取り図	2000 年 11 月	30
図 2	住居見取り図	2006 年 7 月～2007 年 10 月	31
図 3	住居見取り図	2007 年 11 月～2008 年 2 月 19 日	32
図 4	住居見取り図	2008 年 2 月 20 日～10 月 8 日	33
図 5	住居見取り図	2008 年 10 月 9 日～2009 年 12 月	34
図 6	住居見取り図	2010 年 1 月～8 月	35
図 7	住居見取り図	2010 年 8 月～2013 年 8 月	36
図 8	住居見取り図	2013 年 8 月	37
図 9	「ピアノ遊び」を通じた主体的表現形成のカテゴリープロセス図		134

表一覧

表 1	「ピアノ遊び」のレッスン方針	17
表 2	GTA の手順	20
表 3	カンファレンス期日と参加者	25
表 4	カンファレンス実施状況	141

はじめに

本研究は、家庭における「ピアノ遊び」を通した子どもの主体的な表現形成について明らかにすることを目的とする。

この研究を支えた現状認識として、日本学術会議の報告¹「我が国の子どもの成育環境の改善にむけて—成育空間・成育方法・成育時間の課題と提言—」があり、その中で子どもの遊びについての意義が改めて注目されたことである。それに関連する個所を次に要約する²。すなわち「子どもの遊びに大人が関わり、遊びの範囲を広げ、能動的な関わりや体や手を使う遊びを導入する必要がある」と指摘されている。「家庭・地域では家の中の遊びが中心になる中で、どのように子どもの遊びを広げていくかは社会的な課題である」との提言である。2014年の『幼保連携型 認定こども園教育・保育要領³』に示された内容は、この学術会議の提言に応えたものであるという位置づけが可能である。その中で、本研究とのかかわりで注目したいのは次の点である。子どもの「主体的な活動」及び「自発的な活動」を促す「遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習である」と指摘されていることである。「一人一人が主体的に活動し、自発性や探索意欲などを高めるとともに、自分への自信を持つことができるよう成長の過程を見守り、適切に働きかけること」などである。その中で、特に注目されるのは、子どもの「主体的な活動」そして「自発的で意欲的な活動」を高め、「自分への自信を持つことができるよう」、幼児期から児童期にかけて子ども一人一人の成長の過程をいかに実現するかということが改めて指摘された点である。

この提言と要領は更に家庭において、いかに幼児・児童が主体的に成長していく環境を設定することが大切であるかという問題にまで発展していく。かかる観点から、文部科学省の生涯学習審議会⁴の提言は注目に値する。家庭における幼児期・児童期における主体性の育成については、濱名陽子⁵、片

¹ 日本学術会議では、「我が国の子どもの成育環境の改善にむけて—成育空間・成育方法・成育時間の課題と提言—」等と題して、我が国の子どもたちが置かれている現状に対して、極めて危機的な状況にあることを指摘し、総合的、組織的、行動的戦略の提言を行っている。日本学術会議「我が国のこどもの成育環境の改善にむけて—成育空間の課題と提言—」子どもの成育環境分科会、2008年、2011年、2013年。

² 日本学術会議の提言、2011年、10—13頁。

³ 『幼保連携型 認定こども園教育・保育要領』内閣府・文部科学省・厚生労働省、チャイルド本社、2014年、3月、5-23頁。

⁴ 文部科学省の生涯学習審議会（2000年）では次のように報告している。「家庭教育はすべての教育の出発点であるが、近年の都市化、核家族化、少子化などに伴い、家庭の教育力が低下していると懸念されている。また、昨今憂慮されている青少年の問題行動の背景には、家庭における教育の在り方が密接に関係していると言われ、家庭における教育機能を高めていくことが極めて重要な課題となっている」。その後2004年、2005年、2007年にも、子どもを育む家庭の重要性と共に、学校や地域、行政からの家庭への支援の必要性が示されている。文部科学省「家庭の教育力の充実等のための社会教育行政の体制整備について（報告）」社会教育分科審議会報告、2000年11月28日。

⁵ 濱名陽子は「家庭の教育力＝低下」という認識が、十分なデータや客観的な分析に基づいておらずその信

岡栄美⁶、小山静子⁷、荻谷剛彦⁸他、志水宏吉⁹、本田由紀¹⁰も指摘しているところである。

本論文では、冒頭の研究目的を達成するために、次のような研究の構成を行った。まず第 1 章では問題の所在を踏まえながら、「ピアノ遊び」に関連する先行研究を取り上げ、研究目的を設定する。第 2 章では、研究方法である質的研究法の選定理由とその方法を示す。また分析方法についての説明を加える。第 3 章の分析では、19 事例 25 場面の事例の特性化を行い、概念の生成、カテゴリーの生成、カテゴリープロセス図とストーリーラインを示し、理論仮説の生成を行う。さらに、理論仮説の妥当性の検証のために、カンファレンスを行い結果を記述する。第 4 章では全体考察を行い本論文を締めくくる。

憑性の問い直しの必要と共に、家庭教育や家庭の文化的要因の重要性を指摘する最近の研究による知見を示している。濱名は荻谷剛彦他、志水宏吉の研究を紹介し、「家庭教育のあり方は動かすことが出来る変数である」と捉え、「文化資本の中で重要な位置を占めるハビトゥスが、実際に家庭の中で親から子に相続されていくプロセスを検討する研究が求められる」と期待している。濱名陽子「幼児教育の変化と幼児教育の社会学」『教育社会学研究』第 88 集、2011 年、87-102 頁。

⁶ 片岡栄美の文化資本の研究は、身体化レベルの文化資本として、「幼少時の家庭での文化的経験（幼少時文化資本）」について、子ども時代にクラシック音楽に接したかなど「幼少時文化資本」では、文化的財（ピアノなど）を子どもに与えただけでは基本的に文化的なことは伝わらず、文化的経験により身体化された文化資本を前提として考え、音楽等に親しめない親は、子どもに積極的に文化的経験を伝えにくいと述べている。片岡栄美「教育達成過程における家族の教育戦略—文化資本効果と学校外教育投資効果のジェンダー差を中心に—」『教育学研究』第 68 巻第 3 号、2001 年、259-273 頁。

⁷ 小山静子は、家庭の教育力低下の認識に疑問を投げかけ、「事実」をまず検討する必要性を訴えている。小山静子「家庭の教育力の低下という言説」『人間フォーラム 13』京都大学大学院、人間・環境学研究科、2003 年、52 頁。

⁸ 荻谷剛彦、志水宏吉『学力の社会学』岩波書店、2004 年。

⁹ 志水宏吉『学力を育てる』岩波新書 978、岩波書店、2010 年（10 刷）。

¹⁰ 本田由紀は、「ハイパー・メリトクラシー」化という概念を提唱している。「家庭の中での子育ての具体的なあり方やその社会階層による相違に対する研究関心が特に最近高まっていることの背景」について、時代の要求の変化により「新しい人材ニーズに合致した諸能力が形成される場として、家庭の重要性がかつてよりもさらに注目される」事態について述べている。さらに「家庭における日常的な相互作用のあり方が子供の非認知的な能力やパーソナリティに与える微妙な影響関係であるだけに、その実態を明らかにするためには、質的で詳細な調査研究がさらに必要とされる」と述べる。

本田由紀が提唱した「ハイパー・メリトクラシー」化という概念は、「学力のような習得可能・計測可能で知的かつ標準的な「近代型能力」が社会的地位達成への主要な基準とされていた「メリトクラシー」社会から、現代は意欲や創造性、独自性、コミュニケーション能力など、非知的で人格と直結し習得や計測の困難な「ポスト近代型能力」、日本の文脈で言えば「人間力」的な要素が、個人の地位達成において重要化する「ハイパー・メリトクラシー」段階に移行しつつある」と述べる。

本田由紀『「家庭教育」の隘路—子育てに脅迫される母親たち』勁草書房、2008 年、28-30 頁。

第 1 章 先行研究と研究目的

第 1 節 先行研究

1 問題の所在

本研究を進めるにあたって、研究課題を限定する上でまず取り上げなければいけないのは、ジェームス・マーセル（James L. Mursell）、梅本堯夫、ロナルド・カヴァイエ（Ronald Cavaye）らの、ピアノレッスンの導入期における「ピアノ遊び」にかかわる問題提起である。

マーセル¹¹は、自主性と言う観点から次のような問題点を指摘し、音楽的成長にとって自主性の重要性を挙げている。「音楽的自主性とは、学習者の、みずからの意思で音楽活動を試みようとする願望と能力を意味する」。それは、「音楽が学習者の生活の中で、彼自身の意志と欲求によって、一つの大切な役割を持つようになることである」。また、「音楽的自主性は、未熟な、初歩の内から養わなければならない」とし、「音楽的自主性の発達は、継続的な過程として扱われなければならない」と述べている。子どもが音楽的にも未熟な導入段階から、自主性を継続的に育てるとの視点は、子どもの主体的な表現活動の生成の上からも重要な視点であると考ええる。

マーセルの問題提起を受けて梅本¹²は、「音楽は子どもにとって、遊びの一種である。」との視点から、「大人と違って遊びが生活の中心となっている子どもにとっては、歌うことも、音を鳴らすことも、生活にとって、また成長にとって必要不可欠の精神的栄養となっている。」と述べる。その上で、子どもへの音楽教育を開始する際に、「それが子どもの負担にならなければよいが、そこに現在の進学競争と同じような事態が音楽の稽古でも起こり、子どもへの要求が次第に高くエスカレートし、より幼い時期から、より高度な技術を身につけさせようという必死の努力が行われ、音楽は遊びどころではなくなる」、と子どもを取り巻く現状から、音楽が子どもにとって遊びではなくなる危険性を述べる。

¹¹ James L. Mursell, 前掲訳書、1971 年、175－195 頁。James L. Mursell, *Education for Musical Growth*, Ginn and Company, 1948. 美田節子訳『音楽的成長のための教育』音楽の友社、1971 年、288-303 頁。

¹² 梅本は、日本における傾向として「一般教育も犠牲にして音楽、それもある一つの楽器の習得だけに集中して子どもを訓練するという事態がよくみられる。日本ではとにかくこのように一点集中主義の教育がまかり通っていて、当面の目標に関係ないむだなことは一切しないという風潮がある」と述べている。梅本堯夫『子どもと音楽』東京大学出版会、1999 年、2-4 頁。

さて、親が子どもに習い事をさせるのは現在では一般的である。習い事に関する調査^{13, 14, 15}では、スイミング・体操・ピアノ・英会話・学習塾などが、常に上位に位置している。その中でピアノは学習者がピアノ指導者のもとで教授―指導型のレッスンを受け、宿題に出されたピアノ教本の曲を次のレッスンで合格するように家庭で練習するように求められる。梅本の音楽的学習歴の調査¹⁶でも、ピアノは、「約半数が親の意思」でレッスンが開始されている¹⁷。ピアノは上達するために「毎日必ず、時間を割いて練習しなければならない」。練習の困難さなどのために「音楽の稽古を始めたといっても、途中でやめたり、中断するものは多い」と報告する¹⁸。レッスンの中止は、大村典子の調査¹⁹でも報告されている。梅本の上記の考察は、こういう現状に対する根本的な問題提起を行ったものである。

自己表現と言う観点から、カヴァイエ²⁰は、「子どもがピアノを習うということは、音楽に近づくためのとてもよい道」であるとした上で、それが幼い子どもにとって片時も「義務であったり、労働であったり」してはならず、「ピアノを弾くということをここから楽しいと思っているかどうか」が重要だと指摘する。さらに、「音楽すること、そして一般に芸術することによっていちばん大切なことは、自分自身を表現するということ、つまり自己表現ということ」だと述べる。それは「外部から管理され、規制されるような行為とは正反対の行為」であり、「自己以外の何かある外的な物や人によってコントロールされ、他の人間の意志に従属するような行為とは本質的に異なる自由な開放された行為」でなくてはならないと述べる。

それに応えるかたちで、西山志風²¹は「自己の内面世界の表出」が最も大切であり、「自己表現からそれてしまったような行為は、楽器を弾くという外見には類似の行為をしていますが、およそ芸術的

¹³ 「子育て生活基本調査報告書」研究所報、ベネッセ教育研究所、1998年、75頁。

¹⁴ 「バンダイこどもアンケートレポート Vol. 215」、2014年4月。

¹⁵ 「子どものおけいこ事に関する意識調査」アクサダイレクト生命保険株式会社、2014年2月。

¹⁶ 梅本は「1987年から93年にかけて音楽専攻大学生と一般の女子大学生に各自の音楽的学習歴を質問紙形式で答えさせた資料によるものである」と述べている。梅本堯夫、前掲書、1999年、169 - 190頁。

¹⁷ 梅本は調査結果から「音楽の稽古が進行するかどうかは、本人がやる気があるかどうかに大いに依存している。その点で、稽古を始めたいと言いだしたのが本人か、それとも親がやらせたのかがのちの進歩に影響するかもしれない」と述べている。

¹⁸ 質問紙調査の結果では、専攻学生でも中断しており、理由として「単純に興味を失ったからというのがもっとも多く、ついで練習するのが嫌になったから、面白くなかったから、レッスンに行くのが面倒になったから」のほか、「部活をやりたいから、学校が忙しくなったからなどあり、他の勉強との競合に悩んだことが想像される」とある。

¹⁹ 大村は子どもがピアノを辞める原因の一つは、指導するピアノ教師本人が、幼児期から音楽大学の受験を目指し過酷な練習の日々を過ごしており、「ピアノで遊んでいない人が殆ど」のためではないかと指摘する。指導者自身がピアノで遊ぶ重要性を示している。大村典子『ヤル気を引き出すピアノレッスン』音楽の友社、1982年。

²⁰ ロナルド・カヴァイエ、西山志風『日本人の音楽教育』新潮社、1987年、20-104頁。

²¹ ロナルド・カヴァイエ、西山志風、前掲書、1987年、82-90頁。

行為とはいえない」と述べる。さらに「すぐれた芸術作品をわれわれの思う通りに表現できるようにするため」の手段として、ピアノテクニックの練習をするのである。「テクニックの習得が自己目的」になってしまうのではなく、ピアノを弾くことが自己表現につながるということが重要だと指摘する。

ドロシー・T・マクドナルド (Dorothy T. McDonald) 他²²は、子どもの音楽的成長を促そうとする教師に対して、「ピアノに関しても、子どもに対して持続して“注意深く”弾くように忠告することは、幼児に興味を減退させるであろう」と指摘する。子どもがピアノに興味を持てる「積極的な探究活動」を供給できないならば、「教師自身の積極的な参加を通して」子どもが満足感を得られるようにする必要があると述べ、子どもの積極的な探究活動の重要性を指摘している。

以上のように、上記の先行研究は、ピアノ導入期における子どもに対して、自発的に遊びとしてピアノを心から楽しみ自己表現が出来るよう、ピアノレッスンの根本的課題を提起している。

これらの指摘に加えて、幼児期の家庭教育の環境について梅本は欧米の研究²³を紹介し次のように述べる。「幼児期に起居を共にした親や親類の者に、親切な稽古を受けたということが将来の大成につながる」との音楽的発達について家庭の影響が大きいことを指摘したレーマン²⁴ (Lehmann, A. C) のエキスパートには三水準あるというモデル²⁵を解説する。さらに梅本²⁶は「音楽的成長で大きな意義をもつことは、何らかの曲に遭遇して感激する」ことであり、「ある時期にある曲を聴いて感激したという経験がその子どもの後の音楽人生に決定的な影響を持つことが多い」と述べ、子ども時代の音楽に触れる家庭環境の重要性を述べている。

さらにレーマン他²⁷の研究は音楽家の子ども時代を報告している。「最初の音楽作りの経験は、遊び心のある歌を歌ったり、楽器で遊んだりすることだった」、「幼児のころに遊び心があり、楽しくわ

²² Dorothy T. McDonald, Gene m. Simons, : *Musical Growth and Development Birth Through Six*, Schirmer books, (1989)、神原雅之、難波正明、里村生英、渡辺均、吉永早苗共訳、『音楽的成長と発達—誕生から6歳まで—』株式会社溪水社、1999年、69-90頁。

²³ 梅本はレーマンの研究を解説し「古来のピアノの達人はみな家庭内で幼児期に親または親類の者から世話を受けながら稽古をしていることを強調し、最初に指導した親の価値は子どもに動機づけをを起こし、子どもを理解し、熱心だったことにあり、ピアノ演奏技巧自体の価値ではない。たいていの子どもは親自身のピアノの技巧能力を早々と吸収してしまい、つぎの教師によってより高い技巧を習得するのであるが、最初の教師としての親の主な機能は、良い練習習慣の確立である。」と述べる。梅本堯夫 前掲書、1999年、186頁。

²⁴ Lehmann, A. C., The acquisition of expertise in music :Efficiency of deliberate practice as a moderating variable in accounting for subexpert performance. In I. Deliege, & J. Sloboda (Eds.) *Perception and cognition of music*, Psychology Press, 1997, pp. 143-160.

²⁵ エキスパートには、職業的音楽家の水準、アマチュアの水準、非音楽家の水準の3水準がある。

²⁶ 梅本堯夫、前掲書、1999年、175頁。

²⁷ Lehmann, A. C., Sloboda, J. A. & Woody, R. H. (2007). *Psychology for Musicians*, Oxford University Press. pp. 46-51.

くわくする音楽の経験を持っていた」など、「子どもの日常的な遊びの中に音楽が含まれることは、永続的に音楽と関係するために有効であることは間違いない」と述べている。また「子どもたちは楽器を演奏する兄弟に影響されることもある」。「単に年下の兄弟に音楽を気付かせるだけでなく、年長の兄弟は音楽の手本として役立つこともある」。「年上の兄弟に憧れて、同じ楽器のレッスンを受けたいと願うという可能性がある」など、家庭内での兄弟との関係も音楽に目覚めるきっかけになっていると報告している。さらに「親の支援は、子どもたちが音楽との関係を継続する基本的条件である」、しかし、「両親自体は音楽の訓練や経験を必要とはしない」、両親は「子どもたちを励ますことが役割」と述べている。これらの報告から、遊び心で楽しくくわくする子ども時代の音楽の経験が重要なこと、モデルとしての兄弟の関係が重要なこと、親の支援は音楽を継続する上で重要なこと、そしてこれらが子どもが主体的に音楽を表現するとき重要な要因となっていることを指摘している。

2 わが国の研究の現状

「ピアノ遊び」による子どもの主体的な表現活動にかかわる日本の個別研究の現状について概観する。本研究がフィールドとする家庭における子どもの「ピアノ遊び」に直接かかわる先行研究は非常に限定されているが、1で述べた問題提起に応えようとする先行研究が、徐々に積み重ねられている。

藤巻真由美²⁸は、子育て支援ルームでの実践を通して、乳幼児と母子の「身体的な触れあいのある遊び歌」などの「音楽遊び」を体験した母親が、家庭での日常生活において「音楽遊び」を子どもと楽しむ音楽的かわりの追跡調査をしている。その結果「音楽遊び」は、「子どもの成長や発達を助長する」とし、家庭で親子が「音楽活動をすることにより、乳幼児の身体の発達、感情の発達、知性の発達、社会性の発達を促す」と指摘している。

近行あさみ²⁹は、乳幼児期の親子関係は、子どもの発達においてもっとも重要であることから、親子間で「知的過程を通らずに、直接情動に働きかける」という「音楽遊び」の有効性を検討した。そのなかで、子育て支援活動で経験した「音楽遊び」を母親が家庭に取り入れ、子どもと実践した関戸洋子³⁰の実践研究を示すとともに、近行の幼稚園に通う4歳児親子の実践研究では、「音楽遊び」を経験

²⁸ 藤巻真由美「乳幼児の音楽遊びについて」『帝京学園短期大学研究紀要14』2006年、31-38頁。

²⁹ 近行あさみ「親子関係の改善の助長を企図した音楽遊びの検討」『家庭教育研究』第13号、2008年、41-50頁。

³⁰ 関戸洋子「親子のリズム遊びと母子関係(2)」『名古屋芸術大学短期大学部研究紀要』第38巻、2006年、

した親が、子どもが楽しいという感情を表現しているのを見て、家庭でも「音楽遊び」を実践したいとの願望が多く聞かれたと報告している。いずれにせよ保育所や幼稚園、地域での子育て支援活動で行われた親子での「音楽遊び」の成果から、「その場しのぎ」ではなく「家庭でも行える日常生活と結びついた遊びになることが重要」と提言している。

今泉明美³¹は、地域子育て支援の実践のこれまでの先行研究の動向を踏まえ、音楽専門の教員である実践者、保育者、保護者の三者の視点から地域子育て支援活動における音楽表現活動の事例分析を行い、「音楽表現遊び」の可能性を探った。それにより、保護者も「家庭での遊びに反映させたい気持ち」があり、子どもと触れあう遊びの方法を求めている傾向があると報告している。

藤巻、近行、今泉らの研究の成果は、本研究でも継承されるものであるが、とくに近行が提言しているように、実際の家庭における実践と子どもの音楽的な成長を追跡する実証研究への着手が最も立ち遅れているという点がある。

この実践研究の意義と同時にその困難性についての梅本³²の言及をあえてここで援用しておきたい。その理由は子どもの成長を探っていく実践研究では縦断的研究が求められるのであるが、それを実践するには、「あまりにも時間がかかりすぎ」という点にある。すなわち、長期にわたる幼児期から児童期への子どもの音楽的発達についてのフィールドワークと、その分析の困難性を梅本は指摘している。しかしながら前述したマーセル、梅本、カヴァイエらの研究によって明らかにされた「音楽遊び」による子どもの主体的な表現形成を実証的に明らかにするには、この縦断的な研究は回避されてはならない。この課題は我々に残された研究課題として受け止めておかなければならないのである。

奥村直子の研究は上記の先行研究の成果を踏まえて、その課題に対して長期にわたる実践研究および研究方法の開発を含めて正面から応えようとするものである。奥村^{33, 34, 35}は、家庭の日常生活にお

46 頁。

³¹ 今泉明美は、「音楽遊びのねらい」の一つに、「家庭での音楽遊びの促進」を定めている。その結果、参加した保護者のアンケート調査では、「楽器を使った遊びへの満足度が高い」、しかし「家庭で楽器に触れる機会が少ない」との意見があった。「子どもにとって楽器の音を直接聞く体験が大切と考えている傾向がみられる」。「音楽遊び」を「家庭での遊びに反映させたい気持ち」があるなど、楽器による「音楽遊び」を家庭で実践する必要性を親達も感じていると分析している。また、「音楽遊び」が「親子の関係性や他者との関係性を安心して構築でき、子どもの音楽的な育ちや総合的な育ちを獲得するに留まらず子育て中の親が共に育つ場となった」と述べている。今泉明美、有村さやか、小川晃、小澤裕子「子育て支援における音楽表現遊びの実践についての一考察」『小田原女子短期大学研究紀要』第 42 号、2012 年、8 - 20 頁。

³² 梅本堯夫『音楽心理学の研究』ナカニシヤ、1999 年（2 刷）、288 頁。

³³ 奥村直子「家庭内における音楽的コミュニケーションの諸相—ピアノをめぐる音楽的遊びを中心に—」『音楽教育実践ジャーナル』日本音楽教育学会、vol.6 no.1、2008 年、17-26 頁。

³⁴ 奥村直子「ピアノを弾きたいという動機形成は如何にしてなされるのか—「正統的周辺参加論」の視点を参考にして—」『教育方法学研究』日本教育方法学会紀要、第 35 巻、2010 年、35-45 頁。

³⁵ 奥村直子「問題行動のある子どもの母子関係改善への方途—ピアノ遊びの事例をとおして—」『聖徳大学

ける「音楽遊び」の具体的実践に焦点を当て、ピアノを自発的に自由に弾いて楽しむ「ピアノ遊び」に注目し、対象児家庭で展開される兄弟間、親子間のピアノをめぐる活発な「音楽遊び」の継続的フィールドワークにより事例研究を行った。奥村がフィールドとした家庭は、ピアノを弾くことが「ピアノ遊び」として定着し、子ども達は両親も巻き込みながら日常的に楽しんでいる。この「ピアノ遊び」は長女が幼児期に母とスタートしたもので、歳月を経て家族全員が楽しむ「音楽遊び」に発展し、日々の生活の中で主体的な表現形成の活動がそれぞれの子どもたちの成長の場面で展開されていることを明らかにした。

この奥村の先行研究および今後の先行研究上の位置について、山下薫子の調査を挙げておき、その上で改めて先行研究の成果と課題を総括することとしたい。

山下薫子³⁶は、「『レッスン』に対する科学的アプローチの動向」のテーマで「レッスン」に関する近年の研究を概観し、その成果と課題について考察している。まず、英米で発行された音楽教育学と音楽心理学関係の研究に言及した後に、関連した国内の研究に対して論評している。その際、山下は動機づけに注目し、レーマン³⁷他（2007）の内発的動機づけ³⁸、自己効力感、及び家族の支援や教師や仲間の影響についての研究や、コルウェル（Richard Colwell）³⁹他（2011）の研究における自発的な表現活動などに注目している。その文脈で、国内の研究に言及し、奥村（2010）の研究を取り上げている。山下によると奥村はエスノグラフィ法により8歳男児の観察記録を分析し、主体的な表現が生まれるまでの過程を描いているとして、今後の研究の発展の可能性を示唆した。このことにより、今後の研究課題として家庭における「ピアノ遊び」を通した、子どもの主体的な表現形成のプロセスを実証的に分析する必要性が浮かび上がり、この山下の提言は本研究の課題となっている。

児童学研究紀要 16』2014 年、11-20 頁。

³⁶ 山下薫子「『レッスン』に対する科学的アプローチの動向」『音楽教育学』第 43 巻、第 1 号、2013 年、26 頁。

³⁷ Lehmann, A. C., Sloboda, J. A. & Woody, R. H. (2007). 前掲書、pp. 46-51.

³⁸ 動機づけ [Intrinsic motivation] ある特定の活動に従事することによって、得られる外的な利益（たとえば学位など）が原因ではなく、活動それ自体から引き出される動機づけ（たとえば、勉強そのものの面白さ）。『APA 心理学大辞典』G. R. ファンデンボス監修、繁樹算男・四本裕子監訳、培風館。

³⁹ コルウェルらは、欧米の最近の研究成果を報告している。「内発的動機づけがされる場合は、より挑戦を求め熟達する傾向がある」。しかし「挑戦は、生徒が出来る範囲である必要がある」。また「人は自己決定を行うことができないとき、内発的動機づけは低下する」と述べている。また、「動機づけ構造と過程の明確化」の問題点を挙げ、「動機づけの構成概念は努力や継続を高めることで効果が出ると仮定している」と研究が報告されているが、それについての具体的な「証拠がほとんどなく」、その過程においての更なる「描写と説明が必要である」と述べている。特に、動機づけの構成概念と、「芸術、音楽に適用される技能の習得との関連性は殆ど研究されていない」と指摘し、音楽教育への理解を深め個々人の動機づけを改善する理論と研究が進むことを切望すると述べている。Colwell, R. Webster, P. R. eds (2011). *MENC Handbook of Research on Music learning, Volume 1*, Oxford University Press.

3 先行研究の成果と課題

本研究の1の先行研究の検討において明らかにされたことは、マーセル、梅本、レーマンらの基本的な考え方、すなわち、家庭における音楽遊びによる「音楽的自主性」、「自己表現」、「自由な開放された行為」、「自己の内面世界の表出」、「積極的な探索活動」等が、子どもの主体的な表現形成にとって重要であることと、自由な表現活動の場である家庭において行われる「音楽遊び」の意義が確認されたことである。

2のわが国の研究においても、家庭における「音楽遊び」の意義が支持されている。しかし、いずれの場合においても、その実践と実践での検証が課題として挙げられている。とりわけ課題として求められている点は、長期にわたるフィールドワークと分析である。この課題へのアプローチに対する困難性について、梅本は、家庭が実践現場であるために、長期のフィールドの確保と分析がこれまでの研究の進展を阻んできた重要な要因であると述べている。さらに付言すると長期のフィールドワークと分析が不可欠な主要な理由として横たわるのは、子どもの主体的な表現形成のプロセスを継続的に明らかにするということが常に求められていたからに他ならない。本研究はこれまでの成果を踏まえて、この研究課題に正面から向き合おうとするものである。

第2節 研究の目的

本研究は前節の3で指摘したように、先行研究で明らかにされた成果を継承して同時に先行研究の課題に正面から応えようとするものである。すなわち、家庭における「ピアノ遊び」が自由な表現活動を可能にする環境のもとで、主体的自発的な活動を促し、探索的な意欲を高め、自己の内面生活を表出するという自己表現の発達を促すものであるという内外の先行研究の成果を、幼児期から児童期にわたる14年間のフィールドワークを通じて、実証的に分析することである。

このような研究課題に応えるために、本研究の目的は、遊びの性格を備えた「ピアノ遊び」が、幼児期から児童期において子どもたちの主体的な表現⁴⁰の形成にどのように関わっているのかを、キーパーソンB男と対極者A子の家庭で行われる「ピアノ遊び」に着目し分析する。それにより、「ピアノ遊び」を通した子どもの主体的な表現形成過程にかかわる独自の特質を明らかにし、その構造とプロセスを示し理論仮説を提示する。

⁴⁰主体性とは、自分の意思判断で自らの責任をもって行動し個人が判断や基準を決める。自らの判断と責任において自己決定をする。つまり能動的、実践的に行動すること。細谷俊夫、河野重男、奥田真丈、今野善清他編『新教育学大事典』第一法規出版株式会社、1990年。見田宗介、栗原彬、田中義久編、『社会学事典』弘文堂、1988年、448頁。

「主体」とは、認識や行為または意識の存在を指す。近代に入りはじめて人間は自らの判断と責任において行為する主体的存在となりえた。見田宗介、栗原彬、田中義久編、前掲書、1988年、448頁。

「主体的」とは、『心理学辞典』、『発達心理学辞典』、『APA心理学大辞典』等の心理学系の辞典には記載がなく、『新教育学大事典』によると、「自分の意思判断で自らの責任をもって行動し、個人が判断や基準を決める」とあり、『新版 現代学校教育大事典』では、「自らの行為を自分自身で選択するという主体性を発揮できないところに、人間として『生きる』ということはある」とある。細谷俊雄、奥田真丈、河野重男、今野善清、『新教育学大事典』第一法規出版株式会社、1990年。安彦忠彦、新井郁夫、飯長喜一郎、井口磯夫、木原孝博、児島邦宏、堀口秀嗣共著『新版 現代学校教育大事典』株式会社行政、2002年、003頁。

「表現」とは、『APA心理学大辞典』では、「思考や行動、感情の伝達のこと」、また「対人関係や社会的相互作用における個人の行動の仕方もしくは自分を表現するやり方のこと」とある。「表現活動」は、『発達心理学辞典』によると、「本来、内的な感情や思想を絵や音楽やことばなど、外的なものとして表すこと」であり「とくに幼児教育で重視されているが、それは、描画や歌唱や言語表現などが精神発達の重要な側面である表象機能、代表機能、あるいは象徴機能など、表わすものと表わされるものとの関係の発達に寄与し、さらに内的なものを外化することにより、コミュニケーションの技能を促進させ、幼児の社会性をたかめるという機能も期待されているからである。また表現は主として遊びの場でなされ、緊張の緩和という臨床的な意味ももっている。」とされている。G. Rファンデンボス監修、茂栞算男、四本裕子監訳『APA心理学大辞典』培風館、2013年、755頁。岡本夏木、清水御代明、村井潤一監修『発達心理学辞典』ミネルバ書房、1994年、585頁。

第3節 論文の構成

日本学術会議の提言や、保育要領等では、「遊びを広げていくかは社会的な課題」であり、「家庭教育力」を高め、子どもの健全な成長を図る観点から、家庭における子どもの「主体的な活動」及び「自発的な活動としての遊び」、「自分への自信を持つことができるよう成長の過程を見守り、適切に働きかけること」の重要性を指摘している(本稿「はじめに」)。

本稿は、この問題意識に基づき14年間の対象児童のフィールドワークを実施し、遊びの性格を備えた「ピアノ遊び」が子どもの主体的な表現形成にどのように関わっているのかを究明することを課題として設定した。この研究課題を達成するために以下のように論文を構成している。

第1章では、子どもの主体的な表現形成という観点から「ピアノ遊び」を取り上げ、先行研究により課題の明確化を図り研究の目的を明示するために、4節構成とした。

第2章では、上記の課題を明らかにするための研究方法として、フィールドワークを実施し、そのデータを分析する研究方法として、Grounded Theory Approach(以下GTAと略記)を採用した。その際、GTAがフィールドワークに基づいたデータを分析するのに最も適合的な研究方法であり、本研究の「ピアノ遊び」の特質についての理論仮説を提示するために、GTAが採用されたことについて詳述している。なお、その分析の妥当性を担保するために2名のスーパーバイザーとの協議と、5名のカンファレンスの実施にも言及している。以上を記述する必要性から第2章では4節構成とした。

第3章は収集したデータをGTAの手法に則って、ローデータから特性化を行い、概念の生成から「ピアノ遊び」を通した主体的な表現形成の特質のカテゴリーの生成を行った。その結果、抽出したカテゴリーをプロセス図で示し、ストーリーラインで説明を試みた。更に「ピアノ遊び」を通した主体的な表現形成の特質のカテゴリーの適合性を見るために、ピアノ指導者らとのカンファレンスにより、カテゴリーの妥当性の検証を行った。これらを達成するために、最も長い紙幅を取り6節構成としている。

第4章の考察では、本研究の成果が先行研究の課題に対してどのような意義を持っているのかについて示し、加えて「ピアノ遊び」を通した主体的な表現形成の特質である5つのカテゴリーの実践的な適合の可能性について考察を加え、今後の課題を示し1節構成としている。最後に、おわりににて論文を終結する。

第4節 用語の操作上の限定

本研究で使用される重要な用語である「ピアノ遊び」について、用語の操作上の限定をあらかじめを行い、以下の論述を進める。そのために、まず、「遊び」についての限定を行い、これに基づいて「ピアノ遊び」の用語の操作上の限定を行う。

1 「遊び」について

本研究では次のような、ロジェ・カイヨワ (Roger Caillois⁴¹) とヨハン・ホイジンガー (Johan Huizinga⁴²) の「遊び」の考え方に基づいて操作上の用語の限定を行う。カイヨワは、『遊びと人間』において、遊びの重要な特性として次のような点を挙げている。①遊びは「自由で自発的な活動、喜びと楽しみの源泉」であること。②遊びは「参加を強要されたと感じる」ことがあってはならないこと。③遊びは「自発的で自分の意思で行われるもの」であること。本論文ではこの3つの観点から「遊び」を捉えている。さらにホイジンガーの『ホモルーデンス』における「楽器」の捉え方も参照した上で「遊び」についての操作的な用語の限定をカイヨワに基づいて示しておく。

2 「ピアノ遊び」について

カイヨワの遊びの考え方に基づいて、あらかじめ「ピアノ遊び」について操作上の用語を限定しておく。

- ①「ピアノ遊び」は、自由で自発的かつ喜びと楽しみを伴う活動である。
- ②「ピアノ遊び」は、参加を強要されない。
- ③「ピアノ遊び」は、自分の意思で行われる。

⁴¹ 「遊び」について、ロジェ・カイヨワは『遊びと人間』において、遊びは「自由で自発的な活動、喜びと楽しみの源泉」であると述べている。遊びは「参加を強要されたと感じる」ことがあってはならず、「ただ人に勧められただけで、遊びはその根本的な特徴の一つを失う」。すなわち、「遊戯者がそれに熱中するのは、自発的に、まったく自分の意思によって」である。遊びは遊戯者が「遊びたいから遊ぶ」のであり、「いかに疲労の激しい遊び」であろうと遊ぶのである。さらに遊戯者が「やめたいと思うときは」、「立ち去る自由を持つことが何よりも必要である」。カイヨワはこれらを通して遊びの特性の一つを「自由な活動」と定義している。Roger Caillois: *Les Jeux et les Hommes*, 1967. 多田道太郎、塚崎幹夫訳『遊びと人間』講談社、2012年(29刷) 34-41頁。

⁴² ヨハン・ホイジンガーは『ホモ・ルーデンス』において、「遊びとは、あるはっきり定められた時間、空間の範囲内で行われる自発的な行為もしくは活動である⁴²」と定義している。遊びという言葉の用法としては、「とくに楽器を奏でることに対して」この言葉を用い、またゲルマン諸言語ではその最も初期のころから、すでに「楽器を巧みに操ること」を一般に「遊ぶ」という言葉で表現していた。「音楽するということは、最初から、本当の意味での遊びがもっている全ての形式的特徴を帯びた行為」である等々と、遊びと楽器演奏の繋がり深さを述べている。Johan Huizinga: *Homo Ludens*, 1938. 高橋英夫訳『ホモ・ルーデンス』中央公論社、1993年(20刷)。

以上を踏まえて、本研究における「ピアノ遊び」とは、「遊び」の性格を備えたピアノによる表現活動の一つであると捉える。子どもがピアノを色々な音の出る遊具⁴³と捉え、ピアノを自発的に弾き鳴らし遊ぶことを通して、自分自身を表現する自由な活動と定義する。

具体的には、幼児期から児童期における子どもが、ピアノ（電子ピアノなどの鍵盤楽器も可）が設置してある家庭にあって、ピアノレッスンを受けている・いないに関わらず、他者に指示されるのではなく、自由にピアノを弾き鳴らし自己表現することである。

⁴³ 増淵宗一は「芸術活動と遊び」の項において、「遊具は遊びと切っても切れないほど関係が深い。もし遊具なしに遊べと言われたら、多分、遊びの種類の半分は、遊べなくなるだろう」と遊びにとっての遊具の果たす役割を強調する。また「遊具は、何かを生産する道具でもない。それは、遊びという自由で虚構に満ちた世界を実現するための目的的な道具、いわば『魔法の道具』とでもいうべきものである」と述べ、音楽の演奏に使用する楽器も「実際の遊びの遊具」でもあり、「遊具」ということばとの関連で「芸術具」ということばを用いている。高橋たまき、中沢和子、森上史朗 共編『遊びの発達学 基礎編』培風館、1998年（初版第2刷）、150 - 153 頁。

第2章 研究方法

第1節 フィールドワーク選定の理由

本研究は観察対象児の家庭における子どもたちのピアノへのアプローチを連続的に捉える方法として、家庭をフィールドとしたフィールドワークの手法によって情報の収集を行った。

質的な研究方法をとる上で、データとして子どもたちの兄弟姉妹間で展開する「ピアノ遊び」にかかわる生きた豊富なデータを収集することが極めて重要である。子どもたちが生活する家庭をフィールドとしてその場に身を置き、しかも長期にわたってみていくことから、対象児たちが交わす直接的な対話や行動を読み取ることができる。データ収集の方法として、フィールドワークの手法をとることが適切であると考えた。

John Van Maanen⁴⁴ は、フィールドワークについて 以下のように述べている。

フィールドワークは、いかにして異文化——身近なものであれ、遠いものであれ——が理解されるのかという問題に対する一つの——最良の、と言う者もいる——答えである。通常フィールドワークとは、研究対象となる人々とともに生活し、また彼らのように生活することを意味する。その最も広い、最も伝統的な意味において、フィールドワークは、一人の研究者が長期間（どれぐらいかは、普通は決まっていない）にわたり、しかも全時間的に調査地の人々と関わり合うことを要求し、それらの人々のホームグラウンドで絶えず進行する彼らとの相互作用から主に成り立っている。

また、佐藤郁哉⁴⁵は、次のように述べる。

フィールドワーカーは、その出来事が起こるまさにその現場に身を置き、そこに住む人々と出来事の体験を共有し、現場に流れる時間のリズムやテンポに身を添わせることを通して、調査地の社会と文化をまるごと理解し、またそこに住む人びとを理解しようとするのです。

⁴⁴ John Van Maanen, *Tales of the Field: On Writing Ethnography*, 1988. 森川 渉訳『フィールドワークの物語 エスノグラフィーの文章作法』現代書館、1999年、20-21頁。

⁴⁵ 佐藤郁哉『フィールドワーク増訂版 書を持って街に出よう』新曜社、2007年（増訂版2刷）42頁。

以上述べられているフィールドワークの手法に出来る限り基づき、子どもたちの主体的な表現形成に「ピアノ遊び」がどのようにかかわっていくのかを、対象児家庭をフィールドとして14年間にわたって追跡し観察した。

第2節 フィールドワークの対象と方法

1 対象の選定

フィールドワークの対象児家庭は、2000年から筆者のピアノ教室に子どもが通っているY家である。Y家では家庭において母と第1子A子との「ピアノ遊び」が日常的に行われており、その時点で第2子B男も誕生していた。観察対象の選定理由としては、一つには家庭の中で「ピアノ遊び」が日常的に活発に行われ定着しているのを、2000年の修士論文作成時の観察で筆者が知り得ていたこと。二つには共に遊ぶ兄弟姉妹関係があること、三つには長期間にわたる定期的な家庭観察の実施の承諾を得ることができたことである。

2 データ収集期間、方法、内容、方針

(1) 期間

2000年3月～2013年12月である。

Y家をフィールドとして、家庭観察記録を取る。2000年は3回行い、その後2006年7月からは20回、2007年は28回、2008年は42回、2009年は26回、2010年は10回、2011年は9回行い、4月27日に継続的な家庭観察は終了し、2年8ヶ月後の2013年12月4日に観察を行い、全家庭観察日数は計139日間である。

家庭観察が実施されていない期間も、対象児家族は週に1回のピアノ教室へのレッスンに通い、その他、年に2回のピアノ発表会と音楽ボランティア等により筆者との触れ合いがある。

(2) データ収集の方法

観察期間中、筆者が家庭観察に入る時間帯は、月に2回～4回、主にウィークデーの夕方17時前から20時頃を中心に対象児家族の都合に合わせて観察を行った。家庭にあつて、母とA子の「ピアノ遊び」を傍で見ている弟B男をキーパーソンに、すでに自発的な「ピアノ遊び」を行っている姉A子に対極者と位置付けた。観察では家庭におけるB男の自発的な「ピアノ遊び」行動に限定し、A子とのかわりも視野に入れフィールドワークを行った。第3子C子と第4子D男に関しては、B男の「ピアノ遊び」に直接のかわりのある場面のみ本研究の事例として採用した。

フィールドである観察家庭にピアノ指導者でもある筆者が入ることで、Y家で日常的に展開されて

いる子どもの自発的な「ピアノ遊び」の生成に少なからず影響が出ることが懸念された⁴⁶。日常生活の流れを壊さず、子どものいつも通りの「ピアノ遊び」が生起することをなるべく妨げないように、子どもに話しかけられた時と子どもへの危機管理にだけ反応するにとどめ、「受動的参与⁴⁷」の形態をとった。

資料の収集はビデオ撮影、インタビュー、フィールドノーツ、母の日記、ピアノレッスン記録ノート、発表会練習記録表等を資料とした。

（３）内容

収集した内容は、家庭における兄弟姉妹および親子間の会話、行動、家族の属性、住居見取り図である。

（４）「ピアノ遊び」のレッスン方針

筆者のピアノ教室では、「ピアノ遊び」のレッスン方針を示し、「ピアノ遊び」導入期の子どもには、指導者も保護者も共通の認識で接するようにしている。表１に示す。

表１ 「ピアノ遊び」のレッスン方針

①	ピアノ指導者も保護者も、子どもに対してピアノを弾くことを強要しない。
②	レッスン室で子どもがピアノを弾きたがらない時は、無理強いせずにピアノ指導者と保護者がピアノを弾いて遊ぶ。
③	家庭では保護者自身がピアノを弾いて楽しむ姿を日常的に示す。子どもがピアノで遊ぶ行動を示した時は受容し一緒に楽しむ。子どもがピアノで遊びたいという気持ちになることを大切にする。

３ 倫理的配慮

本研究は、「聖徳大学ヒューマンスタディに関する倫理委員会」の承認を得て実施している。対象のY家には、文書と口頭にて研究の目的、内容等を説明し、書面において了承を得ている。個人情報の保護を厳守するため、対象者が特定できないように匿名化したデータを使用した。

⁴⁶ 麻生武『「見る」と「書く」との出会い フィールド観察学入門』新曜社、2009年、188-189頁。

⁴⁷ 箕浦康子編著『フィールドワークの技法と実際 マイクロ・エスノグラフィー入門』ミネルヴァ書房、1999年、91-92頁。

第3節 分析方法

1 分析方法の妥当性

本研究では、対象児家庭Y家におけるフィールドワークにより収集したデータを分析するにあたって、実践の理論化を試みる代表的な質的研究法である Grounded Theory Approach (GTA) の手法を用いる。

GTA の手法の妥当性は、質的データを重視し、徹底したデータとの対話から新たな理論を生み出した B. G. Glaser と A. L. Strauss によって確立された。

フィールドワーカーが、「異なった生活と行為の世界を観察し」、そこから得た「データを体系的に整序し」、「その世界」で経験していない「他の部外者」に対しても、日常生活の経験に対する「有効な行動指針」あるいは「処方箋」となる理論を生成する研究方法であり、これは「領域密着理論」である。GTA は、理論＝グラウンデッド・セオリー (GT) の生成とデータ収集と分析の進め方を方法論として確立していることが、他の質的研究法と比較して特長的な点である^{48, 49, 50, 51}。

GTA の手法により実践研究を行い成果を収めた砂村京子⁵²は、次のように述べている。

GTA は質的研究法の中でも、厳密な研究課題の設定とデータの収集方法、そしてデータ間の意味関連から概念生成の手順、概念間の理論的関連、生成された理論仮説の妥当性をめぐる論議など、研究方法について第三者による追試が可能であり、方法における客観性が高い。さらに GTA から生成された理論仮説は、多様な領域で、より精度と適合性を高められることが求められている。

以上のように、GTA の手法は、場面ごとに文脈に即して状況を切り取り、ローデータを取り出し、それに即して特性化し、概念化を図り、最終的にカテゴリーを見出し新しい理論を生成する分析方法

⁴⁸ B. G. Glaser & A. L. Strauss, *AWARENESS OF DYING*, New York, 1965. 木下康仁訳『死の Awareness 理論と看護』医学書院、2011 年、(第 1 版第 13 刷)。

⁴⁹ B. G. Glaser & A. L. Strauss, *The Discovery of Grounded Theory : Strategies for Qualitative Research*. Aldine Publishing Company, Chicago, 1967. 後藤隆・大出春江・水野節夫訳『データ対話型理論の発見』新躍社、2008 年、(初版第 12 刷)、307-309 頁。

⁵⁰ 木下康仁『グラウンデッド・セオリー・アプローチ 質的実証研究の再生』弘文堂 2006 年 (第 6 刷)。

⁵¹ 増井三夫「実践研究における Grounded Theory Approach の意義と可能性」、『教育実践学研究』第 9 巻、第 2 号、2008 年、11-25 頁。

⁵² 砂村京子「学校における保健室・養護教諭の機能と役割に関する質的研究—養護教諭の生徒へのかかわり方の特徴に着目して—」聖徳大学大学院児童学研究、博士論文、2015 年。

である。本研究においては、家庭における子どもの「ピアノ遊び」が幼児期から児童期を通して、子どもたちの主体的な表現形成にどのように関わっているのかを、そのプロセスを通して「ピアノ遊び」の独自の特質について理論仮説を構築することが目的である。

木下康仁⁵³は、GTA に適した現象の特性として二点挙げている。その一つに「取り上げようとする現象がプロセス的性格」を持っていること、どのような「社会的場面」にあっても「他者との相互作用」が常にスムーズに展開しているのではない。「日常のやりとりは不確定さや緊張関係」などを含んでいるながらも、「相互作用自体は安定化、秩序化の方向」に向かう性質がある。そして「現象がプロセス的性格をもつということは、背景に時間的な要素があることを意味する」と述べている。

以上のことから、本研究における通算 14 年間にわたる、家庭をフィールドとした子どもの日常生活で展開される「ピアノ遊び」の特質について理論仮説を構築するにあたり、研究方法として GTA が適していると判断し採用する。なお、最近普及している『修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) 』ではなく、GTA を用いる理由は、GTA がローデータに即し、そこで表出されている現象を意味文脈から丹念に解釈を行う為である。

2 分析手順

GTA では、段階的に手順を追って、理論仮説の構築を行う。以下に GTA によるコーディング過程を示し、データから生成したカテゴリーと理論の妥当性が追認可能なように操作手順を明示する。本研究で行う手順を示すにあたり、増井三夫⁵⁴、砂村京子⁵⁶の GTA の手順を参照する。

(1) GTA の手順

本研究の分析は、以下の GTA の手順に従って行い、その上で理論仮説の妥当性については、カンファレンスを行い検討を加える。

⁵³ 木下康仁 前掲書、2006 年、180-183 頁。

⁵⁴ 増井三夫、村井嘉子、松井千鶴子「実践場面における質的研究法」、『上越教育大学研究紀要』第 25 巻、第 2 号、2006 年、463-480 頁。

⁵⁵ 増井三夫 前掲書、2008 年。

⁵⁶ 砂村京子 前掲書、2015 年、21-23 頁。

表 2 GTA の手順

手順	内容
①研究課題の明確化	研究対象分野における実践課題を洗い出す。
②研究テーマの選定	「実際に調査可能な形に絞り込む」ための「研究上の問い」＝リサーチ クエスチョン (Research Question) ＝研究テーマを設定する。
③データの収集	質的データには、インタビュー、会話記録の他に文書資料（手紙、伝記、 自伝、回顧録、言語録、小説等）がある。 本研究ではフィールドワークにより観察データを収集した。研究課題に 即したキーパーソンB男の行為特性(property)を他との共通性を含めて 分析するために、対極者A子を選定する。この作業は、他の質的研究で はみられない。
④データの切片化	観察データから状況を定義し場面を取り出すこと。 行為状況（意味文脈）において、行為の意味を、研究テーマ (Research Question) に即して、データに密着し解釈し、その特性を抽出するた めに行われる。ゆえに切片は「一行」あるいは「長い・多いデータ」の場 合もある。
⑤特性の識別	切片化した場面から研究テーマの視点によるローデータを取り出し、ロ ーデータから特性を識別する。 本研究では、ローデータの意味文脈を解釈し、一旦バリエーションとし て抽象度を上げ、特性を識別する砂村の手順を採用している。
⑥概念の生成	設定された研究目的に照らして、データの前後の文脈から解釈した特性 を比較分類し、共通の特性を識別して概念を生成する。
⑦カテゴリーの生成	概念の一覧からその特性にもとづいて、類似性の高い特性を持つ概念の グループであるカテゴリーを生成する。
⑧カテゴリーの説明と定義	生成した概念、特性を使用してカテゴリーの意味を説明し、カテゴリー を定義する。その際、カテゴリーを説明する特徴的なローデータを提示 する。

⑨カテゴリー構成図の作成	カテゴリーや概念を用いて、カテゴリー間の関係の構成を示す。
⑩コアカテゴリーの生成	カテゴリーの中心を貫くコアカテゴリーを決定する。
⑪ストーリーラインの生成	カテゴリーと概念図を説明するストーリーラインから、理論的枠組みを構築する。
⑫理論仮説（グラウンデッド・セオリー）の生成	コアカテゴリーとカテゴリーの理論的関連性を示す。
⑬理論仮説の妥当性の検証カンファレンス	スーパーバイザー・GTA の専門家・研究協力者とのカンファレンスを行う。

（２）GTA における用語の説明

以下に GTA の全てに共通する用語の説明を、分かりやすく解説されている説明文より引用・要約し示す^{57, 58, 59, 60, 61}。

《切片化》（slice of data）

切片をほぼ一文章として、この文章に埋め込まれた特性を抽出して命名（naming）する作業が切片化である。切片化は、調査者の research question（具体的な研究目的）にとって意味があると考えられる全てのデータに対して試みられる。切片化は、行為者の行為の意図を行為者の視点から、行為状況を考慮し、解釈してその行為の特性を抽出し、これを命名し概念とするための「道具」と捉えられる。切片化は、行為状況において、行為者の行為の意味を、研究目的に即してデータに密着して解釈し、その特性を抽出することに意義がある。よって切片は、一行の場合もあり、長い・多いデータを切片とする場合もある。

《特性》（property）

カテゴリーを構成する概念的諸要素をさし、あるカテゴリーが指し示す内容を、例えばその強度や

⁵⁷ B. G. Glaser & A. L. Strauss、前掲書、2008 年、xii 頁。

⁵⁸ 戈木クレイグヒル滋子編『質的研究方法ゼミナール増補版—グラウンデッド セオリー アプローチを学ぶ—』医学書院、2008 年（第 1 刷）。

⁵⁹ 増井三夫 前掲書、2008 年。

⁶⁰ 戈木クレイグヒル滋子『グラウンデッド・セオリー・アプローチ』新曜社、2008 年。

⁶¹ 砂村京子 前掲書、2015 年、23-24 頁。

頻度或いは特定の性質といったレベルなどで説明するものである⁶²。切片ごとに特性を読み取る作業を行い、なるべく多くの特性を識別する。特性の識別には、それを表現する言葉の選定に現象を表現する感性が求められる。また、自分の持つバイアス（bias：経験上の先入観）を認知する機会となる。

《概念》（concept）

ある現象を記述する抽象化された考え、または一般化された考えのことである。データの特性によって定義されたもので、データの中で重要であると識別された特性に名前、あるいはラベルをつけたものである。

データの言葉で生成された概念はインビボ・コード（in vivo code）、理論的に生成された概念は理論的概念である。

《カテゴリー》（category）

同じ特徴を持った概念や考えのまとまりで、分析の単位を形成する。現象を説明する理論的な枠組みである。カテゴリーは、研究の目的を再確認し、概念の一覧から特性（バリエーションも含む）に基づき構成する。カテゴリー名は、概念からとつてもよいし、新たに命名してもよい。特性・概念・カテゴリーと抽象度が異なっているが、一番抽象度が高いのがカテゴリーである。

《ストーリーライン》（storyline）

研究において語られる、研究のストーリーの分析的記述および外観のことである。ストーリーラインは、カテゴリー間の関係を、特性と概念を使用して理論的に説明する。

（３）分析の適用性と妥当性

GTA の実践研究における適用性については、４つの理論特性が挙げられている。GT が「実践に適用される」ためには、この「４つの相互に深い関連を持つ特性を備えた理論として」、展開されている必要がある^{63,64}。それは、「現実への適合性」、「理解しやすさ」、「一般性」、「コントロール」である。

⁶² B. G. Glaser & A. L. Strauss、前掲書、2008 年、xii 頁。

⁶³ B. G. Glaser & A. L. Strauss、前掲書、2011 年、267-280 頁。

⁶⁴ B. G. Glaser & A. L. Strauss、前掲書、2008 年、323-338 頁。

- ①「現実への適合性」(fitness)：「理論が活用される特定の対象領域と堅密に適合」したものであること。これは理論が実践的に適用されるために最も必要な基本的なことである。
- ②「理解しやすさ」(understanding)：「その特定の対象領域に関心を持つ一般の人々にも平易に理解できる」ものであること。
- ③「一般性」(generality)：「その特定の対象領域内の、ある特定のタイプの状況にだけでなく、さまざまな幅広い日常生活状況に対して十分適用可能な一般性を持ち合わせて」いること。
- ④「コントロール」(control)：「その理論を用いた者が、時とともに変化していく日常生活状況の構造と展開を部分的にせよコントロールできるようになる」こと。このコントロールは「状況のリアリティのコントロール」であり、「目の前で展開していくさまざまな状況のリアリティの理解と分析」ができること。「状況のリアリティにおける変化を作り出しそしてその変化を予測」できることである。

また、GTAの「アプローチによる研究成果が評価されるべき基準」として、その妥当性の具体的な内容を「適合性」、「関連性」、「説明力」、「修正可能性」の4つの特性で示している⁶⁵。

- ①「適合性」(fit)：「提示された理論におけるカテゴリーがデータに適っている。」
- ②「関連性」(relevance)：生成されたGTである「理論が説明力を有するためには研究対象である領域における出来事に関連していなくてはならない。」
- ③「説明力」(work)：「生成されたGTがすでに起きたことを説明でき、これから起きるであろうことを予測でき、今起きていることを解釈できることと規定されている。」
- ④「修正可能性」(modifiability)：GTの「動態的性格を意味する。説明しようとする現象は常に変化しているので、生成された理論は常に修正される必要がある。」

以上のことを念頭にいれ、分析においてはGTAの専門家（指導教員）によるスーパーバイズを受けながら実施する。また、GTAの研究者（博士）1名も加わり、2人のスーパーバイザーによるカンファレンス、スーパーバイザーと大学院生3名によるカンファレンスを行い、概念名、カテゴリー名を修正していく。さらに本研究では状況定義で切り取った場面のローデータに基づいて分析を行うため、

⁶⁵ 木下康仁『グラウンデッド・セオリー・アプローチ 質的実証研究の再生』弘文堂、2006年（第6刷）、100-101頁。

カテゴリーが確定した段階でピアノ指導でも多くの人材を育成している5人の音楽家へのカンファレンスにより理論の妥当性の検証を行い、再度スーパーバイズを受け修正を加えて理論の客観性・妥当性を担保する。（アルファベットは氏名の表記）

A：スーパーバイザー1（指導教員）とのカンファレンス

B：スーパーバイザー2（GTAで博士号取得）とのカンファレンス

C：博士課程の大学院生とのカンファレンス（C1、C2、C3、）

F：ピアノ指導者とのカンファレンス

G：ピアノ指導者とのカンファレンス

H：ピアノ指導者（保護者）とのカンファレンス

I：音楽指導者とのカンファレンス

J：ピアノ指導者とのカンファレンス

表 3 カンファレンス期日と参加者

実施期日	参加者	実施期日	参加者
2015 年 9 月 16 日	A	2016 年 1 月 20 日	F
2015 年 9 月 25 日	A	2016 年 1 月 22 日	G
2015 年 9 月 29 日	A・B	2016 年 4 月 21 日	A
2015 年 10 月 1 日	B	2016 年 4 月 28 日	A
2015 年 10 月 5 日	A	2016 年 5 月 10 日	A、C 3
2015 年 10 月 7 日	B	2016 年 5 月 14 日	A、C 1、C 3、
2015 年 10 月 8 日	B	2016 年 5 月 24 日	A、C 3
2015 年 10 月 10 日	A	2016 年 6 月 4 日	A、B、C 1、C 2
2015 年 10 月 10 日	B	2016 年 6 月 9 日	A、C 3
2015 年 10 月 14 日	A	2016 年 6 月 17 日	A、C 3
2015 年 10 月 16 日	A	2016 年 6 月 19 日	A、C 3
2015 年 10 月 19 日	A	2016 年 6 月 22 日	A、C 3
2015 年 10 月 22 日	A	2016 年 7 月 7 日	A、C 3
2015 年 10 月 26 日	A	2016 年 7 月 14 日	A、C 3
2015 年 10 月 27 日	A・B	2016 年 7 月 23 日	A、B、C 1、C 2
2015 年 11 月 2 日	A	2016 年 8 月 2 日	A
2015 年 11 月 12 日	F	2016 年 8 月 24 日	H
2015 年 11 月 24 日	B	2016 年 8 月 25 日	I
2015 年 12 月 8 日	B	2016 年 8 月 30 日	J
2015 年 12 月 27 日	B・C 1・C 2・C 3		

第4節 対象の概要

1 観察対象児 Y 家族

(1) 家族構成と居住環境

Y家の父は会社員でありピアノ歴がある。母は高齢者住宅の生活協力員をしていてピアノ未経験である。1997年6月にA子が誕生し、2000年1月にB男が誕生する。2000年3月にA子が筆者のピアノ教室に入門した時点の家族構成は、父母、第1子A子、第2子B男の4人である。その後、2002年3月にC子が誕生し、2004年10月にD男が誕生して6人家族となる。B男のピアノ教室への入門は、A子の入門から3年5ヶ月後の2003年8月、B男が3歳7ヶ月の時である。B男がピアノを習いたいと自分の意思で父母に申し出たことでレッスンが開始された。続いて、C子は2006年1月に3歳10カ月で、D男は2008年9月に3歳11カ月で、それぞれ自らピアノを習いたいと父母に申し出て、ピアノレッスンが開始されている。レッスンは週1回30分間行われる。レッスン開始当初は、母がA子のレッスンにB男を伴って通っており、C子・D男が誕生するとそれぞれを伴って一緒にレッスンに通っていた。D男が幼稚園の頃まではレッスンへの付き添いを続けていた。

住居は、1999年6月に母が高齢者住宅の生活協力員の仕事に就いたことで、筆者宅から徒歩15分程の高齢者住宅内の2DKの管理人室に転居し、ピアノ教室の存在を知った。それ以前は同じ区内の3駅隣のマンションに、A子と父母の3人で居住していた。住居である管理人室と入居者に対応をする管理室とは鉄製のドアで仕切られている。11年間住んでいた管理人室は、2010年8月に母の転職に伴い転居することになり、3階建て5LDKの借家に移り、さらに3年後の2013年8月には現在居住する3階建て3LDKの一戸建てに入居した。

入門時の2000年から、家庭では電子ピアノを使用している。9年後の2008年10月にアップライトピアノ⁶⁶を知人から預かることになり、2台のピアノを使用できるようになる。その後、2013年より電子ピアノをもう1台購入し、各階に鍵盤楽器が用意された。

(2) 観察対象児

GTAにおいては、データ収集で最も重要な研究対象(sample)の選択を行う。これには、目的的对象選

⁶⁶ グランド・ピアノに対する縦型のピアノ。1789年、アイルランド人のサウスウェルによって考案され、19世紀の前半より非常に流行する。『音楽辞典 楽語』音楽之友社、1971年（第2刷）、5頁。

択(purposeful sampling)と対象選択(sampling)の2種類があり、その内の目的的对象選択は、研究課題に即して特定の個人(キーパーソン)を選択するのであり、本研究では、幼少時からY家内の「ピアノ遊び」を日常生活で経験して育ったB男をキーパーソンとして選択する。また、GTAでは、比較の為に、キーパーソンと他の個人をサンプリングする理論的サンプリングを行う。本事例では、キーパーソンと異なる特性を持つ姉A子を対極データとして選定する。「ピアノ遊び」を導入した順序に合わせ、便宜上、対極者⁶⁷A子、キーパーソン⁶⁸B男の順で記述する。

1) 対極者：第1子A子

A子は幼少時に逸脱傾向が強く、そのため母は育児不安に陥っていた。そのような時に幼児と母がピアノを通して遊び楽しむことを主眼⁶⁹とした筆者のピアノ教室を知る。母はA子の成長と自身の子育ての不安解消を期待してA子が2歳9ヶ月の時にピアノ教室にA子を入門させる。

この教室では、ピアノ導入期の幼児のレッスンは、教材・指導法・親のかかわりの観点⁷⁰から、ピアノで遊べるようにレッスン内容⁷¹を構成していた。

A子は入門したものの指導者が一緒にピアノを弾いて遊ぶことを促しても、教材を使用したレッスンの流れから逸脱する傾向があり、ピアノ教室内ではピアノで遊び楽しむことはすぐには実現していない。しかし指導者がA子の代わりに幼いB男や母とピアノで遊び楽しむ姿を示すと、A子も仲間に入りたい素振りを見せ、近寄って来たりちょっかいを出したりする様子が見られた。この事実からA子の行動がピアノで遊ぶことを通して安定すれば、逸脱傾向も少なくなり母の育児不安が和らぐのではないかと推測できた。A子はレッスンにはいつも笑顔で元気に通っており、家庭でもレッスンに通うことを楽しみにしている様子が母から語られている⁷²。

⁶⁷ 増井三夫他、前掲書、2006年、463-480頁。

⁶⁸ 増井三夫他、前掲書、2006年、463-480頁。

⁶⁹ 幼い子どもに対して、ピアノを奇麗な音のする遊び道具と捉えて親子共にレッスンをする。親子でピアノを鳴らしたり、歌を歌ったり、絵本のイメージに自由に音付けをするなどして遊ぶ。

⁷⁰ 奥村直子「導入期のピアノ指導が幼児の自発的再現に及ぼす効果—教材、指導法、親のかかわりの観点から—」東京学芸大学大学院修士論文、2001年。

⁷¹ レッスン内容は①教本としてバスティンピアノパーティーAを使用②歌唱③「絵本の音付け」指導者が絵本を読み、音響効果として幼児と一緒にクラスターやグリッサンドなどの弾き方で自由にピアノを弾く④手遊び・リトミックなど。また、指を使うという観点から、家庭ではおりがみ・あやとり・お絵かきを母子で楽しみ、ピアノレッスン時に作品を持参してくるようにしている。

⁷² A子はレッスンには常に機嫌よく通って来る。レッスン開始から1年1ヶ月(3歳9ヶ月)が経過し、レッスンを始める時の挨拶ができるようになる。4ヶ月後(4歳1か月)2回目の発表会に出演した帰りの車中で、A子は突然「だ——い満足」と発言し、達成感に溢れた喜びの表情を表わした。この時期から、レッスンで出された宿題を自ら進んで家庭で弾くようになり、宿題曲が合格するようになる。奥村直子「問題行動のある子どもの母子関係改善への方途—ピアノ遊びの事例をとおして—」『児童学研究16』聖徳大学児童学研究所紀要、2014年、11-20頁。

2) キーパーソン：第2子B男

B男は、A子のピアノ教室入門時の2000年は、生後2ヶ月であり、A子のレッスンに母に伴われ来ていた。レッスン時のA子の逸脱傾向が強い時には、B男が代わりに母や指導者とピアノで遊んでいた。A子のレッスンが成立するようになってからも、レッスン室でB男がピアノへの欲求を示した時にはピアノで遊ぶことが受容されている。B男のレッスンの開始時期は、2003年、3歳7ヶ月であり、A子の2回目のピアノ発表会の帰りに、「僕もピアノを習いたい」と母たちに自ら申し出て入門することになる。それまでのY家では、A子を中心に家庭内で「ピアノ遊び」が日常的に行われていた。B男のレッスンの開始に対しては、本人の意思が言動に表れるまで親は待つという姿勢で臨んだ。B男本人がピアノを習いたいと言い出すまでは、家庭内で自由に楽しく「ピアノ遊び」を繰り返すことに留意し、B男に対してレッスンを開始することを両親や指導者から促すような言動は控えるようにしていた。

B男はピアノの他、描画、ブロックなどに特に興味を持ち、サッカーも小学1年生の夏から学校のクラブに入部している。B男は集中力があり落ち着いた穏やかな性格である。

(3) 母

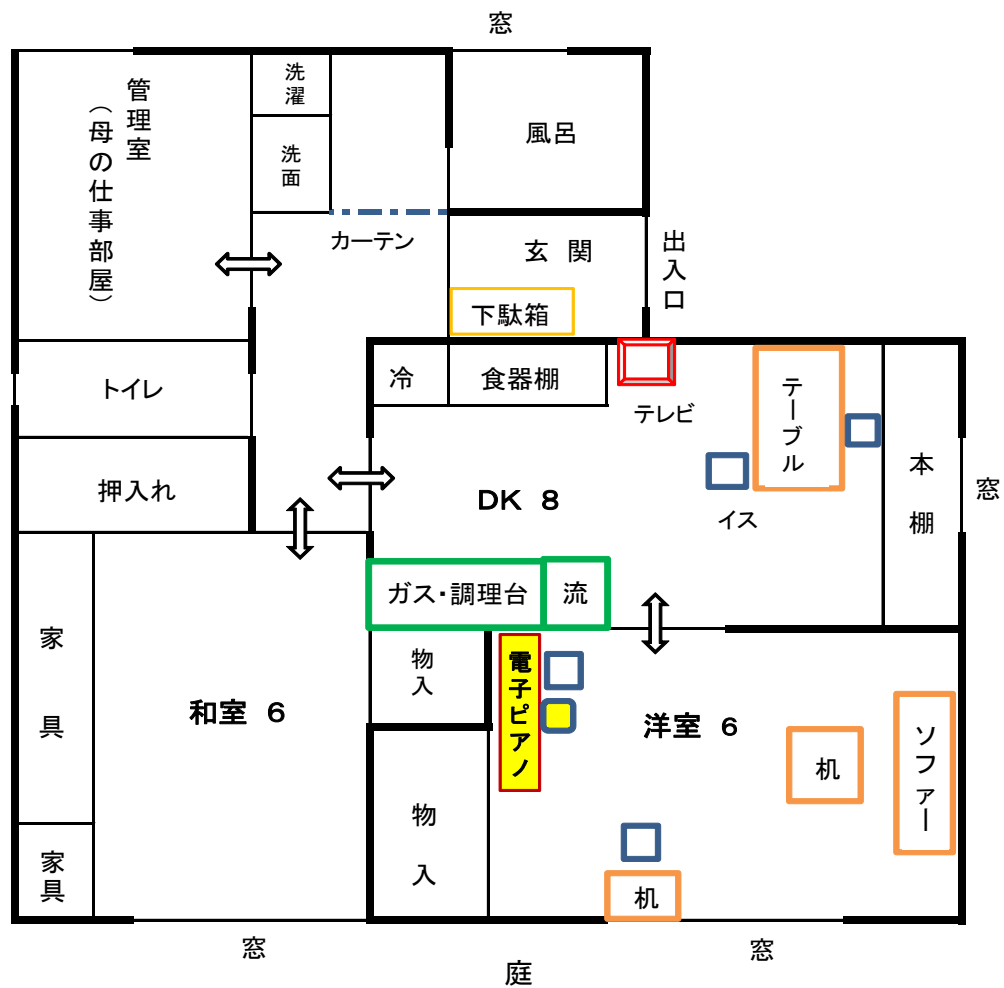
母は3人姉妹の次女として育ち、調理師免許、栄養士免許、介護福祉士免許を取得しており、国立の大型施設で調理師としての勤務経験を経て、特別養護老人ホームに寮母としてA子の妊娠まで勤務していた。ピアノ歴はなく、A子のピアノレッスンに付き添う中でピアノを弾いたのが初めてのピアノ経験である。しかし音楽が好きで家庭内には日常的にコンパクトディスクから音楽が流れており、子どもたちがピアノを弾けるようになると、ピアノに合わせてよく歌っている。観察初期の時点では子どもはA子とB男の2人であったが、その後C子・D男が誕生し4人となる。母は生活協力員として24時間対応の勤務形態で午前中は管理室にて入居者に対応しながら、合間に家事をこなしている。母は仕事を終わると、保育園に子どもを迎えに行き、子どもが就学すると学童保育から帰ってくる子どもたちを家で迎え、夕飯の仕度や洗濯物の片付け、風呂の準備等をする。筆者がフィールド観察を行うためにY家を訪問する時間帯は、母が仕事を終えて子どもたちが帰宅した夕方が多くなる。主婦にとって一番忙しい時間帯であるが、いつも爽やかな笑顔で筆者をY家に迎え入れてくれた。子どもたちが2歳を過ぎる頃から、母が子どもたちと一緒に調理を楽しむ姿が観察中頻繁に見られた。

(4) 父

父は兄と弟と妹の4人兄弟の二男として育った。祖父は音楽を非常に好み終戦後に社会人となつてから資格を取得し中学校の音楽教師となり、祖母は趣味でピアノやヴァイオリンを弾き近隣の子どもたちに教えてもいた。B男の父が育った家庭は自由にピアノを弾ける環境であり、父は幼い頃に祖母にピアノの手ほどきを受けたが、ピアノ教室などには通ってはいない。ショパンの『幻想即興曲』などはお気に入りの曲であり、子どもの頃に弾いて遊んでいた。大学進学で上京し社会人となり結婚する。子どもたちが幼い頃は仕事で帰宅時間が遅かったが、日曜日には電子ピアノやエレキギターなどを弾いて趣味を楽しんでいる。家の中の勉強机や棚などは日曜大工で父が作ったもので、料理も好きである。また子どもたちは父の性格を、「パパは何でも笑い話にしてしまう。負けても笑い話、勝っても笑い話、特に痛い（辛い）体験が笑い話になる。後になればみんな笑い話」と語る。楽観主義で何でもできる父は、子どもたちにとって憧れの存在である。

(5) 住居見取り図

① 2000 年 11 月



↔ は各部屋への動線を示している。

図 1 住居見取り図 2000 年 11 月

住居は、鉄筋 4 階建の 20 世帯が居住する高齢者住宅の 1 階にある 2LDK の管理人室である。母の執務する事務所は住居とドア 1 枚で繋がっている。フローリングの 6 畳の洋室に電子ピアノが置かれている。テレビはダイニングキッチンにあるが、テレビを視聴することは少ない。建物の周りは庭や駐車スペースがあり、ゆったりとした空間が確保されている。B 男と A 子と父母の 4 人で生活している。

② 2006 年 7 月～2007 年 10 月

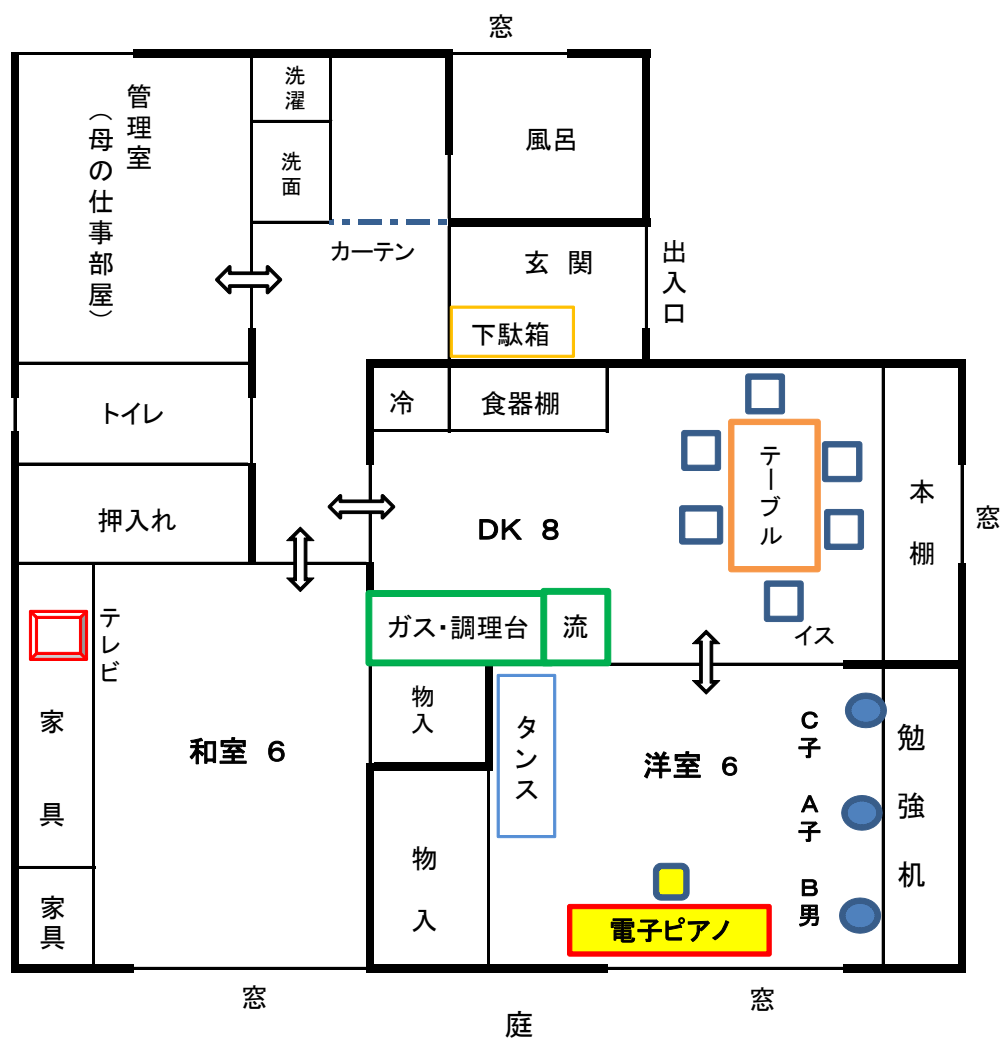


図 2 住居見取り図 2006 年 7 月～2007 年 10 月

観察が再開された時点の家具の配置である。子どもは第 4 子まで誕生しており、6 人家族になっている。仕事を終えた母は、常に台所に立ち、食事の支度や家事をこなす。父が製作した子どもたちの勉強机が洋間に設置されている。室内では CD など音楽が常に流れており、ダイニングと洋室が家族の主に過ごす場所である。テレビは和室に移動してあり、見たい番組のある時に見に行く程度である。

③ 2007 年 11 月～2008 年 2 月 19 日 （電子ピアノを台所に移動する）

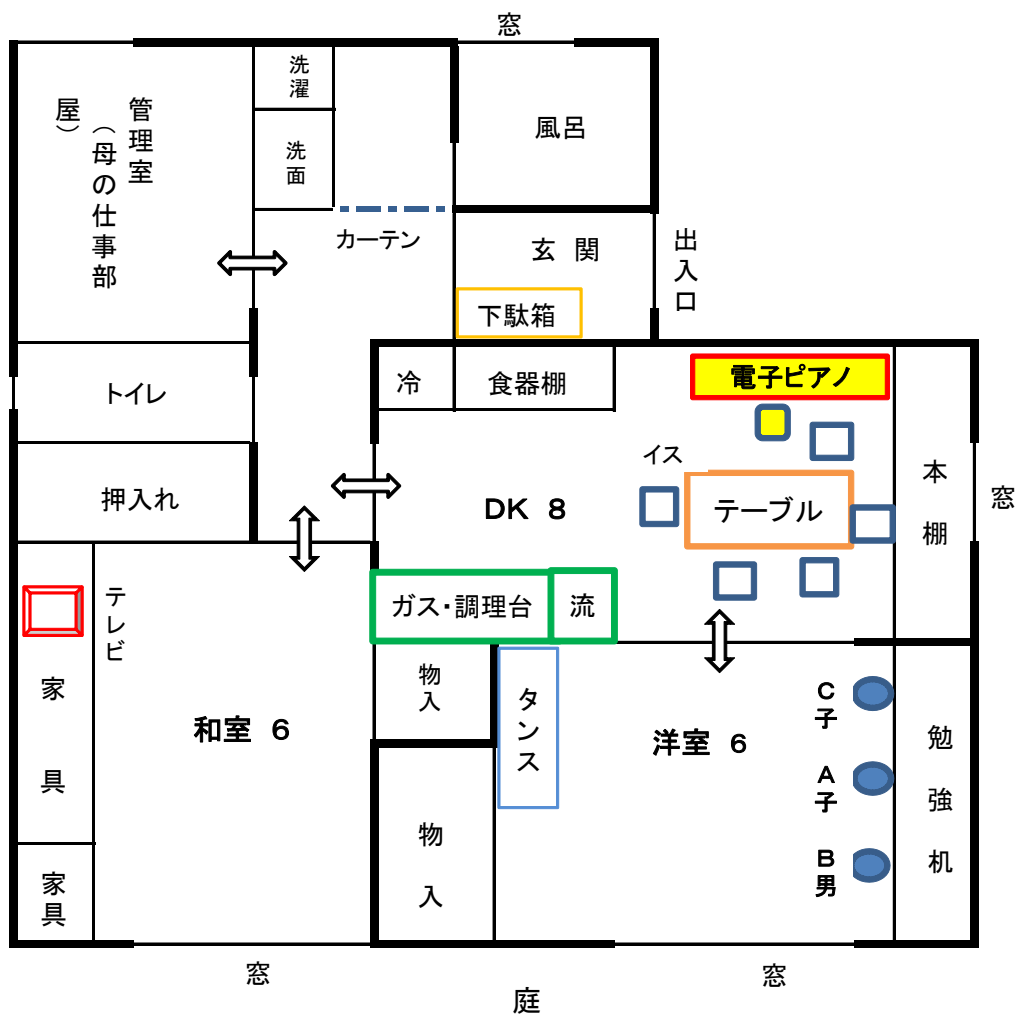


図3 住居見取り図 2007 年 11 月～2008 年 2 月 19 日

2007 年の 11 月から 2008 年の 2 月までの 3 ヶ月間だけ、ピアノがダイニングキッチンに移動されていた。洋間を広く使おうとしたのだが、ピアノとテーブルの周りに家族が集まり、密集する状態になった。ピアノを弾いていても中断されることが多くなり、以前の配置が良いということになった。

④ 2008 年 2 月 20 日～10 月 8 日

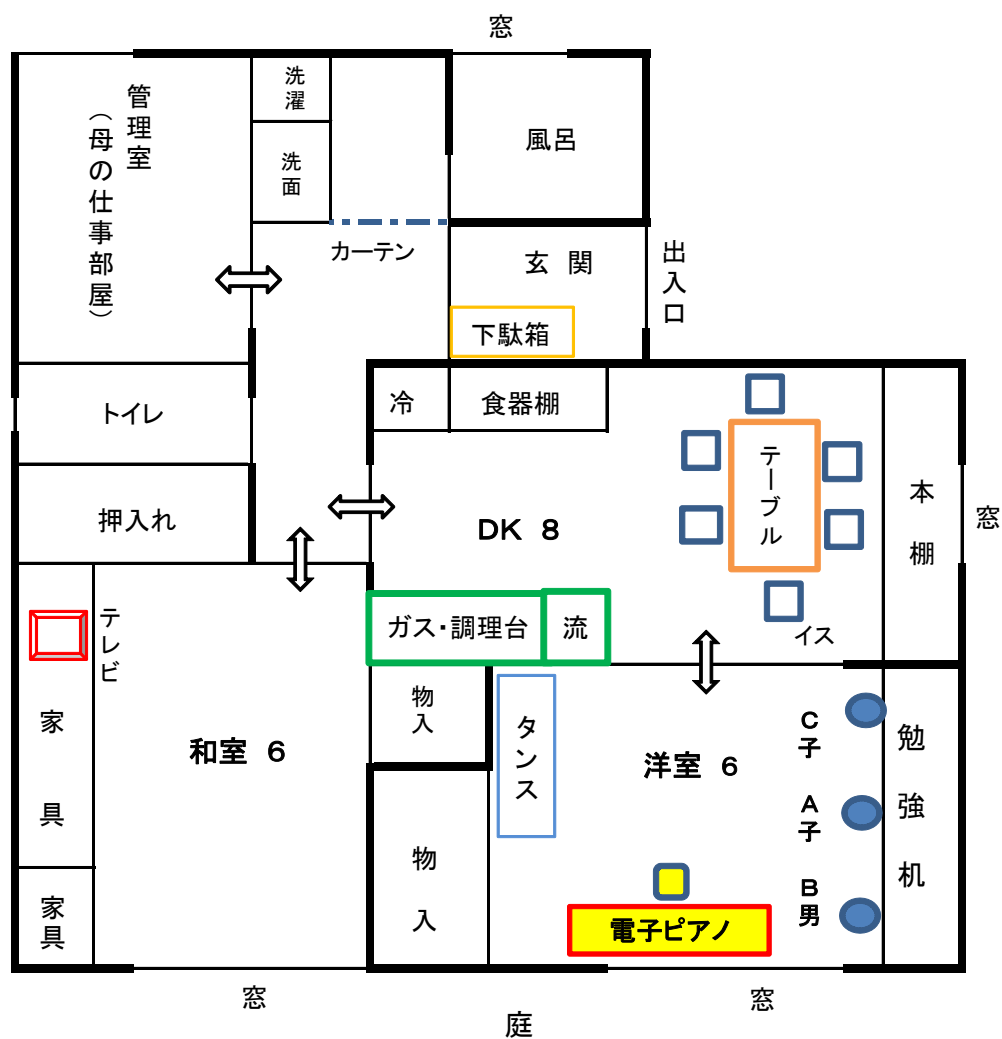


図 4 住居見取り図 2008 年 2 月 20 日～10 月 8 日

3 か月間だけ、図 3 の家具の配置だったが、テーブルとピアノがあり、皆が集まり窮屈だということとで、再度、2006 年 7 月～2007 年 10 月当時の配置に戻る、ピアノを集中して弾くためにもこの配置が良いということになった。

⑤ 2008 年 10 月 9 日～2009 年 12 月 （アップライトピアノと電子ピアノの 2 台を設置）

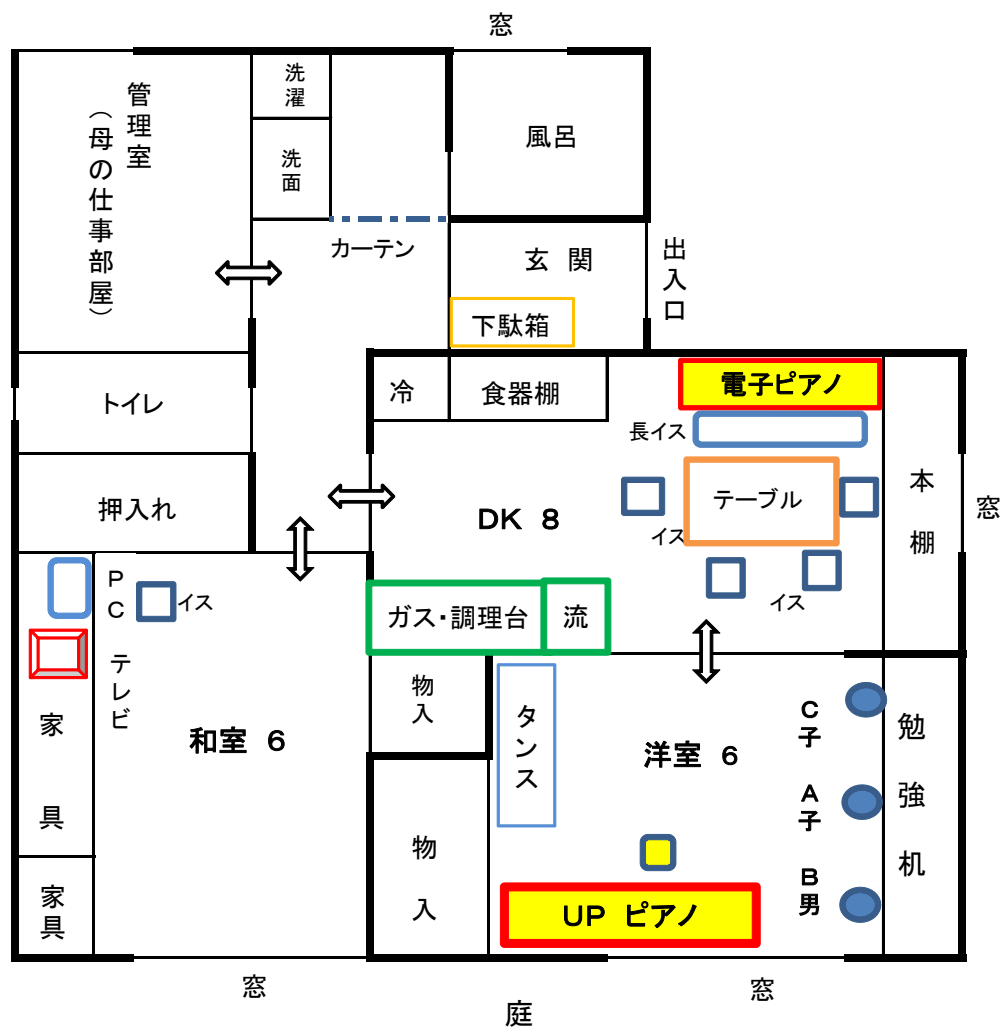


図 5 住居見取り図 2008 年 10 月 9 日～2009 年 12 月

2008 年 10 月よりアップライトピアノを知人より預かり、ピアノが 2 台になる。母は 1 台を処分しようと考えたが、父が育った実家には祖父の仕事のためのピアノの他に台所にもう 1 台ピアノがあり、台所のピアノは父たち 4 人兄弟が日常的に弾いて遊んでいた。そのことが良い経験として残っているため、父の希望によりピアノを 2 台とも設置することにした。

⑥ 2010年1月～8月 （電子ピアノを和室に移動し、男の子部屋と女の子部屋に分ける）



図6 住居見取り図 2010年1月～8月

子どもたちが成長し、4月からA子が中学生になることに伴い和室を女の子部屋、ダイニングの半分を男の子部屋に模様替えをする。家族の食事は、洋室のアップライトピアノの横のテーブルになり、テレビも洋室に移動する。子どもたちは、ちゃぶ台の周りに居ることが多い。

⑦ 2010年8月～2013年8月

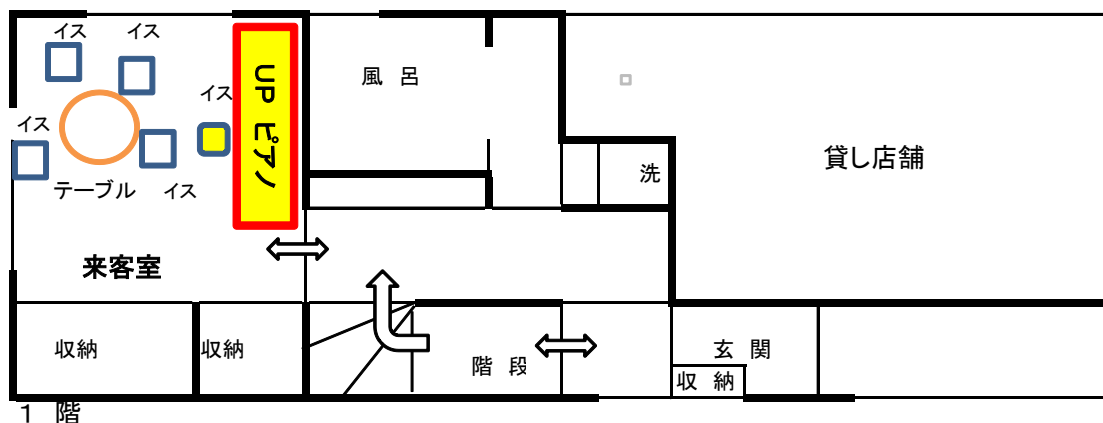
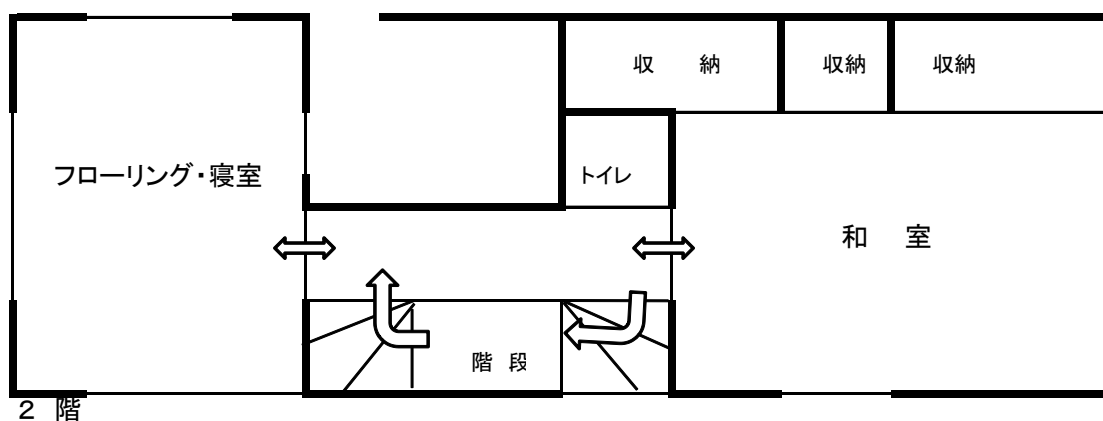
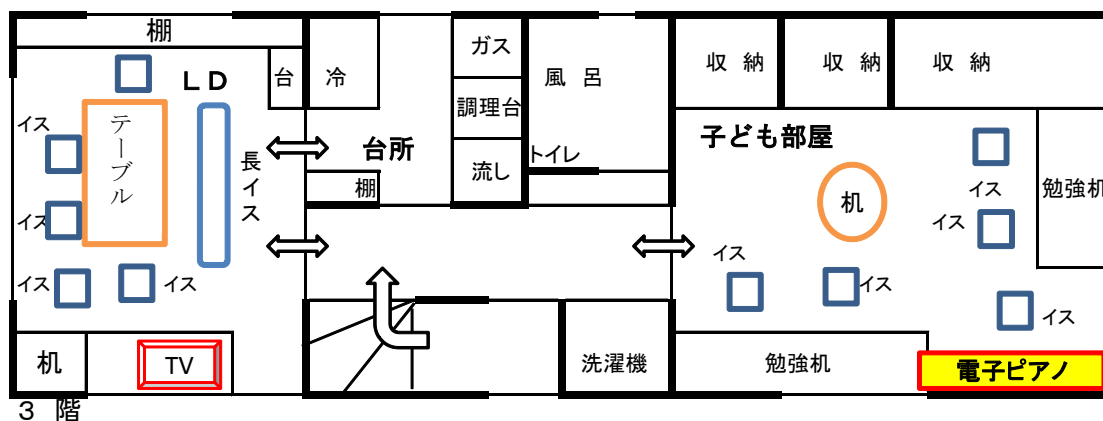
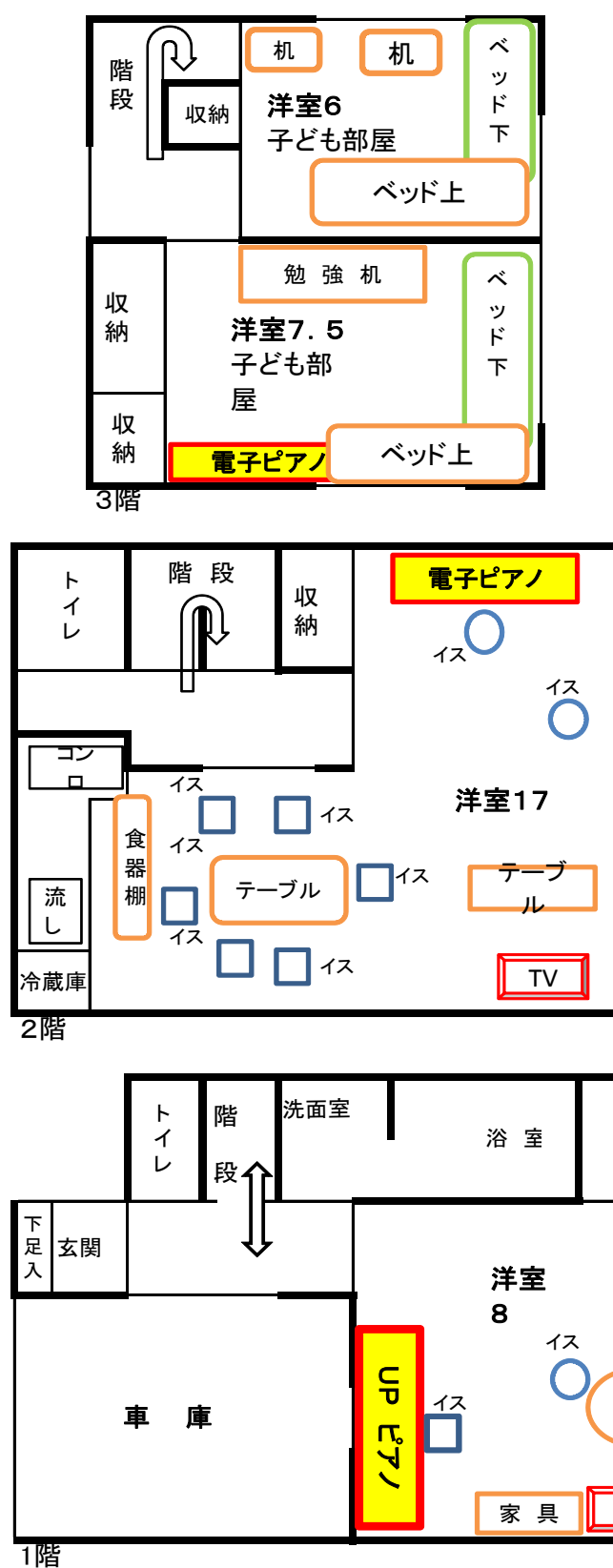


図7 住居見取り図 2010年8月～2013年8月

母の転職に伴い高齢者住宅の管理人室から、近隣の商店街にある1階が店舗の3階建ての借家に転居する。ピアノは1階と3階の子ども部屋に設置されている。間取りが細かく分かれており、3階の狭いダイニングが家族の集まる場所になっている。

⑧ 2013 年 8 月に転居した新居の見取り図



新居は、転居前の借家と同じ3階建てではあるが、2階のリビングが広く、以前の管理人室と同じく、家族が集まる空間に電子ピアノが置かれている。1階にはアップライトピアノ、3階にも電子ピアノが設置してある。この時点でB男は中学2年生、A子は高校1年生である。

図8 住居見取り図 2013 年 8 月

第3章 分析結果

第1節 特性化

分析の第1ステップとして家庭観察で収集したデータの中から、分析対象となるデータを切片化し特性を抽出した。2000年から通算14年間の家庭観察139日のうち、子どもたちのピアノ行動が観察された日数は115日であり、キーパーソンB男のピアノ行動は72日観察された。その中で対極者A子との「ピアノ遊び」にかかわる19事例25場面を切片化し57の特性を抽出した。各事例における対象場面の選定に当たっては、指導教員とGTAで学位を取得したスーパーバイザーとの協議を重ね決定した。また、本事例場面はB男の「ピアノ遊び」においてそれまでに見られなかった新たな特性が表れた場面と判断して選定した。

事例場面のキーパーソンB男は二重下線、対極者A子は下線で示す。

カテゴリーは【 】、概念は《 》、特性は< >、バリエーションは〔 〕、説明文でのローデータは斜体で示した。場面提示の下線部分はローデータと同一箇所である。

家庭内の日常生活の中で行われる「ピアノ遊び」は、家族の構成メンバーが様々に関係しながら表出してくるものである。しかし、本事例では特にキーパーソンB男の「ピアノ遊び」が表出した場面を取り出し、その行為状況をテーマごとに限定し、意味文脈の特徴を示す一行見出しで表示し行為状況の定義を行った^{73,74}。表中の状況定義の左の数字は事例番号と場面の通し番号である。例：1-2は、事例1の場面2（通し番号）、10-14は、事例10の場面14（通し番号）である。各事例の日時表記の下段には、事例内に登場する子どもの年齢学年を表記した。

事例内の文中において、「ピアノ遊び」の定義に基づいてB男が自ら自発的に弾いている曲名は『 』、他の曲名は< >で表記する。

記述の順序は、2000年の対極者A子のピアノ教室入門から、年代ごとに時間の推移を追いながら特性化を進める。

なお、家庭にあって子どもは単独で生活しているのではなく、親の養育を受けていることから、状

⁷³ 増井三夫 前掲書、2008年、11-23頁。

⁷⁴ 砂村京子 前掲書、2015年、47頁。

況定義の背景に親のかかわりが読み取れた場合に、親の特性もローデータから抽出し備考として表記する。場面提示では親のかかわりは波線で示す。

1 事例1 2000年11月14日 初観察の日 (P.30 図1 住居見取り図を参照)

対象児	B男	A子
年齢	0歳9ヶ月	3歳4ヶ月
学年	未就園	保育園年少

B男は姉のA子のレッスンに母と共に生後2ヶ月から週1回随行しており7ヶ月が経過している。この日は初めての家庭観察で、Y家を訪問した。B男は、ハイハイとつかまり立ちがやっとできるようになったところである。A子と母がピアノを鳴らして遊んでいる洋室の床にB男はお座りをして、二人の様子を目で追って見ている。A子は保育園で見てきたハンドベルの音を優しいピアノの音で表現していたが、やがて激しく強い音でピアノを鳴らし「柔道の音」と言う。本事例は、B男が、A子と母の活発な「ピアノ遊び」を楽しんでいる様子を目で追って見えて、A子のようにピアノを鳴らそうと行動した最初の場面であり、本研究の分析の対象場面として適していると判断した。

事例1 場面1

1-1	状況定義：A子と母のピアノで遊ぶ姿を見てB男が鳴らそうとする場面 その1
<p>(16:40) B男は、A子が手をグーの形にしたり手の平を広げたクラスター⁷⁵弾きで、<u>ピアノの鍵盤を自由</u> <u>に鳴らして遊んでいるのを目で追って見ている</u>。母は床に座っているB男を膝に抱きあげ、「B君と一 緒に、ハッピーバースディ弾こうかなあ〜」と言いながらピアノの椅子に座る。A子はピアノから離れてい たので、その途端、<u>「ダメエ〜、Aちゃんのなんだから」</u>と言って慌ててピアノに駆け寄って来る。B男 は<u>右手に積み木を握って持っていない左手で鍵盤をポンポンと叩いて音を鳴らす</u>と、A子は「歌ってる、 B君」と優しく言う。母が「B君上手いんだよ。この間、B君ジャンジャンって弾いてた」とB男を褒め ると、A子は少し気に入らないのか、「ジャンジャンって?」と言って激しく鍵盤を叩いたり、キャーと</p>	

⁷⁵ クラスターの創始者はカウエル。1912年自作の発表にあたって、ピアノの鍵盤を手のひら、肘、腕で奏した。『音楽大事典』第4巻、平凡社、1982年。幼児の手、指の発達に合わせて、ピアノ導入期にはこの奏法が採用されている教本がある。

いう耳をつんざくような奇声を発したりする。しかし母はA子を咎めることなく優しく笑顔で受け止めている。B男はA子がピアノを激しく鳴らす姿を見て笑いかけ、自分も指でピアノの鍵盤を押して鳴らしている。A子がピアノから離れると膝に抱かれているB男は、首をグーッと左に回し後ろを振り向いて、A子の姿を追って見ている。

B男は家庭内でいつも、A子が母と一緒にピアノの鍵盤を自由に鳴らして遊んでいるのを目で追って見ている。B男は、A子がピアノを激しく鳴らす姿を見て笑いかけたり、A子の行動を常に興味を持って見ていて、B男もA子のように指でピアノの鍵盤を押して鳴らして嬉しそうである。A子が活発にピアノで遊ぶ姿に注目しているB男は、A子のすることに興味を持って首をグーッと左に回し後ろを振り向いて、A子の姿を追って見ている。B男はA子の〔ピアノで遊ぶ姿に興味を持ち惹きつけられ〕ているのである。

母がB男とピアノで遊ぼうとすると、A子が「ダメエ〜、Aちゃんのなんだから」とB男に嫉妬したような態度をとるが、B男が右手に積み木を握り、持っていない左手で鍵盤をポンポンと叩いて音を鳴らすのを見ると、A子は途端に「歌ってる、B君」と優しく声をかけている。B男はA子からピアノで〔一緒に遊ぶのを受け入れられる〕のである。

場面1におけるB男の特性は、＜ピアノで遊ぶ姿に惹きつけられ＞＜ピアノで遊ぶのを認められ＞である。親のかかわりの特性は、＜一緒にピアノを弾く＞＜鳴らすのを褒める＞＜優しく受容＞である。

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
1. ピアノで遊ぶ姿に惹きつけられ（1-1）	ピアノで遊ぶ姿を見て興味を持ち惹きつけられ	<ul style="list-style-type: none"> ・（B男は）ピアノの鍵盤を自由に鳴らして遊んでいるのを目で追って見て ・ A子がピアノを激しく鳴らす姿を見て笑いかけ ・ （B男が）指でピアノの鍵盤を押して鳴らし ・ （B男は）首をグーッと左に回し後ろを振り向いて、A子の姿を追って見ている
2. ピアノで遊ぶ	一緒に遊ぶのを受け入	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「ダメエ〜、Aちゃんのなんだから」

のを認められ (1-1)	れられる	<ul style="list-style-type: none"> ・（B男は）右手に積み木を握り、持っていない左手で鍵盤をポンポンと叩いて音を鳴らす ・（A子は）「歌ってる、B君」と優しく
-----------------	------	--

備考：親のかかわり

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
ア.一緒にピアノを弾く(1-1)	一緒にピアノを弾こうと抱く	・B男を膝に抱きあげ、「B君と一緒に、ハッピーバースデー弾こうかなあ～」と言いながらピアノの椅子に座る
イ.鳴らすのを褒める(1-1)	ピアノを鳴らすことを褒める	・「B君上手いんだよ。この間、B君ジャンジャンって弾いてた」とB男を褒める
ウ.優しく受容(1-1)	激しい行動も咎めず受け止める	・咎めることなく優しく笑顔で受け止め

事例1 場面2

1-2	状況定義：A子と母のピアノで遊ぶ姿を見てB男が鳴らそうとする場面 その2
<p>(16:50) <u>母の膝に抱かれてピアノの前</u>にいるB男は、膝の上に立ち上がり<u>大きく腕を振って繰り返しピアノの鍵盤を叩き始めるとボンボンと大きな音がする</u>。A子が傍に来て<u>B男がピアノを叩く様子を見て「やってる、やってる」と面白がり、今度は優しい可愛い声で「やってるう～、やってえ～～～る～」と節をつけて歌い始める。</u></p> <p><u>母が「どんぐりころころ」とメロディーを弾きながら歌うと</u>、A子は横に立ちどんぐりの音をピアノで「こんな音」と言いながら、どんぐりがコロコロころがるような音をトントンと単音で鳴らす。B男はA子の<u>ピアノで遊ぶ姿から目を離さずに見ている</u>。A子は母の膝に抱かれている<u>B男の左手を取り、自分の右手で優しく握りピアノを弾かそうとする</u>。B男はA子に<u>されるままに手を預けて鍵盤を鳴らして一緒にポンポンと音を出す。</u></p> <p>A子が<u>ピアノを両手で鳴らしながらニコニコして片足で飛んだり跳ねたりして遊ぶ姿</u>を見ている母が、<u>「Aちゃん、体中で（弾いている）」と笑いながら言う</u>。B男はA子を<u>時々ニコッとしながら見つめてい</u></p>	

たが、体をA子の方に傾け左手を伸ばし、横で跳ねてピアノを鳴らしているA子に触る。A子は母のどんぐりの歌に合わせて「えへ、面白いよ」と楽しそうにピアノに掴まり飛び跳ねたりして鍵盤を鳴らす。

B男は母の膝の上に座り鍵盤に両手を載せたまま、A子の活発な動きを目で追いながら嬉しそうな表情で見ていたが、やがてB男はニコニコして嬉しように両手をバタバタ鍵盤の上で動かし、A子がピアノを鳴らしたのと同じような勢いで、前のめりになってピアノを両手で鳴らす。母はB男を抱き上げるようにして「B君も、のってきたなあ～、Bちゃん次なあに？」と声をかける。B男は母の膝に立ち上がりピアノによじ登るようにして譜面台に置いてある絵本に手を伸ばす。

A子が活発にピアノを鳴らして遊ぶ姿をずっと見ていたB男は母の膝に立ち上がり、大きく腕を振って繰り返しピアノの鍵盤を叩き始める。まだ一人では立つことは出来ず掴まり立ちがやっとのB男だが、ピアノを鳴らすことに強い意欲を感じる。大きな音を鳴らしB男がピアノを叩く様子は、A子の興味も刺激して、「やってる、やってる」と面白がり、B男の遊びに加わり、更に優しい可愛い声で「やってるう～、やってえ～～～る～」と節をつけて歌い出して、一緒に遊んでいる。〔B男が積極的にピアノを鳴らし、A子の遊びを引き出す〕のである。

母のピアノに合わせて歌ったり鳴らしたり踊ったりするA子の姿は、B男にとって魅力的な存在のようであり、その様子に惹き付けられたようにA子のピアノで遊ぶ姿から目を離さずに見て嬉しそうである。またA子もB男がピアノを鳴らしたいと思っていることが分かったかのように、B男の左手を取り、自分の右手で優しく握りピアノを弾かそうとする。A子はピアノで遊んでいる自分をB男が注目してくれていることが嬉しかったようで、遊んであげようとしている。B男もまたA子に対して嫌がらずじっとして、されるまま手を預けて鍵盤を鳴らし、嬉しそうにしている。B男はA子に「一緒にピアノで遊んでもらう」のである。

更にA子はふざけて全身を使って踊るようにしてピアノを両手で鳴らしながらニコニコして片足で飛んだり跳ねたりして遊ぶ姿を見せている。母に抱かれたままB男もA子の遊ぶ姿を時々ニコツとしながら見つめていたが、一緒に遊びたいとでも言うかのように、急に体をA子の方に傾け左手を伸ばし、横で跳ねてピアノを鳴らしているA子に触る行動に出たので、母はB男が落ちないようにしっかり抱きなおす。A子はピアノを鳴らして遊ぶ愉快的な気持ちを、「えへ、面白いよ」と楽しそうにピアノに掴まり飛び跳ねたりして鍵盤を鳴らす姿を見せながら、B男に話しかける。まだ言葉を話せない

B男は、楽しそうにピアノで遊ぶA子に「興味を持ち一緒に遊びたい」という意思表示を行動で示しているようである。

B男は、飛んだり跳ねたり歌ったり弾いたりするA子の活発な動きを目で追いながら嬉しそうな表情で見ていたが、今度はB男自身が自分からピアノに向かって、ニコニコして嬉しそうに両手をバタバタ鍵盤の上で動かし始めるのである。A子がピアノを鳴らしたのと同じような勢いで、前のめりになってピアノを両手で鳴らす様子は、まるでA子の動きをまねしているように見える。B男にとってA子は、いつも面白そうにピアノを鳴らして歌ったり踊ったりする魅力的な真似をしたくなる存在と言える。B男は「A子のようにピアノを鳴らしたい」という意欲的な姿を示した。

場面2におけるB男の特性は、＜やる気が（A子の）遊びを誘う＞＜一緒にピアノで遊ぶ楽しさ＞＜見てまねて鳴らす＞である。親のかかわりの特性は、＜膝に抱いて弾き歌う＞＜優しく声かけ＞である。

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
3. やる気が（A子の）遊びを誘う (1-2)	B男が積極的にピアノを鳴らし、A子の遊びを引き出す	<ul style="list-style-type: none"> ・（B男は）大きく腕を振って繰り返しピアノの鍵盤を叩き始める ・ B男がピアノを叩く様子 ・（A子は）「やってる、やってる」と面白がり ・（A子は）優しい可愛い声で「やってるう～、やってえ～～～る～」と節をつけて歌い
4. 一緒にピアノで遊ぶ楽しさ(1-2)	一緒にピアノで遊んでもらう	<ul style="list-style-type: none"> ・（B男は）ピアノで遊ぶ姿から目を離さずに見て ・（A子は）B男の左手を取り、自分の右手で優しく握りピアノを弾かそう ・（B男は）されるまま手を預けて鍵盤を鳴らし
	興味を持ち一緒に遊びたい	<ul style="list-style-type: none"> ・（A子は）ピアノを両手で鳴らしながらニコニコして片足で飛んだり跳ねたりして遊ぶ ・（B男は）時々ニコッとしながら見つめて ・（B男は）体をA子の方に傾け左手を伸ばし、横で跳ね

		<p>てピアノを鳴らしているA子に触る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・（A子は）「えへ、面白いよ」と楽しそうにピアノに掴まり飛び跳ねたりして鍵盤を鳴らす
5. 見てまねて鳴らす(1-2)	A子のようにピアノを鳴らしたい	<ul style="list-style-type: none"> ・ A子の活発な動きを目で追いながら嬉しそうな表情で見て ・ （B男は）ニコニコして嬉しそうに両手をバタバタ鍵盤の上で動かし ・ A子がピアノを鳴らしたのと同じような勢いで、（B男は）前のめりになってピアノを両手で鳴らす

備考：親のかかわり

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
エ. 膝に抱いて弾き歌う(1-2)	抱いてピアノを弾き歌う	<ul style="list-style-type: none"> ・ 母の膝に抱かれてピアノの前 ・ 母が「どんぐりころころ」とメロディーを弾きながら歌う ・ B男は母の膝の上で鍵盤に両手を載せ
オ. 優しく声かけ(1-2)	子どもに声をかける	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「Aちゃん、体中で（弾いている）」と笑いながら言う ・ 「B君も、のってきたなあ～、Bちゃん次なあに？」と声をかける

2 事例2 2000年11月20日

対象児	B男	A子
年齢	0歳9ヶ月	3歳5ヶ月
学年	未就園	保育園年少

事例1から6日後の夕方。保育園から帰ったA子と母がピアノで遊ぶ様子を洋室の床に座って見て

いたB男は、「カエルの合唱」のメロディーが流れると、自らハイハイをしてピアノの所に行き、掴まり立ちをして鍵盤を鳴らそうとする。B男がA子の「ピアノ遊び」を楽しむ姿を見て、自分もピアノを鳴らそうと意欲的な行動に出る場面が、本研究の分析の対象場面として適していると判断した。

事例2 場面3

2-3	状況定義：ピアノで遊んでいるA子と母達に興味を持ち、B男が這って傍に行く場面
<p>(16:50) A子がピアノの蓋を開け、スイッチを入れピアノを端から端まで両手で鳴らす。床に座っているB男は、A子が<u>ピアノを弾いて遊んでいるのを目で追って見ている</u>。4ヶ月前のピアノ発表会でA子と連弾した『カエルの合唱』を母が弾き始めると、B男は<u>ピアノに這って近づいて行く</u>。A子も「Aちゃん『カエルの合唱』上手だった」と自分のことを言い、B男に、「<u>Aちゃんもやるけど、B君もやる？教えてあげる</u>」と声をかけながらピアノの椅子に小走りで行き母の隣に座る。B男もグラグラしながら<u>ピアノの椅子につかまり立ちをして、左手を伸ばしピアノの鍵盤を触ろうとする</u>。A子は「三(さん)はい！」と合図をして母と『カエルの合唱』を弾き始める。B男は<u>二人が歌いながら弾くのを椅子に掴まりじっと見ている</u>。母と呼吸を合わせてクラスターで弾いたA子が、「<u>ヤワラちゃんの歌やってあげる</u>」と言って、<u>鍵盤をクラスターで何回も鳴らすと、激しい音ではあるが、母は「力強い感じだね」と言う</u>。横にいるB男は<u>背伸びをして手を鍵盤に伸ばし、やっと届いた一番低い音を鳴らすことが出来た</u>。</p>	

家庭内ではA子が保育園から帰ると、母とA子がピアノを弾いたり歌ったり絵本を読みながら音を付けたりして遊ぶことが日常である。A子は声も大きくよく話し、行動がかなり活発であり感情を激しく表すこともある。従ってB男は生活の中でA子の行動に自然と注目することになる。この日もB男は興味深そうにA子のピアノを弾いて遊んでいるのを目で追って見ている。しかし自分も一緒に遊びたいという意思を示すかのようにすぐピアノに這って近づいて行き、ピアノの椅子につかまり立ちをして、左手を伸ばしピアノの鍵盤を触ろうとしており、ピアノを鳴らしたいという意欲を行動で見せている。しかしB男は母に抱き上げてもらわないとピアノが鳴らせない。母はA子とピアノを弾いているため、B男は二人が歌いながら弾くのを椅子につかまりじっと見ているしかなかったのだが、遂に自力で母に助けってもらわずに背伸びをして手を鍵盤に伸ばし、やっと届いた一番低い音を鳴らすことが出来た。B男は「ピアノで遊ぶ楽しそうな姿を見て鳴らそうとする」のである。

B男の弾きたいという行動に対して、A子は優しく「Aちゃんもやるけど、B君もやる？教えてあげる」と声をかけたりしている。当時人気の柔道の谷選手の激しい動きを、ピアノの音を強く鳴らして表し、「ヤワラちゃんの歌やってあげる」と言って、鍵盤をクラスターで何回も鳴らす姿を見せている。楽しそうにピアノの音を鳴らし表現して遊んでいるA子から、B男は声を掛けられたり遊びに誘ってもらえることは、B男の意欲的行動に繋がったと考えられる。B男は「遊びに誘ってもらおう」のである。

場面3におけるB男の特性は、＜ピアノの遊びに興味を持ち鳴らしたい＞である。親のかかわりの特性は、＜弾いて遊びを示す＞＜肯定的な受け止め＞である。

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
6. ピアノの遊びに興味を持ち鳴らしたい(2-3)	ピアノで遊ぶ楽しそうな姿を見て鳴らそうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・（A子が）ピアノを弾いて遊んでいるのを（B男は）目で追って見て ・（B男は）ピアノに這って近づいて ・（B男は）ピアノの椅子につかまり立ちをして、左手を伸ばしピアノの鍵盤を触ろう ・（B男は）二人が歌いながら弾くのを椅子につかまりじっと見て ・（B男は）背伸びをして手を鍵盤に伸ばし、やっと届いた一番低い音を鳴らす
	遊びに誘ってもらおう	<ul style="list-style-type: none"> ・「Aちゃんもやるけど、B君もやる？教えてあげる」と声をかけ ・（A子はB男に）「ヤワラちゃんの歌やってあげる」と言って、鍵盤をクラスターで何回も鳴らす

備考：親のかかわり

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
カ. 弾いて遊び	弾いてみせる	<ul style="list-style-type: none"> ・『カエルの合唱』を母が弾き始める

を示す(2-3)		
も、肯定的な受け止め(2-3)	肯定的に反応する	・激しい音ではあるが、母は「力強い感じだね」と言う

事例2 場面4

A子は楽しそうに母のピアノに合わせて歌を歌っている。B男はピアノの椅子に掴まり立ちをしてその様子を見てピアノに触ろうとしている。

2-4	状況定義：B男がピアノへの強い意欲を示しピアノを鳴らす場面
<p>(16:56) 母がA子と「大きな栗の木の下で」を歌いながらピアノを弾くと、B男は<u>ピアノの椅子の横に掴まり立ち</u>していて、「<u>あー</u>」とピアノに合わせ声を出している。母は「B君歌ってまーす」と言って、A子と歌う。B男は何度か立ったりしゃがんだりしながら、「<u>うー</u>」と強い調子の声を出し母の顔を見上げる。母はB男に笑いかけ「Bちゃんも弾きたいかい？じゃあBちゃんも一緒に弾く？」と抱き上げる。母がB男を抱きピアノの前に座ると、B男はすぐに膝の上に立ち上がり<u>元気に両手を動かし鍵盤を力強く鳴らし始める</u>。母は「あっ、上手上手、いいねー、力強いねえ〜、おー、はいはい、そうかー、B君うまいねー」と褒める。母が『手をたたきましょう』を弾き歌いすると、B男は<u>リズムに合わせて勢いよく膝の屈伸を繰り返しながら鍵盤を元気に鳴らす</u>。母が弾き歌いを続けると、B男は「<u>あ〜あ〜</u>」と歌と<u>タイミングを合わせて声を出したので、母が驚いて「すごーい」と誉める</u>。</p> <p>B男がピアノの上に登ろうとして危ないので、母はB男を少し離れた床に下ろして座らせおもちゃを与えるが、B男は「<u>う〜う〜</u>」と不満そうな声を出している。A子が「<u>今度、Aちゃんが弾く</u>」と言って走ってピアノに行き、母と一緒に『手をたたきましょう』の笑い声の歌詞の部分を<u>鍵盤の色々な位置で鳴らす</u>。B男は<u>また這ってピアノに戻り、椅子に掴まって立ち上がり、ピアノに両手を伸ばす</u>。母は「B君もやってきた」と言い、A子も「<u>やってる</u>」と言う。B男は、ピアノに<u>両手でしがみつくように掴まり、ゆらゆらしながら鍵盤を鳴らす</u>。</p>	

B男はずっと ピアノの椅子の横に掴まり立ちをしてA子たちがピアノで遊んでいるのを見ており、

一緒に歌うかのように「あー」とピアノに合わせ声を出しているが、抱き上げてくれないので、自分に気づいて欲しいとでも言うように「うー」と強い調子の声を出して訴えている。B男は「ピアノで遊びたいと訴える」のである。

母がB男の訴えに反応し抱き上げると、B男はやっとピアノで遊べるのが嬉しくてたまらないというように元気に両手を動かし鍵盤を力強く鳴らしている。母の膝に抱かれ、リズムに合わせて勢いよく膝の屈伸を繰り返しながら鍵盤を元気に鳴らすことや、「あ〜あ〜」と歌とタイミングを合わせて声を出している姿は、音に合わせて自然に体が躍動しており、「一緒にピアノで遊ぶ喜びに溢れ」ている。

B男は床に下ろされピアノで遊べなくなったので、「う〜う〜」と不満そうな声を出し気持ちを訴えている。「今度、Aちゃんが弾く」とやる気を見せたA子が、歌詞の笑い声を縦横無尽に鍵盤の色々な位置で鳴らす様子は、ピアノで自由に表現できて楽しそうである。B男はまた這ってピアノに戻り、椅子に掴まって立ち上がり、ピアノに両手を伸ばすと、A子はB男の意欲的な行動を見て「やってる」と言う。まだ足腰がしっかりしていないB男だがピアノに両手でしがみつくように掴まり、ゆらゆらしながら鍵盤を鳴らす行動で、やる気を見せるのである。B男が「一緒にピアノで遊びたい強い意欲を示す」行動と捉えられる。

場面4におけるB男の特性は、＜ピアノへの強い意欲＞＜一緒にピアノで遊ぶ喜び＞＜一緒に遊びたい強い意欲＞である。親のかかわりの特性は＜関心を示す＞＜関心を持ち褒める＞である。

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
7. ピアノへの強い意欲(2-4)	ピアノで遊びたいと訴える	<ul style="list-style-type: none"> ・（B男は）ピアノの椅子の横に掴まり立ち ・（B男は）「あー」とピアノに合わせ声を出し ・（B男は）「うー」と強い調子の声を出し
8. 一緒にピアノで遊ぶ喜び(2-4)	一緒にピアノで遊ぶ喜びに溢れ	<ul style="list-style-type: none"> ・（B男は）元気に両手を動かし鍵盤を力強く鳴らし ・（B男は）リズムに合わせて勢いよく膝の屈伸を繰り返しながら鍵盤を元気に鳴らす ・（B男は）「あ〜あ〜」と歌とタイミングを合わせて声を出し

9. 一緒に遊びたい強い意欲(2-4)	一緒にピアノで遊びたい強い意欲を示す	<ul style="list-style-type: none"> ・(B男は)「う～う～」と不満そうな声 ・「今度、Aちゃんが弾く」 ・(A子が)鍵盤の色々な位置で鳴らす ・(B男は)また這ってピアノに戻り、椅子に掴まって立ち上がり、ピアノに両手を伸ばす ・(B男が)「やってる」と言う ・(B男は)両手でしがみつくように掴まり、ゆらゆらしながら鍵盤を鳴らす
---------------------	--------------------	---

備考：親のかかわり

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
ク. 関心を示す(2-4)	子どもに楽しく反応	<ul style="list-style-type: none"> ・母は「B君歌ってまーす」と言って、A子と歌う ・母は「B君もやってきた」と言い
	気持ちを汲んで遊びに誘う	<ul style="list-style-type: none"> ・母はB男に笑いかけ「Bちゃんも弾きたいかい？じゃあBちゃんも一緒に弾く？」と抱き上げる
ケ. 関心を持ち褒める(2-4)	子どもに優しく反応し褒める	<ul style="list-style-type: none"> ・母は「あっ、上手上手、いいねー、力強いねえ～、おー、はいはい、そうかー、B君うまいねー」と褒める ・母が驚いて「すごーい」と褒める

3 事例3 2006年8月4日 (P.31 図2 住居見取り図を参照)

対象児	B男	A子	C子	D男
年齢	6歳6ヶ月	9歳1ヶ月	4歳4ヶ月	1歳9ヶ月
学年	小学1年生	小学3年生	保育園年中	未就園

家庭観察は、5年ぶりである。B男の幼稚園を観察していた期間があり、再び家庭観察を申し出て再開することになった。この期間もピアノレッスンは継続していたので、子どもたちとは毎週顔を会わせていた。

C子とD男が誕生し家族構成が6人となってから初めての家庭観察である。住まいは同じ管理人住居であるが、家具の配置が多少変化している。電子ピアノは洋室の窓側に移動してあり、左側には父が制作した3人が並んで座れる勉強机がある。電子ピアノは台所に立つ母や家族が集う台所のテーブルから見える位置にある。父母はテレビ視聴よりもコンパクトディスクで音楽を流す方を好みテレビは和室に移動してある。流す音楽はクラシックからポップスまで幅広い。電子ピアノにも自動演奏が組み込まれており、ジャズやポップスも流れている。子どもたちは弾いていないときは自動演奏のスイッチをよく入れている。テレビ視聴は、観たい番組を選んで見ているが、長時間の視聴は殆んどない。またファミリーコンピュータ等のゲーム機器は利用していない。

家庭観察の休止期間もA子のピアノレッスンは継続されており、入門して6年目になる。家庭での「ピアノ遊び」はA子が中心となってY家の日常として活発に繰り返され定着している。その間にB男はピアノレッスンを開始したいと両親に希望し2003年、3歳7ヵ月から習い始め3年目である。発表会も3回経験しており、大譜表⁷⁶の読譜⁷⁷は出来るようになっている。C子も同じように自分の習いたいという意思を両親に話し、2006年に3歳10ヵ月で入門し7ヵ月目である。また、ピアノが好きな父は、休日や帰宅の早い時にピアノを弾いて楽しんでいる。母親によると、この頃のB男は、A子がアニメの主題歌やポピュラーな曲を弾いているのを見よう見まねで弾いて遊ぶことが多くなっているようである。B男にとってA子はピアノの上手な姉であり、物心ついた時にはピアノはA子の占有物のような状態であった。幼い頃からB男はA子が「ピアノ遊び」を楽しんでいる日常の中で、その姿を見て聴いて育って来ている。

夏休みのこの日、Y家へのフィールド観察のために訪問する。兄弟姉妹が4人揃って在宅している時に訪問するのは初めてである。筆者と子どもたちはレッスンでは毎週顔を合わせているが、ビデオカメラをセットすると子どもたちは少し興奮気味である。A子はC子がふざけて笑いすぎるので、「Cちゃん興奮しすぎ」と言い、B男はビデオカメラの前でポーズを作って笑いながら、「先生あそこ（ビデオの横）で、透明人間で見てる」と母に言う。台所の母は笑い、C子は穴のあいたブロックをメガネのようにしてビデオを見て笑う。

暫くして子どもたちが落ち着いてくると、A子がD男をピアノで遊ばせながら弾いたり、『1年生になったら』を伴奏つきで弾くとC子がそれに合わせて歌詞を歌い始める。やがてA子がピアノから離

⁷⁶ ト音譜表の下にヘ音譜表を置き、両方を縦線と大かっこで結んだ譜表をいう。ピアノ、オルガン、ハープのような楽器や混声合唱曲等に使用される。『音楽辞典 楽語』音楽之友社、1971年(第22刷)、301頁。

⁷⁷ 楽譜に書かれている音符のリズムや音名を読み取り認識すること。

れると、B男が『エリーゼの為に』を弾く様子が見られた。それまでB男は机でロボットの緻密な絵を熱心に描いていたが、その絵を母に見せに行き褒められ、その嬉しい気持ちをピアノで表現しようとした場面であり、本研究の分析の対象場面として適していると判断した。

事例3 場面5

3-5	状況定義：B男がA子をまねて、やや弾けるようになった曲を弾く場面
<p>(13:41) ピアノをずっと弾いていたA子はピアノを止め、D男をブロックで遊ばせ始める。ピアノは蓋が開いたまま誰も弾いていない。勉強机で絵を夢中で描いていたB男は、出来上がった絵を母に見せに行くと、凄く上手に描けたと母から褒められる。B男は<u>嬉しそうにスキップをしてピアノに行くと、立ったまま『エリーゼの為に』の最初の子レミレの部分元気よく弾き始める。</u>しかし、その<u>先はつかえて上手く弾けない。</u><u>右手を何回も弾き、次に左手の伴奏も付けて考えながら暫く弾いてから、筆者のビデオを覗きに来る。</u>この曲はB男には難しいが、A子がいつも弾いていてB男も好きな曲である。</p> <p>B男がピアノから離れるとすぐに<u>入れ替わってA子がピアノに行き『エリーゼの為に』を軽がると両手で弾き始める。</u>B男はビデオカメラの所で、その様子を「<u>Aちゃんはどうでしょうか。綺麗な音楽をしていますね</u>」と実況中継をする。A子は暫く弾いていたが、自動演奏で『エリーゼの為に』を流し、「Aが弾かなくてもピアノに入っている」と言う。B男はA子の様子をビデオで覗いて面白がる。</p>	

一生懸命に描いた絵を母に誉められたB男は、嬉しそうにスキップをしてピアノに行くと、立ったまま『エリーゼの為に』の最初の子レミレの部分元気よく弾き始める。この頃のB男は、A子が弾いている『エリーゼの為に』が気に入っており、B男自身も一番弾きたい好きな曲であった。B男は一生懸命描いた絵を誉められ、嬉しさを身体で表現するようにスキップをするが、さらに「嬉しくてピアノを弾く」ことを思い立ち元気よくピアノを弾き始めたのだった。

しかし、まだA子のように弾けないB男は、最初の部分を弾いただけで、先はつかえて上手く弾けない。この曲が弾けるだけの実力が伴わないB男は、弾きたい思いだけが先行している。しかし、B男はそこでピアノを弾くのを止めることなく、音を拾いながら右手を何回も弾き、次に左手の伴奏も付けて考えながら暫く弾いていた。上手く弾けないB男はピアノで嬉しさを「表現したいと練習」を始めたのである。

A子が『エリーゼの為に』の見本を見せるように、B男と入れ替わってA子がピアノに行き『エリーゼの為に』を軽がると両手で弾き始める姿を見て、B男が「Aちゃんはどうでしょうか。綺麗な音楽をしていますね」と言うように、A子が弾く色々な曲を自分も弾きたいと思っているB男は、日頃からA子のピアノは上手だと思い、〔A子の演奏を綺麗だと思っている〕ことを発言するのである。

場面 5 におけるB男の特性は、＜ピアノを弾いて気持ちを表現＞＜A子の弾くピアノへの憧れ＞である。

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
10. ピアノを弾いて気持ちを表現 (3-5)	嬉しくてピアノを弾く	・（B男は）嬉しそうにスキップをしてピアノに行くと、立ったまま『エリーゼの為に』の最初のミレミレの部分を元気よく弾き始める
	表現したいと練習	・（B男は）先はつかえて上手く弾けない ・（B男は）右手を何回も弾き、次に左手の伴奏も付け考えながら暫く弾いて
11. A子の弾くピアノへの憧れ (3-5)	A子の演奏を綺麗だと思っている	・入れ替わってA子がピアノに行き『エリーゼの為に』を軽がると両手で弾き始め ・（B男は）「Aちゃんはどうでしょうか。綺麗な音楽をしていますね」

4 事例4 2006年9月6日

対象児	B男	A子
年齢	6歳7ヶ月	9歳2ヶ月
学年	小学1年生	小学3年生

この場面になる30分程前に、B男が英語の絵本を読んでいるのをA子に邪魔されたり、「この頃の一年生は生意気」などと言われ、B男は気分を害している様子だった。A子もイライラしており大音

響でピアノの自動演奏を流し母に注意されている。そのような状況でB男はA子のいつも弾いている『となりのトトロ』の曲を弾き始め、A子に妨害をされたことから小競り合いとなる。A子の様にピアノを上手に弾きたいと意欲を燃やし始めてきたB男と、お気に入りの曲をまねして弾いているB男に対して疎ましさを感じるA子との諍いが観察された。ピアノを弾いているB男がA子に邪魔されたことに強く抗議した初めての場面であるため、本研究の分析の対象場面として適していると判断した。

事例4 場面6

4-6	状況定義：B男がピアノを邪魔したA子に抗議する場面
	<p>(17:15) B男は<u>ピアノの椅子に座り、自動演奏のジャズの音楽に合わせて身体を大きく動かし、ピアノを弾く格好をまねしてふざけて笑っていた</u>が、やがて、B男は、<u>A子がいつも弾く『となりのトトロ』のメロディーを記憶を頼りに片手で何回も繰り返し弾き始める</u>。A子が台所からピアノの傍に行くと、B男が<u>A子を振り向き目が合う</u>。A子は勉強机に座り宿題を始めるが、B男がピアノを弾く横で、<u>邪魔するよ</u>うに違う曲を歌い始める。B男は歌を止めて欲しいのでA子の方を向いて「<u>ね———え!</u>」と大きな声を出し、「<u>もう分かんなくなっちゃったじゃない</u>」と文句を言うと、A子は更に<u>わざと大声で歌い始める</u>。ついに<u>B男はA子とその場でにらみ合いになり、肩をいからすような格好をして立ち上がり、A子の傍に行く</u>と、<u>A子も立ち上がった</u>。すると<u>B男は両手でA子の肩に掴みかかったため、A子も同じようにB男の肩に掴みかかり、取っ組み合いが始まる</u>。普段怒ることが余りないB男が、ピアノを邪魔されたことに対して、A子に向かってぎこちないながらも直接怒りの感情をぶつけている。取っ組み合いの末、<u>B男はA子に押さえ込まれてしまい、A子が常に優勢であるが、B男は押さえ込みをすり抜けて喧嘩が終結する</u>と二人は<u>ケロッとした表情</u>となり、B男は台所のテーブルにおやつを食べに行き、A子も母と話をする。この間台所にいた母は二人の喧嘩を見ていたが、止めることはせずに黙って食器を洗っている。A子が『トトロ』を弾いてから、大音響で『戦場のメリークリスマス』を弾き始めると、<u>母が「音がとっても大きく聴こえるんだけど、何でだろう、Aちゃんの指の力が強くなった」と言って音量を下げる</u>。</p>

B男はピアノの椅子に座り、自動演奏のジャズの音楽に合わせて身体を大きく動かし、ピアノを弾く格好をまねしてふざけて笑っていた。まだピアノ技術が初歩の段階のB男は、有名な曲を弾くことは困難である。この電子ピアノにはクラシック・ポピュラー・ジャズなど自動演奏が内蔵されていて

聴くことができる。B男はいかにも自分が弾いているかのように身体を動かし「名曲の演奏をまねて体を使って楽しむ」のである。

さらにA子がいつも弾く『となりのトトロ』のメロディーを、記憶を頼りに片手で何回も繰り返し弾き始めている。B男はA子のようにはまだ上手に弾けないが、A子が家庭で楽しんで弾いている曲を、B男も聴いて気に入っており、まねて弾くことが多い。B男はA子の「好きな曲をまねて弾き楽しむ」姿を示している。

A子の好きな曲を弾いていたB男はA子の反応を気にして、傍に来たA子を振り向き目が合う。するとA子は、B男の練習を邪魔するように違う曲を歌い始める行動に出る。『となりのトトロ』を弾けるようになりたいと思い弾いていたB男は、「ね———え！」と大きな声を出し、「もう分かんなくなっちゃったじゃない」とA子の態度に不満をぶつける。B男はピアノを「弾くことを妨害され文句を言う」のである。

B男が文句を言うとA子がわざと大声で歌い始めたため、ついにB男はA子とにらみ合い、肩をいからすような格好をして立ち上がりA子につかみかかり、取っ組み合いが始まる。B男はA子に押さえ込まれてしまい、A子が常に優勢である。まだ体がA子よりずっと小さいB男だが、ピアノを弾くのを邪魔され余程腹が立ったようである。「ピアノを邪魔され取っ組み合いで抗議」をする。

B男が兄弟喧嘩をしたのは観察をしていて初めて見る光景である。B男は人と争うのが嫌いで大概の場合は自分から身を退く性格と母も語っている。B男はやがてA子の押さえ込みをすり抜けて喧嘩が終結し、互いにクロツとした表情となっている。争いが苦手でもあり、まだ1年生のB男は体力的にもA子には敵わないが、A子に対して我慢せずに「ピアノを弾きたい感情をぶつけ解消」した珍しい場面であった。

場面 6 におけるB男の特性は、＜ピアニストのまね＞＜曲をまねて遊び弾き＞＜練習を妨害されたことに強く抗議＞である。親のかかわりは、＜子どもに任せ見守る＞＜子どもの表現を肯定的に解釈＞である。

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
12. ピアニストのまね（4-6）	名曲の演奏をまねて体を使って楽しむ	・（B男は）ピアノの椅子に座り、自動演奏のジャズの音楽に合わせて身体を大きく動かし、ピアノを弾く格好をま

		ねしてふざけて笑っていた
13. 曲をまねて遊び弾き (4-6)	好きな曲をまねて弾き楽しむ	・ (B男は) A子がいつも弾く『となりのトトロ』のメロディーを、記憶を頼りに片手で何回も繰り返し弾き始め
14. 練習を妨害されたことに強く抗議 (4-6)	弾くことを妨害され文句を言う	<ul style="list-style-type: none"> ・ (B男は) A子を振り向き目が合う ・ (A子は) 邪魔するように違う曲を歌い始める ・ (B男は) 「ね———え！」と大きな声を出し、「もう分かんなくなっちゃったじゃない」 ・ (A子は) わざと大声で歌い始め
	ピアノを邪魔され取っ組み合いで抗議	<ul style="list-style-type: none"> ・ B男はA子とにらみ合い、肩をいからすような格好をして立ち上がりA子につかみかかり、取っ組み合いが始まる ・ B男はA子に押さえ込まれてしまい、A子が常に優勢
	ピアノを弾きたい感情をぶつけ解消	<ul style="list-style-type: none"> ・ (B男は) 押さえ込みをすり抜けて喧嘩が終結 ・ (B男とA子は) ケロツとした表情

備考：親のかかわり

特性	バリエーション	ローデータ (下線部分)
ユ. 子どもに任せ見守る (4-6)	自分達で解決するのを見守る	・ 母は二人の喧嘩を見ていたが、止めることはせずに黙って
サ. 子どもの表現を肯定的に解釈 (4-6)	激しい表現に肯定的解釈をする	・ 母が「音がとっても大きく聴こえるんだけど、何でだろう、Aちゃんの指の力が強くなった」と言って音量を下げる

5 事例5 2007年6月27日

対象児	B男	A子	C子
年齢	7歳4ヶ月	10歳	5歳3ヶ月
学年	小学2年生	小学4年生	保育園年長

前回の事例から暫くの間、B男による「ピアノ遊び」の新しい特性は観察時において抽出されていない。A子の「ピアノ遊び」を見て育ってきたB男は、2003年8月、3歳7ヶ月の時に、ピアノを習いたいという強い希望を自ら母に申し出たことによりピアノレッスンが正式に開始された。それまでの期間は、家庭内で「ピアノ遊び」に親子で興じることは日常的であったが、B男に対してピアノレッスンの開始に関して、本人が希望するまでは両親も指導者も待つ姿勢で過ごしている。B男へのピアノレッスンもA子と同様の方針⁷⁸で行われた。親からB男に対してピアノを弾くように指示することはなく、家庭内では親子で「ピアノ遊び」を楽しむことが留意されていた。B男はレッスンの開始当初から自発的に教本を弾いたり、A子や父の弾く曲をまねしたりして、家庭で「ピアノ遊び」を繰り返す中で宿題曲も着実に合格している状況であった。B男にとってピアノは大好きな遊びの一つになっているが、特に半年程前からは毎回のレッスンにおいて宿題曲を必ず何曲も合格させるなど、ピアノを弾きたい、上手になりたいという思いが強くなってきている。従って、家庭においてもピアノを意欲的に弾くB男の姿が日常的に頻繁に見られるようになった。

この日、弾き終えたC子がピアノから離れた後、B男がピアノの椅子に交代するようにして座る。B男は『およげたいやきくん』の曲を何度も試行錯誤を繰り返し弾こうとしているが、なかなか上手く弾けないでいると、A子が見本を示すようにピアノを弾いてみせる。今までのB男とA子の張り合おうとする関係性から、B男が応援を求めA子が応じる関係へと変化している様子が、本研究の分析の対象場面として適していると判断した。

事例5 場面7

5-7	状況定義：B男がA子に技術的応援を求める場面
	<p>(16:00) C子がピアノを弾くのを終えたので、B男はピアノの前に座り楽譜が書いてある歌の絵本のページをめくっている。<u>読譜をしながら『およげたいやきくん』を何回も繰り返し弾くが、なかなか上手く弾けない。</u>台所で宿題をしながら<u>B男の弾く曲をハミングしていたA子は、B男が振り向いたので「これ多分、『およげたいやきくん』でしょ」と笑顔で優しく言う。B男はA子に向かってニコっとしてまた弾き始めるがやはり上手く弾けない。</u>A子が「<u>まだフラット⁷⁹とかが分かってないかもしれない</u>」と呟くと、B男は<u>A子に教えて欲しいように「分かんない」と笑顔で言う。</u>それに対してA子は楽譜を「貸して」と言</p>

⁷⁸ 本稿17頁の表1に示したA子への「ピアノ遊び」のレッスン方針①②③はB男にも同様に行った。

⁷⁹ 変化記号の一つ。半音低い音になる。

うと、この絵本楽譜の曲を弾きたいと思っているB男は、まじめな顔をして「貸してじゃないよ」と言う。
A子は立ち上がり「じゃあ見せて」と自分の方からピアノへ弾んだ感じで駆けて行き、立ったまま片手で
メロディーを弾き始める。B男がA子の弾くメロディーに合わせて椅子に座ったまま1番を歌い、続いて
2番3番と歌い続けるので、A子は立ったまま片足の膝をB男の座っている椅子に載せて、B男の歌に合
わせて繰り返しピアノを弾いてあげる。歌い終えたB男が歌の絵本のページをめくろうとするとA子がめ
くり、開いたページを「『チキチキバンバン』オッケー!」と言って、嬉しそうに弾き始める。B男は黙
ってA子に椅子を譲りピアノを交代する。

B男は読譜をしながら『およげたいやきくん』を何回も繰り返し弾くが、なかなか上手く弾けない
でいる。所々はメロディーが繋がって聴こえるので、何の曲を弾いているかは分かる。A子は諦めず
に音を探っているB男の弾く曲をハミングし始める。B男は弾きあぐねていたがA子を振り返ると、
A子が「『およげたいやきくん』でしょ」と笑顔で優しく言う。その言葉を聞いてB男はA子に向か
ってニコっとしてまた弾き始めるがやはり上手く弾けない。B男が弾けない原因を音楽記号の「まだ
フラットとかが分かってないかもしれない」とA子が指摘している。〔諦めずに弾き続けるB男が、
A子の関心を誘う〕のである。A子が関心を示して声を掛けてくれたのでB男はA子に教えて欲しそ
うに「分かんない」と笑顔で言う。B男はA子に〔うまく弾けない曲の応援を求める〕のである。

A子がB男の要望に応じるために「貸して」と言うと、B男はA子に教えてもらいたいが、絵本楽
譜の曲を弾きたいと思ってピアノを弾き始めたので、まじめな顔をして「貸してじゃないよ」とA子
に対してピアノも楽譜も〔貸したくない気持ちを表わす〕のである。

A子はB男の貸したくない気持ちを了解して立ち上がり「じゃあ見せて」と自分の方からピアノへ
弾んだ感じで駆けて行き、ピアノの前に座っているB男の横に立ったまま片手でメロディーを弾き始
める。B男は思い通りピアノの椅子に座ったまま1番を歌い、続いて2番3番と歌い続けることが出
来た。A子がB男の歌に合わせて繰り返しピアノを弾いてあげたことにより、曲を教えてもらいたか
ったB男は自分の〔ピアノへの要求がA子に受容された〕のである。次にB男が歌の絵本のページを
めくろうとした時、A子は気に入った曲を目にし、嬉しそうに弾き始める。今度はA子のピアノを弾
きたい気持ちをB男が受け入れ、黙ってA子に椅子を譲りピアノを交代するのである。B男は自分の
気持ちを受容され満足し、今度は〔A子の気持ちを受容しピアノを譲る〕対応をしたのである。

場面 7 における B 男の特性は、＜技術的応援を求める＞＜ピアノを占有したい気持ちを表わす＞＜互いの弾きたい気持ちを受容＞である。

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
15. 技術的応援を求める(5-7)	諦めずに弾き続ける B 男が、A 子の関心を誘う	<ul style="list-style-type: none"> ・（B 男は）読譜をしながら『およげたいやきくん』を何回も繰り返し弾くが、なかなか上手く弾けない ・（A 子は）B 男の弾く曲をハミング ・（A 子は）「『およげたいやきくん』でしょ」と笑顔で優しく言う ・B 男は A 子に向かってニコっとしてまた弾き始めるがやはり上手く弾けない ・（A 子は B 男が）「まだフラットとかが分かってないかもしれない」
	うまく弾けない曲の応援を求める	<ul style="list-style-type: none"> ・ A 子に教えて欲しそうに「分かんない」と笑顔で言う
16. ピアノを占有したい気持ちを表わす(5-7)	貸したくない気持ちを表わす	<ul style="list-style-type: none"> ・（A 子が）「貸して」と言う ・（B 男は）絵本楽譜の曲を弾きたい ・（B 男は）まじめな顔をして「貸してじゃないよ」
17. 互いの弾きたい気持ちを受容(5-7)	ピアノへの要求が、A 子に受容された	<ul style="list-style-type: none"> ・（A 子は）立ち上がり「じゃあ見せて」と自分の方からピアノへ弾んだ感じで駆けて行き ・（A 子は）立ったまま片手でメロディーを弾き ・（B 男は）椅子に座ったまま 1 番を歌い、続いて 2 番 3 番と歌い続ける ・（A 子は）歌に合わせて繰り返しピアノを弾いてあげ
	A 子の気持ちを受容しピアノを譲る	<ul style="list-style-type: none"> ・（A 子は）歌の絵本のページをめくろうと ・（A 子は）嬉しそうに弾き始め ・（B 男は）黙って A 子に椅子を譲りピアノを交代

6 事例6 2007年8月29日

対象児	B男	A子	D男
年齢	7歳6ヶ月	10歳2ヶ月	2歳10ヶ月
学年	小学2年生	小学4年生	未就園

夏休みが終わりに近づいた日の夕方18時過ぎ、D男がピアノの横で昼寝をしていたので、洋室は電気を消したままで薄暗い状態である。B男は勉強机でスタンドの明かりを付け読書感想文を書いている。この頃の家庭内では、ピアノへの意欲の高まってきたB男のピアノを占有する時間が長くなり、以前のようにA子だけがピアノを自由に弾いている状況ではなくなり始めている。B男はA子や父の弾く曲をまねて弾いて楽しむことも多いが、ピアノの実力を上げたいという意欲が強くなり、自発的にレッスンで出された宿題曲を丹念に集中して弾くようになっている。従ってピアノレッスンにおいても宿題曲が毎回数曲合格し、着実に実力を積み上げている。本事例は、B男とA子のピアノに対する心情が表れており、二人の気持ちが微妙に交差する場面が、本研究の分析の対象場面として適していると判断した。

事例6 場面8

6—8	状況定義：B男がピアノを弾くことにA子が不満を持っている場面 その1
<p>(17:58) ピアノの部屋は今までD男が昼寝をしていたので布団を敷き電気を消して暗くしてある。D男が目覚めたので、A子がD男の布団に横になりおしゃべりをしている。夏休みの宿題の読書感想文を書いていたB男は、D男が起きたばかりなので電気はつけずに、<u>うす暗い部屋で小さな音でピアノを弾き始める</u>のだが、A子はB男が弾く<u>メロディーを茶化すように節をつけ歌い始め</u>、寝ながらB男が座っている<u>椅子に両手を伸ばし、ストッパー⁸⁰をいじろうとする</u>。それに気がついた母は<u>驚いて大声でA子に注意</u>をすると、母の大声に皆が注目する。A子はだるそうに「だって、(ストッパーが) 締まってるか見たかったんだもん」と言う。母はA子の所へ行き、<u>布団をピアノから離し「気をつけなさい、Aちゃん危ないよ」と静かに言う</u>。A子は小さな声で「<u>そうだよ</u>」と人ごとのように<u>呟いたので</u>、B男は横に寝ているA</p>	

⁸⁰ ピアノの専用の椅子についている留め金。椅子の高低を調節するもので椅子が勝手に落ちないようにするもの。椅子に座った状態でストッパーを外すと、座ってる者も留め金を触っている者も怪我をする危険がある。

子を見て「そうだよなんだって、Aちゃん」と苦笑いをして、バッハの「メヌエット」の片手練習を始める。

ピアノを早く弾きたいB男は、目を覚ましたばかりのD男や寝ようとしているA子に迷惑にならないように、うす暗い部屋で小さな音でピアノを弾き始める。B男は日頃からA子の曲をまねて弾こうとするが、読譜力や演奏技術が伴わないので、自分の表現したいようにはピアノが弾けない。この頃のB男はピアノが上手になりたいと思っており、A子の弾く曲の一部を弾いて遊ぶ以外に、半年位前から自発的に丹念に曲を練習する時間が長くなる。B男は、一旦練習をし始めると30分以上は弾き続けるケースが多く見られている。B男は暗い部屋の中であつたが、ピアノを「弾きたい思いが強く練習を始めた」のである。B男が弾こうとすると、A子がメロディーを茶化すように節をつけ歌い出したり、ピアノの椅子に両手を伸ばし、ストッパーをいじろうとするなど、B男がピアノを弾くのを邪魔するかなのような行動をとる。母の注意に対しても、「そうだよ」と人ごとのように呟いている。Y家の子ども達の中で、一番ピアノが上手いのはA子であることはこの当時、家族の誰もが認めていることであつた。しかし、B男のこの数ヶ月間のピアノへの意欲と努力の成果は着実にB男の弾くピアノの演奏に表れており、徐々に家族に認められるようになっていく。この日の場面での二人の関係は、年下であるB男の上達したいというピアノへの「熱心な取り組みが、A子の反発を買った」と言える。A子の言動を見ていたB男は「そうだよなんだって、Aちゃん」と言って、B男は「A子の言動に対して批判的な発言」をする。

場面8のB男の特性は、＜B男の熱心さがA子の反発を買う＞である。親のかかわりは、＜危険に的確な注意＞である。

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
18. B男の熱心さがA子の反発を買う（6-8）	弾きたい思いが強く練習を始めた	・（B男は）うす暗い部屋で小さな音でピアノを弾き始める
	熱心な取り組みが、A子の反発を買った	・（A子が）メロディーを茶化すように節をつけ歌い ・（A子は）椅子に両手を伸ばし、ストッパーをいじろう ・（A子は）「そうだよ」と人ごとのように

	A子の言動に対して批判的な発言	・「そうだよなんだって、Aちゃん」
--	-----------------	-------------------

備考：親のかかわり

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
シ. 危険に的確な注意（6-8）	危険なことは注意	<ul style="list-style-type: none"> ・母は驚いて大声でA子に注意 ・母はA子の所へ行き、布団をピアノから離し「気をつけなさい、Aちゃん危ないよ」と静かに言う

事例6 場面9

B男は暗いままの部屋の中で、バッハの『メヌエット』を弾き続けている。

6-9	状況定義：B男がピアノを弾くことにA子が不満を持っている場面 その2
<p>（18：02）B男は<u>A子とD男がまだ布団に横になっているので、暗い中でピアノの音量を下げて</u>、バッハの『メヌエット』の片手練習を繰り返している。B男が弾くのを止め楽譜を見ていると、A子が横に来てB男の弾いていた『メヌエット』をB男の弾いていた鍵盤の位置でパラパラと弾き始める。母がスタンドのライトをピアノに向け明るくする。『メヌエット』はA子はすでにレッスンで合格してる曲なので簡単に弾ける。B男は<u>黙って座って見ていたが、いつまでもA子が『メヌエット』を弾くのを止めないので、一旦ピアノから離れると、A子は椅子に座って『メヌエット』を弾き続ける。B男はピアノに走って戻り小さな声で「ねえ、Bちゃんが、弾いていたんだよ」と言うと、A子は椅子から立ち上がるが、弾くのを止めようとし</u>ない。ピアノの椅子に腰かけたB男は「<u>ねえ、止めて、何で止めないの～</u>」と大きな声で訴えると、やっとA子は<u>弾くのを止めて</u>布団に寝転がる。B男はつま先で寝ころがったA子の足を突つくと、片手ずつ考えながら『メヌエット』を弾き始める。A子は寝転がったまま足の先でピアノの椅子を押すように触ってから、起き上がってテーブルで宿題を始める。</p>	

B男は、A子とD男がまだ布団に横になっているので、暗い中でピアノの音量を下げてピアノを弾

いている。B男は暗い中でも、小さな音でもピアノの練習がしたいという強い思いと共に、「寝ている兄弟に配慮して、暗いま音量を下げピアノを弾く」行動を取っている。

真剣に弾いていたB男が楽譜を読み始めると、A子が黙って『メヌエット』をB男の弾いていた鍵盤の位置でパラパラと弾き始める。B男が苦労して弾こうとしている曲をA子はいかにも簡単そうに弾いて見せながら、B男がピアノの椅子に座っているにも拘らず練習を始める。A子はピアノの端ではなくピアノの中央の鍵盤の位置で弾いているので、B男は鍵盤に手を出すことが出来ない。「B男の練習がA子のピアノで中断」している。B男は仕方がないので暫く黙って座って見ていたが、いつまでもA子が『メヌエット』を弾くのを止めないので、一旦ピアノから離れて、A子がピアノを弾くのを止めてくれるのを期待する。B男は、「ピアノの取り合いを避けA子の出方を見る」行動に出たのである。

しかしA子は椅子に座って『メヌエット』を弾き続けて一向に止めようとししない。『メヌエット』は、A子にとっては既に合格している曲であり、B男は現在取り組んでいる曲である。遂にB男はピアノへ走って戻り小さな声で「ね～、Bちゃんが、弾いていたんだよ」と自分の弾きたい思いをA子に訴える。B男は「勝手にピアノを弾き続けるA子に、自分の弾く権利を主張する」のである。B男の言葉に対して、A子も一旦は椅子から立ち上がるが、弾くのを止めようとししないで弾き続けている。B男はピアノの椅子に座ることは出来たが、A子が弾き続けているので、いつまでも弾くことが出来ない。そのA子の対応にB男は遂に痺れを切らしたように、「ねえ～、止めて、何で止めないの～」と大きな声で自分の気持ちを強く主張すると、A子はやっと弾くのを止めて寝転がる。〔B男はピアノを弾く権利を強い口調で主張し、練習を始める〕のである。

場面9におけるB男の特性は、＜家族に配慮して弾く＞＜争いを避ける行動＞＜弾きたい思いを強く主張＞である。

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
19. 家族に配慮して弾く（6-9）	寝ている兄弟に配慮して、暗いま音量を下げピアノを弾く	・（B男は）A子とD男がまだ布団に横になっているので、暗い中でピアノの音量を下げ
20. 争いを避ける	B男の練習がA子のピ	・（A子は）『メヌエット』をB男の弾いていた鍵盤の位

行動(6-9)	アノで中断	置でパラパラと弾き
	ピアノの取り合いを避けA子の出方を見る	・(B男は) 黙って座って見ていたが、いつまでもA子が『メヌエット』を弾くのを止めないので、一旦ピアノから離れ
21. 弾きたい思いを強く主張(6-9)	勝手にピアノを弾き続けるA子に、自分の弾く権利を主張する	・(A子は) 椅子に座って『メヌエット』を弾き続け ・(B男は) 走って戻り小さな声で「ね～、Bちゃんが、弾いていたんだよ」
	B男はピアノを弾く権利を強い口調で主張し、練習を始める	・(A子は) 椅子から立ち上がるが、弾くのを止めようとしない ・(B男は) 「ねえ～、止めて、何で止めないの～」と大きな声で ・(A子は) 弾くのを止め

7 事例7 2007年9月25日

対象児	B男	A子	C子
年齢	7歳7ヶ月	10歳3ヶ月	5歳6ヶ月
学年	小学2年生	小学4年生	保育園年長

この日訪問した時にはすでにB男はピアノを弾いており、弾き終えたらC子と交代する約束になっていた。C子と交代したB男は床に寝そべって小型ブロックを組み立てている。Y家では一台のピアノを兄弟で弾き合うので、子どもたち同士で話し合って弾く順番を決めている。新しい曲を弾こうとしたC子が鍵盤の位置が分からないと言って、隣の和室に居るA子に教えてもらいに行く。A子はピアノの部屋に来てC子に教えている。ピアノが兄弟姉妹の関係性を深める存在になっている。

A子はピアノが大好きでいつも弾いていたいという気持ちを、B男は日々の生活の中で理解してきている。またB男自身も学校で伴奏のオーディションに合格するなど、ピアノを弾くことに意欲的になり自信を持ち始めている。この事例では、A子がB男の弾いているところに参入し、B男はそれを

受け入れ二人は一緒にピアノを弾き軽快な演奏をする。B男とA子の関係性が今までと違う心理的な変化を見せる場面であり、本研究の分析の対象場面として適していると判断した。

事例7 場面10

7-10	状況定義：B男がA子に技術的成長を認められた場面
<p>(17:40) 母に頼まれてC子に折り紙の折り方を教えてあげていたB男は、ピアノが空いていたので<u>またピアノに戻り弾き始める</u>。するとA子もB男の後を追いかけてピアノに行く。A子は<u>B男が弾いている右横に立ち、黙ったままB男に合わせて弾き始める</u>。それに対してB男は<u>拒絶せずA子が弾くのに任せ、自分は黙って繰り返し弾き続けている</u>。この曲はB男はまだ練習中だが、A子は容易に弾くことが出来る。二人が共に弾くことを繰り返す中で、<u>B男がゆっくり弾くとA子もゆっくり弾き、B男が時々止まりそうになると、A子はB男を待ちながらゆっくり弾いて、B男が追いつくとテンポを合わせて弾いている</u>。B男が<u>段々弾けるようになり、スピードを上げると、A子もスピードを上げ互いに速いスピードでピッタリと弾き合う</u>。B男は<u>更にスピードを上げて弾こうとすると、A子はピアノを離れてB男の曲に合わせておどけた格好をする</u>。振り向いたB男は<u>嬉しそうにA子の姿を見て「ふっ」と笑い笑顔になる</u>。A子は「速すぎ」と笑う。</p>	

ピアノを中断していたB男がまたピアノに戻り弾き始めると、A子も追いかけてピアノに行く行動に出る。A子はY家の子ども達の中で一番年長でありピアノも一番上手であることは自他共に認めている。弟達がピアノを弾くとA子も弾きたくなり、自分の実力をアピールするかのようピアノを弾く姿がよく見られた。この日のA子も、B男が弾いている右横に立ち、黙ったままB男に合わせて弾き始めるのである。このような時、以前は感情のぶつかり合いが生じトラブルになっていた。しかしこの場面のB男は、自分の弾くメロディーに合わせて弾いているA子を拒絶せずA子が弾くのに任せ、自分は黙って繰り返し弾き続けている。技術的向上に意欲を持ち取り組むようになっているB男は、ピアノを弾くことに自信を持ち始めている。日々の「ピアノ遊び」を通して、B男に「ピアノへの自信が芽生え、A子の行動を受容」できる余裕が生まれて来ていると考えられる。

B男のA子に対するこの態度の変化は、A子の態度にも変化を起こしている。一緒にピアノを弾きたいと思ったA子をB男が受け入れ、B男がゆっくり弾くとA子もゆっくり弾き、B男が時々止まり

そうになると、A子はB男を待ちながらゆっくり弾いて、B男が追いつくとテンポを合わせて弾いて
 いる。二人が一緒にピアノを弾き合うことを通して、穏やかな心の通う関係性が生まれている。二人
 の間には言語的会話はないが、ピアノで会話をしているように見え、この姿はB男とA子が相手を尊
 重しながら互いに「調和しようとする演奏」を試みていると言える。次にB男が段々弾けるようにな
り、スピードを上げると、それに対してA子もスピードを上げ互いに速いスピードでピッタリと弾き
合う。このA子とのスピード競争を通して、B男は自分よりピアノ技術が上のA子と「対等にピアノ
 が弾けた手応え」を感じたと思われる。自信を得たB男は更にスピードを上げて弾こうとすると、そ
れまで受けて立っていたA子は弾くのを止め、ピアノを離れてB男の曲に合わせておどけた格好をし
る。B男のピアノを認めたようなA子の愉快的踊りであった。B男は満足した表情で嬉しそうにA子
の姿を見て「ふっ」と笑い笑顔になると、A子も「速すぎ」と笑う。B男が「A子に技術的成長を認
 識させた」場面である。

場面 10 における B 男の特性は、＜対等にピアノが弾けた手応え＞である。

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
22. 対等にピアノが弾けた手応え (7-10)	ピアノへの自信が芽生え、A子の行動を受容	<ul style="list-style-type: none"> ・（B男が）またピアノに戻り弾き始める ・（A子が）追いかけてピアノに行く ・ B男が弾いている右横に立ち、黙ったままB男に合わせて弾き ・（B男は）拒絶せずA子が弾くのに任せ、自分は黙って繰り返し弾き続け
	調和しようとする演奏	<ul style="list-style-type: none"> ・ B男がゆっくり弾くとA子もゆっくり弾き、B男が時々止まりそうになると、A子はB男を待ちながらゆっくり弾いて、B男が追いつくとテンポを合わせて弾いて
	対等にピアノが弾けた手応え	<ul style="list-style-type: none"> ・（B男が）段々弾けるようになり、スピードを上げる ・ A子もスピードを上げ互いに速いスピードでピッタリと弾き合う

	A子に技術的成長を認識させた	<ul style="list-style-type: none"> ・（B男は）更にスピードを上げて弾こうとする ・ピアノを離れてB男の曲に合わせておどけた格好をする ・（B男は）嬉しそうにA子の姿を見て「ふっ」と笑い笑顔 ・（A子は）「速すぎ」と笑う
--	----------------	---

8 事例8 2007年12月19日 (P.32 図3 住居見取り図を参照)

対象児	B男	A子
年齢	7歳10ヶ月	10歳6ヶ月
学年	小学2年生	小学4年生

B男は下校すると真っ先にピアノを弾くことが多くなってきた。特にこの時期のB男は、ピアノ教室のメンバーと全国レベルのピアノ検定試験⁸¹を受けることを希望していた。検定日を1ヶ月後に控え、B男のピアノを弾きたいという意欲は一層高まっている。本事例は、A子が自分本位の態度を母に叱られた後の気まずい雰囲気の中で、B男がピアノを弾くことを通してA子と心情を交し合うかわり、本研究の分析の対象場面として適していると判断した。

事例8 場面11

8-11	状況定義：B男がA子の気持ちを受け止め、A子もB男の気持ちを尊重する場面
<p>(17:33) A子は母に叱られた後の気まずい雰囲気の中、ピアノの傍のテーブルで元氣なく宿題をしている。B男はA子に気を遣いながらも、小さい音量で片手練習をしてから両手で弾き始める。するとB男と背中合わせで座っているA子は宿題をやりながら、<u>B男の弾く曲に合わせて「ミ～ソ～ド～ミ～」と階名⁸²で歌い始める</u>。B男はとっさに<u>A子に合わせるようにピアノを弾き始めると、それに伴いA子の歌っている声が大きくなる</u>。A子が社会科の宿題を元氣な声で読み始めたので、B男はA子を振り向いてから、</p>	

⁸¹ 社団法人、全日本ピアノ指導者協会（略称ピティナ）が主催するピティナ・ピアノコンペティションとして行われるピアノ演奏検定のこと。

⁸² 音階における各音の名称。ここでは、西洋音楽におけるド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シのこと。『音楽辞典 楽語』音楽之友社、1971年、107頁。

『猫ふんじゃった』を弾き始める。するとまたA子が「ねこ・ふん・じゃっ・た〜」とリズムを変えて、おどけた感じで歌い始める。B男はその歌に応えるかのように、すぐA子の歌に合わせて弾き始める。しかし普通の弾き方ではなく、左右の手を逆にしたオリジナルな弾き方をしたために、B男は中々上手く続けて弾けない。A子は曲がスムーズに流れないので、どうしたのかとB男の方を振り向いて、一旦は鍵盤に手を伸ばして弾こうとするが、B男が真剣な表情をして考えながら何度も繰り返し弾いているので、A子はピアノの音は鳴らさずにテーブルに向き直りまた宿題を続ける。

A子が叱られた後、母が買い物に出かけ、少し重い雰囲気の中でB男がピアノを弾き始める。気まずい感じで宿題をしていたA子がB男の弾く曲に合わせて「ミ〜ソ〜ド〜ミ〜」と音名で歌い始める。すると今まで遠慮がちに弾いていたB男は途端に安心したのか、歌っているA子に合わせてようにピアノを弾き始める。A子もB男の気持ちを受け止めたかのように、歌っている声が大きくなる。B男もA子も言葉は交わしていないが、ピアノと歌でコミュニケーションを取っており、B男はA子の「気まずさをピアノで受容し励ます」振る舞いをしている。

この頃のB男はピアノの上達に意欲を燃やしており、この時はレッスン曲の練習を始めたのだが、B男の弾くピアノに合わせてA子が歌ったことから、B男は気軽な遊びの曲の『猫ふんじゃった』を弾き始める。A子の気まずい雰囲気を変えたいという「心情を汲んで楽しい雰囲気の曲を弾いた」と考えられる。するとまたA子は「ねこ・ふん・じゃっ・た〜」とリズムを変えて、おどけた感じで歌い出している。B男はA子に応えるように、リズムを変化させすぐA子の歌に合わせて弾き始める。B男の「楽しい雰囲気の曲は、A子のおどけた表現を引き出す」ことに成功している。

しかしB男はこの時、『猫ふんじゃった』を普通の弾き方ではなく、左右の手を逆にしたオリジナルな弾き方で弾いており、その弾き方ではまだ途中までしか弾けるようになっていなかった。B男はピアノの曲を自分で気に入ったようにアレンジする等して、「演奏の仕方をオリジナルに工夫し表現」しようと試みている。B男が『猫ふんじゃった』をさっさと弾けないので、A子は鍵盤に手を伸ばしてピアノを弾きたそうにしていたが、真剣な表情をして考えながら何度も繰り返し弾いているB男の様子を見て、邪魔をしないようにA子はピアノの音は鳴らさずに宿題を続ける。B男はA子から「ピアノに取り組む真剣さを尊重された」と言える。

場面 11 におけるB男の特性は、＜気持ちをピアノで励ます＞＜曲で楽しい雰囲気＞＜オリジナルな

表現が（A子に）尊重される＞である。

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
23. 気持ちをピアノで励ます (8-11)	気まづさをピアノで受容し励ます	<ul style="list-style-type: none"> ・ B男の弾く曲に合わせて「ミ～ソ～ド～ミ～」と階名で歌い始め ・ A子に合わせるようにピアノを弾く ・ 歌っているA子の声が大きくなる
24. 曲で楽しい雰囲気(8-11)	心情を汲んで楽しい雰囲気の曲を弾いた	<ul style="list-style-type: none"> ・ (B男は) 『猫ふんじゃった』を弾き始める
	楽しい雰囲気曲は、A子のおどけた表現を引き出す	<ul style="list-style-type: none"> ・ (A子は) 「ねこ・ふん・じゃっ・た～」とリズムを変えて、おどけた感じで歌い ・ (B男は) すぐA子の歌に合わせて弾き始める
25. オリジナルな表現が（A子に）尊重される (8-11)	演奏の仕方をオリジナルに工夫し表現	<ul style="list-style-type: none"> ・ (B男は) 普通の弾き方ではなく、左右の手を逆にしたオリジナルな弾き方 ・ (B男は) 真剣な表情をして考えながら何度も繰り返し弾いて
	ピアノに取り組む真剣さを尊重された	<ul style="list-style-type: none"> ・ (A子は) 鍵盤に手を伸ばし ・ A子はピアノの音は鳴らさず

9 事例9 2008年2月13日

対象児	B男	A子	C子	D男
年齢	8歳	10歳8ヶ月	5歳11ヶ月	3歳4ヶ月
学年	小学2年生	小学4年生	幼稚園年長	未就園

Y家の子どもの中ではB男だけがピアノ検定試験を受けたいと自ら申し出て1月20日に受検した。その結果、納得の演奏が出来て合格することができた。B男はその数日後のレッスンの時に、レッス

ン教本の中の曲だが宿題にはなっていない『エンターティナー⁸³』が弾けるようになったと嬉しそうに筆者に報告した。母が冬休みに他の兄弟たちを連れて里帰りしている間、父とB男の二人が家に残った。B男はピアノが独占できたので思う存分自由に弾くことが出来た。そこで、気に入っていた『エンターティナー』も弾いてみたそう。B男が自分から積極的に曲が弾けるとアピールしたことは今までにないことだった。余程嬉しいのだと思い、早速その場で『エンターティナー』を弾いてみるように促すと、B男は照れながらもすぐに表情豊かに弾きこなして見せた。時間をかけて何回も弾いていることが伺え、相当気に入っている様子の演奏ぶりであったため、最大に褒めて宿題曲として合格にした。

本事例は、そのレッスンの日から3週間後である。観察以来、初めてB男が1時間40分にわたりピアノから離れずに弾き続けている。豊かな表現で弾ける様になったB男が家族とピアノを弾いて楽しむ姿や、日頃から憧れていて弾きたいと思っている曲に取り組む姿が観られた。B男がピアノを通して、自分の感情や感じたことを表現できる楽しさで夢中になって弾き続ける姿があった。それと共に、B男への母たちの反応や称賛に対して苛立つA子の様子があり、二人の気持の差が、本研究の分析の対象場面として適していると判断した。

事例9 場面12

9-12	状況定義：B男が熱意をもってピアノを弾き、動物の形態を表現して楽しむ場面
<p>(16:45) B男がピアノから離れずにずっと弾いているところへA子が帰宅する。B男はピアノ教本に沿って次々読譜して片手練習⁸⁴をしながら弾きこなしている。これらの曲の合間には気に入っている『エンターティナー』や今まで合格した曲を暗譜⁸⁵で表情豊かに弾いている。B男は1時間程弾き続けたので疲れてきたようで椅子の背もたれに寄りかかるが、また思い直したように弾き始める。</p> <p>(17:45) 部屋の中にはB男の弾く<u>曲が軽快に心地よい感じで流れている</u>ので、調理をしている母はB男の曲に合わせて歌い「<u>聴いていると仕事が進みそう</u>」と言う。勉強机の周りを片づけているA子も「<u>確かに</u>」と言う。母は「ね!」とA子に言う。B男が冬休みに父と練習し、レッスンで合格した『<u>エンターテ</u></p>	

⁸³ 『バスティン ピアノ ベーシックス ピアノ レベル2』東音企画、1989年、52-53頁。

⁸⁴ 大譜表で書かれている楽譜を、両手で弾くための前段階として右手と左手とを別々に分けて片手ずつ弾けるように練習をすること。

⁸⁵ 楽譜を見ないで記憶して弾くこと。

ィナー』を軽快にスピードを上げて弾くと、一緒にメロディーを歌っていた母が、急に「じゃあ、あれ、象の欠伸」とリクエストする。B男はニコニコして母を見ながら付点を効かせて⁸⁶「象の欠伸」の雰囲気を出してゆっくり『エンターティナー』を弾き始める。B男の弾き方が象のどっしりした感じを表しており、母はそれに合わせてゆっくりメロディーを歌う。C子もD男も音楽に合わせて嬉しそうに大欠伸をする。次にC子と母が「ネズミが猫に追いかけてるの!」と言うと、A子が「速く」とアドバイスをして、B男は笑いながら嬉しそうに『エンターティナー』を、ネズミが逃げるような猛スピードで弾いて見せる。母が曲に合わせて「キャ!」とネズミの声を入れ、更に「凄いねー! Bちゃん、ピアノ弾けて凄いね〜」と言う。

B男は、合格した曲などを表情豊かに弾いていて、部屋の中にB男の弾く曲が軽快に心地よい感じで流れている。B男の奏でる音楽に対して母は仕事が進むと言い、A子も「確かに」と同意している。B男は自分の気持ちや曲の持つ表情をピアノに込めて表現する楽しさを味わって弾いており、A子にもB男の奏でる「ピアノ演奏が好感を持たれている」と言える。

B男が『エンターティナー』を軽快にスピードを上げて弾くと、それを聞いていた母が「象の欠伸」のように弾いて欲しいとB男にリクエストをする。するとB男は即座にニコニコして母を見ながら付点を効かせて「象の欠伸」の雰囲気を出してゆっくり『エンターティナー』を弾き始める。大きな象が欠伸をしている雰囲気が出ていて、聴いているC子やD男がB男の弾く曲に合わせて欠伸をしている。更にリクエストを受けたB男に、A子が弾き方のスピードを「速く」とアドバイスをすると、B男は笑いながら嬉しそうに『エンターティナー』を、ネズミが逃げるような猛スピードで弾いて見せており、楽しそうである。『エンターティナー』は冬休みから弾き続けている曲であり、自分が表現したいように自由に弾きこなすことが出来るお気に入りの曲になっている。B男は「動物の形態をピアノ曲で表現して家族と共に楽しむ」のである。

場面 12 におけるB男の特性は、＜ピアノ演奏が（A子に）好感を持たれる＞＜動物の形態を表現して楽しむ＞である。親のかかわりは、＜共に歌い共感＞＜動物表現のリクエスト＞＜力量を認め称える＞である。

⁸⁶ 楽譜に書かれていた通りのリズムではなく、ジャズ風に付点音符に変えて強調したような弾き方をする。

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
26. ピアノ演奏が（A子に）好感を持たれる（9-12）	ピアノ演奏が好感を持たれている	<ul style="list-style-type: none"> ・（B男の）曲が軽快に心地よい感じで流れている ・ A子も「確かに」
27. 動物の形態を表現して楽しむ（9-12）	動物の形態をピアノ曲で表現して家族と共に楽しむ	<ul style="list-style-type: none"> ・（B男は）『エンターティナー』を軽快にスピードを上げて弾く ・（B男は）ニコニコして母を見ながら付点を効かせて「象の欠伸」の雰囲気を出してゆっくり『エンターティナー』を弾き ・（A子が）「速く」とアドバイス ・（B男は）笑いながら嬉しそうに『エンターティナー』を、ネズミが逃げるような猛スピードで弾いて見せ

備考：親のかかわり

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
ス. 共に歌い共感（9-12）	ピアノに合わせて歌い共感	<ul style="list-style-type: none"> ・ 母はB男の曲に合わせて歌い「聴いていると仕事が進みそう」と言う ・ 母はそれに合わせてゆっくりメロディーを歌う ・ 母が曲に合わせて「キャ！」とネズミの声を入れ
セ. 動物表現のリクエスト（9-12）	ピアノで動物表現をリクエスト	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「じゃあ、あれ、象の欠伸」とリクエストする
リ. 力量を認め称える（9-12）	ピアノ技術を認め称える	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「凄いねー！ Bちゃん、ピアノ弾けて凄いね～」と言う

事例9 場面13

B男が表情豊かに弾く曲にA子も関心を持ち、他の弟妹も共に音楽を楽しんでいる。母にも演奏を褒められてB男は嬉しい気持ちで更にピアノを弾き続けている。A子には弾くチャンスがない。

9-13	状況定義：B男が体力の限界まで好きな曲を弾き続ける姿とA子が苛立つ場面
	<p>(17:50) B男は<u>リラックスして笑顔でピアノを弾き続けている</u>。スピードを上げて『猫ふんじやった』を弾いてから、<u>今まで合格した曲をレパートリーを弾くように次々暗譜で弾き始める</u>。暫く弾いていたB男は、椅子の背に寄りかかり両手を上げて背伸びをした後、<u>「ああ疲れた～」</u>と言って椅子の上で<u>体育座り</u>をする。しかしピアノを止める気配は全くない。すぐに今度は『エリーゼの為に』を両手で弾いてから、自分のピアノレベルより上のブルグミュラー⁸⁷に載っている『バラード』をつつかえながら弾き始める。</p> <p>A子は勉強机の椅子に座り文具を触りながら、B男の弾くメロディーを<u>口笛で吹いている</u>。母があまり聴いたことがない曲なので<u>何の曲か聞くと</u>、A子が<u>即座に『バラード』と答える</u>。A子はレッスンでブルグミュラーを使用しているが、まだその曲までは進んでいない。B男は1年程前に児童館の先生に教えて貰った曲であるが、<u>「分かんない、楽譜を見ないと分かんない」</u>と言って楽譜を探し始める。母がA子に楽譜が何処にあるかを聞くと、A子は<u>「なんで？」</u>と聞き返すので、母はB男が探していると言う。A子は突然<u>「なんでよお～お～！」</u>と不機嫌になる。B男は教本を見つけ『バラード』を弾こうとするが<u>「忘れちゃった、もう全然記憶にない。読めない、分かんない」</u>と言ってたどたどしく弾くと<u>「1個1個読めば分かるよ」</u>と母が励ます。B男は真剣に楽譜に書かれた音符を1音1音読んでいるが、<u>「ああ、分かんなくなっちゃった。よく見てもさあ」</u>と呟く。それでも<u>根気強く何度も繰り返し読譜しては弾いている</u>。暫くして嬉しそうに<u>「あ～そうか！ママ、ちょっと分かってきたよ」</u>と言うと母が<u>「分かってきたでしょ」</u>と応える。B男は弾き続けていくうちに<u>両手で弾けるようになって来る</u>。</p> <p>(18:15) B男は少し弾けるようになり満足したようで、今度は『幻想即興曲⁸⁸』の冒頭をゆっくり右手で<u>少しだけ弾いてみてから</u>、また得意な合格曲を弾くと、<u>椅子の背によりかかり、首を後ろにそらし「あ～～～あっ、う～～～疲れた」</u>と喉をならすように声を出す。それでもまだ<u>ピアノを止める気配はなく、ニコニコして家族を見ながら暗譜で弾ける得意な曲を弾いている</u>。</p>

⁸⁷ 『ブルグミュラー 25の練習曲』、ヨハン・フリードリヒ・フランツ・ブルグミュラー（1806～1874）により作曲され、初歩の子ども向き曲集として25の小品が収められている。音楽の表現法と技術の習得、音楽性を養うためによく使用される。

⁸⁸ ショパン作曲、Op. 66、『全音 ピアノ名曲選集』中巻、全音楽譜出版社。

(18:20) ピアノを弾き終えたB男は「疲れた、ずっと弾いていたから」と言うと、母は「ずっと弾いてたね」と感心したように言う。B男が「1時間30分?」と言うと、母は「その位弾いてたかな」とB男を労うと、勉強机にいるA子が急に大きな声で「う〜ん!」と言って、床にあった自分のランドセルを、隣のB男の勉強机の椅子に向かって蹴飛ばす。ピアノ椅子に座っているB男はピアノの鍵盤に倒れ込む。C子がA子の傍に行くと急にA子は「あ〜あ〜! 皆そっちへ行って! うるさい!」とイライラした大声で言う。母はA子を擁護するように「(A子は) 疲れちゃった」と呟く。B男が蓋を閉めピアノによりかかり、「はああ〜」とため息をついたので、笑いながら「のびてます、のびてますB様」と母が言う。

B男はずっとピアノを弾いており、ゆったりとした雰囲気の中でリラックスして笑顔でピアノを弾き続けて楽しそうである。『猫ふんじやった』を弾いてから、今まで合格した曲をレパートリーを弾くように次々暗譜で弾き、まるでコンサートの様である。B男がこのような弾き続けるのは観察を通して初めてのことである。弾いている曲が、合格した曲や暗譜で弾ける曲ばかりなので、自分の思うように「リラックスして心のままに表現して弾く」姿を示している。

B男は、「ああ疲れた〜」と言って椅子の上で体育座りをする。1時間以上弾き続けているので、さすがに身体は疲れてきているが、ピアノを弾くこと自体を楽しんでいるので、またすぐ弾き始める。次にB男は『エリーゼの為に』を両手で弾いたり、『バラード』をつつかえながら弾き始める。この二曲はB男にとって技術的に遥かに上のレベルの曲である。B男より技術が上のA子も、まだ遊びで楽しんで弾いている曲であり、進度ではそのレベルになっていない。B男が「憧れの曲を弾きたいと意欲を持って弾く」姿である。

B男は『バラード』を何とか思い出そうとしており、「分かんない、楽譜を見ないと分かんない」と言って楽譜を探し出して弾き始めようとするが、「忘れちゃった、もう全然記憶にない。読めない、分かんない」と言ってこずっている。この曲は以前に児童館で先生が弾いているのを聴いて気に入ったB男が教えて貰ったのだが、それから年月もかなり経過している。それでもB男は「ああ、分かんなくなっちゃった。よく見てもさあ」などと言いながら、楽譜を広げ自力で根気強く何度も繰り返し読んで弾いている。B男は、「自分の力で読譜しピアノを弾こうと取り組む」姿勢を示す。

暫く頑張っ弾いていたB男が「あ〜そうか! ママ、ちょっと分かってきたよ」と嬉しそうに母に言う。何度も繰り返し弾くうちに思い出してきて、両手で弾けるようになって来る。B男は『バラード

ド』が少し弾けるようになって気がすんだようだが、ピアノを弾くことを止めようとしな。今度は更に難しい『幻想即興曲』の冒頭をゆっくり右手で少しだけ弾いている。この曲は父が好きで休みの日などに弾いているのを家族は皆聴いている。B男にとっては幼い時からの憧れの曲である。B男は自分にとって「難しい曲が弾けた自信から、憧れの曲への挑戦」をしようと試みるのである。

ピアノを弾き続けていたB男は、椅子の背によりかかり、首を後ろにそらし「あ〜〜あつ、う〜〜疲れた」と言っており、長時間集中して弾いていたので相当疲れたようである。しかしそれでも全くピアノを止める気配はなく、ニコニコして家族を見ながら暗譜で弾ける得意な曲を弾いて楽しんでいる様子である。長時間弾いて身体的には疲れたようだが、それでもピアノから離れがたく、鍵盤に手を載せて手元は見ずに慣れた様子でピアノを弾いている。しかし遂に、「疲れた、ずっと弾いていたから」と言ってピアノを終える。自分の弾いた時間を「1時間30分？」と言ってピアノの鍵盤に倒れ込むが、存分にピアノを弾けたことに満足している表情であった。B男はピアノの蓋を開けピアノによりかかり、「はああ〜」とため息をついて、1時間40分程の「ピアノ遊び」を終える。B男が『エンターティナー』を自ら主体的に弾きたいと思い、冬休みに父と練習し弾けるようになってから約1ヶ月が経つ。この観察の日、母はB男のピアノに対する自信と共に弾くことに強い熱意を示すように変化したことを「本当に凄いんです」と筆者に話し、また、B男自身もピアノを弾き続けたのは、「気持ち良かったから」、「楽しいから」と笑顔で話している。B男がピアノを「弾く楽しさで、体力の限界まで挑戦する気持ち良さ」を表わした場面である。

またA子とB男の関係にも変化が表れている。A子がB男の弾く曲のメロディーを口笛で吹いて関心を示しており、母がB男の曲名を聞いたときも、B男ではなくA子が即座に『バラード』と答えている。また、楽譜を貸すことについて「なんで？」と母に聞き返し、「なんでよお〜お〜！」と不機嫌な反応をする。兄弟の中でA子が一番ピアノレベルが上であるが、A子自身もまだ到達していない曲を弾こうとするB男のピアノへの強い意欲と成長は、A子に「注目されA子に焦りを感じさせた」と考えられる。

ピアノを弾き続けるB男の頑張りを母が労った時、A子には母の声に反応するように急に大きな声で「う〜〜ん！」と言って、床にあった自分のランドセルを、隣のB男の勉強机の椅子に向かって蹴飛ばすという苛立った行動や、「あ〜あ〜〜！皆そっちへ行って！うるさい！」と感情を露にした言動が見られた。A子は幼い時から、家庭内で自由にピアノを弾き鳴らす「ピアノ遊び」を楽しみなが

ら成長してきている。そのような生活の中で、2歳8ヶ月年下のB男はA子にとってピアノ技術の上でも気にする相手ではなかった。しかし、徐々にB男のピアノへの意欲が高まり始め、この日の家庭の様子は今までとは違う様相を呈した。弟でありA子より技術的に低いB男が示したピアノへの意欲的行動により、B男は「A子に焦りを感じさせライバル感情を持たれた」のである。

場面13におけるB男の特性は、＜リラックスして心のままに表現＞＜レベルの高い曲を体力の限界まで弾き続ける情熱＞＜ライバル視される＞である。親のかかわりは、＜関心を示す＞＜アドバイスで励ます＞＜頑張りを労う＞＜気持ちを汲む＞である。

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
28. リラックスして心のままに表現（9-13）	リラックスして心のままに表現して弾く	<ul style="list-style-type: none"> ・リラックスして笑顔でピアノを弾き続けて ・『猫ふんじゃった』を弾いて ・今まで合格した曲をレパートリーを弾くように次々暗譜で弾き
29. レベルの高い曲を体力の限界まで弾き続ける情熱（9-13）	憧れの曲を弾きたいと意欲を持って弾く	<ul style="list-style-type: none"> ・「ああ疲れた～」と言って椅子の上で体育座り ・『エリーゼの為に』を両手で ・『バラード』をつっかえながら弾き
	自分の力で読譜しピアノを弾こうと取り組む	<ul style="list-style-type: none"> ・「分かんない、楽譜を見ないと分かんない」 ・「忘れちゃった、もう全然記憶にない。読めない、分かんない」 ・「ああ、分かんなくなっちゃった。よく見てもさあ」 ・根気強く何度も繰り返し読んでは弾いて
	難しい曲が弾けた自信から、憧れの曲への挑戦	<ul style="list-style-type: none"> ・「あ～そうか！ママ、ちょっと分かってきたよ」 ・両手で弾けるようになって来る ・『幻想即興曲』の冒頭をゆっくり右手で少しだけ弾いて
	弾く楽しさで、体力の限界まで挑戦する気持ち	<ul style="list-style-type: none"> ・椅子の背によりかかり、首を後ろにそらし「あ～～～あつ、う～～～疲れた」

	良さ	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノを止める気配はなく、ニコニコして家族を見ながら暗譜で弾ける得意な曲を弾いて ・「疲れた、ずっと弾いていたから」 ・「1 時間 30 分？」 ・ピアノの鍵盤に倒れ込む ・蓋を閉めピアノによりかかり、「はああ～」とため息
30. ライバル視される (9-13)	注目されA子に焦りを感じさせた	<ul style="list-style-type: none"> ・口笛で吹いて ・即座に『バラード』と答え ・「なんで？」 ・「なんでよお～お～！」と不機嫌
	A子に焦りを感じさせライバル感情を持たれた	<ul style="list-style-type: none"> ・急に大きな声で「う～～ん！」と言って、床にあった自分のランドセルを、隣のB男の勉強机の椅子に向かって蹴飛ばす ・「あ～あ～～！皆そっちへ行行って！うるさい！」

備考：親のかかわり

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
㌸. 関心を示す (9-13)	関心を持つ	<ul style="list-style-type: none"> ・母があまり聴いたことがない曲なので何の曲か聞く
㌻. アドバイスで励ます (9-13)	アドバイスをして励ます	<ul style="list-style-type: none"> ・「1 個 1 個読めば分かるよ」と母が励ます
㌼. 頑張りを労う (9-13)	頑張りを労う	<ul style="list-style-type: none"> ・母が「分かってきたでしょ」と応える ・母は「ずっと弾いてたね」と感心したように言う ・母は「その位弾いてたかな」とB男を労う ・笑いながら「のびてます、のびてますB様」と母が言う
㌽. 気持ちを汲む	子どもの側に立つ発言	<ul style="list-style-type: none"> ・母はA子を擁護するように「（A子は）疲れちゃった」

(9-13)		と呟く
--------	--	-----

10 事例10 2008年2月20日 (P.33 図4 住居見取り図を参照 電子ピアノは洋室に移動)

対象児	B男	A子	D男
年齢	8歳	10歳8ヶ月	3歳4ヶ月
学年	小学2年生	小学4年生	未就園

事例9の時点で台所に設置していたピアノの位置は周りの弾くスペースが狭いことから、以前のように勉強机のある洋室の窓際へピアノの位置を戻した。B男のピアノへの意欲は日に日に高まっており、この日も1時間半ほど弾き続けている。ピアノの技術は依然としてA子の方が上ではある。しかしB男のピアノへの意欲と熱心な取り組みにより、B男の実力が上がってきたことはA子も認めるころであった。ピアノの占有状況も、以前のように殆んどA子が独占しているという構図ではなくなっている。本事例は、表情豊かに弾いているB男のピアノの音色が家庭内に心地よく流れ、B男のピアノを通してA子や他の子どもたちとの関係性が深まっている様子が、本研究のテーマの分析の対象場面として適していると判断した。

事例10 場面14

10-14	状況定義：B男のピアノ演奏に踊る意欲が引き出されD男が踊る場面
<p>(17:45) B男は40分程熱心にいろいろな曲を繰り返し弾いている。台所のテーブルで学校の宿題をしているA子は、時々B男の弾く曲に合わせてハミングをしている。B男が<u>エネルギーッシュに『蒸気機関車⁸⁹⁾』を弾き始めると</u>、D男はそのピアノの表情に合わせて「あ～、あ～」と笑いながら体を左右に揺らし始める。<u>母も一緒にリズムを歌い身体を動かし「そうだ、そうだ、始まって来たよ。蒸気機関車だ」と言って、ピアノを弾いているB男と顔を見合わせる。</u>D男は四つん這いになって、汽車のように激しく動き回る。B男はD男が<u>踊りたくなるように『タランティラ⁹⁰⁾』を激しいスピードで弾くと</u>、D男は笑いながら更に</p>	

⁸⁹⁾ 『バスティン ピアノ ベーシックス レベル2』東音企画、1989年、50頁。

⁹⁰⁾ 同書、31頁。

激しく寝転がりながら踊り、母も曲に合わせ「ラララ」と歌い笑う。B男がまた『蒸気機関車』を弾くと、D男はピアノに合わせ興奮状態となり部屋中を踊りまわる。B男は『エンターティナー⁹¹』など、今までに合格した曲のリズムを変えてアレンジしたり、スピードを上げて弾いてD男を喜ばそうとする。

B男がエネルギッシュに『蒸気機関車』を弾き始めると、傍にいたD男が突然踊り始める。1週間前の観察でもB男がピアノを弾くとD男が踊り出すという姿が見られていた。この日それまで宿題曲の練習をしていたB男だったが、D男のこの姿を見て、D男が更に踊りたくなるように『タランティラ』を激しいスピードで弾くことでD男に応じている。B男はまだ幼いD男がピアノに合わせて全身を使って楽しめるように、D男のために緩急自在に表情を付けて弾いたので、D男は大喜びして興奮状態になる。更に、B男は自分の気持ちを乗せて自由に表現できるようになったレパートリーともいえる『エンターティナー』など、今までに合格した曲のリズムを変えてアレンジしたり、スピードを上げて弾くことで、D男がますます踊りたくなるように弾いている。B男が相手に合わせて「楽しく踊れるように弾く緩急自在なピアノ表現」によって、「ピアノ遊び」を共に楽しむ関係性が育っていると言える。

場面14におけるB男の特性は、＜楽しく踊れる豊かな表現＞である。親のかかわりは、＜一緒に盛り上げ楽しむ＞＜アイコンタクトを交わす＞である。

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
31. 楽しく踊れる 豊かな表現 (10-14)	楽しく踊れるように弾く 緩急自在なピアノ表現	・エネルギッシュに『蒸気機関車』を弾き始める ・踊りたくなるように『タランティラ』を激しいスピードで弾く ・『エンターティナー』など、今までに合格した曲のリズムを変えてアレンジしたり、スピードを上げて

⁹¹ 同書、52－53 頁。

備考：親のかかわり

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
ト. 一緒に盛り上げ 楽しむ(10-14)	一緒になって盛り上げ 楽しむ	・ 母も一緒にリズムを歌い身体を動かし「そうだ、そうだ、 始まって来たよ。蒸気機関車だ」と言って ・ 母も曲に合わせ「ラララ」と歌い笑う
ナ. アイコンタクト を交わす(10-14)	アイコンタクトで意思 を通わせる	・ ピアノを弾いているB男と顔を見合わせる

1 1 事例 1 1 2008 年 2 月 24 日

対象児	B 男	A 子	C 子	D 男
年齢	8 歳	10 歳 8 ヶ月	5 歳 11 ヶ月	3 歳 4 ヶ月
学年	小学 2 年生	小学 4 年生	幼稚園年長	未就園

この頃のY家では、B男は下校するとピアノへ直行してすぐ弾き始めることが定着している。筆者が家庭観察に伺った際も殆どB男がピアノを占有して弾き続けていて、他の子が弾いている場面があまり見られない。しかし、休みの日などには父も交えて子どもたちが活発に「ピアノ遊び」をする場面が見られるため、休日の家庭風景のビデオ撮影を母にお願いした。

この日は日曜日で、A子が子ども達の中で一番早く起き朝食も済ませており、B男が起きた時には既にA子がピアノを弾いていた。B男はやはりピアノを弾きたいと思っているので、ピアノの横で勉強机に寄りかかりながらピアノが空くのをずっと待っている。本事例は父も在宅している日曜日の朝、B男がA子に『月の光⁹²』が弾けると伝えるなど、B男のピアノへの意欲的な気持ちや真剣に取り組む様子がみられる。B男のピアノに対する思いとA子の心の動き、更にB男が憧れの曲を弾きたいという強い思いの表れた場面が、本研究のテーマの分析の対象場面として適していると判断した。

⁹² ドビュッシー作曲、ベルガマスク組曲の第3曲。この事例で弾いている『月の光』は、原曲ではなく全音楽譜出版社『ピアノ名曲選集・中巻』に掲載されている移調した曲である。

事例 1 1 場面 1 5

1 1 - 1 5	状況定義：B男が憧れの『月の光』に挑戦していると発言し、A子を驚かす場面
<p>(9:52) B男は机に寄りかかりA子が弾くのをしている。A子が『月の光』を譜読みしながら弾き始めると、B男は「<u>昨日もう、ちょっと（月の光）弾けるようになった</u>」と言う。B男が『月の光』を弾いていることを知らなかったA子は、「え！どうして？」と驚く。B男は「<u>昨日やったもん、楽譜を見て</u>」と答える。傍で洗濯物を干していた母が、「B君も弾いてみて、昨日の・・・」と言うと、A子は途端に『軍隊行進曲⁹³』の冒頭部分を弾き始める。</p> <p>B男が<u>まだピアノの横に立ち待っている</u>ので、母は洗濯物を干しながら、「弾きたいの？」と聞き、<u>ずっと弾きたいと思っているB男は「うん」と答える</u>。母は「待ってるの？」と笑いながら優しく言う<u>と「うん、待ってる」と答える</u>。母は健気なB男の姿に「かわいい！もうムズムズっていう感じ？」と言い身体をよじるジェスチャーをし、持っていた洗濯物でB男に「いないいないばあ」をして笑う。B男は母の行動に気づき、ニコニコして「いないいないばあ」をジェスチャーで返す。<u>互いに同じタイミングで「いないいないばあ」をして母と笑い合うと</u>、B男はピアノを待つのを止めて床に座り、小型ブロックで作っている戦艦の続きを組み立て始める。</p>	

A子のピアノが終わるのを横で待っていたB男は、『月の光』を弾いているA子に、自分も「昨日もう、ちょっと（月の光）弾けるようになった」と話す。それを聞いたA子は「え！どうして？」と驚いて聞き返しており、B男は「昨日やったもん、楽譜を見て」と嬉しそうに答える。このドビュッシー作曲の『月の光』は父が趣味で若い頃から弾いていた曲であり、休日などに弾くことが多い。従ってB男もA子も幼い頃から聴いている憧れの曲でもあり、A子の「ピアノ遊び」では弾こうとする様子が何度も観察されている。しかしこの曲はA子も挑戦中でまだ弾けない難しい曲である。まして、ピアノが初歩段階のB男が弾いていることが信じられないA子の驚きである。母は前日にB男が挑戦して弾いているのを聴いていたので、B男に弾くように促す。するとA子はB男に弾かせる隙を与えないとでもいうように、反射的に『軍隊行進曲』を弾き始める。B男の音楽的成長がA子を焦らせたのだろう。B男はずっと弾きたかった「憧れの曲を弾いている嬉しさを発言し、A子を驚かせる」のである。母は、B男がまだピアノの横に立ち待っているので弾きたいのかを聞くと、ずっと弾きたい

⁹³ シューベルト作曲、Op. 51, No. 1, 『ピアノ名曲選集・中巻』 全音楽譜出版社。

と思っているB男は「うん」、 「うん、待ってる」と答え、「憧れの曲を弾きたい強い意欲を示す」のである。そのB男の健気さに母はいないいいないばあをすると、B男は笑顔になりピアノの順番を待つのを止め、床に座りブロックをし始める

場面15におけるB男の特性は、＜憧れの曲に挑戦する嬉しさを発言＞である。

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
32. 憧れの曲に挑戦する嬉しさを発言(11-15)	憧れの曲を弾ける嬉しさを発言し、A子を驚かせる	<ul style="list-style-type: none"> ・「昨日もう、ちょっと（月の光）弾けるようになった」 ・（A子が）「え！どうして？」 ・「昨日やったもん、楽譜を見て」
	憧れの曲を弾きたい強い意欲を示す	<ul style="list-style-type: none"> ・（B男は）まだピアノの横に立ち待っている ・ずっと弾きたいと思っているB男は「うん」 ・「うん、待ってる」

備考：親のかかわり

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
ニ. 気持ちに寄り添い応援(11-15)	弾きたい気持ちに寄り添い応援	<ul style="list-style-type: none"> ・母が、「B君も弾いてみて、昨日の・・・」と言う ・母は洗濯物を干しながら、「弾きたいの？」と聞き ・母は「待ってるの？」と笑いながら優しく言う
ヌ. 気持ちを汲んで明るく励ます(11-15)	気持ちを理解し、明るく心を通わす	<ul style="list-style-type: none"> ・母は健気なB男の姿に「かわいい！もうムズムズっていう感じ？」と言い身体をよじるジェスチャーをし、持っていた洗濯物でB男に「いないいいないばあ」をして笑う
	心を汲みジェスチャーで心を通わす	<ul style="list-style-type: none"> ・互いに同じタイミングで「いないいいないばあ」をして母と笑い合う

事例 1 1 場面 1 6

ピアノから離れずにずっと弾いて遊んでいたA子は、ショパンの『子犬のワルツ⁹⁴』のメロディーを譜読みして音名で歌っている内に曲名を当てるクイズを思いつく。A子の呼びかけに家族全員が応じて活発に曲名を当てようとして大いに盛り上がる。暫くするとD男がピアノを弾きたがり、A子とピアノの奪い合いを始める。母はA子にD男にピアノを教える先生役をさせると、A子を中心にして兄弟全員がD男の「ピアノ遊び」にかかわり一緒に歌い、D男の反応を楽しんでいる。D男がA子との「ピアノ遊び」をなかなか止めないため、C子は弾くのを待ち続けている。A子の説得でD男はピアノを止めてやっとC子は交代してピアノを弾き始める。しかし、ピアノの周辺から人が居なくなると興味がなくなったのか、C子は少し弾いただけでピアノを止めてD男やA子達と一緒に絵を描き始める。ピアノは誰も弾いていない状態になる。

1 1 - 1 6	状況定義：B男が憧れの『月の光』『幻想即興曲』に挑戦する場面
<p>(11 : 03) B男は床に座りブロックで戦艦を組み立てていたが、C子がピアノを止めたのでブロックの戦艦を床に置いたまま<u>ピアノに走って行き、憧れの曲である『月の光』の楽譜を広げ、冒頭部分を何度も繰り返し弾き始める。</u>朝からずっと待っていてようやくピアノを弾けたので、<u>B男は夢中になって音符を1つ1つ読みながら弾いている。</u></p> <p>食事を終えた父が「(月の光) 弾けるの？ Bちゃん。カッコいいじゃん」と言いながらピアノに歩み寄り、<u>B男と一緒に腰掛け譜読みに付き合おうとする。</u>B男が「<u>分かんない～</u>」と言うと、父はB男を懷に抱くようにして楽譜を指さしながら優しく説明する。B男が「<u>右手は分かるんだけど、左手分かんない</u>」と言うと、父は楽譜を指さし穏やかな口調で説明し、B男が弾くのを見守る。B男は『月の光』の冒頭部分を両手で弾こうと何回も繰り返すが、左手が上手く弾けない。すると、<u>真剣に弾いているB男の左手の甲に父が左手を重ね、歌いながらタイミングを合わせてピアノを弾き、「面白いでしょ」とB男に言う。</u></p> <p>B男達を見ていたA子が『月の光』について父に話しに来る。B男は父の歌うリズムに合わせて何回も繰り返し弾いている。次に父の提案で、<u>B男が右手、父が左手を弾くとやがて曲として成立し始める。</u>父が「あぁいい感じだ。カッコいいね」と言うと、B男も「うん、1ページできた」と笑顔で嬉しそうに言う。父は楽譜をめくりながら「楽しいね。これ(ピアノ名曲選集)ね」と笑顔で言い、B男も笑顔で次々ペー</p>	

⁹⁴ ショパン作曲、OP. 64, No. 1『ピアノ名曲集 下巻』全音楽譜出版社。

ジをめくる。B男は『幻想即興曲』のページを開き、冒頭の左手の伴奏部分を弾こうとするが上手く弾けない。A子がまた「A、出来るよ」と話しに来る。暫く左手を弾いていたB男は、次に右手のメロディー部分を弾こうとするが、これも難しくてなかなか上手く弾けない。父は「ゆっくりやろうか」と言って、B男が右手で弾くメロディーに父が左手のメロディーを合わせて一緒に弾く。B男は何回も何回も真剣に繰り返し弾き、父との片手ずつのデュエットを成立させる。

父は微笑みながら一緒に弾き続け「いい感じ、凄くいい感じ」と嬉しそうに言う。父と真剣に弾いていたB男は、父の胸に寄りかかり、「疲れた～」と言うと、父も「疲れるよね～」と応じ、B男の身体を後ろから包むようにして弾いている。A子が二人の傍に来て、メロディーを気持ち良さそうに歌う。B男は楽譜を見ているが、また、「疲れるねえ～」と笑顔で言う。父も「疲れるね～」と言って楽譜を閉じる。B男は伸びをしながら大欠伸をする。

朝起きたときから弾きたくて順番を待っていたB男は、ピアノが空いた途端ピアノに走って行き、憧れの曲である『月の光』の楽譜を広げ、冒頭部分を何度も繰り返し弾き始める。父が家で休みの日などによく弾いている『月の光』はB男にとって幼い頃からの憧れの曲である。B男は夢中になって音符を1つ1つ読みながら弾いている。B男の技術で弾くには遥かにレベルの高い曲であり譜面も複雑で難しい。しかしB男は「憧れの曲が弾けることが嬉しくて夢中」になっているのである。

ピアノが大好きな父は、まだ初歩段階のB男が『月の光』を弾いていることへの驚きと嬉しさで声をかける。B男は父に見守られながら、「分かんない～」、「右手は分かるんだけど、左手分かんない」などと難しさを訴え、『月の光』の冒頭部分を両手で弾こうと苦心している。すると父が自分の手の平をB男の手に重ねて一緒に弾いてくれる。まだ手の小さいB男は父の歌うリズムに合わせて何回も繰り返し弾いている。父はB男と父で片手ずつ分担して一緒に弾くことを提案する。B男にとって難しい曲であるが、B男が右手、父が左手を弾くと、やがて曲として成立し始める。一部分ではあるが、憧れの『月の光』を父と協力して弾くことが出来たB男は、父にも褒められ「うん、1ページでまた」と笑顔で嬉しそうに応え、父が楽譜をめくるとB男も一緒に笑顔で次々ページをめくるのである。B男は「真剣に繰り返し弾き、憧れの曲が弾けた」ことに満足した笑顔を見せている。

『月の光』が収録されている『ピアノ名曲選集・中巻』は、元々父の楽譜であり、父が日頃よくこの楽譜を開いてピアノを弾いているので、B男達は幼い頃から憧れを持って聴いてきた。B男は次に、

やはり父がよく弾く『幻想即興曲』のページを開き、冒頭の左手の伴奏部分を弾こうとするが上手く弾けない。B男はこの曲を弾いたことがなく、A子が時々遊びで一部分を弾いたりしているが、父が弾くのを聴いて知っているという程度である。しかしB男は父が優しく練習に付き合い『月の光』と一緒に弾いてくれたことで、『幻想即興曲』にも挑戦したいと思ったようである。B男は今度は右手のメロディー部分を弾こうとするが、これも難しくてなかなか上手く弾けない。一生懸命なB男の様子を父はゆったりと見守りながら寄り添って一緒に弾くと、B男はこの曲も何回も何回も真剣に繰り返し弾き、また父と二人の片手ずつのデュエットを成立させることが出来た。B男は自ら進んで「意欲的に憧れの曲を弾く熱意と努力」を示すのである。

幼い時から憧れていた曲ではあるが、高い技術を要する曲でありB男のピアノ技術から考えて弾けるレベルの曲ではない。しかしこの曲を弾こうとするB男は、誰から指示されたのでもなく純粋に弾きたいから弾くのであり、まさに自発的に弾く「ピアノ遊び」だからこそ難しさを克服して弾く楽しさがある。真剣に全力で高度な曲を弾いていたB男は、緊張を緩めるように父の胸に寄りかかり、「疲れた～」と言い、また「疲れるねえ～」と笑顔で言って、伸びをしながら大欠伸をする。根をつめて練習したのでかなり疲労したと思われるが、B男の笑顔から父と一緒に「集中して真剣に弾いた満足感」が感じられる。

B男と同様に、A子にとっても『月の光』『幻想即興曲』は父が弾く憧れの曲である。B男が弾こうとする傍に来て、メロディーを気持ち良さそうに歌うA子は、以前のように妨害をしたり不快感を表わすのとは対極にあり、B男の弾く「ピアノが（A子の）歌を誘う」のであり、A子との爽やかな触れ合いが見られる。

場面16におけるB男の特性は、＜憧れの曲に夢中＞＜憧れの曲を目指す熱意＞＜集中し弾けた満足感＞＜ピアノが歌を誘い出す＞である。親のかかわりは＜関心を持ち褒める＞＜ピアノの楽しさを共有したい＞＜子どものペースを尊重＞＜子どもの気持ちに同意＞である。

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
33. 憧れの曲に夢中 (11-16)	憧れの曲が弾けることが嬉しくて夢中	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノに走って行き、憧れの曲である『月の光』の楽譜を広げ、冒頭部分を何度も繰り返し弾き ・B男は夢中になって音符を1つ1つ読みながら弾いて
34. 憧れの曲を目	真剣に繰り返し弾き、憧	<ul style="list-style-type: none"> ・「分かんない～」

指す熱意 (11-16)	れの曲が弾けた	<ul style="list-style-type: none"> ・「右手は分かるんだけど、左手分かんない」 ・『月の光』の冒頭部分を両手で弾こう ・父の歌うリズムに合わせて何回も繰り返し弾いて ・B男が右手、父が左手を弾くと、やがて曲として成立し始め ・「うん、1ページできた」と笑顔で嬉しそう ・笑顔で次々ページをめくる
	意欲的に憧れの曲を弾く熱意と努力	<ul style="list-style-type: none"> ・『幻想即興曲』のページを開き、冒頭の左手の伴奏部分を弾こうとするが上手く弾けない ・右手のメロディー部分を弾こうとするが、これも難しくてなかなか上手く弾けない ・何回も何回も真剣に繰り返し弾き ・片手ずつのデュエットを成立させる
35. 集中し弾けた満足感 (11-16)	集中して真剣に弾いた満足感	<ul style="list-style-type: none"> ・父の胸に寄りかかり、「疲れた～」 ・「疲れるねえ～」と笑顔で ・伸びをしながら大欠伸
36. ピアノが歌を誘い出す(11-16)	ピアノが(A子の)歌を誘う	<ul style="list-style-type: none"> ・傍に来て、メロディーを気持ち良さそうに歌う

備考：親のかかわり

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
ネ. 関心を持ち褒める (11-16)	関心を持って褒める	<ul style="list-style-type: none"> ・父が「（月の光）弾けるの？ Bちゃん。かつこいいじゃん」と言いながらピアノに歩み寄り ・父が「ああいい感じだ。かつこいいね」と言う
	一緒に楽しんで弾き褒める	<ul style="list-style-type: none"> ・父は微笑みながら一緒に弾き続け「いい感じ、凄くいい感じ」と嬉しそうに言う

ノ. ピアノの楽しさを共有したい (11-16)	優しく説明する	<ul style="list-style-type: none"> ・ B男と一緒に腰掛け譜読みに付き合おうとする ・ 父はB男を懷に抱くようにして楽譜を指さしながら優しく説明する
	一緒に弾き面白さを知って欲しい	<ul style="list-style-type: none"> ・ 真剣に弾いているB男の左手の甲に父が左手を重ね、歌いながらタイミングを合わせてピアノを弾き、「面白いでしょ」とB男に言う
	楽しさを知って欲しい	<ul style="list-style-type: none"> ・ 父は楽譜をめくりながら「楽しいね。これ（ピアノ名曲選集）ね」と笑顔で言い
ハ. 子どものペースを尊重(11-16)	子どものペースに合わせ弾く	<ul style="list-style-type: none"> ・ 父は「ゆっくりやろうか」と言って、B男が右手で弾くメロディーに父が左手のメロディーを合わせて一緒に弾く
ヒ. 子どもの気持ちに同意(11-16)	子どもの気持ちに同意する	<ul style="list-style-type: none"> ・ 父も「疲れるよね～」と応じ、B男の身体を後ろから包むようにして弾いている ・ 父も「疲れるね～」と言って楽譜を閉じる

12 事例12 2008年2月27日

対象児	B男	A子	C子
年齢	8歳	10歳8ヶ月	5歳11ヶ月
学年	小学2年生	小学4年生	幼稚園年長

Y家の父は、日常的にピアノやギターを楽しみ、特に『幻想即興曲』や『月の光』は得意なピアノ曲である。子ども達にとっては工作や相撲などの相手をして遊んでくれる優しい父親でもある。B男はそのような父と父が弾く曲に憧れを抱いている。数日前の日曜日（事例11）に、その父と憧れの曲を弾けたことで、B男のピアノへの意欲は更に強いものになった。B男のピアノへの強い意欲と真剣な努力は、B男に対するそれまでのA子の態度にも変化を及ぼしている。本事例は、B男とA子との「ピアノ遊び」を通した関係性の変化が明確に示されている為、本研究のテーマの分析の対象場面と

して適していると判断した。

事例 1 2 場面 1 7

1 2 - 1 7	状況定義：B男のピアノレベルがA子に迫って来たと感じさせる場面
	<p>(16：38) B男はいつもの様に<u>帰宅すると真っ先にピアノを弾き始める。最初はピアノの音量が小さく絞ってあり殆ど聴こえない。</u>ヘッドフォンではないのでB男本人にも聴こえない状態であり、鍵盤のカタカタする音だけがしている。B男は『<u>幻想即興曲</u>』をゆっくり譜読みしながら片手練習し、次に『<u>月の光</u>』を繰り返して弾いていたが、<u>ピアノの音量が少しずつ大きくなり部屋中に響き始める。</u></p> <p>テーブルで母に編み物を教えてもらっていたA子が、<u>「Bに先を越されてしまう。でも大丈夫だよ・・・」</u>と自分に言い聞かせるように呟くと、母が「大丈夫だよ。Aちゃんが見本になってるんだから」と励まし、母はB男がピアノで兄弟を抜くという気持ちはないとA子に話す。B男は『<u>月の光</u>』を譜読みしながら弾いているが「<u>分かんない</u>」と呟く。<u>音がなかなかうまく繋がらないでいると、台所にいる母が応援するかのように『月の光』のメロディーをラララと歌う。</u>B男は繰り返して弾いていたが一旦ピアノから離れおやつを食べにテーブルへ行く。A子がB男と入れ替わってピアノに行き『<u>幻想即興曲</u>』『<u>軍隊行進曲</u>』をゆっくりしたテンポで弾いてから、テーブルに戻り編み物の続きをする。B男はまたピアノへ行行って『<u>結婚行進曲</u>』のさわりを弾いてから、<u>「難しい」と言いながら『幻想即興曲』を両手でゆっくり合わせている。</u>編み物をしているA子は、<u>「それ難しいよ、頑張って！応援してるから」</u>とB男に声をかける。母が「<u>優しいね～</u>」とA子に言う。B男は『<u>月の光</u>』を両手でゆっくり弾いたあと、<u>『エンターティナー』のリズムやテンポを変えてアレンジし、色々なパターンを試すようにして弾いている。</u>C子はヒップホップのようなステップを踏んで、B男の曲に合わせて楽しそうに踊り続けている。さらにB男が『<u>月の光</u>』に<u>ペダルを付けて雰囲気を出して弾き始める。</u>A子は編み物をしながら<u>「Bに抜かされたかも、まあいいや」</u>と呟くように言ってから、<u>「・・・っていうかさ、（楽譜を）見てるだけでやってるから、ちょっと凄いかも・・・」</u>と言い、<u>「Aも抜かされないように頑張る」</u>と言う。B男は『<u>幻想即興曲</u>』の楽譜を開いてしばらく考えてから何回も弾いていたが、<u>やがて両手が正確に合い始める。</u>B男はボリュームを上げペダルをつけて弾いてから、<u>「疲れた～」と立ち上がるが、また座りなおして『エンターティナー』や『幻想即興曲』を弾いてから、満足気な笑顔になって約1時間弾き続けたピアノを終える。</u></p>

B男は数日前の父との練習から、ピアノへの熱意がさらに高まっており、帰宅すると真っ先にピアノを弾き始める。この日のB男は父と弾いた憧れの曲を弾き始めるが、まだ上手く弾けず自信がないためか、最初はピアノの音量が小さく絞ってあり殆ど聴こえない状態であった。B男は『幻想即興曲』をゆっくり譜読みしながら片手練習してから、今度は『月の光』を繰り返し弾いており、カタカタと鍵盤を叩く音だけが聞こえていた。B男は熱心に繰り返し弾くうちにやがて弾けるようになり始めると、ピアノの音量が少しずつ大きくなり部屋中に響き渡る。B男が「難曲を弾けるようになった喜びに溢れる気持ち」が音量で示されたと言える。

B男は『月の光』を譜読みしながら弾いているが「分かんない」と呟く。父から教えてもらったのだが、B男にとっては高度な上にまだ手が小さいため音がなかなかうまく繋がらないでいると、B男の様子を気にかけて見ていた母が歌うことで応援している。B男は一旦ピアノから離れるが、またピアノに戻り今度は同じ曲集に載っているメンデルスゾーンの『結婚行進曲』のさわりを弾いてみる。しかしB男はどうしても『幻想即興曲』を弾けるようになりたいと思っているようで、「難しい」と言いながら『幻想即興曲』を両手でゆっくり合わせて同じ箇所を何回も弾いている。そして再度楽譜を見ながら『月の光』を両手でゆっくり弾いた後に、曲の表情を出すためにペダルを付けて雰囲気を出して弾き始める。更にもう一度読譜が困難な『幻想即興曲』の楽譜を開いてしばらく考えてから何回も弾いていたが、やがて両手が正確に合い始める。B男が弾いている曲は全て自分が弾きたいと思い、今夢中になっている曲であり、真摯に研鑽に取り組む姿は、自分発信の「ピアノ遊び」を通して、
〔高度な曲を自力で弾こうとする熱意と根気と努力〕に溢れている。自分の力量からすると余りにも難しい曲を弾き続けているB男は「疲れた～」と立ち上がるが、疲れていてもまだピアノを弾きたくて離れ難いようで、『エンターティナー』や『幻想即興曲』を弾くことを繰り返してから、満足気な笑顔でピアノを終える。B男は「体力の限界を超えても、ピアノを弾き続ける情熱に溢れた姿」を見せている。

また、B男は高度な曲を弾く合間に、自分のレパートリーになった『エンターティナー』のリズムやテンポを変えてアレンジし、色々なパターンを試すようにして弾いている。自分の心情をピアノで思い通りに表現するためには、まず楽譜通りに弾けることが先決である。B男は「曲を自由にアレンジしてオリジナルな表現を楽しむ」姿を示している。

この事例でも見られるが、A子は毎日の生活の中で、B男が精力的に難曲に挑戦して徐々にピアノ

の技術を上げていく様子を見ている。この日、B男のピアノへの熱意に溢れた取り組みに対して焦りを感じたのか、A子は「Bに先を越されてしまう。でも大丈夫だよ・・・」と呟いて自分の気持ちを慰めている。この時のA子の言葉からは、以前のような怒りやイラつきは感じられないものの、少し諦めたような声の調子である。しかし母が、A子の自信を失っているような心情を即座に汲み取り励ますと、A子は苦労して自力で弾いているB男に対して、「それ難しいよ、頑張って！応援してるから」と優しい言葉かけをする。そしてB男のピアノの実力が上がって来たことを認めるかのように「Bに抜かされたかも、まあいいや」と言った後、思いなおしたように明るい口調になって、「・・・っていうかさ、(楽譜を) 見てるだけでやってるから、ちょっと凄いかも・・・」とB男を称える発言をしてから、「Aも抜かされないように頑張る」とすっきりした決意の言葉を述べている。ピアノへの「B男の熱意と努力が、A子の決意に繋がる」という状況の変化が生まれたと考えられる。

場面 17 における B 男の特性は、＜難曲を弾ける喜び＞＜憧れの曲に対し妥協せず取り組む努力＞＜アレンジでオリジナルな演奏＞＜成長が(A子の)決意に繋がる＞である。親のかかわりは、＜子どもを理解し兄弟間の調整＞＜歌って応援＞である。

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
37. 難曲を弾ける喜び（12-17）	難曲を弾けるようになった喜びに溢れる気持ち	<ul style="list-style-type: none"> ・帰宅すると真っ先にピアノを弾き始める ・最初はピアノの音量が小さく絞ってあり殆ど聴こえない ・『幻想即興曲』をゆっくり譜読みしながら片手練習し ・『月の光』を繰り返し弾いて ・ピアノの音量が少しずつ大きくなり部屋中に響き
38. 憧れの曲に対し妥協せず取り組む努力(12-17)	高度な曲を自力で弾こうとする熱意と根気と努力	<ul style="list-style-type: none"> ・『月の光』を譜読みしながら弾いているが「分かんない」と呟く ・音がなかなかうまく繋がらないでいる ・『結婚行進曲』のさわりを弾いて ・「難しい」と言いながら『幻想即興曲』を両手でゆっくり合わせ ・『月の光』を両手でゆっくり弾いた

		<ul style="list-style-type: none"> ・ペダルを付けて雰囲気を出して弾き始める ・『幻想即興曲』の楽譜を開いてしばらく考えてから何回も弾いていたが、やがて両手が正確に合い始め
	体力の限界を超えても、ピアノを弾き続ける情熱に溢れた姿	<ul style="list-style-type: none"> ・「疲れた～」と立ち上がる ・『エンターティナー』や『幻想即興曲』を弾く ・満足気な笑顔
39. アレンジでオリジナルな演奏 (12-17)	曲を自由にアレンジしてオリジナルな表現を楽しむ	<ul style="list-style-type: none"> ・『エンターティナー』のリズムやテンポを変えてアレンジし、色々なパターンを試すようにして弾いている
40. 成長が(A子の)決意に繋がる (12-17)	B男の熱意と努力が、A子の決意に繋がる	<ul style="list-style-type: none"> ・「Bに先を越されてしまう。でも大丈夫だよ・・・」 ・「それ難しいよ、頑張って！応援してるから」 ・「Bに抜かされたかも、まあいいや」 ・「・・・っていうかさ、(楽譜を)見てるだけでやるから、ちょっと凄いかも・・・」 ・「Aも抜かされないように頑張る」

備考：親のかかわり

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
7. 子どもを理解し兄弟間の調整 (12-17)	子ども達の長所を理解	<ul style="list-style-type: none"> ・母が「大丈夫だよ。Aちゃんが見本になってるんだから」と励まし ・母が「優しいね～」とA子に言う
	子どもの真意を兄弟に伝える	<ul style="list-style-type: none"> ・母はB男がピアノで兄弟を抜くという気持ちはないとA子に話す
8. 歌って応援 (12-17)	応援して歌う	<ul style="list-style-type: none"> ・母が応援するかのよう『月の光』のメロディーをラララと歌う

1 3 事例 1 3 2008 年 4 月 9 日

対象児	B 男	A 子	C 子
年齢	8 歳 2 ヶ月	10 歳 9 ヶ月	6 歳 1 ヶ月
学年	小学 3 年生	小学 5 年生	小学 1 年生

新年度になり、それぞれが進級し、B 男は 3 年生になった。この頃の B 男は「ピアノ遊び」を精力的に展開している。2 月 24 日に父と憧れの曲を弾いた事が大きなきっかけとなり、B 男のピアノに対する心情、熱意や努力は A 子を始め家族全員に好感を持って認められている。本事例は、表情豊かに色々な曲を弾き、また複雑にアレンジして「ピアノ遊び」をしている B 男と、傍で見ている A 子との関係性に良好な心の変化が見られ、本研究のテーマの分析の対象場面として適していると判断した。

事例 1 3 場面 1 8

1 3 - 1 8	状況定義：B 男が色々な曲を複雑にアレンジして遊ぶ場面
<p>(18 : 24) A 子がピアノを弾き終え、母が夕飯の支度をしている。B 男は皆と果物を食べてからピアノを弾き始める。お気に入りの『エンターティナー』に付点を効かせたり、左手の伴奏を変えたりしてアレンジして弾いてから、『楽しき農夫』は伴奏部分に分散和音⁹⁵を使い複雑な演奏にアレンジして弾いている。母が「なんか B ちゃん、オリジナル?」と言うと、A 子が「そう」と自分のことのように答え、B 男の弾くメロディーを歌う。母は「凄いね!」と感心したように言う。C 子も B 男の弾き方は左手の和音を変えて弾いていると母に説明する。A 子は「B ちゃんはそういうのが好きだから」と言う。B 男は『結婚行進曲』を少し弾いていたが、『月の光』の楽譜を広げてペダルを付けて雰囲気を出して弾き始めると、A 子が歌いながら両手を広げて B 男が座るピアノの椅子に踊るようにふわっと抱きつく。B 男は、更に表現の仕方を工夫するかのように、考えながら表情豊かな弾き方を何度も試し、最初のページは曲として成立している。B 男の曲をハミングしている A 子は「パパみたい」と言う。</p>	

B 男は『エンターティナー』に付点を効かせたり、左手の伴奏を変えたりしてアレンジして弾いて楽しんでる。また丁度レッスンで C 子の宿題になっている『楽しき農夫』は伴奏部分に分散和音を使

⁹⁵ 和音の各音を同時でなく分散させて順次に奏するものをいう。前掲書、音楽之友社、1971 年、448 頁。

い複雑な演奏にアレンジして弾いている。これらの曲は既に合格した曲であり、全く違う華やかな雰囲気曲に聴こえる。この頃のB男は自由な自己表現ができるお気に入りの〔曲を複雑にアレンジして楽しむ〕ことが多くなっている。

母がオリジナルかとB男に聞くと、A子が代わりに「そう」と自分のことのように自慢げに答えて、階名で楽しそうにB男の弾くメロディーを歌うのである。更に母がB男のアレンジを褒めると、A子は「Bちゃんはそういうのが好きだから」と、B男の音楽的な好みは自分の方が母よりも理解しているというような話しぶりである。A子はB男に以前のような焼きもちや焦りを感じた言動ではなく、ピアノを好きなもの同士として自分こそB男の一番の理解者であるという心情を表わしている。B男はピアノでアレンジを工夫しながら弾き続けており、言葉を発していないが、〔ピアノを通してA子に自分を理解してもらえた〕場面と言える。

更にB男がペダルを付けて雰囲気を出して弾き始めると、傍にいたA子は嬉しそうに歌いながら両手を広げてB男が座るピアノの椅子に踊るようにふわっと抱きつく行動を取ったりする。B男は憧れの曲である『月の光』を2ヶ月近く自発的に家で弾いていた。B男のピアノ技術はまだ初級レベルであり、上級レベルのこの曲を自力で弾くのは大変な忍耐と努力が要求される。しかしB男のこの曲への思いは強く、表現の仕方を工夫するかのように、考えながら表情豊かな弾き方を何度も試して弾いている。B男の弾く『月の光』は自己流ではあるが、最初のページは曲として成立している。A子はピアノに合わせB男の曲をハミングしていたが、心地よい優しい音楽が部屋に流れてくると、「パパみたい」と言う。Y家の父は子ども達にとって、ピアノが弾けて大工仕事から料理まで何でも楽しんでやり、遊んでもくれる優しいヒーロー的存在である。B男のピアノがA子からY家における最大の賛辞で評価されたことになる。B男の〔ピアノ表現が最大の評価で認められる〕のである。

場面 18 におけるB男の特性は、＜複雑なアレンジで楽しむ＞＜ピアノ表現が高く評価される＞である。親のかかわりは、＜音楽的成長を褒める＞である。

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
41. 複雑なアレンジで楽しむ (13-18)	曲を複雑にアレンジして楽しむ	・『エンターティナー』に付点を効かせたり、左手の伴奏を変えたりしてアレンジして弾いて ・『楽しき農夫』は伴奏部分に分散和音を使い複雑な演奏

		にアレンジ
42. ピアノ表現が (A子に) 高く評 価される(13-18)	ピアノを通してA子に 自分を理解してもらえ た	<ul style="list-style-type: none"> ・「そう」と自分のことのように ・B男の弾くメロディーを歌う ・「Bちゃんはそういうのが好きだから」
	ピアノ表現が最大の評 価で認められる	<ul style="list-style-type: none"> ・ペダルを付けて雰囲気を出して弾き ・歌いながら両手を広げてB男が座るピアノの椅子に踊る ようにふわっと抱きつく ・表現の仕方を工夫するかのように、考えながら表情豊かな弾き方を何度も試し ・最初のページは曲として成立し ・B男の曲をハミングし ・「パパみたい」

備考：親のかかわり

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
ホ. 音楽的成長を褒 める（13-18）	関心を持って聴いてい る	・母が「なんかBちゃん、オリジナル？」と言う
	表現を褒める	・母は「凄いな！」と感心したように言う

14 事例14 2008年5月21日

対象児	B男	A子
年齢	8歳3ヶ月	10歳11ヶ月
学年	小学3年生	小学5年生

B男は家庭において「ピアノ遊び」を繰り返すうちに、A子も自分と同じようにピアノを弾くことが好きで、心が満たされ幸せな気持ちになることを理解するようになる。またA子もB男が憧れの曲

を弾きたいと思い技術の向上を目指していることに一目置くようになっている。本事例はピアノを通してお互いが相手のことを理解し、相手の立場になって発言し行動するという、B男とA子との関係において、互いの心情が穏やかに触れ合う様子が観察されたため、本研究のテーマの分析の対象場面として適していると判断した。

事例 14 場面 19

14-19	状況定義：B男がA子に快くピアノを譲る場面
<p>(17:30) B男はお気に入りの『エンターティナー』などを30分以上弾いている。A子は入浴前からピアノを弾きたそうにしていたが、A子が入浴を終えてもまだB男は弾いていたので、A子は「<u>ねえ、Bちゃん、ピアノ飽きたら後で弾かせて</u>」と穏やかな調子で言う。声を掛けられたB男はA子を振り返り、父とC子が発表会で連弾をする『小さな世界⁹⁶』の父のパートを1回だけ弾いてから、<u>「いいよAちゃん」と言ってピアノから離れる</u>。A子は素早くピアノに向かい弾き始める。</p>	

B男は相変わらず熱心にピアノを弾いており、A子が入浴を終えてもまだ弾いて止める気配がない。ピアノを弾きたいA子は、「ねえ、Bちゃん、ピアノ飽きたら後で弾かせて」と技術の向上を目指して弾くB男に遠慮勝ちに申し出る。熱心にピアノを弾いているB男の「気持ちがA子に尊重される」発言である。それに対してB男は、まだ弾きたい気持ちはあるのだが、A子の気持ちを汲んで「いいよAちゃん」と言ってピアノから離れる。B男が速やかに要求を受け入れて交代してくれたので、A子は素早くピアノに向かい弾き始める。B男とA子は互いにピアノを弾きたい気持ちを尊重して行動できる関係へと成長したと捉えられる。B男はA子のピアノを「弾きたい気持ちを汲んで要求に快く応じる」のである。

場面19におけるB男の特性は、＜互いの思いを理解し共有＞である。

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
43. 互いの思いを	気持ちがA子に尊重さ	・「 <u>ねえ、Bちゃん、ピアノ飽きたら後で弾かせて</u> 」

⁹⁶『連弾と2台ピアノ 発表会で弾きたい定番曲』シンコーミュージック・エンタテイメント、2009年、23-25頁。

理解し共有	れる	
(14-19)	弾きたい気持ちを汲んで要求に快く応じる	<ul style="list-style-type: none"> ・「いいよAちゃん」 ・ピアノから離れる ・素早くピアノに向かい弾き始める

15 事例15 2008年6月26日

対象児	B男	A子
年齢	8歳4ヶ月	11歳
学年	小学3年生	小学5年生

B男は7月に行われるピアノ発表会でA子と連弾をすることになっている。B男は技術的にはまだA子に及ばないが、練習する時間はA子よりも多くなっており熱心な練習により着実に上達している。B男はA子と自分達二人で選曲した連弾曲を通して、ピアノで表現する二人の音楽の世界を創り上げていく。連弾はソロとは違ったピアノの楽しみ方の一つである。二人が互いの心情を一つの曲にまとめ上げようとする様子は、本研究のテーマの分析の対象場面として適していると判断した。この日は遅い時間帯の観察である。

事例15 場面20

15-20	状況定義：B男がA子と優しい音で「風の谷のナウシカ」を連弾する場面
<p>(20：29) ピアノを弾き続けていたB男は、<u>『風の谷のナウシカ⁹⁷』の連弾曲を、ピアノを背にして後ろ向きになり、手を逆にして笑いながら弾いている。母が「凄い！モーツァルトみたい！」と驚く。B男は笑いながらピアノに向かい『エンターティナー』を弾いてから、また『風の谷のナウシカ』を暗譜で楽譜通りに弾いた後、色々な弾き方を試みてアレンジを加えている。B男のアレンジを聴いていたA子は「つまらないから、アレンジしているんだ。カッコいい方がいいよね」と言う。</u></p> <p>B男が『風の谷のナウシカ』を弾いていると、<u>帰宅した父がピアノに直行しB男の座っている椅子に一</u></p>	

⁹⁷ 『ピアノ連弾アニメ名曲集』ドレミ楽譜出版社、1995年、7-11頁。

緒に腰かける。母はそれを見てB男が連弾を待っているとA子に言うと、A子は「はいはいはい、じゃあやろう」とピアノに走って行く。父が「やるか、じゃあ、パパがやるか、やるか」とふざけてピアノを弾こうとすると、A子は「だめだめ、Aちゃんがやるから」と言い、父は笑いながらA子に席を譲る。A子はB男と同じ椅子に座り一緒に『風の谷のナウシカ』の連弾を始める。二人は優しい音で表情豊かにピアノを弾いている。父はピアノの椅子の背に両手を乗せ、二人が弾くのを見守りながら楽譜をめくる。B男の指がもつれそうになると父はB男の髪の毛を撫でる。二人が弾き終わると父は「ここをもっとゆっくりするとカッコいいよ」と楽しそうに笑いながらアドバイスをする。A子は少し弾くと席を立つが、B男は父のアドバイスを受けた箇所を丁寧に情感を込めるように表情をつけて弾く。B男の後ろに立っている父は「いい曲だなあ〜」と嬉しそうに笑ってから、他の子達と相撲を取り始める。B男は「疲れた〜」と言うのだが、今度は楽譜を見ながらゆっくりと音を確認するように丁寧に弾き始める。

この頃のB男は、色々な弾き方をして「ピアノ遊び」に興じている。この時は『風の谷のナウシカ』の連弾曲を、ピアノを背にして後ろ向きになり、手を逆にして笑いながら弾いており、アクロバットのような演奏方法を暫く試みている。やがてピアノに向き直ったB男は、A子と弾く連弾曲『風の谷のナウシカ』を暗譜で楽譜通りに弾いた後、色々な弾き方を試みてアレンジを加え遊んでいる。連弾曲は二人で弾くようにパートが分けてある為、自分のパートだけ弾いていると、表現が単調であったり、メロディーラインがないため物足りなさを感じてしまう場合がある。A子は、B男が連弾曲を簡単に弾けてしまったので「つまんないから、アレンジしているんだ。カッコいい方がいいよね」と、物足りなさから複雑にアレンジしようとしているB男の気持ちを代弁する。B男は、楽譜通りに自分のパートを弾くだけでなく、表現豊かな曲となるように、〔アレンジを加えオリジナルな表現を楽しむ〕のである。

B男が連弾曲を弾いていると父が帰宅し、B男と一緒に椅子に腰かけピアノを弾こうとする。父は帰宅してピアノに直行することがよくある。B男と弾こうと思っていたA子は、「はいはいはい、じゃあやろう」と言いながら、「だめだめ、Aちゃんがやるから」と父を遮って、二人は同じ椅子に座り一緒に『風の谷のナウシカ』の連弾を始める。姉弟であっても技術も感性も違う二人が連弾曲を成立させるためには、互いの技術的自律と共に、相手の心情を汲みながら表現をまとめ上げることが必要である。二人は優しい音で表情豊かにピアノを弾いて、曲のイメージを表現しようとする。〔二人

が心情を合わせ美しい連弾を弾こうとする」姿である。

父がアドバイスをすると、B男はアドバイスを受けた箇所を丁寧に情感を込めるように表情をつけて弾く。それまで長時間弾いていたため「疲れた～」と言うのだが、今度は楽譜を見ながらゆっくりと音を確認するように丁寧に弾き始める。B男は美しい演奏ができるようにアドバイスを取り入れ、
〔丁寧に納得する演奏を目指す努力〕をしていると言える。

場面 20 における B 男の特性は、＜魅力的なアレンジを（A 子に）認められる＞＜心情を合わせ美しい表現＞＜納得の演奏を追及＞である。親のかかわりは、＜感情豊かに褒める＞＜ピアノを共に楽しむ＞＜子ども目線で楽しむ＞＜子どもを見守り適切に援助＞である。

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
44. 魅力的なアレンジが（A 子に）認められる (15-20)	アレンジを加えオリジナルな表現を楽しむ	<ul style="list-style-type: none">・『風の谷のナウシカ』の連弾曲を、ピアノを背にして後ろ向きになり、手を逆にして笑いながら弾いて・『風の谷のナウシカ』を暗譜で楽譜通りに弾いた後、色々な弾き方を試みアレンジを加え・アレンジした連弾を聴いていた A 子は「つままないから、アレンジしているんだ。カッコいい方がいいよね」
45. 心情を合わせ美しい表現 (15-20)	二人が心情を合わせ美しい連弾を弾こうとする	<ul style="list-style-type: none">・「はいはいはい、じゃあやろう」・「だめだめ、A ちゃんがやるから」・同じ椅子に座り一緒に『風の谷のナウシカ』の連弾を始め・二人は優しい音で表情豊かにピアノを弾いて
46. 納得の演奏を追及 (15-20)	丁寧に納得する演奏を目指す努力	<ul style="list-style-type: none">・アドバイスを受けた箇所を丁寧に情感を込めるように表情をつけて弾く・「疲れた～」と言うのだが、今度は楽譜を見ながらゆっくりと音を確認するように丁寧に弾き始める

備考：親のかかわり

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
マ. 感情豊かに褒める（15-20）	弾き方に驚き褒める	・母が「凄い！モーツァルトみたい！」と驚く
ミ. ピアノを共に楽しむ（15-20）	子どもに関心を持ち一緒に弾こうとする	・帰宅した父がピアノに直行しB男の座っている椅子に一緒に腰かける
	曲を楽しむ	・B男の後ろに立っている父は「いい曲だなあ～」と嬉しそうに笑って
ム. 子ども目線で楽しむ（15-20）	ふざけて子どもとピアノを取り合う	・父が「やるか、じゃあ、パパがやるか、やる、」とふざけてピアノを弾こうとする ・父は笑いながらA子に席を譲る
メ. 子どもを見守り適切に援助（15-20）	子どもが弾こうとするのを援助	・母はそれを見てB男が連弾を待っているとA子に言う
	子どもが弾くのを見守り援助	・父はピアノの椅子の背に両手を乗せ、二人が弾くのを見守りながら楽譜をめくる
	スキンシップで励ます	・B男の指がもつれそうになると父はB男の髪の毛を撫でる
	楽しくアドバイス	・父は「ここをもっとゆっくりするとカッコいいよ」と楽しそうに笑いながらアドバイスをする

16 事例16 2008年11月19日 (P.34 図5 住居見取り図を参照)

対象児	B男	A子	C子	D男
年齢	8歳9ヶ月	11歳5ヶ月	6歳8ヶ月	4歳1ヶ月
学年	小学3年生	小学5年生	小学1年生	保育園年少

Y家では前月の10月にアップライトピアノを知人から預かり、鍵盤楽器が2台になる。アップライトピアノは、今まで電子ピアノが置かれていた洋室の窓際に、電子ピアノは台所の壁側に設置されている。他の家具の位置は変わっていない。

第4子のD男が、B男やC子と同じように「僕もO先生に習いたい」と申し出て、9月にピアノレッスンを開始したので、4人の兄弟姉妹全員がピアノ教室に通うようになった。この事例はピアノが2台になってから初めてB男とA子の二人が在宅しており、B男の「ピアノ遊び」が観察された。

B男とA子は4日前に行われた学習発表会で伴奏者として出演し、学校長から「姉弟でピアノを弾いて凄いですね」と言われる。B男は伴奏者としてピアノが弾けた楽しさと自信から、益々ピアノへの思いが強くなっている。

この頃のB男は1年生の夏から始めた小学校のサッカークラブの練習が増えてきた為、帰宅が18時過ぎになることが多くなっている。B男は家庭でピアノや小型ブロックなど好きなことをする時間を確保する為に、学校で宿題を終えてサッカークラブに行くように自分で考え実行している。またY家の子どもたちは早寝早起きが定着しており、起こされることなく6時～6時半には起床し、B男はピアノや小型ブロックをして朝の時間を有効に使っている。

この日、筆者が訪問したのは17時であり、B男はサッカーが早く終わり既に帰宅していた。B男はやはりピアノから離れがたいようで気に入っている曲をずっと弾き続け、更に自分のレベルより遥かに高い父の好きなモーツァルトの『ソナタ⁹⁸』を弾こうと挑戦する。本事例では、B男がピアノを弾き続ける姿、高度な曲を弾きこなす面白さを追及しようと「ピアノ遊び」に熱中する姿が、本研究の分析の対象場面として適していると判断した。

事例16 場面21

16-21	状況定義：B男は自由にピアノを楽しみ、父の好きな曲を弾こうとする場面
(17:30) B男が台所の電子ピアノで『エリーゼの為に』を弾いていると、D男がお菓子の袋を持って母と買い物から帰宅し、横のテーブルで分配し始める。B男は <u>電子ピアノを弾き続けながら後ろを向き</u> 、テーブルにいるA子達と話をしているが <u>電子ピアノを弾く手は止めずに</u> 、今まで <u>合格した中でお気に入りの</u>	

⁹⁸ モーツァルト作曲のソナタ（K. 331）。

曲を思い出すままに次々と 20 分ほど弾いている。次にB男はいつものように自分の進度よりずっと先の『バラード⁹⁹』やレベルの高い『月の光』を暗譜で途中部分まで弾き、続いて今まで弾いたことがなかった『貴婦人の乗馬¹⁰⁰』のスケールが連続する最後の部分を弾き始める。母が片づけをしながらB男が弾いている曲をハミングで歌うと、B男は最後のスケールの部分を繰り返し弾く。

B男が今度は父が好んで弾いているモーツァルトの『ソナタ（K. 331）』を弾き始めると、それに合わせて母もまたハミングをする。B男はモーツァルトの楽譜を出して両手でテーマの部分を弾き始め、続けてソナタの『バリエーションⅠ』も音を探りながら熱心に弾いている。分からない部分になると手を止めて楽譜を読み取ろうと集中して考えてから、また弾き始めるということを繰り返している。母が夕飯の準備を始めると手伝っていたA子が「納豆食べる人？」と子ども達に聞く。B男がピアノを弾きながら「食べる」と答えると、A子が「食べるか弾くかどっちかにして」と言い、B男は「分かった」と言ってピアノの蓋を閉める。テーブルに向き直って腰掛けたB男が、今まで弾いていた『ソナタ』をハミングすると、母も合わせてハミングで歌い、A子も口笛で『ソナタ』を吹いている。B男は何回も『ソナタ』をハミングする。

B男は母達が帰宅すると電子ピアノを弾き続けながら後ろを向き、A子達の話に加わっているがピアノは弾き続けていたいようで、電子ピアノを弾く手は止めずに時々話をしながら途切れることなく、合格した中でお気に入りの曲を思い出すままに次々と 20 分ほど弾いている。B男は話をしながら手を見なくてもリラックスして楽に弾けるようになった〔得意な曲を自由に弾いて楽しむ〕姿である。

更にB男は、以前から挑戦している自分の進度よりずっと先の『バラード』やレベルの高い『月の光』を暗譜で途中部分まで非常にスムーズに弾いている。次に『貴婦人の乗馬』のスケールが連続する最後の部分を弾き始める。この曲はまだレッスンでは到達していないレベルが上の曲ではあるが、家庭で自発的に繰り返し弾いているうちに弾けるようになってきた。B男は「ピアノ遊び」を通して、かねがね弾きたいと思っていた〔レベルが上の曲を弾けるようになってきた〕のである。また、この日は初めてB男が父が好んで弾いているモーツァルトの『ソナタ（K. 331）』を弾き始める姿も観察された。B男は耳でコピーして弾くのではなく、きちんと楽譜を出して両手でテーマの部分を弾き始めている。B男は学校でピアノ伴奏者に選ばれたことで、更にピアノを弾く楽しさを経験した自信か

⁹⁹『ブルグミュラー 25 の練習曲』15 番、全音楽譜出版社、30-31 頁。

¹⁰⁰同書、25 番、46-47 頁。

ら、新たな憧れの曲に挑戦するようになっている。B男はソナタのテーマに続いて『バリエーション I』も音を探りながら熱心に弾いているが、難しい部分に來ると手を止めて楽譜を読み取ろうと集中して考えてから、また弾き始めることを繰り返している。誰にも教えてもらわずに「ピアノ遊び」として自力でピアノを弾いているB男は、〔憧れの曲を弾くことで自分の可能性を探っている〕ように見える。

また、B男が『ソナタ』をハミングすると母もハミングし、更にA子が口笛で『ソナタ』を吹いているが、父がよく弾いているこのソナタ（K. 331）はB男やA子にとっては幼い時からの憧れの曲であり、B男はメロディーをしっかりと覚えていて何回も『ソナタ』をハミングする。幼い時からの憧れの曲に挑戦できるようになった〔嬉しさでハミングし、共に楽しむ〕B男達の微笑ましく楽しむ様子が見られた。

場面 21 におけるB男の特性は、＜色々な曲を弾ける楽しさ＞＜レベルが上の曲に挑戦する楽しさ＞＜共にハミング＞である。親のかかわりは、＜共にハミングし歌う＞である。

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
47. 色々な曲を弾ける楽しさ (16-21)	得意な曲を自由に弾いて楽しむ	<ul style="list-style-type: none"> ・電子ピアノを弾き続けながら後ろを向き ・電子ピアノを弾く手は止めず ・合格した中でお気に入りの曲を思い出すままに次々と 20 分ほど弾いて
48. レベルが上の曲に挑戦する楽しさ (16-21)	レベルが上の曲を弾けるようになってきた	<ul style="list-style-type: none"> ・進度よりずっと先の『バラード』やレベルの高い『月の光』を暗譜で途中部分まで ・『貴婦人の乗馬』のスケールが連続する最後の部分を弾き始める
	憧れの曲を弾くことで自分の可能性を探っている	<ul style="list-style-type: none"> ・父が好んで弾いているモーツァルトの『ソナタ (K. 331)』を弾き始める ・楽譜を出して両手でテーマの部分を弾き始め ・『バリエーション I』も音を探りながら熱心に弾いて

		・手を止めて楽譜を読み取ろうと集中して考えてから、また弾き始め
49. 共にハミング (16-21)	嬉しさでハミングし、共に楽しむ	<ul style="list-style-type: none"> ・『ソナタ』をハミングする ・口笛で『ソナタ』を吹いて ・何回も『ソナタ』をハミングする

備考：親のかかわり

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
モ. 共にハミングし歌う (16-21)	曲に合わせてハミングをする	<ul style="list-style-type: none"> ・母が片づけをしながらB男が弾いている曲をハミングで歌う ・それに合わせて母もまたハミングをする ・母も合わせてハミングで歌い

17 事例17 2009年3月4日

対象児	B男	A子	C子	D男
年齢	9歳1ヶ月	11歳8ヶ月	6歳11ヶ月	4歳4ヶ月
学年	小学3年生	小学5年生	小学1年生	保育園年少

鍵盤楽器が2台になったY家では、子どもたちの気分によってピアノを弾き分けている。4人兄弟姉妹全員がピアノレッスンを受けていることもあり、2台のピアノが同時に使われる時には、電子ピアノを弾く子がヘッドフォンをつけている。音量が大きいアップライトピアノは施設の入居者への配慮もあって、夜は弾くのを控えるようにしている。

この日、17時頃に筆者が訪問した時、B男は何日もかけて製作してきた小型ブロックの戦艦の完成に向け黙々と組み立てていた。C子とD男は空き箱で工作をしており、A子は台所のテーブルで漫画を読んでいる。母は夕食の支度を始めていた。本事例は、B男が製作していた戦艦が完成し、その嬉しい心情を咄嗟にピアノで表現する姿が、本研究のテーマの分析の対象場面として適していると判断した。

事例 17 場面 2 2

17-22	状況定義：B男が「気分いいと何か弾きたくなる」と言う場面
<p>(17:13) B男は小型ブロックの大型戦艦を何日もかけて製作している。A子はテーブルで漫画を読んでい る。B男はテレビドラマの主題歌『キセキ』をハミングしながら戦艦を組み立てていたが遂に完成する。B 男は戦艦を自分の勉強机に飾ると、近づいたり離れたったりして出来映えを満足げに眺め、嬉しそうに体を揺ら していたが、<u>急にピアノに行き宿題に出ている『牧歌¹⁰¹』を弾き始めた</u>。調理をしながらB男の様子を見て いた母は、弾き終えたB男に「B君、完成の曲？」と笑いながら聞く。本立てに『牧歌』の楽譜を取りに行 こうとしていたB男は、母に<u>何を言われたのか理解できずに「え〜？」とポカンとした表情</u>で母を振り返る。 母は「船が完成して嬉しくて、ピアノ弾いたのかと思った。気分良くなっちゃったんでしょ、出来上がって」 と言う。B男は<u>首をすくめて笑い、「そうだね」と嬉しそうに答える</u>。母は「それで弾きたくなっちゃった、 可愛い」と笑う。B男は「<u>気分いいと何か弾きたくなる</u>」と言ってピアノに座り、<u>もう一度『牧歌』を元気 よく弾き、母も『牧歌』をハミングして「いいじゃん」と言う</u>。B男は<u>何度も『牧歌』を表情豊かに弾いて から、合格している曲を次々弾き続ける</u>。</p>	

B男は完成した大きな戦艦を机の上に飾り満足気に眺め、嬉しそうに体を揺らしていたが、思い立
ったように急にピアノに行き宿題曲の『牧歌』を弾き始めた。母がB男に戦艦が完成した嬉しさで弾
きたくなったのかと聞くと、B男は戦艦のことに集中していたので、母に何を言われたのか理解でき
ずに「え〜？」とポカンとした表情になる。嬉しい気持ちから自然にピアノを弾きたくなったB男は、
母から言われ初めて自覚したようだ。B男は首をすくめて笑い「そうだね」と同意し、「気分いいと
何か弾きたくなる」とピアノを弾きたくなった理由を言う。B男はブロックが完成した「嬉しさを咄
嗟にピアノで表現したくなった」のである。

B男は、楽譜を見ながらもう一度『牧歌』を元気よく弾き始める。B男は感情を込めて何度も『牧
歌』を表情豊かに弾いてから、合格している曲を次々と弾き続けて嬉しい気持ちをピアノで表現して
いる。B男は家族から「何がなくても〇〇ブロック、ご飯食べなくても〇〇ブロック」と言われる程、
小型ブロックを組み立てるのが好きであり、この頃の将来の夢は小型ブロックビルダーであった。そ
れ程好きな「小型ブロックが完成した嬉しい気持ちを曲で表現」したのであろう。

¹⁰¹ 『ブルグミュラー 25の練習曲』第3番、14頁。

場面 22 における B 男の特性は、＜嬉しい気持ちをピアノ曲で表現＞である。親のかかわりは、＜気持ちを理解し愛情を示す＞である。

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
50. 嬉しい気持ちをピアノ曲で表現 (17-22)	嬉しさを咄嗟にピアノで表現したくなった	<ul style="list-style-type: none"> ・急にピアノに行き宿題曲の「牧歌」を弾き始め ・何を言われたのか理解できずに「え〜？」とポカンとした表情 ・首をすくめて笑い「そうだね」 ・「気分いいと何か弾きたくなる」
	小型ブロックが完成した嬉しい気持ちを曲で表現	<ul style="list-style-type: none"> ・もう一度「牧歌」を元気よく弾き ・何度も『牧歌』を表情豊かに弾いてから、合格している曲を次々弾き続け

備考：親のかかわり

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
ヤ. 気持ちを理解し愛情を示す (17-22)	嬉しさを理解し愛情を示す	<ul style="list-style-type: none"> ・「B 君、完成の曲？」と笑いながら聞く ・母は「船が完成して嬉しくて、ピアノ弾いたのかと思った。気分良くなっちゃったんでしょ、出来上がって」と言う ・母は「それで弾きたくなっちゃった、可愛い」と笑う
	ハミングして褒める	<ul style="list-style-type: none"> ・母も『牧歌』をハミングして「いいじゃん」と言う

対象児	B男	A子	C子	D男
年齢	9歳11ヶ月	12歳7ヶ月	7歳10ヶ月	5歳3ヶ月
学年	小学4年生	小学6年生	小学2年生	保育園年中

前回の家庭観察から約10ヶ月間「ピアノ遊び」は活発に展開されているが、B男に焦点を当てた「ピアノ遊び」の新しい特性は、筆者の訪問時間内では観察されなかった。また、4年生のB男と6年生のA子の帰宅時間が、学校の活動やサッカーの練習により遅くなり夕方の観察時間帯は彼らが不在のことも多く、更にC子とD男の「ピアノ遊び」が活発になったために、C子達にピアノを譲るケースもあった。この頃のY家は部屋割りが変わり、和室は女の子部屋で電子ピアノを設置、台所の半分が男の子部屋となり、アップライトピアノは以前と同じで洋室に設置してあり居間兼父母の部屋になっている。

A子の中学受験5日前のこの日、筆者の訪問は夕方17時半過ぎであった。B男は18時頃帰宅するとすぐ、半年前の発表会で父と連弾した『ホール・ニュー・ワールド¹⁰²』（アラジン）を弾き始める。この曲は、B男が父と楽譜売り場に行き2時間かけて選曲し、B男がセコンド（第2奏者）、父がプリモ（第1奏者）を担当することに決めた思い出の曲である。選曲当時小学3年生のB男は、まだ手が小さくピアノ技術も未熟であり、憧れの存在である父のピアノレベルには到底届いていない。しかしB男は、父が仕事で忙しく夜遅く練習している姿が大変そうなので、自分が難しいセコンドを引き受けたと語っている。憧れの父との連弾で必死に練習を積み重ねた結果、発表会で見事に成功を納められたことは、B男の大きな自信となりピアノへの思いを更に強くした。

本事例は、思い入れの強い『アラジン』を集中して弾いていたB男が兄弟を気遣う様子と、憧れの『ソナタ』を試行錯誤しながら自力で譜読みして熱心に弾く姿に、B男のピアノへの熱い心情が表れており、本研究のテーマの分析の対象場面として適していると判断した。

¹⁰² 映画「アラジン」の挿入歌。前掲曲集、2009年、58-62頁。

事例 18 場面 23

18-23	状況定義：表情豊かにピアノを弾いていたB男がD男を気遣う場面
<p>(18:01) 学校での大縄跳びのリーダーとなったB男は、クラスメイトとの練習を終え 18 時に帰宅するとすぐに、半年前の発表会で父と連弾した<u>思い出の曲『アラジン』の楽譜を広げ、アップライトピアノで弾き始める</u>。B男は発表会の時よりもピアノの実力が上がっており、この曲は日頃から弾いて楽しんでいる大好きな曲である。B男は<u>思いを込め美しい音色で表情豊かに雰囲気を出して弾いていた</u>。しかし傍で電話の子機で遊んでいたD男が、母の携帯に電話をかけ「B君が(ピアノ)やっているから、聞こえない・・・」と言った瞬間、それまで集中して弾いていたと思われたB男は、<u>ピアノを弾くのをピタッと止めて</u>振り返りD男の様子をうかがう。<u>母がD男に「あっちの部屋でやったら」と言ってD男が隣の部屋に行くと、B男はまたピアノを弾き始める</u>。</p>	

B男は帰宅すると、半年前の発表会で父と弾いた思い出の曲『アラジン』の楽譜を広げ、アップライトピアノで弾き始める。当時はもっと手も小さく技術的にも未熟であったB男だったが、父と初めて『アラジン』を弾いた時の感動と充実感は、その後のB男のピアノに対する思いを強くしたことを本人も述懐している。この時もB男は思いを込め美しい音色で表情豊かに雰囲気を出して弾いており、B男は大好きな「思い出の曲を表情豊かに弾き楽しむ」姿を示していた。しかしD男が電話の声が聞こえないと言った瞬間、ピアノを弾くのをピタッと止めている。B男は電子ピアノでも、傍に家族がいる時は音量を下げて弾くことがあり、アップライトピアノは音量が大きいため、迷惑をかけないようにという気持ちが咄嗟に働いたようである。D男がその場を離れると、B男はまたピアノを弾き始めている。B男はピアノを弾く時に「家族を気遣いながら、ピアノを楽しむ」ことが、自然に身についているように見える。

場面 23 における B 男の特性は、〈相手に気を配りピアノを楽しむ〉である。親のかかわりは、〈兄弟間への気配り〉である。

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
51. 相手に気を配	思い出の曲を表情豊か	・ 思い出の曲『アラジン』の楽譜を広げ、アップライトピ

りピアノを楽しむ (18-23)	に弾き楽しむ	アノで弾き ・思いを込め美しい音色で表情豊かに雰囲気を出して弾いて
	家族を気遣いながら、ピアノを楽しむ	・ピアノを弾くのをピタッと止めて ・またピアノを弾き始め

備考：親のかかわり

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
ユ. 兄弟間への気配り（18-23）	弾けるように兄弟を調整	・母がD男に「あっちの部屋でやったら」と言って

事例 18 場面 24

B男は、D男の電話の子機の件でピアノを一旦は中断したが、今度は父が好きなモーツァルトの『ソナタ（K. 331）』の最初の部分を暗譜で弾き始める。暫く弾いて曲の先が分からなくなったので、自分でコピーして作った楽譜のファイルを持ち出して読譜しながら弾き始める。母の仕事場である部屋続きの事務所で勉強をしていたA子は、アップライトピアノの横のテーブルに来て参考書を読んでいる。

18-24	状況定義：B男が憧れの曲を試行錯誤しながら弾く場面
<p>（18：17）『アラジン』を弾いてから、次に父が弾いている曲の一つでありB男もコンパクトディスクでよく聴いている<u>モーツァルトの『ソナタ（K. 331）』の『テーマ』を両手で弾き始める</u>。B男はこの時点で自己流だが<u>『テーマ』と『バリエーションⅠ』の前半までは両手で合わせて弾けるようになっている</u>。B男は<u>『バリエーションⅠ』の後半部分、『バリエーションⅡ』、『バリエーションⅢ』の右手などを譜読みしながら一音一音諦めずに最後まで弾き続けているが、かなりの困難さを伴っている</u>。その姿はまるで<u>難しい数式を解いているかのよう</u>である。黙々と弾いていたB男だったが、次に<u>『バリエーションⅣ』</u></p>	

に進むと「あ、ここから分かんない、全然また」と言いながら階名を読み上げ、難しさを声に出して自問自答しながら弾いている。「あ、そういうことか！」と一瞬分かったかのような発言もするが、やはり途切れ途切れで曲として繋がらない。10分程頑張っただけで弾いていたが、あまりにも難しくて諦めたのか、楽譜のページをめくり笑いながら振り向くと、お手上げだとでも言うように、しかし笑顔のまま、「あ～！う～！、もう無理。死んじゃう」と呟く。A子は横のテーブルで参考書を読んでいて、その声にチラッとB男を見るが黙って参考書のページをめくる。B男はバリエーションの『V. VI. メヌエット』を抜いて、次の『トリオ』の最後の2小節を「こうか！」と言い、力強く両手で弾き始める。やがて弾き方の手がかかりを見つけたことが出来たようで、満足げな表情をして椅子から立ち上がり、「ずっと弾いてた～～」と笑顔で台所に行き、C子達とお菓子を分け合う。B男が弾いていた時間は35分程であった。

この時点でのB男のピアノの進度は『ブルグミュラー25練習曲』の中程であり、全音ピアノ教本のレベル分けでは初級の第一課程である。B男はモーツァルトの『ソナタ (K. 331)』の『テーマ』を両手で弾き始めたが、この曲は中級の第三課程に位置づけられており、B男のレベルよりも遥かに上である。しかしB男は1年半前から気に入って弾いており、『テーマ』と『バリエーションⅠ』の前半までは両手で合わせて弾けるようになっている。B男は毎日の「ピアノ遊び」を通して、憧れの曲を〔月日をかけて自力で弾いてきた〕のである。

B男はレッスンで習っている宿題の曲でもなく、自分の演奏レベルより遥かに上の曲ではあるが、どうしても弾けるようになりたいという思いが強いようで、続く『バリエーションⅠ』の後半部分、『バリエーションⅡ』、『バリエーションⅢ』の右手などを譜読みしながら一音一音諦めずに最後まで弾き続けている。それはまるで難しい数式を解いているかのようであり、非常に根気の要る作業である。これらの行動は誰に指図された訳でもなく、自発的に弾こうとする「ピアノ遊び」だからこそ出来たことであり、自分の心の底から湧き上がる〔憧れの曲を弾きたいとの強い思いで取り組む〕B男のピアノへの気持ちと姿勢が表れている。

B男は『バリエーションⅣ』に進むと「あ、ここから分かんない、全然また」と言いながら階名を読み上げる。今までひたすら黙々と弾いていたB男だったが、この場面では曲に取り組む大変さを声に出して自問自答しながら弾いている。「あ、そういうことか！」と一瞬分かったかのような発言もするが、試行錯誤を繰り返しながら苦戦して音を拾っている状態である。「あ～！う～！もう無理。

死んじゃう」と弦く姿は、一見すると難しい曲を弾くことが辛く嫌がっているようでもある。しかし、次の曲に挑戦しようとしてページをめくり笑いながら振り向く表情からは、高度な曲を弾けるようになる為の技術の「難しさ自体を面白がり、自分の可能性に挑戦する楽しさ」を味わっているB男の心情が読み取れる。読譜に苦労しながら弾いていたB男は、『トリオ』の最後の2小節を「こうか!」
と言い、力強く両手で弾き終えると、晴れ晴れとした満足げな表情を見せ、「ずっと弾いてた～～」
と笑顔で言う。B男は、自分が弾きたい曲を弾きたい時に自由に弾く「ピアノ遊び」をしているのである。従ってB男は曲の難しさにてこずってはいるものの、傍に居るA子に教えてもらおうとはしていない。自分よりも技術が上のA子の前で、難しい曲に挑戦していることが自体が楽しく、そのことに満足しているようである。技術の未熟なB男は、自分の思うように弾くことは出来なかったが、難しい曲に対して「弾きこなそうと挑戦した満足感」を味わうことが出来たと言える。

場面 39 におけるB男の特性は、＜憧れの曲に意欲を燃やし忍耐強く弾く持続力＞＜実力より高い曲に取り組む充実感＞である。

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
52. 憧れの曲に意欲を燃やし忍耐強く弾く持続力 (18-24)	月日をかけて自力で弾いてきた	<ul style="list-style-type: none"> ・モーツァルトの『ソナタ（K. 331）』の『テーマ』を両手で弾き ・『テーマ』と『バリエーションⅠ』の前半までは両手で合わせて弾ける
	憧れの曲を弾きたいとの強い思いで取り組む	<ul style="list-style-type: none"> ・『バリエーションⅠ』の後半部分、『バリエーションⅡ』、『バリエーションⅢ』の右手などを譜読みしながら一音一音諦めずに最後まで弾き ・難しい数式を解いているかのよう
53. 実力より高い曲に取り組む充実感(18-24)	難しさ自体を面白がり、自分の可能性に挑戦する楽しさ	<ul style="list-style-type: none"> ・『バリエーションⅣ』に進むと「あ、ここから分かんない、全然また」と言いながら階名を読み上げ ・「あ、そういうことか!」と一瞬分かったかのような発言

		<ul style="list-style-type: none"> ・「あ～！う～！もう無理。死んじゃう」と呟く ・ページをめくり笑いながら振り向く
	弾きこなそうと挑戦した満足感	<ul style="list-style-type: none"> ・『トリオ』の最後の2小節を「こうか！」と言い、力強く両手で弾き ・満足げな表情 ・「ずっと弾いてた～～」と笑顔で

19 事例19 2013年12月4日 (P.37 図8 住居見取り図を参照)

対象児	B男	A子	C子	D男
年齢	13歳10ヶ月	16歳5ヶ月	11歳8ヶ月	9歳1ヶ月
学年	中学2年生	高校1年生	小学6年生	小学3年生

Y家の2010年1月の事例18以降から2011年4月までの期間における家庭観察では、B男の「ピアノ遊び」の新しい特性は抽出されておらず、2011年4月で一旦終了している。また、本事例までにY家は2度転居している。1度目は2010年8月に母の転職により高齢者住宅の管理人室から借家に転居し(P.36の図7住居見取り図を参照)、2度目は2013年8月に現在の3階建ての3LDKの一戸建て住宅へ転居した。

本事例は、家庭観察の終了後より2年7ヶ月ぶりであり、新居への転居から4ヶ月後である。新居で家族が集まる場所は2階のL字型のリビングダイニングになっている。ダイニング側に家族が集まり食事をするテーブルがあり、L字に折れたリビングの窓側に1年前に買い換えた電子ピアノが設置されている。預かっているアップライトピアノは1階の来客室に設置してある。

この時点で、中学2年生のB男のピアノ進度は高校1年のA子より進んでいる。半年前のピアノ発表会の演奏順はB男がA子よりも上級のプログラム位置となり、お互いのピアノレベルがそれまでと逆転している。

この日、サッカーのクラブチームの練習に行っているC子以外は在宅している。A子がリビングの電子ピアノで合唱の伴奏曲やポップスを弾き母が夕食の支度をしていると、空腹のB男がリビングに

入って来て残り物で先に食事を始める。A子は45分程電子ピアノを弾いていたが、その後D男や父と食事を始める。先に食事を終えたB男が電子ピアノを弾き始めると、A子も食事を終えてB男の傍へ行き一緒にピアノを弾こうとする。ピアノを通した二人の振る舞いには、幼い時からピアノと共に成長してきた二人の関係性が表われており、本研究のテーマの分析の対象場面として適していると判断した。なお、家庭観察が中断している期間も、4人の兄弟姉妹の週1回のピアノレッスンは継続して行われていた。

事例19 場面25

19-25	状況定義：B男がA子とピアノの連弾を通して理解しあう場面
<p>(19:45) 先に食事が終わったB男は、来年の発表会で父と弾く<u>連弾用の『パヒュームメドレー¹⁰³』を2階の電子ピアノで弾き始める</u>。父との発表会での連弾は3年ぶり3回目である。食事を終えたA子はB男が弾く<u>メロディーを楽しそうに歌いながら「どこやってんの？」</u>と言ってピアノの傍に行くと、B男は<u>ピアノを中断せずに弾きながら楽譜の方に顎を突き出し、弾いている箇所を示す</u>。A子はB男の横に立ったまま、すぐに父が担当するパートと一緒に弾き始める。<u>A子が一緒に椅子に座り弾き始めると</u>、B男はA子が座れるように席を空け<u>A子をリードしながら弾いている</u>。</p> <p>テクノポップでスピードが速く、リズムも音も複雑な曲である。B男はA子と<u>弾き進みながら次のページをめくると</u>、A子は<u>複雑な楽譜を見て「なんだこりゃ」と呆れたように言うが</u>、B男は<u>曲を止めることなく二人は呼吸を合わせて弾こうとする</u>。余りに難しそうな曲なので母が、「パパ、パパ、今の曲って誰が弾くの？」と聞くと、「あれ〜、パパと弾くやつ？」と笑いながら父が答える。母は一瞬哑然として「うふふふ〜、う〜ふふふ〜ほほほ〜」と複雑な笑いをする。父も「弾けないの、難しい、すごい難しい」と困ったように笑いながら言う。B男がクレメンティの『ソナチネ』を弾き始めると、A子は明るい声でメロディーを歌いながら母達の座っているテーブルに戻る。</p> <p>B男は『エンターティナー』『ゴリウオークのケーキウオーク』などを暗譜で<u>中断なく弾き続け</u>、アニメ主題歌の『<u>進撃の巨人</u>』を弾くと、A子が嬉しそうに「A、その曲好き」とまたいそいそとピアノに走って行き、<u>一緒に弾き始める</u>。激しいスピードで音階を下降する最後のフレーズを弾くと、A子が「いいね、ここ、好きでしょ？」とB男に聞く。B男は<u>弾きながら「B、好き」</u>と答え、A子も「<u>Aも好き</u>」と</p>	

¹⁰³ 『メドレーポリリズム〜チョコレイト・ディスコ〜ねえ』中田ヤスタカ作曲、内田美雪アレンジ、ぷりんと楽譜、ヤマハミュージックメディア。

言う。B男がゲーム曲『スーパーマリオブラザーズ』を弾きだすと、A子はそのメロディーを口ずさみながらステップを踏んで食卓に戻る。B男は続けて『エンターティナー』を軽やかに弾いている。

A子はB男の姿を見て、「B君はピアノが恋人だ」と言う。D男が「B君『ガリレオ』弾いて」と言うと、B男は即座にリクエストに応え、テレビドラマの主題曲『ガリレオ』を弾く。更に『エンターティナー』『トルコ行進曲¹⁰⁴』、『あまちゃんのテーマ』など、まるでコンサートのように全て暗譜で、次から次へと流れるように軽快なピアノ演奏が続く。A子はB男のことを「1回モードに入るとそのままずっと弾く」と言い、父も「ずっとやってんだよね」と嬉しそうに言う。

B男は非常に難しいが若者受けする連弾用の『パピュームメドレー』を2階の電子ピアノで弾き始める。発表会で父と弾く連弾曲で、まだ曲が決定してから日が経たないがB男はすでに両手で弾けており非常にカッコいい演奏である。A子は、B男が弾く曲のメロディーを楽しそうに歌いながら「どこやってんの？」と興味を持って一緒に弾こうとする。それに対してB男はピアノを中断せずに弾きながら楽譜の方に顎を突き出し、弾いている箇所を示す。集中して弾いていたB男だが、A子が一緒に椅子に座り弾き始めることを嫌がらずに受け入れ、A子をリードしながら弾いている。1人用のピアノ椅子に、思春期の姉弟であるB男とA子が一緒に腰掛けて弾き合う微笑ましい姿は、共に楽しむことが出来る音楽の力でもあり、連弾の良さでもあろう。B男がA子の「一緒に弾きたい気持ちを快く受け入れる」場面である。スピードが速くリズムも音も複雑で弾くのが大変そうな曲である。母が心配するように、父はこの曲がまだ弾けていないため、B男との連弾は実現していない。しかし、A子はほぼ初見¹⁰⁵だが弾くことができるので、B男はA子と一緒に弾き進みながら次のページをめくる。A子も複雑な楽譜を見て「なんだこりゃ」と呆れたようにふざけて言うが、それでも互いに雰囲気は掴めており、曲を止めることなく二人は呼吸を合わせて弾こうとしている。B男は「A子との演奏で難曲の連弾を楽しむ」ことが出来たのである。

その後もB男は『エンターティナー』『ゴリウオークのケーキウォーク』などを暗譜で間断なく弾き、アニメ主題歌『進撃の巨人』を弾くと、A子がまた「A、その曲好き」といそいそとピアノに走って行き、一緒に弾き始める。難しくスピード感のある現代風の曲を弾く二人は実に楽しそうであり、

¹⁰⁴ モーツァルト作曲、K331、ピアノソナタ第11番、3楽章。

¹⁰⁵ 楽譜を初めて見て弾くこと。

姉弟の仲の良さが垣間見れる。A子はB男に「いいね、ここ、好きでしょ？」と魅力的なフレーズ¹⁰⁶への感想を聞くと、B男は弾く手を休めずに途切れることなく弾き続けながら「B、好き」と答え、「Aも好き」と互いに感覚の一致を確認している。A子は楽しそうにB男が弾くゲーム曲のメロディーを口ずさみながらステップを踏んでいる。B男はA子と「互いにピアノを弾くのを楽しみ理解し合う」関係性が築けているのである。

この日のY家は、B男がリクエストに応え、テレビドラマの主題曲『ガリレオ』を弾くかと思うと、まるでリビングでのコンサートのように全て暗譜で、次から次へと流れるように軽快なピアノ演奏が続くが、これはY家にとって特別なことではなく日常である。B男は「様々なジャンルの曲を自力で自由自在に弾いて楽しみ」家族も共に楽しむ日常を過ごしているのである。

常日頃、B男がピアノを弾くことを楽しみ喜びと感じている姿を見ているA子は、「B君はピアノが恋人だ」と言って、B男がどれ程ピアノを弾くことが好きかを一言で表現している。そして「1回モードに入るとそのままずっと弾く」と普段から夢中で弾いているB男の様子を述べる。B男はA子から「ピアノは大切なかけがえのない存在と認識される」のである。

場面 25 におけるB男の特性は、＜弾き合う連弾の面白さ＞＜連弾により互いを理解＞＜ピアノを自力で自由に弾く醍醐味＞＜ピアノが恋人＞である。親のかかわりは、＜親を超えた子どもの成長が嬉しい＞である。

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
54. 弾き合う連弾の面白さ(19-25)	一緒に弾きたい気持ちを快く受け入れる	<ul style="list-style-type: none"> ・連弾用の『パビュームメドレー』を2階の電子ピアノで弾き ・メロディーを楽しそうに歌いながら「どこやってんの？」 ・ピアノを中断せずに弾きながら楽譜の方に顎を突き出し、弾いている箇所を示す ・A子と一緒にの椅子に座り弾き始める ・A子をリードしながら弾いて
	A子との演奏で難曲の	<ul style="list-style-type: none"> ・弾き進みながら次のページをめくる

¹⁰⁶ 旋律あるいは走句の一区切りのこと。

	連弾を楽しむ	<ul style="list-style-type: none"> ・複雑な楽譜を見て「なんだこりゃ」と呆れたように ・曲を止めることなく、二人は呼吸を合わせて弾こうとする
55. 連弾により互 いを理解(19-25)	互いにピアノを弾くの を楽しみ理解し合う	<ul style="list-style-type: none"> ・『エンターティナー』『ゴリウオークのケーキウオーク』などを暗譜で間断なく弾き ・『進撃の巨人』を弾く ・「A、その曲好き」といそいそとピアノに走って行き、一緒に弾き ・「いいね、ここ、好きでしょ？」 ・「B、好き」と答え ・「Aも好き」 ・メロディーを口ずさみながらステップを踏んで
56. ピアノを自力 で自由に弾く醍醐 味(19-25)	様々なジャンルの曲を 自力で自由自在に弾い て楽しむ	<ul style="list-style-type: none"> ・リクエストに応え、テレビドラマの主題曲『ガリレオ』を弾く ・コンサートのように全て暗譜で、次から次へと流れるように軽快なピアノ演奏が続く
57. ピアノが恋人 (19-25)	ピアノは大切な存在と 認識される	<ul style="list-style-type: none"> ・「B君はピアノが恋人だ」 ・「1回モードに入るとそのままずーっと弾く」

備考：親のかかわり

特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
3. 親を超えた子ども の成長が嬉しい (19-25)	高度な連弾曲に関心を 持つ	<ul style="list-style-type: none"> ・余りに難しそうな曲なので母が、「パパ、パパ、今の曲って誰が弾くの？」と聞く
	子どもが上達し一緒に 弾く連弾が大変であり 嬉しい	<ul style="list-style-type: none"> ・「あれ～、パパと弾くやつ？」と笑いながら父が答える ・父も「弾けないの、難しい、すごい難しい」と困ったように笑いながら言う ・母は一瞬唖然として「うふふふ～、う～ふふふ～ほほほ～」

		と複雑な笑いをする
	子どもの成長が嬉しい	・父も「ずっとやってんだよね」と嬉しそうに言う

第2節 概念の生成

抽出された「ピアノ遊び」の57の＜特性＞から共通の特性を見出し、概念化を図った。その結果、17の《概念》が生成された。＜特性＞と《概念》の相関を以下に示す。

《概 念》	＜特 性＞
①ピアノに興味を持ち鳴らしたい	1. ピアノで遊ぶ姿に惹きつけられ(1-1)
	6. ピアノの遊びに興味を持ち鳴らしたい(2-3)
	7. ピアノへの強い意欲(2-4)
②一緒にピアノで遊びたいという 意欲的行動	9. 一緒に遊びたい強い意欲(2-4)
	2. ピアノで遊ぶのを認められ(1-1)
	3. やる気が（A子の）遊びを誘う(1-2)
	4. 一緒にピアノで遊ぶ楽しさ(1-2)
	8. 一緒にピアノで遊ぶ喜び(2-4)
③聴いてまねて弾き遊ぶ	5. 見てまねて鳴らす(1-2)
	13. 曲をまねて遊び弾き(4-6)
	12. ピアニストのまね(4-6)
④自身の気持ちをピアノで表現	10. ピアノを弾いて気持ちを表現(3-5)
	50. 嬉しい気持ちをピアノ曲で表現(17-22)
⑤ピアノ技術向上への願望	11. A子の弾くピアノへの憧れ(3-5)
	15. 技術的応援を求める(5-7)
⑥ピアノ技術向上への競い合い	18. B男の熱心さがA子の反発を買う(6-8)
	30. ライバル視される(9-13)
	14. 練習を妨害されたことに強く抗議(4-6)
⑦ピアノ共有への交渉	16. ピアノを占有したい気持ちを表わす(5-7)
	21. 弾きたい思いを強く主張(6-9)
	20. 争いを避ける行動(6-9)
	17. 互いの弾きたい気持ちを受容(5-7)
	43. 互いの思いを理解し共有(14-19)
⑧ピアノ技術向上の認め合い	22. 対等にピアノが弾けた手応え(7-10)
	26. ピアノ演奏が（A子に）好感を持たれる(9-12)
	25. オリジナルな表現が（A子に）尊重される(8-11)
	42. ピアノ表現が（A子に）高く評価される(13-18)
	40. 成長が（A子の）決意に繋がる(12-17)
⑨憧れを抱き達成への期待感	32. 憧れの曲に挑戦する嬉しさを発言(11-15)
	34. 憧れの曲を目指す熱意(11-16)
	46. 納得の演奏を追及(15-20)
⑩忍耐強く挑戦する持続性	29. レベルの高い曲を体力の限界まで弾き続ける情熱(9-13)

	38. 憧れの曲に対し妥協せず取り組む努力(12-17)
	52. 憧れの曲に意欲を燃やし忍耐強く弾く持続力(18-24)
⑪憧れの曲を夢中で弾く充実感	33. 憧れの曲に夢中(11-16)
	35. 集中し弾けた満足感(11-16)
	48. レベルが上の曲に挑戦する楽しさ(16-21)
	37. 難曲を弾ける喜び(12-17)
	53. 実力より高い曲に取り組む充実感(18-24)
⑫ピアノに合わせ歌う一体感	49. 共にハミング(16-21)
	36. ピアノが歌を誘い出す(11-16)
	31. 楽しく踊れる豊かな表現(10-14)
	24. 曲で楽しい雰囲気(8-11)
	23. 気持ちをピアノで励ます(8-11)
⑬連弾による音楽の生成	45. 心情を合わせ美しい表現(15-20)
	54. 弾き合う連弾の面白さ(19-25)
	55. 連弾により互いを理解(19-25)
⑭ピアノを通して周囲への配慮	19. 家族に配慮して弾く(6-9)
	51. 相手に気を配りピアノを楽しむ(18-23)
⑮表現力豊かな演奏を志向	27. 動物の形態を表現して楽しむ(9-12)
	57. ピアノが恋人(19-25)
⑯曲をアレンジして楽しむ	39. アレンジでオリジナルな演奏(12-17)
	41. 複雑なアレンジで楽しむ(13-18)
	44. 魅力的なアレンジが(A子に)認められる(15-20)
⑰心の赴くままに弾ける満足感	47. 色々な曲を弾ける楽しさ(16-21)
	28. リラックスして心のままに表現(9-13)
	56. ピアノを自力で自由に弾く醍醐味(19-25)

以下で＜特性＞と《概念》の相関を説明する。文中の《 》は概念、＜ 》は特性を表示したものであり、（ ）は筆者による加筆である。

概念①《ピアノに興味を持ち鳴らしたい》

家庭内にあって、A子と母の楽しそうに＜ピアノで遊ぶ姿に惹きつけられ＞、目で追うB男の姿が日常的に見られる。A子達の＜ピアノの遊びに興味を持ち鳴らしたい＞と思ったB男は、自らピアノに這って行きピアノの鍵盤に手を伸ばし、＜ピアノへの強い意欲＞を示す行動に出るのである。以上のことから、《ピアノに興味を持ち鳴らしたい》という概念が生成される。

概念②《一緒にピアノで遊びたいという意欲的行動》

ピアノで＜一緒に遊びたい強い意欲＞を示したB男の行動はA子の関心を引き、A子から＜ピアノで遊ぶのを認められ＞て、B男は一緒に遊ぶことを受け入れてもらう。ピアノを鳴らそうとするB男の＜やる気が（A子の）遊びを誘う＞ことにもなり、A子の関わりにより、＜一緒にピアノで遊ぶ楽しさや喜び＞を経験したB男は、更なる意欲的行動を示そうとする。以上のことから《一緒にピアノで遊びたいという意欲的行動》という概念が生成される。

概念③《聴いてまね¹⁰⁷で弾き遊ぶ》

幼いB男はA子がピアノを弾くと嬉しそうに近寄り、鍵盤に手を伸ばしバタバタ鳴らすなど、A子が弾く姿を＜見てまねて鳴らす＞様子が頻繁に見られる。時の経過により成長してきたB男は自己流でA子が弾く＜曲をまねて遊び弾き＞をして楽しむようになる。また、電子ピアノの自動演奏を流し、まるで自分が弾いているかのように＜ピアニストのまね＞をしてリズムに合わせ身体を動かし遊ぶ姿が見られた。以上のことから、《聴いてまねて弾き遊ぶ》という概念が生成される。

概念④《自身の気持ちをピアノで表現》

B男は心で感じた思いや感情を表わす手段として言葉だけではなく、＜ピアノを弾いて気持ちを表現＞しようとする姿が見られるようになる。更に少しピアノ技術がついてくると、自分の心に湧き上がる＜嬉しい気持ちをピアノ曲で表現＞しようとして、咄嗟にピアノに向かって得意の曲を弾いて感情表現をする姿も見られる。以上のことから《自身の気持ちをピアノで表現》という概念が生成される。

概念⑤《ピアノ技術向上への願望》

B男は幼い時から＜A子の弾くピアノへの憧れ＞を持っており、B男にとってA子是一目置く模範の存在である。B男は曲が上手く弾けないときにA子に＜技術的応援を求める＞など、もっとピアノが弾けるようになりたいと、技術的向上への願いが強くなっていく。以上のことから、《ピアノ技術向上への願望》という概念が生成される。

¹⁰⁷ まねる。模倣であり、他の人やグループの行動、あるいは物事を、意図的もしくは非意図的にまねる過程のこと。前掲書、『APA心理学大事典』880頁。

概念⑥《ピアノ技術向上への競い合い》

B男がピアノに意欲を燃やし徐々にピアノ技術を高めはじめると、＜B男の熱心さがA子の反発を買う＞こととなり、B男がピアノを弾くのを邪魔するA子の行動が見られる。今まで技術的にレベルが低いと思われていたB男が、A子の進度より上の曲に自ら挑戦し始めたことにより、B男は＜ライバル視される＞のである。しかしピアノ技術向上への意欲を燃やしているB男は弾きたいという自分の気持ちを主張し、＜練習を妨害されたことに強く抗議＞する行動に出たりもする。以上のことから、《ピアノ技術向上への競い合い》という概念が生成される。

概念⑦《ピアノ共有への交渉》

ピアノへの意欲が高まってきたB男はピアノが弾きたいためにピアノから離れようとせず、＜ピアノを占有したい気持ちを表わす＞ようになり、＜弾きたい思いを強く主張＞する。しかしピアノを力づくで奪い合うのではなく、互いが気持ちよくピアノを弾けるように工夫をして交渉をするなど、＜争いを避ける行動＞も取れるようになる。その交渉の経験の積み重ねを通して、＜互いの弾きたい気持ちを受容＞出来るようにもなり、ピアノを自分だけが独り占めするのではなく譲り合う等、＜互いの思いを理解し共有＞しようとする穏やかな姉弟関係も生まれてくる。以上のことから《ピアノ共有への交渉》という概念が生成される。

概念⑧《ピアノ技術向上の認め合い》

B男が弾いている時にA子が介入して来てもB男は以前のように嫌がって拒絶せずに、かえって自分より上手なA子と＜対等にピアノが弾けた手応え＞を楽しむかのように一緒に弾いている。また、B男の奏でる＜ピアノ演奏が（A子に）好感を持たれる＞ようになってくると、B男のピアノによる＜オリジナル¹⁰⁸な表現が（A子に）尊重される＞など、ピアノ技術もA子から認められ始める。更にB男の＜ピアノ表現が（A子に）高く評価される＞ようになると、B男の＜成長が（A子の）決意に繋がる＞という波及効果も表れて来る。日々の生活の中でピアノを通して互いに相手の存在を尊重することができるようになったとも言える。以上のことから、《ピアノ技術向上の認め合い》という概念が生成される。

¹⁰⁸ この事例では、B男が右手で左手のパートを弾き、左手で右手のパートを弾くという左右逆の弾き方を自分で工夫しながら考えて弾いていた。

概念⑨《憧れを抱き達成への期待感》

B男は幼い頃から弾きたいと思いつけてきた＜憧れの曲に挑戦する嬉しさを発言＞して喜びを言葉に表わす。B男のピアノ技術のレベルではまだ弾くには難しいが、＜憧れの曲を目指す熱意＞に溢れピアノを弾く姿は、如何に弾くことが困難であっても、＜納得の演奏を追及＞しようとする意志の強さと、自分にも弾けるのではないかという期待感に溢れている。以上のことから、《憧れを抱き達成への期待感》という概念が生成される。

概念⑩《忍耐強く挑戦する持続性》

B男は幼い時から憧れていた＜レベルの高い曲を体力の限界まで弾き続ける情熱＞を示しながら、疲労をも乗り越えて曲をマスターしようと繰り返し熱心に弾き続けている。誰に指示されるでもなく、自ら進んで＜憧れの曲に対し妥協せず取り組む努力＞を惜しまない姿が日々の生活にみられる。また＜憧れの曲に意欲を燃やし忍耐強く弾く持続力＞が、一過性ではなく長期間にわたったB男の主体的行動として継続して示されている。以上のことから、《忍耐強く挑戦する持続性》という概念が生成される。

概念⑪《憧れの曲を夢中で弾く充実感》

B男はピアノに向かい＜憧れの曲に夢中＞になって取り組み弾いている。それがたとえ難しく思うようにまだ弾けなくても、＜集中し弾けた満足感＞が嬉しそうな笑顔の表情に表れている。B男自身のピアノの実力はまだ低いのだが、自分が弾きたいと思った憧れの曲である＜レベルが上の曲に挑戦する楽しさ＞と、今まで手の届かなかった＜難曲を弾ける喜び＞に溢れた姿が示されている。B男は＜実力より高い曲に挑戦する充実感＞を感じながら、ピアノを弾ける楽しみに浸る。以上のことから、《憧れの曲を夢中で弾く充実感》という概念が生成される。

概念⑫《ピアノに合わせ歌う一体感》

B男が奏でる音楽が家庭内に響き渡ると、居合わせた家族がピアノと＜共にハミング＞する様子は、Y家で繰り返される＜ピアノが歌を誘い出す＞日常である。またB男は家族の要望に応え、＜楽しく踊れる豊かな表現＞でピアノをリズムカルにエネルギッシュに弾いて、弟達の踊りを引き出す。B男

はピアノを弾いて＜曲で楽しい雰囲気＞を作り出したり、家族の＜気持ちをピアノで励ます＞など、ピアノを介して家族が一体となって楽しむ姿が随所で見られる。以上のことから、《ピアノに合わせ歌う一体感》という概念が生成される。

概念⑬《連弾¹⁰⁹による音楽の生成》

ピアノには1台のピアノを複数の人数で弾く連弾という楽しみ方がある。2人及び3人が4手や6手を駆使して互いの＜心情を合わせ美しい表現＞を目指して弾くことは、一人で弾くよりもずっとダイナミックな演奏をすることが出来る。互いに相手の弾くパートを聴き合いながら＜弾き合う連弾の面白さ＞は、アンサンブル¹¹⁰にも発展していく楽しさでもある。連弾は、弾きあうお互いの関係性が悪い状態では成立させるのは難しい。しかし一緒にピアノを奏でる＜連弾により互いを理解＞しようと心を通わせることで、連弾の成立と共に良好なお互いの関係も築かれていくのである。以上のことから、《連弾による音楽の生成》という概念が生成される。

概念⑭《ピアノを通して周囲への配慮》

ピアノを弾くと周囲に音が響きわたるが、それはいつも心地よい音律とは限らず時には騒音になる場合もある。従って弾きたいという自分の思いを優先させるだけでなく、家庭の中でも＜家族に配慮して弾く＞ことも必要であろう。他者の気持ちや立場、状況を汲んで、＜相手に気を配りピアノを楽しむ＞心遣いが出来ることも、ピアノを弾く際に望まれる姿勢である。以上のことから、《ピアノを通して周囲への配慮》という概念が生成される。

概念⑮《表現力豊かな演奏を志向》

緩急自在に表現力豊かにピアノを奏でることを通し、色々なく動物の形態を表現して楽しむ＞ことなどピアノで様々に浮かぶ心象を表現する面白さを経験する。ピアノを弾くことに魅了され、時を忘れ没頭し自分の思いを表現しようと弾き続けるB男に対して、家族からは＜ピアノが恋人＞と称される。B男はピアノを一旦弾き始めるとピアノからなかなか離れようとしない。B男にとってピアノは、

¹⁰⁹ 一般に1台の鍵盤楽器（おもにピアノ）を2人で奏することを連弾と呼ぶ。4手連弾あるいは単に4手ともいうが、例外的には3手（2人）、6手（3人）等の連弾もある。『音楽大事典5』平凡社、1988年（第8刷）、2797頁。

¹¹⁰ 全体、集合、統一、調和などの意味から、複数名による演奏の意味にも用いる。比較的小規模な重奏や重唱をさすことが多い。『音楽大事典1』平凡社、1987年（第10刷）、67頁。

自分自身の気持ちを表現することができる大切なツールである。B男が＜ピアノが恋人＞と言われるのは、ピアノを弾いている時のB男の幸福感に溢れている姿が家族に認識されている証左である。以上のことから、《表現力豊かな演奏を志向》という概念が生成される。

概念⑯ 《曲をアレンジ¹¹¹して楽しむ》

ピアノは楽譜通りに弾くだけではなく、＜アレンジでオリジナルな演奏＞を楽しむことができる。自分が感じるままにアレンジし、自分流に自由に自己表現を出来るのはピアノの楽しみ方の一つでもある。B男は既存の曲を自身の感性により試行錯誤しながらメロディーや伴奏に手を加え＜複雑なアレンジで楽しむ＞ことを、家庭内で繰り返している。このようなB男の＜魅力的なアレンジが（A子に）認められる＞のである。以上のことから、《曲をアレンジして楽しむ》という概念が生成される。

概念⑰ 《心の赴くままに弾ける満足感》

読譜が出来てピアノを弾きこなす技術も身に付き、自力で＜色々な曲を弾ける楽しさ＞を味わえるようになると、子どもにとってピアノは得意分野となり、それは自信にも繋がっていく。ピアノに向かい自分らしく＜リラックスして心のままに表現＞しピアノを奏でられることは、子どもにとって大きな喜びである。自分が弾きたいと思った時、誰の助けも借りずに＜ピアノを自力で自由に弾く醍醐味＞を味わう楽しみを経験する。この日常の積み重ねの経験は、子どもが自己の可能性の実現に向かって主体的に自己表現して行くエネルギーとなると考えられる。以上のことから、《心の赴くままに弾ける満足感》という概念が生成される。

¹¹¹ 編曲のこと。（１）ある音楽の使用楽器を変更すること。（２）主としてジャズ音楽において楽器を定めない原曲を合奏の形に直すこと。ジャズ音楽では非常に重要な仕事となっている。（３）ある楽曲の一部を使用して楽曲を作ること。例えば旋律を取ってこれに伴奏をつける。この事例では、はぼ（３）にあたる。前掲『音楽辞典』、453 頁。

第3節 カテゴリーの生成と「ピアノ遊び」の3つの段階

「ピアノ遊び」の17の概念から更に共通の特性を見出し、カテゴリー化を行った。その結果「ピアノ遊び」の5つのカテゴリーが生成された。生成された各カテゴリーは、【ピアノで遊び、表現する意欲】、【ピアノ技術の競合】、【憧れを抱いて努力する充実感】、【共に歌い弾く楽しさを享受】、【囚われず表現し、思うがまま演奏する喜び】である。また、各カテゴリーが、導入期・展開期・達成期の3つの段階を辿り発展することが見い出された。各カテゴリーと関係づけられる中心となるコアカテゴリーは『あるがままの自分を表現する喜び』であった。＜特性＞、《概念》、【カテゴリー】の相関は以下のとおりである。各カテゴリーのローデータ、バリエーション、特性、概念の一覧表は、資料2、資料3、資料4、資料5、資料6として巻末に添付した。

【カテゴリー】	《概 念》	＜特 性＞
Ⅰ. 【ピアノで遊び、表現する意欲】	①ピアノに興味を持ち鳴らしたい	1. ピアノで遊ぶ姿に惹きつけられ(1-1)
		6. ピアノの遊びに興味を持ち鳴らしたい(2-3)
		7. ピアノへの強い意欲(2-4)
	②一緒にピアノで遊びたいという意欲的行動	9. 一緒に遊びたい強い意欲(2-4)
		2. ピアノで遊ぶのを認められ(1-1)
		3. やる気が(A子の)遊びを誘う(1-2)
		4. 一緒にピアノで遊ぶ楽しさ(1-2)
		8. 一緒にピアノで遊ぶ喜び(2-4)
	③聴いてまねて弾き遊ぶ	5. 見てまねて鳴らす(1-2)
		13. 曲をまねて遊び弾き(4-6)
		12. ピアニストのまね(4-6)
	④自身の気持ちをピアノで表現	10. ピアノを弾いて気持ちを表現(3-5)
		50. 嬉しい気持ちをピアノ曲で表現(17-22)
Ⅱ. 【ピアノ技術の競合】	⑤ピアノ技術向上への願望	11. A子の弾くピアノへの憧れ(3-5)
		15. 技術的応援を求める(5-7)
	⑥ピアノ技術向上への競い合い	18. B男の熱心さがA子の反発を買う(6-8)
		30. ライバル視される(9-13)
		14. 練習を妨害されたことに強く抗議(4-6)
	⑦ピアノ共有への交渉	16. ピアノを占有したい気持ちを表わす(5-7)
		21. 弾きたい思いを強く主張(6-9)
		20. 争いを避ける行動(6-9)
		17. 互いの弾きたい気持ちを受容(5-7)
		43. 互いの思いを理解し共有(14-19)

	⑧ピアノ技術向上の 認め合い	22. 対等にピアノが弾けた手応え (7-10)
		26. ピアノ演奏が (A子に) 好感を持たれる (9-12)
		25. オリジナルな表現が (A子に) 尊重される (8-11)
		42. ピアノ表現が (A子に) 高く評価される (13-18)
		40. 成長が (A子の) 決意に繋がる (12-17)
Ⅲ. 【憧れを抱いて 努力する充実感】	⑨憧れを抱き達成へ の期待感	32. 憧れの曲に挑戦する嬉しさを発言 (11-15)
		34. 憧れの曲を目指す熱意 (11-16)
		46. 納得の演奏を追及 (15-20)
	⑩忍耐強く挑戦する 持続性	29. レベルの高い曲を体力の限界まで弾き続ける情熱 (9-13)
		38. 憧れの曲に対し妥協せず取り組む努力 (12-17)
		52. 憧れの曲に意欲を燃やし忍耐強く弾く持続力 (18-24)
	⑪憧れの曲を夢中で 弾く充実感	33. 憧れの曲に夢中 (11-16)
		35. 集中し弾けた満足感 (11-16)
		48. レベルが上の曲に挑戦する楽しさ (16-21)
		37. 難曲を弾ける喜び (12-17)
		53. 実力より高い曲に取り組む充実感 (18-24)
Ⅳ. 【共に歌い弾く 楽しさを享受】	⑫ピアノに合わせ歌 う一体感	49. 共にハミング (16-21)
		36. ピアノが歌を誘い出す (11-16)
		31. 楽しく踊れる豊かな表現 (10-14)
		24. 曲で楽しい雰囲気 (8-11)
		23. 気持ちをピアノで励ます (8-11)
	⑬連弾による音楽の 生成	45. 心情を合わせ美しい表現 (15-20)
		54. 弾き合う連弾の面白さ (19-25)
		55. 連弾により互いを理解 (19-25)
	⑭ピアノを通して周 囲への配慮	19. 家族に配慮して弾く (6-9)
		51. 相手に気を配りピアノを楽しむ (18-23)
Ⅴ. 【囚われず表現 し、思うがまま演奏 する喜び】	⑮表現力豊かな演奏 を志向	27. 動物の形態を表現して楽しむ (9-12)
		57. ピアノが恋人 (19-25)
	⑯曲をアレンジして 楽しむ	39. アレンジでオリジナルな演奏 (12-17)
		41. 複雑なアレンジで楽しむ (13-18)
		44. 魅力的なアレンジが (A子に) 認められる (15-20)
	⑰心の赴くままに弾 ける満足感	47. 色々な曲を弾ける楽しさ (16-21)
		28. リラックスして心のままに表現 (9-13)
		56. ピアノを自力で自由に弾く醍醐味 (19-25)

以下に、「ピアノ遊び」の5つの【カテゴリー】の定義を示し、《概念》を用いた説明を行い、
主なく特性>、〔バリエーション〕、裏づけとなる主なローデータを示す。

文中の《 》は概念、＜ ＞は特性、〔 〕はバリエーション。（ ）は筆者による加筆。
『 』は「ピアノ遊び」をしている曲名である。

1 カテゴリーⅠ 【ピアノで遊び、表現する意欲】

カテゴリーⅠ	【ピアノで遊び、表現する意欲】
定義	他者がピアノで遊ぶ姿を見た子どもは、その様子に興味を持ち惹きつけられ、一緒に遊びたいと思い、ピアノを聴いてまねて弾き遊ぶことを通して、自身の気持ちをピアノで表現しようとする。
説明	<p>家庭における「ピアノ遊び」では、ピアノを綺麗な音の出る遊具と捉える。導入期において、母親らが子どもとピアノで楽しく遊ぶ姿を示すことを通して、子どもは《ピアノに興味を持ち鳴らしたい》と思い、自分も仲間に入り《一緒にピアノで遊びたいという意欲的行動》を自ら起こそうとする。</p> <p>家庭において、「ピアノ遊び」は弾くことを誰かに指示され強要されるのではなく、家族がピアノで遊ぶ姿を子どもが《聴いてまねて弾き遊ぶ》という自発的な遊び行動として日常生活の中で展開されている。</p> <p>家庭にあって、「ピアノ遊び」として自由に鳴らし意欲を示し繰り返してきた子どもは、《自身の気持ちをピアノで表現》できた嬉しい経験を持つと、もっと弾けるようになりたいとさらに意欲を燃やす。</p>
主な特性とバリエーション	<p>〔ピアノで遊ぶ姿に興味を持ち惹きつけられ〕</p> <p>〔ピアノで遊ぶ楽しそうな姿を見て鳴らそうとする〕</p> <p>〔一緒にピアノで遊びたい強い意欲を示す〕</p> <p>＜見てまねて鳴らす＞</p> <p>〔嬉しさを咄嗟にピアノで表現したくなった〕</p>
主なローデータ	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノの鍵盤を自由に鳴らして遊んでいるのを目で追って見て ・また這ってピアノに戻り、椅子に掴まって立ち上がり、ピアノに両手を伸ばす ・元気に両手を動かし鍵盤を力強く鳴らし

	<ul style="list-style-type: none"> ・リズムに合わせて勢いよく膝の屈伸を繰り返しながら鍵盤を元気に鳴らす ・A子がピアノを鳴らしたのと同じような勢いで、前のめりになってピアノを両手で鳴らす ・嬉しそうにスキップをしてピアノに行くと、立ったまま『エリーゼの為に』の最初のミレミレの部分を元気よく弾き始める ・「気分いいと何か弾きたくなる」
--	---

2 カテゴリーⅡ 【ピアノ技術の競合】

カテゴリーⅡ	【ピアノ技術の競合】
定義	<p>子どもたちが家庭で自発的にピアノを弾き合う中で、ピアノ技術向上への願望を示し、ピアノ技術向上への競い合いも活発となり、その中でピアノを順番に弾く等の共有への交渉が行われ、やがて互いがピアノ技術向上を認め合えるようになるということ。</p>
説明	<p>「ピアノ遊び」はピアノを弾いて楽しむ遊びであり、自発的な行動である。「ピアノ遊び」が子どもたちの間で活発になってくると、ピアノ技術の高い子が模範的存在となり、年下の子どもは自分も上手になりたいという《ピアノ技術向上への願望》を抱くようになる。その思いは意欲的な取り組みに繋がり、ピアノを弾き合う相手はライバルとなり、《ピアノ技術向上への競い合い》が活発さを増していく。</p> <p>ピアノを所有していても、多くの家庭では一台だけであることが多く、弾きたい人物が複数いる場合にピアノの取り合いが生じる。しかし「ピアノ遊び」を気持ちよく楽しむには、奪い合うのではなく譲り合う等、相手の立場に立って行動する必要がある。子どもの知恵と寛容さにより《ピアノ共有への交渉》がなされるのである。</p> <p>家庭内で「ピアノ遊び」が活発に展開し繰り返しピアノを弾き合うことを通して、互いの演奏の技術も向上してくる。ピアノの先輩格の年長者と後輩の年少者の間では、互いの演奏に対して《ピアノ技術向上の認め合い》など相手を褒める姿が見られ</p>

	<p>るようになるのである。</p>
<p>主な特性と バリエーション</p>	<p>〔A子の演奏を綺麗だと思っている〕</p> <p>〔うまく弾けない曲の応援を求める〕</p> <p>〔熱心な取り組みが、A子の反発を買った〕</p> <p><ライバル視される></p> <p><練習を妨害されたことに強く抗議></p> <p>〔ピアノを邪魔され取っ組み合いで抗議〕</p> <p>〔B男はピアノを弾く権利を強い口調で主張し、練習を始める〕</p> <p>〔ピアノの取り合いを避けA子の出方を見る〕</p> <p><互いの弾きたい気持ちを受容></p> <p>〔弾きたい気持ちを汲んで要求に快く応じる〕</p> <p><対等にピアノが弾けた手応え></p> <p>〔演奏の仕方をオリジナルに工夫し表現〕</p> <p>〔ピアノ表現が最大の評価で認められる〕</p> <p>〔B男の熱意と努力が、A子の決意に繋がる〕</p>
<p>主なローデータ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「Aちゃんはどうでしょうか。綺麗な音楽をしていますね」 ・A子に教えて欲しそうに「分かんない」と笑顔で言う ・B男はA子とにらみ合い、肩をいからすような格好をして立ち上がりA子につかみかかり、取っ組み合いが始まる ・B男はA子に押さえ込まれてしまい、A子が常に優勢 ・「ねえ～、止めて、何で止めないの～」と大きな声で ・拒絶せずA子の弾くのに任せ、自分は黙って繰り返し弾き続け ・B男がゆっくり弾くとA子もゆっくり弾き、B男が時々止まりそうになると、A子はB男を待ちながらゆっくり弾いて、B男が追いつくとテンポを合わせて弾いて ・A子もスピードを上げ互いに速いスピードでピッタリと弾き合う ・「パパみたい」 ・「Bに先を越されててしまう。でも大丈夫だよ・・・」

	<ul style="list-style-type: none"> ・「それ難しいよ、頑張って！応援してるから」 ・「Bに抜かされたかも、まあいいや」 ・「・・・っていうかさ、(楽譜を) 見てるだけでやってるから、ちょっと凄いかも・・・」 ・「Aも抜かされないように頑張る」 ・「Bちゃんはそういうのが好きだから」
--	---

3 カテゴリーⅢ 【憧れを抱いて努力する充実感】

カテゴリーⅢ	【憧れを抱いて努力する充実感】
定義	<p>ピアノへの憧れを抱き、憧れの曲を弾けるようになるという目標達成への期待感を抱いて、たとえ難しくても忍耐強く挑戦する持続性に支えられながら、憧れの曲を夢中で弾く充実感を感じる。</p>
説明	<p>家庭にあって「ピアノ遊び」を楽しむ中で、年長者が奏でる曲に憧れて成長し育った子どもは、頑張れば自分も弾けるという《憧れを目指し達成への期待感》に胸を膨らませる。</p> <p>憧れの曲は難度の高い曲が多いが、ピアノレッスンで与えられた曲ではなく、子ども自身が弾きたいと思う「ピアノ遊び」の曲である。たとえ難しくても《忍耐強く挑戦する持続性》を発揮して弾こうとするのである。</p> <p>子どもの自発性により「ピアノ遊び」が繰り返され積み上げられていくプロセスを通して、子どもは次第にピアノ技術を身につけていき、やがて自分の《憧れの曲を夢中で弾く充実感》を味わうことが可能となる。子どもの自発性を保障する「ピアノ遊び」だからこそ、弾くこと自体が嬉しく主体的な表現活動として繰り返され積み上げられていく。</p>
主な特性とバリエーション	<p><憧れの曲に挑戦する嬉しさを発言></p> <p>〔真剣に繰り返し弾き、憧れの曲が弾けた〕</p> <p>〔丁寧に納得する演奏を目指す努力〕</p>

	<p>〔自分の力で読譜しピアノを弾こうと取り組む〕</p> <p>〔弾く楽しさで、体力の限界まで挑戦する気持ち良さ〕</p> <p>〔体力の限界を超えても、ピアノを弾き続ける情熱に溢れた姿〕</p> <p>〔月日をかけて自力で弾いてきた〕</p> <p>〔憧れの曲が弾けることが嬉しくて夢中〕</p> <p>〔憧れの曲を弾くことで自分の可能性を探っている〕</p> <p>〔難しさ自体を面白がり、自分の可能性に挑戦する楽しさ〕</p>
主なローデータ	<ul style="list-style-type: none"> ・「昨日もう、ちょっと（月の光）弾けるようになった」 ・メロディー部分の右手を弾こうとするが難しくて、これも中々上手く弾けない ・アドバイスを受けた箇所を丁寧に情感を込めるように表情をつけて弾く ・「疲れた～」と言うのだが、今度は楽譜を見ながらゆっくりと音を確認するように丁寧に弾き始める ・椅子の背によりかかり、首を後ろにそらし「あ～～～あっ、う～～～疲れた」 ・ピアノを止める気配はなく、ニコニコして家族を見ながら暗譜で弾ける得意な曲を弾いて ・『幻想即興曲』の楽譜を開いてしばらく考えてから何回も弾いていたが、やがて両手が正確に合い始め ・進度よりずっと先の『バラード』やレベルの高い『月の光』を暗譜で途中部分まで ・父が好んで弾いているモーツァルトの『ソナタ（K. 331）』を弾き始める ・手を止めて楽譜を読み取ろうと集中して考えてから、また弾き始め ・帰宅すると真っ先にピアノを弾き始める ・『バリエーションⅣ』に進むと「あ、ここから分かんない、全然また」と言いながら階名を読み上げ ・「あ、そういうことか！」と一瞬分かったかのような発言 ・「あ～！う～！もう無理。死んじゃう」と呟く ・「ずっと弾いてた～～」と笑顔で

4 カテゴリー IV【共に歌い弾く楽しさを享受】

カテゴリーIV	【共に歌い弾く楽しさを享受】
定義	<p>家庭にピアノの音律が流れると、それに合わせて家族のハミングや踊りが生まれ、また連弾により音楽の生成もなされる。またピアノを楽しみながら周囲への配慮もしつつ、家族が一体となって歌い弾く楽しさを享受すること。</p>
説明	<p>「ピアノ遊び」が家庭の中で定着してくると、家族がピアノに合わせてハミングして歌ったり踊ったり、心を通わせ楽しく《ピアノに合わせて歌う一体感》が日常的に自然に生まれてくる。</p> <p>一緒にピアノを弾いて遊ぶ連弾は「ピアノ遊び」の楽しみ方の一つである。ピアノ技術に差があっても技術の高い方がリードすることで、憧れの曲を弾くことも出来る。連弾では、一緒に楽しみたいという良好な関係が要求され、相手との関係性が悪いと楽しい連弾は成立し難い。しかし、《連弾による音楽の生成》は、互いの心と身体が一曲の音楽を通して融合して実現するものである。ピアノを共に弾くことにより、良き関係性を築いていくとも言える。</p> <p>音楽は音を楽しむ、音による芸術である。しかし音が鳴り続けると弊害もある。ピアノを弾く際に、《ピアノを通して周囲への配慮》が出来る心が育つことが子どもに要求されるのも、音の出る楽器で遊ぶ「ピアノ遊び」の特徴である。</p>
主な特性と バリエーション	<p>〔嬉しさで何回もハミングし、共に楽しむ〕</p> <p>〔楽しく踊れるように弾く緩急自在なピアノ表現〕</p> <p>〔楽しい雰囲気曲は、A子のおどけた表現を引き出す〕</p> <p>〔気まずさをピアノで受容し励ます〕</p> <p>〔二人が心情を合わせ美しい連弾を弾こうとする〕</p> <p><弾き合う連弾の面白さ></p> <p>〔互いにピアノを弾くのを楽しみ理解し合う〕</p> <p>〔寝ている兄弟に配慮して暗いまま音量を下げピアノを弾く〕</p> <p>〔家族を気遣いながら、ピアノを楽しむ〕</p>

主なローデータ	<ul style="list-style-type: none"> ・何回も『ソナタ』をハミングする ・傍に来て、メロディーを気持ち良さそうに歌う ・踊りたくなるように『タランティラ』を激しいスピードで弾く ・すぐA子の歌に合わせて弾き始める ・同じ椅子に座り一緒に『風の谷のナウシカ』の連弾を始め ・二人は優しい音で表情豊かにピアノを弾いて ・ピアノを中断せずに弾きながら楽譜の方に顎を突き出し、弾いている箇所を示す ・A子をリードしながら弾いて ・曲を止めることなく、二人は呼吸を合わせて弾こうとする ・「A、その曲好き」とまたいそいそとピアノに走って行き、一緒に弾き ・A子とD男がまだ布団に横になっているので、暗い中でピアノの音量を下げ ・ピアノを弾くのをピタッと止めて
---------	--

5 カテゴリー V 【囚われず表現し、思うがまま演奏する喜び】

カテゴリーV	【囚われず表現し、思うがまま演奏する喜び】
定義	表現力豊かな演奏を志向し、曲をアレンジしてオリジナルな表現を楽しむなど、心の赴くままにピアノを弾ける満足感を味わい自由に自己表現する喜びのこと。
説明	<p>他者からの指示ではなく、自らの自発的行為である「ピアノ遊び」を繰り返し実践し、生活の中に根付かせてきた子どもは、《表現力豊かな演奏を志向》するなかで、ピアノを弾くことを通して自身が感じる様々な思いを表現することで自分も楽しみ、家族の人をも楽しませることが出来るようになる。</p> <p>「ピアノ遊び」は、曲の選択や表現が子どもの自発的な自由意志に任されている。自分の好きな曲を自由に演奏する楽しさだけでなく、試行錯誤しながら自分流に《曲をアレンジして楽しむ》ことも出来る。これは他者に管理されない「ピアノ遊び」だからこそ可能になってくる。</p>

	<p>家庭生活の中で子どもの自由意志で繰り返される「ピアノ遊び」は、子どもがピアノを弾いて遊びたい、憧れの曲を弾きたいという思いに支えられ、やがて自力で楽譜を読み弾くという自律した行動となり、《心の赴くままに弾ける満足感》を味わうのである。</p>
<p>主な特性と バリエーション</p>	<p>〔動物の形態をピアノ曲で表現して家族と共に楽しむ〕</p> <p>＜ピアノが恋人＞</p> <p>〔ピアノは大切な存在と認識される〕</p> <p>〔曲を自由にアレンジしオリジナルな表現を楽しむ〕</p> <p>〔得意な曲を自由に弾いて楽しむ〕</p> <p>〔リラックスして心のままに表現して弾く〕</p> <p>〔様々なジャンルの曲を自由自在に弾いて楽しむ〕</p>
<p>主なローデータ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・『エンターティナー』を軽快にスピードを上げて弾く ・ニコニコして母を見ながら付点を効かせて「象の欠伸」の雰囲気を出してゆっくり『エンターティナー』を弾き ・笑いながら嬉しそうに『エンターティナー』を、ネズミが逃げるような猛スピードで弾いて見せ ・「B君はピアノが恋人だ」 ・「一回モードに入るとそのままずーっと弾く」 ・『エンターティナー』のリズムやテンポを変えてアレンジし、色々なパターンを試すようにして弾いている ・『楽しき農夫』は伴奏部分に分散和音を使い複雑な演奏にアレンジ ・『風の谷のナウシカ』を暗譜で楽譜通りに弾いた後、色々な弾き方を試みアレンジを加え ・アレンジした連弾を聴いていたA子は「つまんないから、アレンジしているんだ。カッコいい方がいいよね」 ・合格した中でお気に入りの曲を思い出すままに次々と20分ほど弾いて ・今まで合格した曲をレパートリーを弾くように次々暗譜で弾き

	・コンサートのように全部暗譜で次から次へと、流れるように軽快なピアノ演奏が続いている
--	--

6 「ピアノ遊び」の3つの段階

「ピアノ遊び」を特徴づける5つのカテゴリーの生成と共に、家庭にあつて幼児期から児童期にわたる子どもの「ピアノ遊び」には、導入期、展開期、達成期の3つの段階があることが見い出された。

「ピアノ遊び」の導入期は、子ども自身が「ピアノ遊び」を自ら導入したことで開始される。子どもは家庭生活の中で、《ピアノに興味を持ち》、《一緒に遊びたいと意欲的行動》に出て、ピアノを《聴いてまねて遊ぶ》うちに、《気持ちをピアノで表現》しようとする。このように【ピアノで遊び、表現する意欲】を十分に家庭の中で繰り返し発揮した経験が積み上げられてくると、「ピアノ遊び」の特質は渾沌とした未分化の状況から、次の各特質が特徴を持った活動として分化していく展開期へと発展していく。

「ピアノ遊び」の展開期は、導入期で《ピアノに興味を持ち鳴らしたい》という特質が、子どもが強い意志を持って【ピアノ技術の競合】という意欲的行動へと発展する。《聴いてまねて弾き遊ぶ》行動は、主体的にピアノで表現しようとする【憧れを抱いて努力する充実感】へと発展する。《一緒にピアノで遊びたいという意欲的行動》は、その自発的な「ピアノ遊び」の営みの中で、家族と【共に歌い弾く楽しさを享受】する行動へと発展する。

その結果、達成期となると、導入期の段階で、《自身の気持ちをピアノで表現》したいとピアノを鳴らしていた子どもは、ピアノ技術を身につけて、【囚われず表現し、思うがまま演奏する喜び】を感得できるようになる。「ピアノ遊び」を通した主体的な表現形成のプロセスはこの3つの段階を辿り、「ピアノ遊び」の全カテゴリーは統合される。家庭における「ピアノ遊び」を繰り返してきた子どもは、各特質が統合された達成期に到達したとき、「ピアノ遊び」を通した主体的な表現形成を生み出す各カテゴリーの活動が、子どもの生活にしっかりと根付いたといえるのである。

第4節 カテゴリープロセス図とストーリーライン

幼児期から児童期にわたる「ピアノ遊び」の特質のカテゴリーと概念の関連を示すプロセス図を提示し、ストーリーラインを作成した。

1 「ピアノ遊び」を通した主体的表現形成のプロセス図

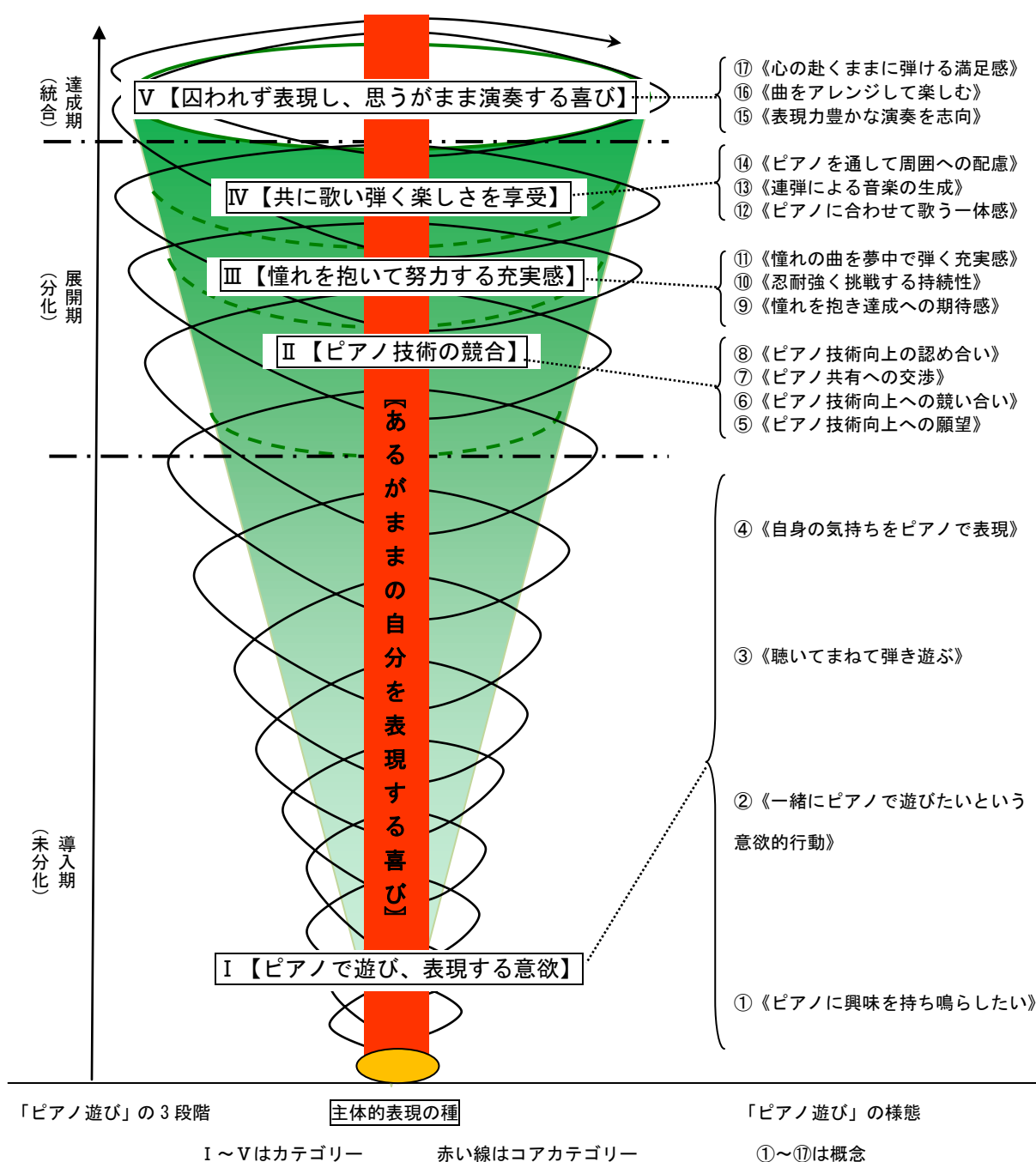


図9 「ピアノ遊び」を通した主体的表現形成のカテゴリープロセス図

「ピアノ遊び」を通した主体的表現形成のプロセス図の説明

図9は、家庭において幼児期から児童期にわたる子どもの「ピアノ遊び」を通した主体的表現形成のプロセスを示したものである。以下説明を加えていく。

幼児期から児童期にわたり主体的表現活動を形成する「ピアノ遊び」の17の概念から、5つのカテゴリーが生成された。Ⅰ【ピアノで遊び、表現する意欲】、Ⅱ【ピアノ技術の競合】、Ⅲ【憧れを抱いて努力する充実感】、Ⅳ【共に歌い弾く楽しさを享受】、Ⅴ【囚われず表現し、思うがまま演奏する喜び】である。これらのカテゴリーは、幼児期から児童期にわたる子どもの成長に沿って、「ピアノ遊び」の導入期・展開期・達成期の3つの段階を経過しながら生成されていく。

家庭における子どもの「ピアノ遊び」は、導入期の特徴がまだ未分化な段階においては、【ピアノで遊び、表現する意欲】が各表現活動を通して渾然として表れてくる。その経験が十分に繰り返され蓄積されると、それは次の段階へと進むエネルギーとなる。子どもは自らの意思により目標に向かい、自信を持って展開期へ進んでいこうとするのである。

展開期の段階では、【ピアノ技術の競合】、【憧れを抱いて努力する充実感】、【共に歌い弾く楽しさを享受】という「ピアノ遊び」の分化された各特質が次第に表れてくる。その特質は、子どもの主体的表現活動を促進しながら輻輳的に絡み合い進展していく。その中で子どもは他者との関係性も築きながら自身の掲げた目標を目指し、期待感と充実感を持って、躍動的に達成期へ向かっていく。

「ピアノ遊び」の達成期において、子どもは【囚われず表現し、思うがまま演奏する喜び】を体験することにより子どもの主体的な表現は生成され、この時点で「ピアノ遊び」の特質は統合される。

このように幼児期から児童期にわたる子どもの「ピアノ遊び」は、導入期・展開期・達成期の各段階をゆったりと螺旋を描きながら繰り返し、「ピアノ遊び」を通した子どもの主体的表現を形成していくのである。さらに、子どもの「ピアノ遊び」を通した主体的表現活動の形成の全過程にかかわる中核として『あるがままの自分を表現する喜び』が、コアカテゴリーとして浮上した。

以上のプロセス図の説明は、ストーリーラインの中でさらに詳述する。

2 ストーリーライン

ストーリーラインは、最初に「ピアノ遊び」の5つの【カテゴリー】を示し、具体的な《概念》、<特性>を用いてその特質を説明したのち、各カテゴリーを結びつけ中核となるコアカテゴリー『あるがままの自分を表現する喜び』が浮上したことを説明する

文中の【 】はカテゴリー、《 》は概念、< >は特性、〔 〕はバリエーション。

(1) 【ピアノで遊び、表現する意欲】

「ピアノ遊び」が開始される導入期において、家庭で親や兄弟姉妹の<ピアノで遊ぶ姿に惹きつけられ>た子どもは、<ピアノへの強い意欲>を持ち、《ピアノに興味を持ち鳴らしたい》との思いから、《一緒にピアノで遊びたいという意欲的行動》に出ることによって、<一緒にピアノで遊ぶ喜び>を味わう。子どもは自発的に<見てまねて鳴らす>などの行為を通して、ピアノの音律を《聴いてまねて弾き遊ぶ》という主体的表現活動を繰り返す。<嬉しい気持ちをピアノ曲で表現>するなど、《自身の気持ちをピアノで表現》する喜びの体験をする。このような子どもの【ピアノで遊び、表現する意欲】は、さらに積極的なピアノ行動へと展開していく。導入期では「ピアノ遊び」による主体的表現の特質が、未分化な状態で渾然一体としている。この時期の「ピアノ遊び」の楽しい経験が、子どもが主体となって十分に繰り返され積み上げられることにより子どもの主体的表現活動は「ピアノ遊び」の展開期へと進んでいくことができる。

(2) 【ピアノ技術の競合】

「ピアノ遊び」の展開期では、子どもは<他者の弾くピアノへの憧れ>を持つ。このことは《ピアノ技術向上への願望》を意識させる。子どものピアノに対する<熱心さが他者の反発を買う>など、他者から<ライバル視され>、《ピアノ技術向上への競い合い》が起きて来る。子どもは家庭内でピアノを弾きたい一心から、<ピアノを占有したい>と思うようになり、<弾きたい思いを強く主張>するようにもなる。しかし1台のピアノを奪い合うのではなく、<争いを避け><互いの弾きたい気持ちを受容>するという感情の中で、《ピアノ共有への交渉》を始めることにより、ついに譲り合うことが出来るようにもなってくる。家庭でピアノを弾き聴き合う中で、子どもは技術が上の他者との

間に＜対等にピアノが弾けた手応え＞を感じたり、自分の＜ピアノ演奏が他者に好感をもたれたり＞、＜尊重されたり＞することを認識する。これらのことを通して、《ピアノ技術向上の認め合い》という関係が築かれてくるのである。このように「ピアノ遊び」の展開期には、周囲のピアノを弾く他者との【ピアノ技術の競合】関係が芽ばえ、活発な表現活動が展開してくる。

（３）【憧れを抱いて努力する充実感】

「ピアノ遊び」の展開期にあつて、「ピアノ遊び」が繰り返され、演奏技術が徐々に身についてくると、子どもは＜憧れの曲を目指す熱意＞を表すようになる。家族に対して、自分から＜憧れの曲に挑戦する嬉しさを発言＞し、ピアノへの意欲的な姿勢を示すなど、《憧れを抱き達成への期待感》を持つようになる。憧れの曲は難度が高い場合が多いが、子どもは＜レベルの高い曲を体力の限界まで弾き続ける情熱＞を持って、＜憧れの曲に対し妥協せず取り組む努力＞を惜しもうとしない。子どもは何とかして弾きこなそうと＜意欲を燃やし忍耐強く弾く持続力＞を示すなど、《忍耐強く挑戦する持続性》を発揮するのである。また、子どもは＜憧れの曲に夢中＞になり、＜集中し弾けた満足感＞を感じる。＜レベルが上の曲に挑戦する楽しさ＞、＜難曲を弾ける喜び＞を通して、子どもは、《憧れの曲を夢中で弾く充実感》を獲得するのである。子どもは、誰から指示されたのでもなく、自分の意思でピアノを弾き、取り組んでいること自体に喜びを感じながら、【憧れを抱いて努力する充実感】を味わう楽しい経験をするのである。

（４）【共に歌い弾く楽しさを享受】

子どものピアノ技術が向上してくると、子どものピアノ演奏に対して家族が＜共にハミング＞をしたり、子どもの弾く＜ピアノが歌を誘い出す＞和やかな様子が見られる。また、＜楽しく踊れる豊かな表現＞でピアノを弾いたり、演奏を通して＜曲で楽しい雰囲気＞を醸し出すなど、子どもが家族の＜気持ちをピアノで励ます＞という行動も見られる。子どもが弾くことで家族が自然に《ピアノに合わせ歌う一体感》が家庭内に生まれてくるのである。ピアノが弾ける他者が存在する場合は、子どもは共に＜心情を合わせ美しい表現＞を目指し、＜弾き合う連弾の面白さ＞を経験する。ピアノを通して＜互いを理解＞することを学び、《連弾による音楽の生成》が出来てくる。また、「ピアノ遊び」は音が発生する遊びのために、日常生活においても＜家族に配慮して弾く＞ことが要求され、＜相手

に気を配りピアノを楽しむ>ことが自然に身についていく。子どもが《ピアノを通して周囲への配慮》が出来ようになるのも、「ピアノ遊び」に興じる家庭の特徴と言える。子どもは自分だけでピアノを楽しむのではなく、家族と【共に歌い弾く楽しさを享受】するのである。

これら展開期の段階では、「ピアノ遊び」の特質が、【ピアノ技術の競合】、【憧れを抱いて努力する充実感】、【共に歌い弾く楽しさを享受】にと分化した特徴を示しながら、やがて各特質が互いに影響し合いながら主体的表現活動を充実させ、子どもの主体的表現活動は「ピアノ遊び」の達成期へと発展していく。

(5) 【囚われず表現し、思うがまま演奏する喜び】

「ピアノ遊び」の達成期になると、子どもは自分の思うことや感じたことをピアノで弾いてみて様々な表現を試みる。＜動物の形態を表現して楽しむ>ことや、まるで＜ピアノが恋人>でもあるかのようになりピアノに寄り添い弾き続け《表現力豊かな演奏を志向》するのである。また、＜アレンジでオリジナルな演奏>をして、＜魅力的なアレンジが認められる>など、自分が思うように《曲をアレンジして楽しむ》こともできるようになる。＜色々な曲を弾ける楽しさ>、＜リラックスして心のままに表現>する、＜ピアノを自力で自由に弾く醍醐味>により、子どもは《心の赴くままに弾ける満足感》を味わうことが出来るのである。自らが日常生活の中で自発的に積み上げてきた「ピアノ遊び」により、【囚われず表現し、思うがまま演奏する喜び】を体験することが可能になり、この達成期に至り、「ピアノ遊び」の全ての特質が統合されることになる。

(6) コアカテゴリー 【あるがままの自分を表現する喜び】

コアカテゴリーは、カテゴリーの中核となるカテゴリーである。幼児期から児童期にわたる「ピアノ遊び」の3つの段階を通して、主体的表現形成のコアカテゴリーが浮上することを記述する。

本研究では、「ピアノ遊び」とは、「遊び」の性格を備えたピアノによる表現活動の一つであり、ピアノを自発的に弾き鳴らし遊ぶことを通して自分自身を表現する自由な活動と定義している。つまり、ピアノは、自分自身を表現するための手段であり、遊具であり、ツールと捉えている。その観点から見た時、重要なものは何かということになる。つまり表現する道具が重要なのではなく、その道具を使って表現しようとする本体が重要なことは言うまでもない。「ピアノ遊び」の3つの段階は、

その道具が使いこなせる技術的レベルともいえる。コアカテゴリー『あるがままの自分を表現する喜び』は、「ピアノ遊び」で表現しようとする子どもの思いそのものである。また、5つのカテゴリーは、「ピアノ遊び」の具体的な内容を示した表現活動である。子どもの『あるがままの自分を表現する喜び』が、各カテゴリーの中核にあり密接に関係し合っこそ、導入期から展開期、達成期へと子どもの主体的な表現活動は進展していく。『あるがままの自分を表現する喜び』を感じ続けながら、【ピアノで遊び、表現する意欲】に溢れているが未分化な導入期から、【ピアノ技術の競合】、【憧れを抱いて努力する充実感】、【共に歌い弾く楽しさを享受】へと分化する展開期を経て、【囚われず表現し、思うがまま演奏する喜び】の達成期まで発展して行くのは大変なことである。達成期に到達すると「ピアノ遊び」は統合されるが、それまで『あるがままの自分を表現する喜び』が各カテゴリーの中核であり続けることが主体的表現を実現することにつながる。「ピアノ遊び」が強制ではなく、「ピアノ遊び」本来の活動であるとき、『あるがままの自分を表現する喜び』が、カテゴリーの中核として発揮され続け、子どもは「ピアノ遊び」の達成期まで到達することが出来る。そのとき「ピアノ遊び」を通した主体的表現活動が、子どもの心身にしっかりと根付いたのであり、ピアノは子どもにとって、自分を表現できる最高のツールになったといえる。

第5節 理論仮説の生成

以下に、本研究における目的、カテゴリー生成による理論仮説、理論仮説の定義及び説明を示す。

研究目的	「ピアノ遊び」を通した子どもの主体的な表現形成要因の研究 —14年間の追跡データの分析を通して—
理論仮説	「ピアノ遊び」を通した『あるがままの自分を表現する喜び』は、子どもの主体的な表現形成の主要因。
定義	家庭において「ピアノ遊び」を通して『あるがままの自分を表現する喜び』の経験を幼児期から児童期にわたり積み重ねた子どもは、意欲を持って他者との競合関係を経験しながら、憧れを抱いて努力する充実感に溢れていく。子どもは「ピアノ遊び」を通して家族との一体感も感じ、主体的な自己表現を達成していく。「ピアノ遊び」を通しての『あるがままの自分を表現する喜び』の経験は、子どもの主体的な表現形成の主要因となる。
説明	<p>「ピアノ遊び」は、自由で自発的かつ喜びと楽しみを伴う活動であり、参加を強要されないもの、さらに自分の意思で行われるものである。家庭における子どものこのような「ピアノ遊び」は、『あるがままの自分を表現する喜び』の体験を、日常生活の中で常に積み上げていくことが出来る活動である。</p> <p>幼児期から児童期にわたる子どもは、『あるがままの自分を表現する喜び』を「ピアノ遊び」に興じる中で瞬間瞬間感じながら、特質が未分化な導入期、分化していく展開期、統合する達成期へと3つの段階を経過しながら主体的な表現形成のプロセスを辿る。</p> <p>『あるがままの自分を表現する喜び』は、「ピアノ遊び」を通した主体的表現形成の特質である【ピアノで遊び、表現する意欲】、【ピアノ技術の競合】、【憧れを抱いて努力する充実感】、【共に歌い弾く楽しさを享受】、【囚われず表現し、思うがまま演奏する喜び】という具体的行動の5つのカテゴリーの中核にある。「ピアノ遊び」を通して『あるがままの自分を表現する喜び』は、5つのカテゴリーとのかかわり合いながら、主体的な表現形成の主要因となっている。</p>

第6節 理論仮説の妥当性の検証—ピアノ指導者とのカンファレンス

1 ピアノ指導者とのカンファレンス実施状況

「ピアノ遊び」の理論仮説及びカテゴリーについて、5人に対してカンファレンスを行った。協議に入る前に、本研究の目的、プロセス図、ストーリーライン、理論仮説について説明を行い理論仮説の妥当性について協議した。

表4 カンファレンス実施状況

仮名	実施年月日	時間	場所	属性
Fさん	2016年1月20日	13:30~14:30	対象者宅	ピアノ指導者・ピアニスト・60代 (ドイツ留学経験)
Gさん	2016年1月22日	14:30~15:30	対象者宅	ピアノ指導者・ピアニスト・60代 (フランス留学経験)
Hさん	2016年8月24日	11:30~12:30	筆者宅	ピアノ指導者・ピアニスト・保護者・50代 (ドイツ留学経験)
Iさん	2016年8月25日	14:30~16:30	筆者宅	音楽指導者・声楽家・心理カウンセラー・ 保護者・50代 (ドイツ留学経験)
Jさん	2016年8月30日	17:00~19:00	対象者宅	ピアノ指導者・ピアニスト・60代 (国内外演奏会多数)

2 カンファレンス結果

ピアノ指導者、音楽指導者とのカンファレンスにおいて、理論仮説全体に対してフィット感、カテゴリーⅠ【ピアノで遊び、表現する意欲】、カテゴリーⅡ【ピアノ技術の競合】、カテゴリーⅢ【憧れを抱いて努力する充実感】、カテゴリーⅣ【共に歌い弾く楽しさを享受】、カテゴリーⅤ【囚われず表現し、思うがまま演奏する喜び】、コアカテゴリー【あるがままの自分を表現する喜び】について協議した。その結果をGTAの専門家であるスーパーバイザーと協議をし修正を加えた。

(1) カテゴリーⅠ【ピアノで遊び、表現する意欲】

説明文において、カンファレンス発言者の引用は〔 〕で囲み斜体で示す。発言のローデータは□内に示し、発言者はアルファベットの仮名を文末に示す。筆者の補足説明は()で挿入する。

「ピアノ遊び」の導入期の説明に対して、ピアノ指導者は〔私が小さい時こんな感じでしたね〕と語り、別の指導者も〔自分のことがまさにそうですよね〕と自分のピアノとの出会いを語った。幼稚園で友達がピアノを弾くのを見て、〔いいなあと思って〕、〔まねして家に帰って机の上を叩いて〕〔次の日の朝（幼稚園に）早く行ってピアノを弾く〕という毎日であり、〔自分も弾けるようになりたい〕と思っていた。机の上で毎日弾いていたので母親が〔見かねて母のお小遣いで中古〕のピアノを購入してくれた。後年、当時のピアノの先生が、〔〇ちゃんもママもね、えらくおっとりしててね、周りがキリキリしてたのに一つも気づかなかった〕とその頃を振り返って語ったとおり、家庭ではピアノの練習を強いられることはなく〔要するに伸び伸びしてたから、小さい時から、何の制約もなく〕自由にピアノを弾いて遊んで過ごすことができ、導入期にピアノへ興味を持ち意欲的に遊んでいたことが身をもって合意された。

自身は指導者の立場でもあるが、子どもがドイツ人指導者にピアノを習っていたとき〔絶対に何があっても怒らないでください。見ていてください〕と言われ、〔この時期に強制的はよくない〕ことを母として改めて認識させられたと語る。わが子に対してそれまでピアノを〔ギュッとやっていたのだが、ギチギチとレッスン、レッスン〕とその時から言うことを止めたので、子どもはピアノの〔先生のお宅には遊びに行ってたし、家でも遊んでいるし、そういう環境でやってきているので、（ピアノが）続いていますね〕、〔そこ（導入期）を自由に通ってきた子は長続きしている〕と語り合意された。

別の指導者は、まだ自分が幼い頃、母親が掃除の手を止めてピアノを弾いた時〔とても嬉しそうな顔をしてて、私が見たことのない表情でしたね。自分の世界なんでしょうね。自分の世界に浸ってるんですよ。初めて見た顔でしたね〕、〔私は弾いてない時です。そんなに楽しいの？って思いましたよね。母親が、だって見たこと無い表情ですものね〕。弟が母の傍に行こうとしたので〔邪魔しちゃだめよ〕と自分が遊んであげた。母親がピアノを弾いている空間を〔壊しちゃいけないという感覚〕が幼くてもあり、〔そのくらいあの人（ピアノが）好きだったんだ〕と幼い時の鮮明な記憶と共に、

母の姿からピアノへの魅力や興味を感じたと語り合意された。更に、留学した時に師事したピアニストの幼少時代、[とにかくピアノから離れないで遊んでいる] 姿から、子どもとピアノとのかかわりが[始まっていくんですよ。私こういうスタートが幸せなんじゃないかなって思いますよ] とピアノで遊ぶことでスタートすることの大切さが合意された。

特に[表現は、自分の中で何かが起こったことを出すということでしょ。感じたことを出す] という[ここ(概念④¹¹²)が待てないんですよ]。周りの大人が、[皆ね。無理なんですよ。だから、これは本当に大変なことだと思う]。[子どもの場合一番気をつけなければいけないのは、楽しんでいるっていうのが、楽しんでも親に言われてる場合があるんですよ]。[あんなに上手いのに、お母さんの目を見て、お母さんに気にいられたくてやってる]、[遊んでる風なんだけど、それも管理されているみたいな時があるのよ]、と最近の子どもの傾向と大人との関係性が語られた。[子どもに教えてもらうくらいの気分で自由にさせたほうがいいですよ。大人の感性で物を言うと言つて潰すと思いますね]、と遊びから生まれる自由な子どもの発想を尊重する姿勢が周りの大人に求められることが指摘された。子どもが【ピアノで遊び、表現する意欲】が表れる導入期が、その後「ピアノ遊び」が継続し発展していくかの分岐点であることが確認され重要性が合意された。また、子どもが[ピアノに興味を持ちピアノを弾き始めた時点]で「ピアノ遊び」が始まり、それを導入期とするという子ども主体の「ピアノ遊び」の導入期の捉え方が協議され合意された。

- ・私が小さい時こんな感じでしたね。(F)
- ・まさにその通りだと思います。合意できます。(H)
- ・皆が弾いてのを見て、うらやましかったんですよ。自分も弾けるようになりたいなと思って、そして机の上を叩いていた訳だから。楽器ないんだから。(J)
- ・自分のことがまさにそうですね。幼稚園で皆が弾いてて、いいなあと思って、まねして家に帰って机の上で弾いて、次の日の朝(幼稚園に)早く行ってピアノを弾くということをやったので、最初はまさにそれですよ。(J)
- ・母がだから、私があまりにもやりたかったから、机の上で、毎日弾いていたので、それを見かねてね、それでやりたいって言った。(J)

¹¹² カテゴリー I の概念④《自身の気持をピアノで表現》

- ・そうしたら母のお小遣いで、その当時ディアパーソンの 10 万円って言ってたけど、私の記憶ではね、中古で買ってくれて。(J)
- ・母は自分はオルガンしかなかったから、その思いがあったのね、自分がやりたくてもやれない、戦時中やれなかったから、やらせてあげたいという母親の気持ちがあった。(J)
- ・うちの母ものんびりした人だったから、ピアノの先生がおっしゃるには、〇ちゃんもママもね、えらくおっとりしててね、周りがキリキリしてたのに、一つも気づかなかったって言われたの。だから全然気づいてないんですよね。(J)
- ・要するに伸び伸びしてたから小さい時から何の制約もなくそこまで来てるんだから、大学に入って。(J)
- ・(ドイツ人の先生から)「絶対に何があっても怒らないでください。見ていてください。」と言われ。(H)
- ・この時期に強制的はよくない。うちの娘を見ても、そこを自由に通ってきた子は長続きしている。(H)
- ・上の子には、ギュッとやっていたのだが、(下の子には)ギチギチとレッスン、レッスンと言わなかった、ギチギチやらなかった。(H)
- ・下二人が、(ドイツの)楽しい教材で楽しくレッスンをして頂いていたので、ほぼ先生のお宅には遊びに行ってたし、家でも遊んでいるし、そういう環境でやってきているので、(結果としてピアノが)続いていますね。(H)
- ・母親が弾けたもので、女学校の時弾いてたらしいんですよね。はたきかけながら鍵盤を見てると弾きなくなっちゃうんでしょうね。弾いちゃってるんですよ。なんかとても嬉しそうな顔をしてて、私が見たことのない表情でしたね。自分の世界なんでしょうね。自分の世界に浸ってるんですよ。初めて見た顔でしたね。(G)
- ・私は弾いてない時です。そんなに楽しいの？って思いましたよね。母親が、だって見たこと無い表情ですものね。(G)
- ・それで傍に行って(母に)じゃれちゃう弟を、邪魔しちゃだめよっていう風に。私と遊びましょっていう風に言って、なんかそれ(母親が弾いているのを)壊しちゃいけないという感覚は小さくたってありますよ。それ記憶にあります。そのくらいあの人(母はピアノが)好きだったんだなっていうの。(G)
- ・パリで教わった先生が生まれた時にはすでにお家にはピアノがあって、でもピアノはまだ弾けない。幼稚園生位らしいです。とにかくピアノから離れないで遊んでいる。自分で歌を歌いながらでしょうね。

それを見たおじさんが、この子にピアノさせるといいかもしれない。それで始まっていくんですよ。私
こういうスタートが幸せなんじゃないかなって思いますよ。(G)

- ・表現は、自分の中で何かが起こったことを出すということでしょう。感じたことを出す。その時にそれが、
たまたま楽譜の通りになればいいみたいな感じなんですよ。だけど、先に楽譜ありきだから、これをど
うやって音にするのってみんな思っちゃうんですよ。(J)
- ・ここ(概念④)が待てないんですよ。皆ね。(大人が待つことが)無理なんですよ。だから、これは
本当に大変なことだと思う。(J)
- ・子どもの場合一番気をつけなければいけないのは、楽しんでいるっていうのが、楽しんでも親に
言われてる場合があるんですよ。(J)
- ・あんなに上手いのに、お母さんの目を見て、お母さんに気にいられたくてやってるだけだと私は知って
たので。(J)
- ・玄関出るじゃないですか、そうすると、「はい4回スキップして」とママが言うわけよ。分かります？
遊びもカリキュラムみたいにしちゃうわけ。私は、何も考えないでスキップして欲しいのに。遊ぶこと
も一つの項目に入っちゃう。だから、そこが凄くこの頃子どもたちには懸念されるんですよ。遊んで
る風なんだけど、それも管理されているみたいな時があるのよ。(J)
- ・きちんと弾くって大事な一歩ですけども、それだけずっとやり続けてたら音楽では無くなります。だ
から文字を読むのと同じで、まず最初スタートは違う。好奇心ですよ。でそこに書いてあるものに触
れたい、でもそこに行くのには約束事がある。それは守んなくちゃいけないけれどもそれに縛られすぎ
はおかしい。音楽ではないという風に思いますね。(G)
- ・この遊んでる場合は、楽譜無視のこと多いじゃないですか。だから長さも無視とか、だからそれは自然
にやってたら、たとえばクレッシェンドがついたとか、フォルテに弾いていたけど、やっているうちに
いや、やっぱりピアノ(強弱記号で弱くの意味)の方がいいかなとか。(J)
- ・実は大人より子どものほうが発想が豊かなわけですよ。で、発想が豊かじゃなくなった大人が物言う時
点でおかしいんですよ。子どもの方が絶対に発想が豊かだから、子どもに教えてもらうくらいの気分で
自由にさせた方がいいですよ。大人の感性で物を言うと潰すと思いますね。(J)
- ・ピアノに興味を持ちピアノを弾き始めた時点でピアノ遊びが始まるという形になるんじゃないかな。

(I)

（２）カテゴリーⅡ【ピアノ技術の競合】

説明文において、カンファレンス発言者の引用は〔 〕で囲み斜体で示す。発言のローデータは□内に示し、発言者はアルファベットの仮名を文末に示す。筆者の補足説明は（ ）で挿入する。

子どもの「ピアノ遊び」が展開期へと進むと、ピアノ技術の競合関係が生起する。〔（私が）どんどん弾けるようになって行ったでしょ。そしたら今度は、父が全く弾けなかったのが、私を見て（ピアノを）習い出すんですよ。別の先生に。うちの父も１年でショパンまで行っちゃったの。凄かった！〕と、意欲的にピアノで遊び続ける子どもの姿に〔連鎖反応〕するかのように、親がピアノの競い合いに加わり熱心に「ピアノ遊び」に興じた様子も語られる。また、〔弟がピアノが弾けることは、すごーく私は嬉しかったので、競争というよりは、やったあ！という感じで〕と、家庭内で行われるピアノを通しての競い合いは、相手を負かすというよりも良きライバルとして家族が弾き合う楽しさがあったと語る。ピアノという楽器も、〔奪い合うじゃなくて、譲り合っていましたね。最初は押しのけているんだけど、その内どうぞ、どうぞお先にやって〕と、譲り合ってピアノを共有するようになる。そして、〔認め合うようになっていきますね。自分よりも妹はこういうところが優れているとか、お姉ちゃんはこういうところ優れているとか、感じているようで〕、〔個性の認め合いのようなどこに行くのでしょうかね〕、自分と〔同じ物をやりたいと言う人を認める〕など、他者との関係性の中で活発な「ピアノ遊び」が展開されていく。このように〔ピアノを弾くということを通して、社会性が育つ〕という側面も確認され、【ピアノ技術の競合】は合意された。

- ・（私が）どんどん弾けるようになって行ったでしょ。そしたら今度は、父が全く弾けなかったのが、私を見て（ピアノを）習い出すんですよ。別の先生に。うちの父も１年でショパンのプレリュードまで行っちゃったの。凄かった！だから二人で共演したんですから。それで一緒に、だから戴冠式¹¹³とか二人で弾いたりね。凄く上手くはないですよ。だけど CD のように早くはもちろん弾けないけど。だけどとにかく弾けるように……。〔J〕
- ・だから連鎖反応ですよ。私がやるといって、おばあちゃんが弾けて、父親がやり出して。〔J〕
- ・弟がピアノが弾けることは、すごーく私は嬉しかったので、でその弟が私より耳がいいというのも、す

¹¹³モーツァルトのピアノ協奏曲 第 26 番 ニ長調 K. 537《戴冠式》のピアノ連弾編曲版。

ご〜く嬉しかったので、競争というよりは、やったあ！という感じで、いやだという感覚は何もないし。

(J)

- ・常に一人でやるのではなくて、共にやるっていうことが、だからこの競合というのが、その親とか先生と生徒の競合が非常に大事だと私は思う。だから生徒同士ではなくて。(J)
 - ・奪い合うじゃなくて、譲り合っていましたね。最初は押しのけているんだけど、その内どうぞ、どうぞお先にやってみたいな。(H)
 - ・認め合うようにもなっていますね。自分よりも妹はこういうところが優れているとか、お姉ちゃんはこういうところ優れているとか、感じているようで。(H)
 - ・好きな作曲家も何とはなしに違って来るから個性の認め合いのようなどこに行くのでしょうかね。(H)
 - ・ピアノを弾くということを通して、社会性が育つのですよね。競い合いとか。技術向上の願望と言うのは、どちらかと言うと、自己の問題ですから、自分の中でどうして行きたいか。それを達成する為にはピアノ弾きたいけれども自分一人じゃないからどうしよう。おもちゃで遊びたいけれども一つしかないからどうしようと同じことになるわけですよね。多分。自分はこの時間使う、けれども残りの時間は〇〇ちゃんいいよとか。お母さんいいよとかいう形での社会性が営まれていくと。その中で、多分この技術の認め合いが出てくると思うんですよ。ようするに同じ物をやりたいと言う人を認めるということ。
- (I)

(3) カテゴリーⅢ【憧れを抱いて努力する充実感】

説明文において、カンファレンス発言者の引用は〔 〕で囲み斜体で示す。発言のローデータは□内に示し、発言者はアルファベットの仮名を文末に示す。筆者の補足説明は()で挿入する。

子どもの「ピアノ遊び」が家庭内で繰り返され、次第にピアノ技術も身についてくると、子どもは憧れの曲に挑戦したいと思うようになる。

〔挑戦する楽しさって言うの、だんだん今度は憧れが姉じゃなくなっていくんですよね〕。そして「発表会と言うのも面白かったですよね。上級の人たちが出ますよね。知らない曲を沢山聴く」ことで憧れはさらに膨らむ。〔だんだんとそれが本格的になると、あの時代のレコードの人になっていく

わけですよね。面白かったですよね。憧れね、ホントありますよね」[憧れって大事ですね。憧れもっちゃうような人たちが弾いてた曲に感動しているんですよね。その好奇心で大事ですね。そういうのが挑戦していく意欲になるわけですね。これとっても大事ですね]と合意された。

[ショパンのエチュード¹¹⁴が物凄く大好きで、どうしても弾きたいっていうわけ、弾けるわけじゃないですか。だけどコピーして渡して、じゃあお家でやっごらんって言って、とにかくいけな
いと言わないで全部させる]、[弾きたいと言うものは、どんなに難しくても、やらせる]と子ども
の憧れの曲を弾きたいという気持ちを否定せず、全て受け止めてあげる姿勢の大切さを語った。[あなたにはまだ無理よって言う。そういう意識は先生の方が持ちちゃいけない]、[憧れの曲に取り組
めた方が長続きもするし、最後は頑張る]。[好きな曲をやり始めた時はもう全然違うし、仕上がり
も違うし、ピアノを弾いてる量も違う]、憧れの曲にいよいよ取り組むとなったら[後ろに手綱を緩め
られた馬]みたいな勢いになる。子どもが自分自身の可能性に期待感を持って挑んでいくことを指導者
も親も認め受容することで、【憧れを抱いて努力する充実感】を体験することが出来ると確認し合意
された。

また、[いざここで演奏するとか、そうした時の取り組みは、私が見てても頑張るなって]、[忍
耐強く挑戦するって言う意味では、必要とあれば朝早く起きたり、夜中でも、言わなくてもやってま
すね]と語られるように、子どもが自分の意思で努力し弾けた満足感は、何としてもやりきろうと取
り組む真剣な姿勢に顕著に表れてくることが確認され、合意された。特に、このカテゴリーⅢは「こ
れは絶対そうですね。これはもう間違いなくそうだと思いますよ」と、強く合意がなされた。

- ・いや～本当そうですよ。挑戦する楽しさって言うの、だんだん今度は憧れが姉じゃなくなっていくん
ですね。それで。発表会と言うのも面白かったですよね。上級の人たちが出ますよね。知らない曲を沢山聴
く。やっぱり憧れってありますよね。大きいんですよね。だんだんとそれが本格的になると、あの時代のレ
コードの人になっていくわけですよね。面白かったですよね。憧れね、ホントありますよね。(G)
- ・憧れって大事ですね。だからやっぱりね、憧れもっちゃうような人たちが弾いてた曲に感動しているん
ですね。その好奇心で大事ですね。そういうのが挑戦していく意欲になるわけですね。これとって
も大事ですね。この憧れって。(G)

¹¹⁴ 練習曲のこと。ショパンは技術上の華麗さと抒情性をあわせもつ〈12の練習曲〉Op. 10とOp. 25を作曲している。前掲書、『音楽大事典5』平凡社。

- ・(生徒が)ショパンのエチュードが物凄く大好きで、どうしても弾きたいっていうわけ、弾けるわけじゃないですか。だけどそれもコピーして渡して、じゃあお家でやっごらんって言って、とにかくいけな
いと言わないで全部させる。それはそう思います。(J)
- ・弾きたいと言うものは、どんなに難しくても、やらせる。(J)
- ・好きな曲の時はこう(カテゴリーⅢの内容)ですよね。好きな曲をやり始めた時はもう全然違うし、仕上
がりも違うし、ピアノを弾いてる量も違うし、だからこれはよく分かりますね。さあいいよ(憧れの曲
を)やろうかと言うと、なんていうの後ろに手綱を緩められた馬みたいに走り始めるというか、それはあ
りますよね。(F)
- ・あなたにはまだ無理よって言う。そういう意識は先生の方が持ちちゃいけないなっていうことを思います
ね。(H)
- ・憧れの曲に取り組ませた方が長続きもするし最後は頑張るのかなと言うのは、それは子どもだけでなく生
徒さん全体としてはありますね。(H)
- ・うちの子達を例に取れば、毎日毎日きちっと練習というのは全くできないんだけど、いざここで演奏す
るとか、そうした時の取り組みは、私が見てても頑張るなって。(H)
- ・忍耐強く挑戦すると言う意味では必要とあれば朝早く起きたり夜中でも言わなくてもやってますね。(H)
- ・それ段階まだ上でしょっ、みたいなのを弾きたいと言い出すんですよね。(H)
- ・やってみればという方向で行くと意外にそれを、自分で頑張って弾いてしまったりとか。(H)
- ・(カテゴリーⅢ) これは絶対そうですよね。これはもう間違いなくそうだと思いますよ。(J)

(4) カテゴリーⅣ【共に歌い弾く楽しさを享受】

説明文において、カンファレンス発言者の引用は〔 〕で囲み斜体で示す。発言のローデータは
□内に示し、発言者はアルファベットの仮名を文末に示す。筆者の補足説明は()で挿入する。

展開期の「ピアノ遊び」が家庭内で活発になり充実してくると、ピアノは子どもにとって、〔前は
単におもちゃの取り合いだったのが、一緒に遊ぶおもちゃになるわけですよね。連弾をしたら、一
緒に歌うとか〕、家族が〔なんかやっている(弾いている)と、横に寄ってきて歌う〕ことが始まる。

「楽器やってなくたって歌を歌えばいいんですよ。一緒になってメロディーを歌い、踊る」などピアノと一体となって楽しむ家族の行動が表れてくる。しかしその半面、「ピアノやってる子は、歌いたくない子」「声を出したくない子が結構いて」、そういう子には「下手でもいいんだよ」と言ってあげる。「声を出すことは、とても大事だと思うから」、ちゃんとした歌になってなくても「合いの手を入れる」だけでもいいからと、一緒に楽しむことの大切さが語られた。ピアノに合わせ歌う一体感が重要であることも合意された。

ピアノには1台のピアノを他者と一緒に弾く連弾の楽しみ方がある。「私は子どもの時よくやったから、近所の子とね。何とかちゃん遊びましょつ、ていうノリで」楽しい経験であったと語る。また、連弾は「他の人の音楽を取り込めるということもあるけど、他の楽器とか歌とか一緒にやる素養になる。自分一人だけの勝手な思い込みの音楽ではなくなってくる」と連弾の意義と広がりの可能性が指摘された。加えて、連弾をして「他人と遊ぶためにはどうしなきゃいけないと言う命題が出て」くる。その「解決の一つとして、共通言語」としての「楽譜っていうものが必要」であることに「気がついていく」、連弾の相手と「それ（楽譜）がないと意志の疎通が図れない」ため、「ピアノ遊び」の中で子どもは必然的に読譜力を獲得し、連弾による音楽の生成がなされていくことも合意された。

「ピアノ遊び」は他の遊びと違って音が出る遊びということが最大の特徴である。従って家族や近隣への配慮も考えなくてはならない。「もう止めればみたいな時間」まで「熱心に遊んで」いることがあるが、「夜遅くは弾かない位」な「常識的な時間」は理解している。しかし最近では世間的にも「音を出しちゃいけない」ということもあり、近隣対策として「サイレント」機能の付いたピアノが多くなっている。高校時代に、「うちの姉にとってはピアノが大事ですから（音が鳴るのを）許してください」と、弟が隣家に頼みに行ったこともあり、「音を出すという大変さが非常にありますね」と音楽をする者の悩みも語られ、周囲への配慮も合意された。

このように、「ピアノ遊び」を通して、家族が一体感を持ち【共に歌い弾く楽しさを享受】は合意された。

・その前は単におもちゃの取り合いだったのが、一緒に遊ぶおもちゃになるわけですね。連弾をしたら、一緒に歌うとか、だから単に自分の欲求を満たすものとしてのわがままで（ピアノを）取るのから、それを他人と一緒に遊ぶという、「ピアノ遊び」が他人との遊びになってきている。（I）

- ・なんかやっていると、横に寄ってきて歌うとかそういうことはあります。(H)
- ・楽器やってなくたって歌を歌えばいいんですよ。一緒になってメロディーを歌い、踊る、これでいいんですよ。楽しいですよ。凄いことなんですね。(G)
- ・あのねピアノやってる子は、歌いたくない子っていうのが結構いるんですよ。声を出したくない子が結構いて。そういう子には下手でもいいんだよって言いながら声を出させることをさせてたのね。上手じゃなくていいというのが凄い大事で、何でもいから、私はよくカラスのまねしながら、動物の真似でも何でもいいの。(J)
- ・声を出すことは、とても大事だと思うから、ちゃんとした歌の、歌曲になってなくてもいいと思うんですよ、合いの手を入れるんでも。(J)
- ・連弾の曲をきっちりやるという風にはなかなかならないんだけど、何となく楽器を合わせたり、ピアノでこっち（高音域の鍵盤）とこっち（低音域の鍵盤）でとかやります。(H)
- ・連弾もね、私は子どもの時よくやったから近所の子とね。何とかちゃん遊びましょっていうノリでできたから。(J)
- ・連弾をやっていると、私の中の目的は他の人の音楽を取り込めるということもあるけど、他の楽器とか歌とか一緒にやる素養になる。自分一人だけの勝手な思い込みの音楽ではなくなってくるので、連弾の意義はもっと広いと思いますよ。(F)
- ・他人と遊ぶためにはどうしなきゃいけないと言う命題が出てきて、その解決の一つとして、共通言語、例えば連弾弾くんだったら、楽譜を見ようとするとか。(I)
- ・連弾しようとか、一緒に歌おうとか、一人で歌うんではなくて一緒に歌ってもらいたいとか、誰かが弾いているのを自分は歌いたいとかっていう形になってくると、そこには共通の言語として、楽譜っていうものが必要になるというのに気がついていくんじゃないか、それがないと意志の疎通が図れない。(I)
- ・夜遅くは弾かない位で、比較的そこは環境が幸いしているので、さすがにもう止めればみたいな時間もありますけどね。熱心に遊んでいます。（隣と）距離があるのでということで許して頂いてますけれど、ま、常識的な時間でということは分かっているの。家族全員が音を出し（演奏をし）ていて。ここも合意できます。もちろん。(H)
- ・いかんせん（近隣で）音を出しちゃいけないというのが、今、ピアノも全部サイレントだったり、声っ

て結構響くから、ここは防音してあるから、安心してカラスのまねもできる。(J)

- ・高校の頃、弟と二人で暮らしていて、弟が隣のおじさんに挨拶に行って、「うちの姉にとってはピアノが大事ですから（音が鳴るのを）許してください。」みたいな時期を経てるので、その辺の音を出すという大変さが非常にあると思いますね。でも声を出すのは大事よ。(J)

(5) カテゴリーV【囚われず表現し、思うがまま演奏する喜び】

説明文において、カンファレンス発言者の引用は〔 〕で囲み斜体で示す。発言のローデータは□内に示し、発言者はアルファベットの仮名を文末に示す。筆者の補足説明は（ ）で挿入する。

幼児期から児童期へと日常生活の中で繰り返されてきた「ピアノ遊び」は、達成期に到達する。子どもの「ピアノ遊び」がこの段階にまで到達するのは〔なかなか大変なことだと思うけれども〕〔ピアノ遊びをやって来た結果として、もちろんこういう風に成長していける〕。〔そういう意味では、うちの子達は遊んできたので〕、ピアノを〔弾いて自分が表現するということは得意〕だったり、〔曲を聴くと自分でアレンジをしてキーボードを弾いた〕りするようになったと、表現力豊かな演奏やアレンジをして楽しむことが合意された。また、生徒が〔本当に好きなアレンジの曲を弾いてるときは、全く出てくる音が違う〕ことに衝撃を受けた経験から、〔音が全然違ったのね、なんていうのかな、体がほぐれてて〕、〔自分の好きなものを弾く時の音の違いね〕、〔だから音がもうねえ、その本人の自由なところから出てるのとそうじゃないものは全然違う音になる〕という表現力の豊かさの違いも確認された。しかし一部アレンジに関しては、〔クラシックの曲は一応アレンジはしない〕のが一般的でもあり、その子が、〔音楽のどこに趣味を求めるか〕、〔ポピュラーが凄く好きか〕、〔やりたいと思うかどうか〕であり個人差もあるとされた。また、自身はアレンジをやりたかった経験を〔私が小さい時こんな感じ（アレンジが好き）でしたね。私はアレンジをして弾くのを母親から止められた人ですから。これをやりたくなる気持ちはよく分かります〕と語る。アレンジをして楽しむは、合意された。アレンジを母親に止められなかったらの質問に、〔やっていたでしょうね、きっと。よくうそ歌、歌っていたし〕と答え、心の赴くままに弾くことを禁止された時の子どもの残念な気持ちが示唆的に語られた。

「楽譜があればその通り弾く」ことができる技術が身についてきた子どもに対して、「弾けた満足感っていうのが危険」だという指摘があった。「ピアノをやってる人は、指が動く快感」があるが、「これはあくまでも肉体的な快感」であり、「肉体的快感も大事」だが、もっと大事なのは「その音楽が出来た時の喜び」であり、「弾ける快感じゃなくて、その音が聴こえた快感、その音の世界を感じられた快感、それの方がより嬉しいですよ」と音楽に対する感じ方の視点が語られた。さらに、自分がピアノを弾き「聴いてもらう事によって他人が喜んでくれて、モチベーションになるという、外からの働きかけ」があり、「聴いた人に楽しんで貰えることが、自分の気持ちに戻ってくることを感じ取れる。それが「ピアノ遊び」の特徴」と意義付ける意見も出た。「自己表現をするという喜びのために、周りの人間との関係性が、大きなファクトになる」、それは「一番は音」であり、「他人と関係性を築かないと続けられないという物の一つ、それが騒音ではなく、音楽になっていかないと続けられないという所の大きな命題みたいなもの」が「ピアノ遊び」に入ってくる。「これが「ピアノ遊び」というものから、ピアノ演奏を人に聴いてもらう喜びが出てくるかどうか、その先に繋がるものになるのか」と「ピアノ遊び」が青年期へ発展していく可能性を展望した。

幼児期、児童期と「ピアノ遊び」を経験してきた子どもが青年期に達した現在の姿を、「ミュージカルに物凄くはまっていて、もう、毎日聴き流してる。毎日毎日毎日毎日、ヘッドホーンかけて、そうするとバックは常にオケ（オーケストラ）が鳴っている状態だから、ピアノで飽き足らずピアノの音だけじゃつまんないよねという世界に今、入ってる感じがする」と述べた。今後「自分がそういうものとどう対処するかってなると、ここから・・・先の話」になると、親として子どもの未来が楽しみな発言があった。また、最近の青年の傾向に対して、「自己表現が下手だとか今あるじゃないですか、大人になってから。たとえば、こういう段階に達してないから、自己表現できないんでしょうね」との発言もあった。多岐にわたって協議された結果、【囚われず表現し、思うがまま演奏する喜び】は合意された。

- ・なかなか大変なことだと思うけれども、でも、中学生・高校生ぐらいまで頑張れば・・・、「ピアノ遊び」をやった結果として、もちろんこういう（カテゴリーV）風に成長していける。（H）
- ・そういう意味では、うちの子達は遊んできたので、丁度いいかと。（H）
- ・三女はどっちかと言うとあるものを弾いて自分が表現するということは得意なんです。（H）

- ・次女は、物凄く音感がいいんですね。比較的ぱっと弾ける方なので、高校で軽音部にいて殆んどその曲を聴くと自分でアレンジをしてキーボードを弾いていた。(H)
- ・(レッスンで私が中座した時、好きな曲弾いててと言ったら)「トイレの神様」という曲を上手くアレンジして弾いてたわけよ。すごい上手くて、それでもうなんか私やんなっちゃって、ようするにワルツを教え込んで、一応、人様が素晴らしいと言ってる位には弾けてるんですよ。だけど彼女はそういうのが好きじゃなくて、「トイレの神様」アレンジして弾く方が好きだったのを(私は)知ったわけよ。そしたら音が全然違ったのね、なんていうのかな、体がほぐれてて、「あなたこっちの方が好きなんじゃないの」って言ったら。「ウン」と言うから、ああそうだったんだって。自分の好きなものを弾く時の音の違いね。もう全然違う音になる。(J)
- ・だから結局私が(自分のことを)振り返ってみても、みんなからいいと言われた時は言われたことをやったときじゃないんですよね(自分の表現したいように弾いた時)。だから音がもうねえ、その本人の自由なところから出てるのとそうじゃないものは全然違う音になる。それを大人が見抜けない。(J)
- ・ショパンのワルツだって弾いてて楽しいのよ、ちゃんと弾けるようになってるんだから、だけど、本当に好きなアレンジの曲を弾いてるときは、もうねえ、全く出てくる音が違うのよね。(J)
- ・クラシックの曲は一応アレンジはしないっていう。だからこの16番(概念⑩)に関しては、すごくそういう環境にもよるのかな、それから音楽のどこに趣味を求めるかって言う所にもあります。ポピュラーが凄く好きかどうかとかね。(J)
- ・このアレンジの行動になると、やっぱりやりたいと思うかどうかということにもなる。(H)
- ・私が小さい時こんな感じでしたね。私はアレンジをして弾くのを母親から止められた人ですから。これをやりたくなる気持ちは、よく分かります。(F)
- ・(アレンジを止められなかったら)やっていたでしょうね。きっと、よくうそ歌、歌っていたし。(F)
- ・赴くままにをどう取るかだけど、楽譜があればその通り弾くし、それは中学校くらいの段階でほぼ達成している。(H)
- ・弾けた満足感っていうのが危険なんですよ。ピアノをやってる人は、指が動く快感があるんですよ。これはあくまでも肉体的な快感なんですよ。だから肉体的快感も大事だけど、そうじゃなくて、その音楽が出来た時の喜びなんです。だからそこに弾けるという事が入るとちょっと違うんですよ。だから弾ける快感じゃなくて、その音が聴こえた快感、その音の世界を感じられた快感それの方がより嬉しいで

すよ。(J)

- ・聴いてもらう事によって他人が喜んでくれたということがモチベーションになると言う、外からの働きかけというのがあるんでしょう。(I)
- ・聴いた人に楽しんで貰えることが、自分の気持ちに戻ってくることを感じ取れる。それが「ピアノ遊び」の特徴になってくると思います。(I)
- ・やっぱりその自己表現をするという喜びのために、周りの人間との関係性が一つは大きなファクトになるのかな。一番は音かな、他人と関係性を築かないと続けられないという物の一つ、それが騒音ではなく音楽になっていかないと続けられないという大きな命題みたいなものは、どうしても入ってくる。(I)
- ・これが「ピアノ遊び」というものから、ピアノ演奏を人に聴いてもらう喜びが出てくるかどうかはその先に繋がるものになるのかな。(I)
- ・ミュージカルに物凄くはまっていて、もう毎日聴き流してる。毎日毎日毎日毎日、ヘッドホーンかけて、そうするとバックは常にオケ（オーケストラ）が鳴っている状態だから、ピアノで飽き足らずピアノの音だけじゃつままないよねという世界に今入ってる感じがする。そうなった時に、じゃあ自分がそういうものとどう対処するかってなると、ここから・・・先の話。(H)
- ・自己表現が下手だとか今あるじゃないですか、大人になってから。たとえば、こういう段階に達してないから、自己表現できないんでしょうね。(I)

（6）コアカテゴリー『あるがままの自分を表現する喜び』

説明文において、カンファレンス発言者の引用は〔 〕で囲み斜体で示す。発言のローデータは□内に示し、発言者はアルファベットの仮名を文末に示す。筆者の補足説明は（ ）で挿入する。

子どもは幼児期から児童期へと、「ピアノ遊び」の導入期・展開期・達成期へとあるがままの自分を表現しながらそのプロセスを辿っていく。

ピアノに興味を抱いた子どもが、家庭において「ピアノ遊び」を意欲的に展開していく背景に、ピアノ指導者や親の存在がある。毎日自由にピアノを弾いて遊んでいた子ども時代について〔年に3回

位、ひな祭り会・お花祭り会・クリスマス会があって、もう本当になんていうかな、楽しくて、レッスンに行くと、お菓子があつたり、絵本があつたり、とにかくピアノを楽しませようという先生だったんですよ」と振り返る。〔その当時、（ピアノの練習の為に）運動会も遠足もなしみたいな人がいたんですよ〕、〔私は絶対普通の暮らしがしたかった〕、〔私が才能があると言われてたのに、母はその先生を選んだ。それが大きな大きな別れ目〕だった。半世紀以上ピアノとの充実した生活をしている自身を振り返り、〔最近、やっと、子どもの時に自由にさせてくれたから今まで続いているかなあって、この頃思うのね。今やっとその答えが出てきて〕と語り合意された。

親の立場からは、レッスンに付き添って行った時、〔子どもが気が向かないと思ったら、ぱっと曲を替えて下さって、（曲は）星の数ほどあるから、この曲嫌いでもいいですって言われて、だから最後まで行かないんですよ、1曲が〕とドイツ人指導者のレッスンを語る。〔手を替え品を替えいろんなものを持ってきて下さった結果、結局ドビュッシーのような響きのものに割合小さいときに出会って、で今でもドビュッシーのあの感じが好きっていうのが、もう小学生の後半から確立してました〕。子どもがピアノを楽しめるように、子どもの意思を尊重した指導者からのアプローチの重要性が語られた。さらに親が子どもに対して〔そんなことやったら恥ずかしいでしょ〕、〔みっともないから止めなさい〕、〔そんな下手なの聴かせられない〕など、子どもの自由な表現を禁止する〔瞬間が積み重なると、やっぱり萎縮する部分ってあるんじゃないか〕と親の立場からの反省の言葉も聞かれた。あるがままの自分を表現する喜びを子どもが感じる経験の大切さが合意された。

〔自分で作り出す音楽の楽しさ、自分で作り出す音楽の意味〕、つまり〔自分の音、自分の音楽を表現するということの快感が、一番大きい〕ことが強調された。この自己表現の意欲は、〔ピアノを弾き続ける原動力〕であり、〔それをもっと（プロセス図の）一番上まで〕、児童期の先まで〔自己表現意欲を如何に生まれさせて、育てていくか〕、が大事であるとの指摘があった。さらに、〔自己表現を達成したい為には、それなりの努力というのが必ず「ピアノ遊び」にはある〕。〔どういう努力をしていけば目標達成できるのか〕、その試行錯誤の積み重ねの〔結果として自己表現があるんであって、それは単にわがままじゃない〕ことが協議され、「ピアノ遊び」によりあるがままの自分を表現をする喜びの意義が合意された。

また「ピアノ遊び」に内包されている主体的表現の種について、〔この種がほんとに、そういうピアノだけでなく。音楽だけでなく。もっともっと広がっていく、そういう根幹になるものなんじ

やないかなって、思うんです] との意見もあった。幼少期から「ピアノ遊び」で育ち青年に成長した現在の様子を、[ピアノだけでなく、歌もあり、楽器もあり、さらには、もうちょっと派生して、ミュージカルであり、それから演劇であり、演劇のもととなる脚本も書く、小説も書く、そういう自己表現もあり、そういう全てに自分を出す。『あるがままの自分を表現する』ということに躊躇がない様な気がするんですよ] と語られ、「ピアノ遊び」の理論仮説は合意された。

- ・私が始めたいと言って年長の1月から、やりたくて、やりたくて、懇願して母親が中古のピアノを買ってくれて始めたんだけど、小学校に入って1年生になった9月までの8ヶ月間、町の先生についてたんだけど、私の譜読みが早かったんですよ。上手いっていうんじゃないんだけど、譜読みがあまりにも早かったのでトットコトットコ、ツェルニーの30番とかソナチネまで全部いっちゃったんですよ。(J)
- ・音楽大学の先生とかピアノの先生だけで16人位近所にいたんですよ。その中で母が探してきた先生が、短大の音楽部を出た先生で、年に3回位、ひな祭り会・お花祭り会・クリスマス会があって、もう本当になんていうかな、楽しくて、レッスンに行くとお菓子があったり絵本があったり、とにかくピアノを楽しませようという先生だったんですよ。私が才能があると言われてたのに、母はその先生を選んだ。それが大きな大きな別れ目で。(J)
- ・その当時、(ピアノの練習の為に)運動会も遠足もなしみたいな人がいたんですよ。結構いたんですよ。ピアノをやる人で。私はそういう人を知っていたので、私は絶対普通の暮らしがしたかった。(J)
- ・最近、やっと、子どもの時に自由にさせてくれたから今まで続いているかなあって、この頃思うのね。今やっとその答えが出てきて。(J)
- ・(ドイツ人の先生宅の)レッスンは通っていたんですが、子どもが気が向かないと思ったらばつと曲を替えて下さって、星の数ほどあるからこの曲嫌いでもいいですって言われて、だから(曲の)最後まで行かないんですよ、1曲が。途中で嫌だとか言って。私なんか最後まで弾けばって思ってるんですけど。いいです。これしまししょうって言って次の曲。凄いと思います。言えないです、私なら。これ嫌だったら、これ弾いたら、じゃあすぐ替えるからってそうなっちゃうんです。でもそれが最後まで行かずに。最後まで行こうという時点で「ピアノ遊び」になってない。(H)
- ・手を替え品を替えいろんなものを持ってきた結果、結局ドビュッシーのような響きのものに割合小さいときに出会って、で今でもドビュッシーのあの感じが好きっていうのが、もう小学生の後半

から確立してました。(H)

- ・小さい時にそんなことやったら恥ずかしいでしょ。みたいなそうやって止めちゃったら、きっと、あっ！いけないんだとか、親がみつともないから止めなさいとか言ってしまったり。そんな下手なの聴かせられないじゃないとかっていう瞬間が積み重なると。やっぱり萎縮する部分ってあるんじゃないかな。最近いろいろ考える。(H)
- ・自分で作り出す音楽の楽しさ、自分で作り出す音楽の意味っていうの、そこらへんの方がずっと大きいと思う、だから先にもっともっともっと素敵な曲を弾きたいという。(F)
- ・自分の音、自分の音楽を表現するということの快感が、一番大きいんじゃない？(F)
- ・自己表現意欲、それをもっと一番上まで、上（児童期の先）まで。それがピアノを弾き続ける原動力だと私は思う。(F)
- ・自己表現意欲を如何に生まれさせて、育てていくか、ということじゃない？これを上手く育てていけばこの子はピアノが好きになる。じゃないのかしら。(F)
- ・自由奔放というか、（我が子は）全然規制されない子どもたちになった。自己表現はしっかり出来ている感じです。そうですね。本当に。自己表現出来ていることが幸せです。(H)
- ・『あるがままの自分を表現する喜び』、自己表現をどうして行くのかということで、自分は何を訴えたいかって言うことがきちんと消化されていけば、例えば世の中に出て行ったときにどうするとか。(I)
- ・自己表現を達成したい為には、それなりの努力というのが必ず「ピアノ遊び」にはあるわけですね。どういう努力をしていけば目標達成できるのかっていうのを学んでいるはずなんですね。例えばこの段階まで来たら楽譜読めなきゃいけないよね。とすると楽譜読む為には何をしなくてはいけないか。他人と合わせる連弾する為には、リズムとか分かんないや合うわけ無いから、そうすると最低限のルール、演奏上のルールを守らないといけないとか。そういうことが自然と身についてくるよっていうことなんです。で、その結果として自己表現があるんであって、それは単にわがままじゃないよと。(I)
- ・だからこの（主体的表現の）種がほんとに、そういうピアノだけじゃなく。音楽だけじゃなく。もっともっと広がっていく、そういう根幹になるものなんじゃないかなって、思うんです。(H)
- ・ピアノだけではなく歌もあり楽器もあり、更にはもうちょっと派生してミュージカルであり、それから演劇であり、演劇のもととなる脚本も書く、小説も書く、そういう自己表現もあり、そういう全てに自分を出す。『あるがままの自分を表現する』ということに躊躇がない様な気がするんですよね。(H)

・とにかくそういうものを外に出して（表現して）いいんだということが分かってない人が多いような気がするんです。（H）

（7）全体のフィット感

説明文において、カンファレンス発言者の引用は〔 〕で囲み斜体で示す。発言のローデータは□内に示し、発言者はアルファベットの仮名を文末に示す。筆者の補足説明は（ ）で挿入する。

全体のフィット感について、〔子どもの発達形成における中での、いろんな働きかけっていうんですかね、完全に一致すると言えるなど、心理学的にも〕（I）と、音楽指導者として心理学が音楽指導に必須であるという立場から〔再確認できた〕（I）と、発達段階を「ピアノ遊び」が引き上げていくことの重要性が語られ合意された。また、〔他人との関係性の中で、自分を表現していくという力を付けるということが、もっともっと本来必要なこと〕（I）である。「ピアノ遊び」は、〔発達段階の人間形成に十分寄与するものがある〕（I）等と、その可能性に期待できると賛同を得た。また、「ピアノ遊び」の理論仮説をモデルに、〔日本における、一般的な芸術教育というものを通しても、きちんと子どもの人格形成は出来る〕（I）と、芸術教育の可能性にも言及された。〔この「ピアノ遊び」と（娘が習っていた）ドイツの先生と凄く共通するものを今感じていて、娘たちがそういうことでレッスンを受けてきたことを幸せだと思っている〕（H）と、親の立場からも、「ピアノ遊び」についての有効性が再認識され合意された。

〔自分のことが、まさにそうです。やりたくて、やりたくて懇願して（ピアノを）始めた〕（J）と、ピアノとの出会いを振り返る。ピアノレッスンでは、〔子どもに遊べと言わない。私が遊ぶ〕（J）姿勢で臨み、自身が「ピアノ遊び」を繰り返してきたことで現在の自分が形作られていると語った。〔ええ、フィット感ありますよ。私はこれ以外が考えられなくて生きてきた〕（G）、〔これ以外ないでしょ。答え〕（G）と語る。〔教わった外人の先生方も皆同じもの感じたんですよ。フランスの先生も全くこの通りでしたよね。もう本当に遊びです〕（G）と自分が長年師事してきた巨匠といわれたピアニストについて語る。〔そういった人を皆さん崇めている〕（G）のであるから、「ピアノ遊び」の考え方は正しいとの見解から、今まで看過されてきた「ピアノ遊び」についての理論仮説が合意された。

観察対象児に対して、「幸せな育ち方よ」(G)、「幸せに育ってきてる子がこういう風になるんですよ。満ち足りてる子よね」(G)、「こうでありたいですね。私もこの通りだと思いますよ」(G)と子どもにとって「ピアノ遊び」の果たす意義を語る。「私もやってるし。「ピアノ遊び」で。私がみてる子どもたちもなんかいろいろ家でやってるという話は聞きます。合意できます。よく分かります」(F)。

以上のカンファレンスの結果、全体のフィット感、及び、「ピアノ遊び」の理論仮説について合意がなされた。

- ・今の伺って基本的には全部同意できるというか、フィット感もあるんですよ。ピッタシなんですよ。(I)
- ・その発達、子どもの発達形成における中でのいろんな働きかけっていうんですかね、完全に一致と言えるなど、心理学的にも。(I)
- ・(子どもの)発達段階に対するいい働きかけになってくるものであるなというのが、再確認できたという気がする。(I)
- ・自分を表現するということ、他人との関係性の中で自分を表現していくという力を付けるということが、もっともっと本来必要なことではないかなという気がするんです。(I)
- ・「ピアノ遊び」というものを通して、発達段階の人間形成に十分寄与するものがあるということ、大きく結論付けられればいい。(I)
- ・やっぱりこういう発達段階を如何に引き上げてくのかっていうのは重要なことになると思いますよ。(I)
- ・日本における一般的な芸術教育というものを通してきちんと子どもの人格形成は出来るよねと。(I)
- ・この「ピアノ遊び」と(娘が習っていた)ドイツの先生と凄く共通するものを今感じていて、娘たちがそういうことでレッスンを受けてきたことを幸せだと思っているんです。ドイツの先生方、特に音楽教育を目指す方、でも普通の大学でもですね。心理学の勉強をきっちりしないと駄目なんですね。(H)
- ・ピアノの先生、音楽の先生するのに。だから、そういうこと(児童心理などの知識)が日本においては足りないかなと本当に思いましたね。(H)
- ・児童心理とか何とかが分かんないで、ただ上手にしようと思っても無理だしって、だから本当に、(子どもが)嫌だと言ったら曲を替えるに始まり、その前でもう気が向かないと思ったら、もうゲームが一

杯置いてあるんですね、お部屋に。遊べるものが。それで遊んでもらって遊びながらいろんな曲を弾いたり、音を弾いたりしながら（ドイツの先生は）遊んで下さるっていう、そんな感じだった。（H）

- ・子どもが遊ぶというレッスンを受けていたことが、今思うともっとそういう時間を大切にしてくれば良かったと思いました。これからも大事にしないでほしいです。（H）

- ・（「ピアノ遊び」は）理想的というか本当に。そうですね。音大を出た友人でお嬢さん連れて結構海外赴任の長かった方で、北欧にいたり、スペイン、イギリスにも、いろんなところを歩いてらっしゃって、お嬢さんがずっと弦楽器をやっていて日本に帰って来られて、今、職場のオーケストラで弾いているんですが、日本でいうようなギチギチしたレッスンではない道を通ってらっしゃる方が、やはり孫がいたらこういう「ピアノ遊び」の形でやりたいわと仰ってました。（H）

- ・自分のことが、まさに（「ピアノ遊び」）そうです。やりたくて、やりたくて懇願して（ピアノを）始めた。（J）

- ・ここ（レッスン室）にすれば自由でいいんだっていうものを感じさせる。私が一つ大事にしていることは、私が自らやる、ということを気をつけてやっている。子どもに遊べと言わない。私が遊ぶ。（J）

- ・ええ、フィット感ありますよ。私はこれ（「ピアノ遊び」）以外が考えられなくて生きてきたわけですよ。だから私はこのまんまこうやって来ました。この通りです。ええ。だってこれ以外ないでしょ。答え。だって自分もそうだったし、教わった外人の先生方も皆同じもの感じたんですよ。フランスの先生も全くこの通りでしたよね。もう本当に遊びです。そのまんま、（ピアノに対して）子どもが大きくなっただけ。だからそういった人を皆さん崇めているのだったら、私が言っているのが正しいでしょって言う風になります。（G）

- ・（観察対象児に対して）幸せな育ち方よ。全部土台って言うか、幸せに育ってきてる子がこういう風になるんですよ。満ち足りてる子よね。でそこにいいものが表れたんですよ。そしてそこに興味を示して、そのまんま進んでいったんですよ。こうでありたいですよ。私もこの通りだと思いますよ。（G）

- ・みんなやると思いますよ多かれ少なかれ。私もやってるし。ピアノ遊びで。私がみてる子どもたちもなんかいろいろ家でやってるという話は聞きます。合意できます。よく分かります。よく解ります。（F）

第4章 考察

第1節 本研究の成果と課題

本研究の研究成果を示す前に、先行研究との関係の中でこの研究成果がどこまで達成され、それがどのような意義を持っているのかについて、改めてここで論じる必要がある。そのために本研究目的を示して、次に成果を要約して示し、達成された成果が先行研究との関係でどのような意義を持っているのかについて言及したい。

1 本研究の成果

ここで、本研究の研究目的を改めて示す。本研究の目的は、遊びの性格を備えた「ピアノ遊び」が、幼児期から児童期において子どもたちの主体的な表現形成にどのように関わっているのかを、対象児の「ピアノ遊び」に着目し分析する。それにより、「ピアノ遊び」を通した子どもの主体的表現形成過程を示し、その理論仮説を提示することであった。

「ピアノ遊び」を通した子どもの主体的な表現形成における特質と理論仮説を以下でまとめておく。

第1に、主体的な表現形成過程の特質は、5つのカテゴリーから構成されていることである。「ピアノ遊び」を通して、子どもは《ピアノに興味を持ち鳴らしたい》という《意欲的行動》から、《聴いてまねて弾き遊び》、《自身の気持ちをピアノで表現》する活動を繰り返すという【ピアノで遊び、表現する意欲】を表していく。その経験により子どもの《ピアノ技術向上への願望》が生起し、《ピアノ技術向上への競い合い》が始まっていく。この【ピアノ技術の競合】関係の中で、兄弟間で《ピアノ共有への交渉》と《ピアノ技術向上の認め合い》の関係が構築されていく。この関係が築かれることによって、子どもたちは「ピアノ遊び」を通して、《憧れを抱き達成への期待感》に溢れ、《忍耐強く挑戦する持続性》を保ちながら《憧れの曲を夢中で弾く》という【憧れ¹¹⁵を抱いて努力する充実感】を感じていくのである。さらに子どもは家族と《ピアノに合わせて歌う一体感》や、《連弾による音楽の生成》を楽しみ、《周囲への配慮》もしながらピアノを通して【共に歌い弾く楽しさを享受】していく。そして、その享受の上に《表現力豊かな演奏を志向》し、《曲をアレンジして楽しむ》創造性が生起し、《心の赴くままに弾ける満足感》を持ち【囚われず表現し、思うがまま演奏する喜

¹¹⁵ 憧れの対象(姉の弾くピアノ→父が弾くピアノ→コンパクトディスクから流れるピアニストの音楽など、より高い水準のものに移行していく。)

び】を味わうという特質が見い出される。

第 2 に、主体的な表現形成の過程の特質は、カテゴリーが段階的に発展し形成されていく。すなわち、まだ特質が未分化な導入期、分化していく展開期、統合される達成期の 3 つの段階を経て発展していくことが明らかになったことである。導入期の未分化な段階では、カテゴリー I 【ピアノで遊び、表現する意欲】の構成概念が、①《ピアノに興味を持ち鳴らしたい》、②《一緒にピアノで遊びたいという意欲的行動》、③《聴いてまねて弾き遊ぶ》、④《自身の気持ちをピアノで表現》である。それらは導入期における主体的な表現形成の活動が活発になっていくと、展開期へと発展し分化していく。それは具体的に①の発展形として【ピアノ技術の競合】という活動になり、②の発展形は【共に歌い弾く楽しさを享受】となり、そして③の発展形は、【憧れを抱いて努力する充実感】へと特質が分化していく。さらに「ピアノ遊び」による主体的な表現形成の「達成期」には、導入期の段階では、まだ思うように弾けないが、④《自身の気持ちをピアノで表現》したいと思っていた子どもは、「ピアノ遊び」を繰り返す年月を通してピアノ技術も身につけ、音楽的にも【囚われず表現し、思うがまま演奏する喜び】を味わえる主体的な表現形成過程の達成期へと到達する。これは④の発展形といえる。この達成期の段階で「ピアノ遊び」のすべての特質が統合される。子どもはピアノ技術も身につけ音楽的な成長を遂げる。それは言い換えればピアノをツールとした「ピアノ遊び」を通して、子どもが主体的な表現形成の過程を、自らの意思で、自由に、自発的に、喜びと楽しさを味わいながら辿ってきた結果といえるのである。

第 3 に、「ピアノ遊び」を通した主体的な表現形成過程の特質である 5 つのカテゴリーと、【あるがままの自分を表現する喜び】というコアカテゴリーとが関連し合いながら、主体的な表現形成過程の 3 つの段階である導入期・展開期・達成期を経て、「ピアノ遊び」の 5 つのカテゴリーが発展していくことを明らかにできたことである。

第 4 に、以上の 3 点に基づいて、主体的な表現形成の理論仮説が生成されたことである。その理論仮説は次のとおりである。

「ピアノ遊び」を通した【あるがままの自分を表現する喜び】は、子どもの主体的な表現形成の主要因。

「ピアノ遊び」を通した【あるがままの自分を表現する喜び】の体験の蓄積は、「ピアノ遊び」の

特質である 5 つのカテゴリーの具体的な活動と密接にかかわり合いながら、導入期・展開期・達成期の 3 つの段階を螺旋的に辿り発展し、主体的な表現形成を生み出していく。「ピアノ遊び」を通した『あるがままの自分を表現する喜び』は、子どもの主体的な表現形成の中核的なカテゴリーとなり、同時に子どもの主体的な表現形成の主たる要因となっている。

以上の研究成果が、先行研究との課題のなかでいかなる意義を持っているのか改めて考察しておきたい。

先行研究で明らかになったピアノ導入期の音楽的特質—「自己表現」、「自己の内面世界の表出」、「音楽的自主性」、「自由な開放された行為」、「積極的な探究活動」—は、極めて重要な研究成果であった。しかしながらこれらについて実際にどのような場面で、どのように具体的に表れるのかの説明が十分ではなかった。そのことが、我が国の先行研究でも共通に見られた課題であった。本研究は、この課題に具体的な説明を加えることが出来たという点で、先行研究に対して、一定の貢献を果たしうると考える。

先行研究で明らかになった上記の特質は、「ピアノ遊び」で言うところのまだ特性が未分化な「導入期」の段階のカテゴリーである【ピアノで遊び、表現する意欲】を構成する概念—①《ピアノに興味を持ち鳴らしたい》、②《一緒にピアノで遊びたいという意欲的行動》、③《聴いてまねて弾き遊ぶ》、④《自身の気持ちをピアノで表現》—と共通していると言える。このことにより、上記の音楽的特質は、一つ一つ単独で存在するのではなく、すべてが関連しあっていると言える。つまり、導入期に「ピアノ遊び」によって「自己表現」、「自己の内面世界の表出」、「音楽的自主性」、「自由な開放された行為」、「積極的な探究活動」などの表現形成の特質が十分に繰り返されたとき、子どもの自由意思で「ピアノ遊び」の活動は、次の展開期へ、さらに達成期へと進展する。その段階で、これらの音楽的特質が、【ピアノ技術の競合】【憧れを抱いて努力する充実感】【共に歌い弾く楽しさを享受】というカテゴリーへとかかわりを持ちながら分化し発展していく。さらに達成期では【囚われず表現し、思うがまま演奏する喜び】となり、「ピアノ遊び」は統合される。従って「自己表現」、「自己の内面世界の表出」、「音楽的自主性」、「自由な開放された行為」、「積極的な探究活動」などの子どもの主体的表現を構成する音楽的特性も、単独で存在するのではなく、すべてが関連しあっていた導入期の段階から同じように展開期へと段階を辿って発展し達成期へ至って統合されたと言える。

先行研究の成果として挙げられた主体的な表現形成の特質が、本研究の実証的研究によって具体的な子どもの「ピアノ遊び」の場面でどのように表れ役割を果たしているかという「実相」を示すことができた。それはまた本研究を通して、マーセル、梅本らがあげた先行研究の成果である上記の特質の重要性が、逆に新たな意義を持って再評価されることにつながったとも言える。

日本の研究は「音楽遊び」が主要な対象であるということを考慮した上で、主体的な表現形成の過程の実証的研究までは至っていない。その原因としては、梅本の指摘する継続的研究の必要性に付け加え、研究方法の問題が大きかったと言える。本研究では、梅本らが問題として挙げた長期にわたるフィールドワークとその実践分析を行うことに加えて、主体的な表現形成の過程を明らかにする質的な研究方法を持って、研究方法上の梅本らの課題を解決したことになる。このことは、今後の「音楽遊び」を通した主体的な表現形成過程の分析方法に一定の貢献をなし得ると考えられる。

以上のように、先行研究との関連における本研究の成果を提示したが、これに加えてさらに以下の点についても、本研究の成果として挙げておきたい。研究の成果として、幼児期から児童期にわたって、かかる主体的な表現形成は、導入期・展開期・達成期のそれぞれの段階における各特質のカテゴリーが、音楽的成長の特質と同様の意味を持っており、一人一人の子どもの音楽的成長を判断する上での指標となりうる。この点についてさらに説明を加えておきたい。

本研究によって、主体的な表現形成と音楽的な成長が対をなしていることを見出すことができたことで、3つの段階と5つの特質によって、子どもの音楽的な成長を判断することに活用できるものと考ええる。まず「ピアノ遊び」を通した主体的な表現形成の過程は、導入期の未分化な段階、展開期の分化していく段階、達成期の「ピアノ遊び」が統合した段階へと発展する3つの段階があること。さらに特質としてはそれぞれの段階でどのような成長の特質を持っているのかを見る時に、この5つのカテゴリー【ピアノで遊び、表現する意欲】、【ピアノ技術の競合】、【憧れを抱いて努力する充実感】、【共に歌い弾く楽しさを享受】、【囚われず表現し、思うがまま演奏する喜び】が具体的な活動の指標となるということである。導入期、展開期、達成期の3つの段階と、5つのカテゴリーは、自由な音楽的な表現活動の段階と特質を個々の子どもに即して評価し、同時にそれを改善する際の処方箋的な観点を提示することが出来ると考える。ただしこれについてはさらに精度を高める必要がある。

2 本研究の課題

本研究は14年間という長期間のフィールドワークであったため、対象児家庭が一家庭の事例となり、そのような制約のために、本研究を進めるにあたり質的研究法の中でGTAを採用した。GTAは、比較していくことが求められるが、この比較については、同等のフィールドワークを伴うものであったために、本研究では大きな課題となった。ただし、その制約をカバーするためにピアノ指導者と音楽指導者及び保護者の5人によるカンファレンスを丹念に行い、その合意に基づいて妥当性を検証した。今後は、このカテゴリーと理論仮説について、多様な対象者による調査によって計量的な検証を行っていききたい。

いま一つは、カンファレンスで指摘された点である。すなわち「4人兄弟という例をとっているので、一般的な1人か2人の兄弟を題材にして考えた方が、もっと納得するだろうなと思う」という指摘であり、少子化の現在では1人か2人兄弟を対象にすべきではなかったかという意見であった。これについては、この家庭を観察対象とした2000年の時点では、姉弟は2人でスタートしたのだが、その後4人兄弟姉妹となったためにこのようなコメントを受けることになった。この点も、カテゴリーと理論仮説の定量的な検定を行うときに、1人と2人以上というケースを取って検定を行う必要があると考える。

量的な検定と共に、現在同じような「ピアノ遊び」という考え方に基づいて、家庭において主体的な表現形成の活動が見られる子どもの観察や、保護者に対するインタビューを継続して行っていきたい。そのことによって「ピアノ遊び」の可能性を広げ、多様な子どもたち一人一人の主体的な表現形成にさらに寄与することが出来ると考える。

本研究が明らかにしえたことは、家庭における「ピアノ遊び」という限定されたフィールドでの考察ではあるが、質的な研究を採用して「ピアノ遊び」を通した子どもの主体的な表現形成、換言すれば、それは一人の子どもの成長の過程を質的に明らかにすることができたと考えている。この研究成果が、他の子どもたち一人一人の成長に今後どのように寄与できるかについて、さらに具体的な実践のレベルで挑戦していきたい。

おわりに

日本学術会議では、「家庭・地域では家の中の遊びが中心になる中で、どのように子どもの遊びを広げていくかは社会的な課題である」との提言がなされたことから、子どもの「主体的な活動」「自発的な活動」「意欲的な活動」を子ども一人一人にどう実現させていくかという関心が高まった。本論文ではこの課題に応えるために、「ピアノ遊び」を通した子どもの主体的表現形成の生成のプロセスを、観察対象児の14年間のフィールドワークを通して得たデータをGTAで分析して、理論仮説の生成を行った。その結果、成果として「ピアノ遊び」を通した子どもの主体的表現形成のプロセスが明らかになり、5つのカテゴリーとコアカテゴリー、さらに理論仮説を生成することが出来た。

「ピアノ遊び」を通した子どもの家庭における遊びの意義、さらに具体的には、家庭における「ピアノ遊び」を通した子どもの主体的な活動、意欲的活動を、主体的な表現形成の分析から具体的に表れ方を明らかにしたことである。本研究は、保育所、幼稚園、小学校におけるピアノ教育そのものを扱っているものではない。これらの機関が、家庭における子どもの成長と教育を通して、いかにして子どもの主体的な活動、自発的な活動を育んでいくかということについては、共通な課題を持つものである。従って、本研究は、特に家庭において子どもたちの主体的な表現活動を育むという点についての個別的な研究に一定の貢献をなしうると考える。

引用文献

B. G. Glaser & A. L. Strauss, *AWARENESS OF DYING*, 木下康仁訳『死の Awareness 理論と看護』、医学書院、1998 年。

B. G. Glaser & A. L. Strauss, *The Discovery of Grounded Theory : Strategies for Qualitative Research*. Aldine Publishing Company, Chicago, 1967. 後藤隆・大出春江・水野節夫訳『データ対話型理論の発見』新躍社、1996 年、307-309 頁。

Colwell, R. & Webster, P. R. eds, 2011. *MENC Handbook of Research on Music Learning*, Volume 1, Oxford University Press. pp. 250-253.

Dorothy T. McDonald, Gene m. Simons, : *Musical Growth and Development Birth Through Six*, Schirmer books, (1989)、神原雅之、難波正明、里村生英、渡辺均、吉永早苗共訳『音楽的成長と発達—誕生から 6 歳まで—』株式会社溪水社、1999 年、69-90 頁。

Erik H. Erikson, *Childhood and Society*, 仁科弥生訳『幼児期と社会 1』みすず書房、1977 年、322-327 頁。

James L. Mursell, *Education for Musical Growth*, Ginn and Company, 1948. 美田節子訳『音楽的成長のための教育』音楽之友社、1971 年、288-303 頁。

Johan Huizinga: *Homo Ludens*, 1938. 高橋英夫訳『ホモ・ルーデンス』中央公論社、1993 年（20 刷）。

John Van Maanen, *Tales of the Field: On Writing Ethnography*, 1988、森川 渉訳『フィールドワークの物語 エスノグラフィーの文章作法』現代書館、1999 年、20-21 頁。

Lehmann, A. C., Sloboda, J. A. & Woody, R.H. *Psychology for Musicians*, Oxford University Press, 2007, pp. 43-60.

Lehmann, A. C. *The acquisition of expertise in music : Efficiency of deliberate practice as a moderating variable in accounting for subexpert performance*. In I. Deliege, & J. Sloboda (Eds.) *Perception and cognition of music*, Psychology Press, 1997, pp. 143-160.

Mursell, James. L. *Education for Musical Growth*, 『音楽的成長のための教育』美田節子訳 音楽之友社、1971 年、288-303 頁。

Roger Caillois: *Les Jeux et les Hommes*, 1967. ロジェ・カイヨワ、多田道太郎、塚崎幹夫訳『遊びと人間』講談社、2012 年（29 刷）、34-41 頁。

麻生武『「見る」と「書く」との出会い フィールド観察学入門』新曜社、2009 年、188-189 頁。

安彦忠彦、新井郁夫、飯長喜一郎、井口磯夫、木原孝博、児島邦宏、堀口秀嗣共著『新版 現代学校教育大事典』株式会社行政、2002 年、003 頁。

生田久美子、〔補稿〕佐伯胖『「わざ」から知る』東京大学出版会、1987 年、9-22 頁。

今泉明美、有村さやか、小川晃、小澤裕子「子育て支援における音楽表現遊びの実践についての一考察」『小田原女子短期大学研究紀要』第 42 号、2012 年、8-20 頁。

梅本堯夫「音楽的発達過程の研究（その 1）—音楽大学生と一般女子大学生の事例研究」『発達研究』第 8 巻、1992 年、163 - 178 頁。

梅本堯夫『音楽心理学の研究』ナカニシヤ、1999 年（2 刷）、287-288 頁。

梅本堯夫『子どもと音楽』東京大学出版会、1999 年、170-188 頁。

大村典子『ヤル気を引き出すピアノレッスン』音楽之友社、1982 年。

奥村直子「家庭内における音楽的コミュニケーションの諸相—ピアノをめぐる音楽的遊びを中心に—」『音楽教育実践ジャーナル』日本音楽教育学会 vol.6 no.1、2008 年、17-26 頁。

奥村直子「ピアノを弾きたいと言う動機形成は如何にしていられるのか—「正統的周辺参加論」の視点を参考に—」『教育方法学研究』日本教育方法学会紀要、第 35 巻、2009 年 35-45 頁。

奥村直子「問題行動のある子どもの母子関係改善への方途—ピアノ遊びの事例をとおして—」『児童学研究』聖徳大学児童学研究紀要 16、2014 年、11-20 頁。

片岡栄美「教育達成過程における家族の教育戦略—文化資本効果と学校外教育投資効果のジェンダー差を中心に—」『教育学研究』第 68 巻第 3 号、2001 年、259-273 頁。

片山順子、小方圭子、木山徹哉、太田光洋「親子関係支援としての音楽表現・やりとり遊び」『九州女子大学紀要』2004 年、第 41 巻 1 号、27 - 38 頁。

木下康仁『グラウンデッド・セオリー・アプローチ 質的実証研究の再生』弘文堂、2006 年（第 6 刷）、100-101 頁、180-183 頁。

小山静子「家庭の教育力の低下という言説」『人間フォーラム 13』京都大学大学院、人間・環境学研究科、2003 年、52 頁。

佐藤郁哉『フィールドワーク増訂版 書を持って街に出よう』新曜社、2007 年（増訂版 2 刷）、42 頁。

戈木クレイグヒル滋子『グラウンデッド・セオリー・アプローチ』新曜社、2008 年。

佐藤郁哉『フィールドワーク増訂版 書を持って街に出よう』新曜社、2007 年（増訂版 2 刷）42 頁。

志水宏吉『学力を育てる』岩波新書、2005 年。

砂村京子「学校における保健室・養護教諭の機能と役割に関する質的研究—養護教諭の生徒へのかかわり方の特徴に着目して—」聖徳大学児童学研究、博士論文、2015 年。

高橋たまき、中沢和子、森上史朗 共編『遊びの発達学 基礎編』培風館、1998 年（初版第 2 刷）、150 - 153 頁。

日本学術会議「我が国のこどもの成育環境の改善にむけて—成育空間の課題と提言—」子どもの成育環境分科会、2011 年、10-13 頁。

濱名陽子「幼児教育の変化と幼児教育の社会学」『教育社会学研究第 88 集』2011 年、87-102 頁。

星野圭朗『オルフ・シュールベルク理論とその実際』全音楽譜出版社、1979 年、28-29 頁。

本田由紀『「家庭教育」の隘路—子育てに脅迫される母親たち』勁草書房、2008 年、28-29 頁。

増井三夫、村井嘉子、松井千鶴子「実践場面における質的研究法」『上越教育大学研究紀要』第 25 巻、第 2 号、2006 年。

増井三夫「実践研究における Grounded Theory Approach の意義と可能性」『教育実践学研究』第 9 巻、第 2 号、2008 年。

箕浦康子編著『フィールドワークの技法と実際』ミネルヴァ書房、1999 年、91-92 頁。

山下薫子「『レッスン』に対する科学的アプローチの動向」『音楽教育学』第 43 巻 第 1 号、2013 年、26 頁。

『幼保連携型 認定こども園教育・保育要領』内閣府・文部科学省・厚生労働省、チャイルド本社、2014 年、3 月、5-23 頁。

ロナルド・カヴァイエ、西山志風『日本人の音楽教育』新潮社、1987 年、20-104 頁。

参考文献

- Colwell, R. Webster, P. R. eds (2011). *MENC Handbook of Research on Music learning, Volume 1, Volume 2*, Oxford University Press.
- David Walsh, *Selling Out America's Children* 小田玲子訳『テレビ汚染とアメリカの子どもたち』ハ潮出版社、1998 年。
- Erik H. Erikson, *Childhood and Society*, 仁科弥生訳『幼児期と社会 1』みすず書房、1977 年。
- Gergen, Kenneth. J. 永田素彦 深尾誠訳『社会構成主義の理論と実践—関係性が現実をつくる』ナカニシヤ出版、2004 年。
- Herbert, Read. *Education Through Art* 宮脇理、岩崎清、直江俊雄訳『芸術による教育』フィルムアート社、2001 年。
- Jerome S. Bruner, *The Culture of Education* 岡本夏木、池上喜美子、岡村佳子訳『教育という文化』岩波書店、2004 年。
- Lave, J. & E. Wenger, *Situated Learning Legitimate Peripheral Participation* 佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習』産業図書、1993 年。
- Manturzewski, M. *A biographical study of the life-span development of performing musicians. Psychology of Music. 1990, 18, pp. 112-139.*
- McDonald, Dorothy. T. & Simons, Gene. M. *Musical, Growth and development* 神原雅之 難波正明 里村生英 渡邊均 吉永早苗共訳『音楽的成長と発達』溪水社、1999 年。
- Mursell, James. L 共田武嘉津訳『音楽教育心理学』音楽之友社、1965 年。
- Philippe Aries, L' *Enfant Et La Vie Familiale*, 杉山光信、杉山恵美子訳『子供の誕生』みすず書房、1980 年。
- Sloboda, J. A., Davidson, J. W., Moore, D., & Howe, M. J. A. Formal practice as predictor of success and failure in instrumental learning. In I. Dliege (Ed), *Proceedings of the 3rd International Conference on Music Perception and Cognition*, 1994, pp. 125-126.
- 秋田喜代美、恒吉僚子、佐藤学編『教育研究のメソドロジー』東京大学出版会、2005 年。

浅見英夫「バスターンピアノメソッドについて」『東京家政大学研究紀要』 第19集 1979年。

市川浩『精神としての身体』勁草書房、1975年。

市川浩『〈身〉の構造』青土社、1997年。

市川浩『身体論集成』岩波書店、2001年。

岩田遵子『現代社会における「子ども文化」成立の可能性—ノリを媒介とするコミュニケーションを通して—』風間書房、2007年。

梅本堯夫『子どもと音楽』東京大学出版会、1999年。

大澤真幸『身体の比較社会学Ⅱ』勁草書房、1992年。

大里修二「乳幼児における音楽行動の発達過程」『日本保育学会大会研究発表論文集』1971年～2004年。

小笠原道雄『フレーベルとその時代』教育の発見双書、玉川大学出版部、1994年。

小川博久「幼児の特質と音楽的表現」『子どもと音楽6巻』同朋舎、1988年。

小川博久『保育原理2001』同文書院、1988年。

小川博久『保育援助論』生活ジャーナル、2000年。

小川博久『「遊び」の探究』生活ジャーナル、2001年。

加宮葵『子どもが音楽を好きになるとき』音楽之友社、1997年。

荻谷剛彦、志水宏吉『学力の社会学』岩波書店、2004年。

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科京都大学等南アジア研究所編『京大式フィールドワーク入門』NTT出版、2006年。

鯨岡峻『原初的コミュニケーションの諸相』ミネルヴァ書房、1997年。

小泉文夫『音楽の根源にあるもの』青土社、1977年。

古賀正義『＜教えること＞のエスノグラフィー』金子書房2001年。

小島律子「生成の原理に基づく音楽家単元構成における「経験」と「教材」のかかわり」『学校音楽教育研究』Vol.17、2013年。

小林れいこ、水戸美津子「配偶者がいない高齢男性のデイケアへの適応に関する研究」『日本在宅ケア学会誌』Vol.20、No.1、55 - 62頁、2016年。

齊藤百合子「音楽的経験における意味生成を原理とした小学校音楽家授業構成の研究」大阪教育大学大学院博士論文、2010年。

佐藤郁哉『フィールドワーク 書を持って街に出よう』新曜社、1999年（初版14刷）。

下田和夫・西村政一編著『幼児の音楽と表現』建帛社、2002年（第15刷）。

重永洋子「子どものためのピアノ教則本について」『長崎県立女子短期大学研究紀要』1977年。

志水宏吉編著『教育のエスノグラフィー』嵯峨野書院、1998年。

志水宏吉『学力を育てる』岩波新書978、岩波書店、2010年（10刷）。

志水宏吉『「つながり格差」が学力差を生む』亜紀書房、2014年。

菅原和孝『フィールドワークへの挑戦』世界思想社、2006年。

高橋巖『シュタイナー教育入門』角川選書、1986年(5版)。

中村雄二郎『場所』弘文堂、1989年。

西村清和『遊びの現象学』勁草書房、1989年。

西原稔『ピアノの誕生』講談社、1995年、220 - 254頁。

橋本外記子「幼児の音楽表現の形成について」『日本保育学会大会研究論文集』37-40、1984年、1986年、1987年。

橋本のぞみ、橋本外記子「幼児学童の音楽表現について」『日本保育学会大会研究論文集』47-49、1994年、1995年、1996年。

広井多鶴子・小玉亮子『現代の親子問題』日本図書センター、2010年。

広田照幸『日本人のしつけは衰退したか「教育する家族」のゆくえ』講談社現代新書1448、2004年（14刷）。

藤田芙美子・大宮真彦『幼児と音楽』有斐閣、1985 年。

本田由紀『多元化する「能力」と日本社会 ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT 出版、2016 年（12 刷）。

本間友巳「不登校児童の母親とのカウンセリング過程」『日本カウンセリング学会』 第 32 巻 第 2 号 1999 年。

増井三夫、福山暁雄、鈴木智子、齋京四郎「保健室の会話記録から相互行為をどこまで読み取れるか——ハーバーマス『コミュニケーション的行為論』の可能性（1）——」『上越教育大学研究紀要』第 24 巻、第 1 号、2004 年。

増井三夫、福山暁雄、鈴木智子、齋京四郎「保健室の会話記録から相互行為をどこまで読み取れるか——ハーバーマス『コミュニケーション的行為論』の可能性（2）——」『上越教育大学研究紀要』第 24 巻、第 2 号、2005 年。

増井三夫、村井嘉子、松井千鶴子「GTA おけるレベル 1 の概念化—実践場面における質的研究法（2）」『上越教育大学研究紀要』第 26 巻、第 2 号、2007 年。

増井三夫、中田秀樹「実践場面における GTA (Grounded Theory Approach) の可能性—マイクロ分析とオープン・コーディングの再検討」『上越教育大学研究紀要』第 27 巻、2008 年。

増井三夫「GTA (Grounded Theory Approach) におけるフォーマル理論の可能性」『上越教育大学研究紀要』第 28 巻、2009 年。

増井三夫、杉田かおり「文章構成におけるメタ認知活動の質的研究—大手町小学校 1 年生の事例研究」『上越教育大学研究紀要』第 30 巻、2011 年。

宮内洋『体験と経験のフィールドワーク』北大路書房、2005 年。

無藤隆『早期教育を考える』NHK ブックス、1998 年。

やまだようこ『人生を物語る — 生成のライフストーリー』ミネルヴァ書房、2000 年。

【本論分の基礎となる既発表論文】

奥村直子「家庭内における音楽的コミュニケーションの諸相—ピアノをめぐる音楽的遊びを中心に—」

『音楽教育実践ジャーナル』日本音楽教育学会 vol. 6 no. 1、2008 年、17-26 頁。

奥村直子「ピアノを弾きたいと言う動機形成は如何にしてなされるのか—「正統的周辺参加論」の視

点を参考にして—」『教育方法学研究』日本教育方法学会紀要 第 35 巻、2009 年、35-45 頁。

奥村直子「問題行動のある子どもの母子関係改善への方途—ピアノ遊びの事例をとおして—」『児童

学研究』聖徳大学児童学研究紀要 16、2014 年、11-20 頁。

資 料

フィールド観察記録一覧表

フィールド記録ビデオデータ:139件

「ピアノ遊び」表出事例:115件

分析対象事例:19事例

分析場面:25場面

(A子=A、B男=B、C子=C、D男=Dで表示)

No.	年	月	日	時間	事例	場面	在宅者	「ピアノ遊び」行動者	備考
1	2000	11	14	16:36~	事例1	場面1・場面2	B・A・母	B・A・母	住居見取り図①
2			20	16:46~	事例2	場面3・場面4	B・A・母	B・A・母	
3			27	17:33~			B・A・母	B・A・母	
4	2006	7	31	13:00~			D・母	なし	住居見取り図②
5		8	1	13:52~			D・母	なし	
6			4	13:00~	事例3	場面5	B・A・C・D・母	B・A・D	母にインタビュー
7			7	14:28~			D・母	D	
8			9	14:00~			B・A・C・D・母	A・C・D	
9			10	16:30~			B・A・C・D・母	B・A・C	
10			18	16:30~			B・A・C・D・母	A・C	
11			26	16:30~			B・A・C・D・母	A	
12			28	16:30~			B・A・C・D・母	A	
13			29	16:30~			B・A・C・D・母	B・A・C・D	
14		9	6	17:00~	事例4	場面6	B・A・C・D・母	B・A・C・D	母の撮影
15			11	16:30~			B・A・C・D・母	A・C	
16			18	20:00~			B・A・C・D・母・父	A	母の撮影
17		10	1	17:30~			B・A・C・D・母	B	母の撮影
18			18	17:00~			B・A・C・D・母	A	
19		11	15	17:00~			B・A・C・D・母	A	
20			29	17:00~			B・C・D・母	B	
21		12	8	14:59~			B・C・D・母	B	
22			20	14:30~			A・C・D・母	なし	
23			27	16:30~			B・A・C・D・母	なし	
24	2007	2	27	17:19~			B・A・C・D・母	B	
25		3	13	17:06~			B・A・C・D・母	B・D	
26			22	16:00~			B・A・C・D・母	B・C	
27			29	17:40~			B・A・C・D・母	A・B・C	
28		4	4	17:09~			B・A・C・D・母	B	
29			10	16:30~			B・A・C・D・母	B・A	
30		6	20	14:42~			B・A・C・D・母	B・C・D	
31			27	15:51~	事例5	場面7	B・A・C・D・母	B・A・C・D	
32		7	4	17:12~			B・A・C・D・母	A	
33			18	20:09~			B・A・C・D・母	なし	
34		8	1	16:07~			B・A・C・D・母	A	
35			9	16:25~			B・A・C・D・母	なし	
36			17	14:30~			B・A・C・D・母	なし	
37			29	16:44~	事例6	場面8・場面9	B・A・C・D・母	B・A	
38		9	5	17:28~			B・A・C・D	なし	
39			12	16:17~			B・A・C・D・母	B・A	
40			19	16:18~			B・A・C・D・母	B・A・C	

41			25	17:00~	事例7	場面10	B・A・C・D・母	B・A	
42		10	3	17:27~			B・A・C・D・母	B・A・C	
43			10	15:53~			B・A・C・D・母	C	
44			17	16:16~			B・A・C・D・母	B・A	
45			23	15:21~			B・A・C・D・母	B・A	
46			31	16:38~			B・A・C・D・母	A	
47		11	8	16:43~			A・C・D・母	A・C・D	住居見取り図③
48			15	16:28~			A・C・D・母	A・C	
49			28	17:25~			B・A・C・D・母	B・A	
50		12	5	16:30~			B・A・C・D・母	B・A・C	
51			19	16:18~	事例8	場面11	B・A・C・D・母	B・A・D	
52	2008	1	9	16:45~			B・A・C・D・母	A	
53			16	16:15~			B・A・C・D・母	A・C	
54			23	17:14~			B・A・C・D・母	なし	
55			30	16:20~			B・C・D・母	B・C	
56		2	6	17:12~			B・A・C・D・母	B	
57			13	16:45~	事例9	場面12・場面13	B・A・C・D・母	B	
58			20	17:05~	事例10	場面14	B・A・C・D・母	B	住居見取り図④
59			24	9:52~	事例11	場面15・場面16	B・A・C・D・母・父	B・A・C・D・父	母の撮影
60			27	16:28~	事例12	場面17	B・A・C・D・母	B・A・C・D	
61		3	1	17:00~			B・A・C・D・母	B・C	母の撮影
62			5	17:26~			B・A・C・D・母	D	母の撮影
63			12	15:01~			B・A・C・D・母	B・A・C・D・母	
64			19	17:20~			B・A・C・D・母	A	
65			30	10:04~			B・A・C・D・母・父	B・A・C・父	母の撮影
66		4	1	12:41~			B・A・C・D・母	B・A	母の撮影
67			9	17:09~	事例13	場面18	B・A・C・D・母	B・A・C・母	
68			16	16:30~			B・A・C・D・母	A	
69			23	17:09~			B・A・C	B	
70		5	21	17:10~	事例14	場面19	B・A・C・D・母	B・A	
71		6	11	15:13~			B・A・C・D・母	B・A・C・D・母	
72			18	17:15~			B・A・C・D・母	A	
73			26	20:29~	事例15	場面20	B・A・C・D・母・父	B・A・D	遅い時間帯の観察
74		7	2	17:17~			B・A・C・D・母	B・A・C	
75			9	17:25~			B・A・C・D・母	C	
76			16	17:15~			B・A・C・D・母	B・A・C	
77			24	9:00~			B・A・C・D・母・父 祖父・祖母	B・A・C・D・父・母・祖父	Y家が帰省した父の実家に訪問し観察。トーン チャイム・ギターで合奏
78		8	8	16:10~			B・A・C・D・母	A	
79			20	16:00~			B・A・C・D・母	なし	
80		9	3	16:00~			B・A・C・D・母	なし	
81			17	17:45~			A・C・D・母	A・C・D	
82			24	16:00~			B・A・C・D・母	A	
83		10	1	17:00~			B・A・C・D・母	A	
84			8	17:00~			B・A・C・D・母	B・A	
85			9	13:00~			B・A・C・D・母	B・A	住居見取り図⑤ アップライトピアノを預かり、ピ アノが2台になる。
86			15	17:30~			B・A・C・D・母	A・C・D	
87			23	19:40~			B・A・C・D・母	A・C・D・母	
88			30	17:30~			B・C・D・母	B・C	
89		11	6	17:31~			C・D・母	A・D・母	
90			19	17:00~	事例16	場面21	B・A・C・D・母	B・A	

91			26	17:00～			B・A・C・D・母	B・A	
92		12	10	16:40～			B・A・C・D・母	A	
93			29	15:00～			D・母	なし	母にインタビュー
94	2009	1	6	17:19～			B・A・C・D・母	A	
95			8	17:00～			B・A・C・D・母	A	
96			21	16:30～			B・A・C・D・母	B・A・C	
97			22	16:30～			B・A・C・D・母	B・C・D・母	
98			29	17:33～			B・A・C・D・母	B・A・D・母	
99		2	4	17:30～			B・A・C・D・母	A・B	
100			18	16:30～			B・A・C・D・母	B・A・C・D	
101			25	17:00～			B・A・C・D・母	A	
102		3	4	17:00～	事例17	場面22	B・A・C・D・母	B	
103			11	17:15～			B・A・C・D・母	B	
104			25	17:15～			B・A・C・D・母	B・A・C・D	
105		4	9	17:30～			B・A・C・D・母	A・D	
106		5	14	17:40～			B・A・C・D・母	A	
107		6	17	16:40～			B・A・C・D・母	A	
108		7	15	17:20～			B・A・C・D・母	A・C	
109		8	3	17:30～			B・A・C・D・母・父	B・A・C	
110			11	17:00～			B・A・C・D・母	A	
111			30	15:00～			B・A・C・D・母	B・D	
112		9	4	19:25～			B・A・C・D・母	なし	ピアノ調律師の作業
113			30	17:20～			B・A・C・D・母	A	
114		10	14	17:00～			B・A・C・D・母	B・A	
115		11	18	18:40～			B・A・C・D・母	なし	
116		12	2	17:00～			B・A・C・D・母	なし	
117			9	17:27～			A・C・D・母	A	
118			16	17:30～			B・A・C・D・母	B	
119			24	18:40～			B・A・C・D・母・父	A	
120	2010	1	6	17:30～			B・A・C・D・母	A	住居見取り図⑥男の子部屋・女の子部屋
121			27	17:30～	事例18	場面23・場面24	B・A・C・D・母	B・A	
122		8	12	17:00～			B・A・C・D・母	B・A	
123			19	17:40～			A・C・D・母	A・D・母	
124			25	16:30～			B・A・C・D・母	B・C・D・母	
125			31	16:50～			B・C・D	なし	住居見取り図⑦・転居
126		9	23	16:50～			B・C・D・母・父	なし	父母インタビュー
127		10	20	17:30～			B・A・C・D・母	B・A	
128		11	10	17:05～			B・A・C・D・母	なし	
129			24	20:00～			B・A・C・D	B・A	
130	2011	1	26	19:30～			B・A・C・D・父	なし	
131		2	9	17:00～			B・D・母	B	
132			16	17:50～			B・C・D・母	なし	
133			23	17:10～			B・A・C・D・母・祖父	B・A・C・D	母方の祖父
134		3	2	17:00～			B・A・C・D・母	なし	
135			30	17:10～			B・A・C・D・母	なし	
136		4	6	17:00～			A・C・D・母	なし	
137			20	18:00～			B・A・C・D・母	なし	
138			27	19:00～			B・A・C・D・母・父・祖母	B	母方の祖母
139	2013	12	4	19:00～	事例19	場面25	B・A・D・母・父	B・A	住居見取り図⑧・転居

「ピアノ遊び」のカテゴリーⅠ【ピアノで遊び、表現する意欲】

カテゴリー	概念	特性	バリエーション	ローデータ
Ⅰ【ピアノで遊び、表現する意欲】	①ピアノに興味を持ち鳴らしたい	1. ピアノで遊ぶ姿に惹きつけられ (1-1)	ピアノで遊ぶ姿に興味を持ち惹きつけられ	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノの鍵盤を自由に鳴らして遊んでいるのを目で追って見て ・A子がピアノを激しく鳴らす姿を見て笑いかけ ・指でピアノの鍵盤を押して鳴らし ・首をグーッと左に回し後ろを振り向いて、A子の姿を追って見ている
		6. ピアノの遊びに興味を持ち鳴らしたい (2-3)	ピアノで遊ぶ楽しそうな姿を見て鳴らそうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノを弾いて遊んでいるのを目で追って見て ・ピアノに這って近づいて ・ピアノの椅子につかまり立ちをして、左手を伸ばしピアノの鍵盤を触ろう ・二人が歌いながら弾くのを椅子につかまりじっと見て ・背伸びをして手を鍵盤に伸ばし、やっと届いた一番低い音を鳴らす
			遊びに誘ってもらう	<ul style="list-style-type: none"> ・「Aちゃんもやるけど、B君もやる？教えてあげる」と声をかけ ・「ヤワラちゃんの歌やってあげる」と言って、鍵盤をクラスターで何回も鳴らす
		7. ピアノへの強い意欲 (2-4)	ピアノで遊びたいと訴える	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノの椅子の横に掴まり立ち ・「あ——」とピアノに合わせ声を出し ・「う——」と強い調子の声を出し
	②一緒にピアノで遊びたいという意欲的行動	9. 一緒に遊びたい強い意欲 (2-4)	一緒にピアノで遊びたい強い意欲を示す	<ul style="list-style-type: none"> ・「う～う～」と不満そうな声 ・「今度、Aちゃんが弾く」 ・鍵盤の色々な位置で鳴らす ・また這ってピアノに戻り、椅子に掴まって立ち上がり、ピアノに両手を伸ばす ・「やってる」と言う ・両手でしがみつくように掴まり、ゆらゆらしながら鍵盤を鳴らす

		2. ピアノで遊ぶのを認められ (1-1)	一緒に遊ぶのを受け入れられる	<ul style="list-style-type: none"> ・「ダメ〜、Aちゃんのなんだから」 ・積木で鍵盤を叩く ・「歌ってる、B君」と優しく
		3. やる気が（A子の）遊びを誘う (1-2)	B男が積極的にピアノを鳴らし、A子の遊びを引き出す	<ul style="list-style-type: none"> ・大きく腕を振って繰り返しピアノの鍵盤を叩き始める ・B男がピアノを叩く様子 ・「やってる、やってる」と面白がり ・優しい可愛い声で「やってるう〜、やってえ〜〜〜る〜」と節をつけて歌い
		4. 一緒にピアノで遊ぶ楽しさ (1-2)	一緒にピアノで遊んでもらう	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノで遊ぶ姿から目を離さずに見て ・B男の左手を取り、自分の右手で優しく握りピアノを弾かそう ・されるまま手を預けて鍵盤を鳴らし
			興味を持ち一緒に遊びたい	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノを両手で鳴らしながらニコニコして片足で飛んだり跳ねたりして遊ぶ ・時々ニコツとしながら見つめて ・体をA子の方に傾け左手を伸ばし、横で跳ねてピアノを鳴らしているA子に触る ・「えへ、面白いよ」と楽しそうにピアノに掴まり飛び跳ねたりして鍵盤を鳴らす
		8. 一緒にピアノで遊ぶ喜び(2-4)	一緒にピアノで遊ぶ喜びに溢れ	<ul style="list-style-type: none"> ・元気に両手を動かし鍵盤を力強く鳴らし ・リズムに合わせて勢いよく膝の屈伸を繰り返しながら鍵盤を元気に鳴らす ・「あ〜あ〜」と歌とタイミングを合わせて声を出し
	③聴いてまねて弾き遊ぶ	5. 見てまねて鳴らす(1-2)	A子のようにピアノを鳴らしたい	<ul style="list-style-type: none"> ・A子の活発な動きを目で追いながら嬉しそうな表情で見て ・ニコニコして嬉しそうに両手をバタバタ鍵盤の上で動かし ・A子がピアノを鳴らしたのと同じような勢いで、前のめりになってピアノを両手で鳴らす
		13. 曲をまねて遊び弾き(4-6)	好きな曲をまねて弾き楽しむ	<ul style="list-style-type: none"> ・A子がいつも弾く『となりのトトロ』のメロディーを、記憶を頼りに片手で何回も

				繰り返し弾き始め
		12. ピアニストのまね (4-6)	名曲の演奏をまねて体を使って楽しむ	・ピアノの椅子に座り、自動演奏のジャズの音楽に合わせて身体を大きく動かし、ピアノを弾く格好をまねしてふざけて笑っていた
	④自身の気持ちをピアノで表現	10. ピアノを弾いて気持ちを表現 (3-5)	嬉しくてピアノを弾く	・嬉しそうにスキップをしてピアノに行くと、立ったまま『エリーゼの為に』の最初のミレミレの部分を元気よく弾き始める
			表現したいと練習	・先はつかえて上手く弾けない ・右手を何回も弾き、次に左手の伴奏も付け考えながら暫く弾いて
		50. 嬉しい気持ちをピアノ曲で表現 (17-22)	嬉しさを咄嗟にピアノで表現したくなった	・急にピアノに行き宿題曲の「牧歌」を弾き始め ・何を言われたのか理解できずに「え〜？」とポカンとした表情 ・首をすくめて笑い「そうだね」 ・「気分いいと何か弾きたくなる」
			小型ブロックが完成した嬉しい気持ちを曲で表現	・もう一度「牧歌」を元気よく弾き ・何度も「牧歌」を表情豊かに弾いてから、合格している曲を次々弾き続け

「ピアノ遊び」のカテゴリーⅡ 【ピアノ技術の競合】

カテゴリー	概念	特性	バリエーション	ローデータ
Ⅱ 【ピアノ技術の競合】	⑤ ピアノ技術向上への願望	11. A子の弾くピアノへの憧れ (3-5)	A子の演奏を綺麗だと思っている	・入れ替わってA子がピアノに行き『エリーゼの為に』を軽がると両手で弾き始め ・「Aちゃんはどうか。綺麗な音楽をしていますね」
		15. 技術的応援を求める (5-7)	諦めずに弾き続けるB男が、A子の関心を誘う	・読譜をしながら『およげたいやきくん』を何回も繰り返し弾くが、なかなか上手く弾けない ・B男の弾く曲をハミング ・『およげたいやきくん』でしょ」と笑顔で優しく言う ・B男はA子に向かってニコっとしてまた弾き始めるがやはり上手く弾けない ・「まだフラットとかが分かってないかもしれない」
				・A子に教えて欲しそうに「分かんない」と笑顔で言う
	⑥ピアノ技術向上への競い合い	18. B男の熱心さがA子の反発を買う (6-8)	弾きたい思いが強く練習を始めた	・うす暗い部屋で小さな音でピアノを弾き始める
			熱心な取り組みが、A子の反発を買った	・メロディーを茶化すように節をつけ歌い ・椅子に両手を伸ばし、ストッパーをいじろう ・「そうだよ」と人ごとのように
			A子の言動に対して批判的な発言	・「そうだよなんだって、Aちゃん」
		30. ライバル視される (9-13)	注目されA子に焦りを感じさせた	・口笛で吹いて ・即座に『バラード』と答え ・「なんで？」 ・「なんでよぉ～ぉ～！」と不機嫌
			A子に焦りを感じさせライバル感情を	・急に大きな声で「う～ん！」と言って、床にあった自分のランドセルをB男の椅

			持たれた	子に向かって蹴飛ばす ・「あ〜あ〜！皆そっちへ行って！うるさい！」
		14. 練習を妨害されたことに強く抗議（4-6）	弾くことを妨害され文句を言う	・A子を振り向き目が合う ・邪魔するように違う曲を歌い始める ・「ね——え！」と大きな声を出し、「もう分かんなくなっちゃったじゃない」 ・わざと大声で歌い始め
			ピアノを邪魔され取っ組み合いで抗議	・B男はA子とにらみ合い、肩をいからすような格好をして立ち上がりA子につかみかかり、取っ組み合いが始まる ・B男はA子に押さえ込まれてしまい、A子が常に優勢
			ピアノを弾きたい感情をぶつけ解消	・押さえ込みをすり抜けて喧嘩が終結 ・ケロツとした表情
	⑦ピアノ共有への交渉	16. ピアノを占有したい気持ちを表わす（5-7）	貸したくない気持ちを表わす	・「貸して」と言う ・絵本楽譜の曲を弾きたい ・まじめな顔をして「貸してじゃないよ」
		21. 弾きたい思いを強く主張（6-9）	勝手にピアノを弾き続けるA子に、自分の弾く権利を主張する	・椅子に座って「メヌエット」を弾き続け ・走って戻り小さな声で「ね〜、Bちゃんが、弾いていたんだよ」
			B男はピアノを弾く権利を強い口調で主張し、練習を始める	・椅子から立ち上がるが、弾くのを止めようとし ・「ねえ〜、止めて、何で止めないの〜」と大きな声で ・弾くのを止め
		20. 争いを避ける行動（6-9）	B男の練習がA子のピアノで中断	・「メヌエット」をB男の弾いていた鍵盤の位置でパラパラと弾き
			ピアノの取り合いを避けA子の出方を見る	・黙って座って見ていたが、いつまでもA子が「メヌエット」を弾くのを止めないの で、一旦ピアノから離れ

		17. 互いの弾きたい気持ちを受容 (5-7)	ピアノへの要求が、A子に受容された	<ul style="list-style-type: none"> ・立ち上がり「じゃあ見せて」と自分の方からピアノへ弾んだ感じで駆けて行き ・立ったまま片手でメロディーを弾き ・椅子に座ったまま1番を歌い、続いて2番3番と歌い続ける ・歌に合わせて繰り返しピアノを弾いてあげ
			A子の気持ちを受容しピアノを譲る	<ul style="list-style-type: none"> ・歌の絵本のページをめくろうと ・嬉しそうに弾き始め ・黙ってA子に椅子を譲りピアノを交代
		43. 互いの思いを理解し共有 (14-19)	気持ちがA子に尊重される	・「ねえ、Bちゃん、ピアノ飽きたら後で弾かせて」
			弾きたい気持ちを汲んで要求に快く応じる	<ul style="list-style-type: none"> ・「いいよAちゃん」 ・ピアノから離れる ・素早くピアノに向かい弾き始める
	⑧ピアノ技術向上の認め合い	22. 対等にピアノが弾けた手応え (7-10)	ピアノへの自信が芽生え、A子の行動を受容	<ul style="list-style-type: none"> ・またピアノに戻り弾き始める ・追いかけてピアノに行く ・B男が弾いている右横に立ち、黙ったままB男に合わせて弾き ・拒絶せずA子が弾くのに任せ、自分は黙って繰り返し弾き続け
			調和しようとする演奏	・B男がゆっくり弾くとA子もゆっくり弾き、B男が時々止まりそうになると、A子はB男を待ちながらゆっくり弾いて、B男が追いつくとテンポを合わせて弾いて
			対等にピアノが弾けた手応え	<ul style="list-style-type: none"> ・段々弾けるようになり、スピードを上げる ・A子もスピードを上げ互いに速いスピードでピツタリと弾き合う
			A子に技術的成長を認識させた	<ul style="list-style-type: none"> ・更にスピードを上げて弾こうとする ・ピアノを離れてB男の曲に合わせておどけた格好をする。 ・嬉しそうにA子の姿を見て「ふっ」と笑い笑顔

				・「速すぎ」と笑う。
		26. ピアノ演奏が（A子に）好感を持たれる(9-12)	ピアノ演奏が好感を持たれている	・曲が軽快に心地よい感じで流れている ・A子も「確かに」
		25. オリジナルな表現が（A子に）尊重される(8-11)	演奏の仕方をオリジナルに工夫し表現	・普通の弾き方ではなく、左右の手を逆にしたオリジナルな弾き方 ・真剣な表情をして考えながら何度も繰り返し弾いて
			ピアノに取り組む真剣さを尊重された	・鍵盤に手を伸ばし ・A子はピアノの音は鳴らさず
		42. ピアノ表現が（A子に）高く評価される(13-18)	ピアノを通してA子に自分を理解してもらえた	・「そう」と自分のことのように ・B男の弾くメロディーを歌う ・「Bちゃんはそういうのが好きだから」
			ピアノ表現が最大の評価で認められる	・ペダルを付けて雰囲気を出して弾き ・歌いながら両手を広げてB男が座るピアノの椅子に踊るようにふわっと抱きつく ・表現の仕方を工夫するかのように、考えながら表情豊かな弾き方を何度も試し ・最初のページは曲として成立し ・B男の曲をハミングし ・「パパみたい」
		40. 成長が（A子の）決意に繋がる(12-17)	B男の熱意と努力が、A子の決意に繋がる	・「Bに先を越されてしまう。でも大丈夫だよ・・・」 ・「それ難しいよ、頑張って！応援してるから」 ・「Bに抜かされたかも、まあいいや」 ・「・・・っていうかさ、（楽譜を）見てるだけでやってるから、ちょっと凄いかも・・・」 ・「Aも抜かされないように頑張る」

「ピアノ遊び」のカテゴリーⅢ 【憧れを抱いて努力する充実感】

カテゴリー	概念	特性	バリエーション	ローデータ
目【憧れを抱いて努力する充実感】	⑨憧れを抱き達成への期待感	32. 憧れの曲に挑戦する嬉しさを発言（11-15）	憧れの曲を弾ける嬉しさを発言し、A子を驚かせる	・「昨日もう、ちょっと（月の光）弾けるようになった」 ・「え！どうして？」 ・「昨日やったもん、楽譜を見て」
			憧れの曲を弾きたい強い意欲を示す	・まだピアノの横に立ち待っている ・ずっと弾きたいと思っているB男は「うん」 ・「うん、待ってる」
		34. 憧れの曲を目指す熱意（11-16）	真剣に繰り返し弾き、憧れの曲が弾けた	・「解んない～」 ・「右手は解るんだけど、左手解んない」 ・『月の光』の冒頭部分を両手で弾こう ・父の歌うリズムに合わせて何回も繰り返し弾いて ・B男が右手、父が左手を弾くと、やがて曲として成立し始め ・「うん、1ページできた」と笑顔で嬉しそう
			意欲的に憧れの曲を弾く熱意と努力	・笑顔で次々ページをめくる ・『幻想即興曲』のページを開き、冒頭の左手の伴奏部分を真剣に弾こうとするが上手く弾けない ・右手のメロディー部分を弾こうとするが、これも難しくてなかなか上手く弾けない ・何回も何回も真剣に繰り返し弾き ・片手ずつのデュエットを成立させる
		46. 納得の演奏を追及（15-20）	丁寧に納得する演奏を目指す努力	・アドバイスを受けた箇所を丁寧に情感を込めるように表情をつけて弾く ・「疲れた～」と言うのだが、今度は楽譜を見ながらゆっくりと音を確認するように丁

	⑩ 忍耐強く 挑戦する持 続性	29. レベルの高い曲を体力の限 界まで弾き続ける情熱 (9-13)		寧に弾き始める
			憧れの曲を弾きたいと意欲を持って 弾く	<ul style="list-style-type: none"> ・「ああ疲れた～」と言って椅子の上で体育座り ・『エリーゼの為に』を両手で ・『バラード』をつっかえながら弾き
			自分の力で読譜しピアノを弾こうと 取り組む	<ul style="list-style-type: none"> ・「分かんない、楽譜を見ないと分かんない」 ・「忘れちゃった、もう全然記憶にない。読めない、分かんない」 ・「ああ、分かんなくなっちゃった。よく見てもさあ」 ・根気強く何度も繰り返し読んで弾いて
			難しい曲が弾けた自信から、憧れの曲 への挑戦	<ul style="list-style-type: none"> ・「あ～そうか！ママ、ちょっと分かってきたよ」 ・両手で弾けるようになって来る ・『幻想即興曲』の冒頭をゆっくり右手で少しだけ弾いて
			弾く楽しさで、体力の限界まで挑戦す る気持ち良さ	<ul style="list-style-type: none"> ・椅子の背によりかかり、首を後ろにそらし「あ～～～あっ、う～～～疲れた」 ・ピアノを止める気配はなく、ニコニコして家族を見ながら暗譜で弾ける得意な曲を弾いて ・「疲れた、ずっと弾いていたから」 ・「1 時間 30 分？」 ・ピアノの鍵盤に倒れ込む ・蓋を閉めピアノによりかかり、「はああ～」とため息
		38. 憧れの曲に対し妥協せず取 り組む努力 (12-17)	高度な曲を自力で弾こうとする熱意 と根気と努力	<ul style="list-style-type: none"> ・『月の光』を譜読みしながら弾いているが「分かんない」と呟く ・音がなかなかうまく繋がらないでいる ・『結婚行進曲』のさわりを弾いて ・「難しい」と言いながら『幻想即興曲』を両手でゆっくり合わせ

				<ul style="list-style-type: none"> ・『月の光』を両手でゆっくり弾いた ・ペダルを付けて雰囲気を出して弾き始める ・『幻想即興曲』の楽譜を開いてしばらく考えてから何回も弾いていたが、やがて両手が正確に合い始め
			体力の限界を超えても、ピアノを弾き続ける情熱に溢れた姿	<ul style="list-style-type: none"> ・「疲れた～」と立ち上がる ・『エンターティナー』や『幻想即興曲』を弾く
		52. 憧れの曲に意欲を燃やし忍耐強く弾く持続力(18-24)	月日をかけて自力で弾いてきた	<ul style="list-style-type: none"> ・モーツァルトの『ソナタ (K. 331)』の『テーマ』を両手で弾き ・『テーマ』と『バリエーションⅠ』の前半までは両手で合わせて弾ける
			憧れの曲を弾きたいとの強い思いで取り組む	<ul style="list-style-type: none"> ・『バリエーションⅠ』の後半部分、『バリエーションⅡ』、『バリエーションⅢ』の右手などを譜読みしながら一音一音諦めずに最後まで弾き ・難しい数式を解いているかのよう
	⑪憧れの曲を夢中で弾く充実感	33. 憧れの曲に夢中(11-16)	憧れの曲が弾けることが嬉しくて夢中	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノに走って行き、憧れの曲である『月の光』の楽譜を広げ、冒頭部分を何度も繰り返し弾き ・B男は集中して音符を1つ1つ読みながら真剣に取り組んで弾いて
		35. 集中し弾けた満足感(11-16)	集中して真剣に弾いた満足感	<ul style="list-style-type: none"> ・父の胸に寄りかかり、「疲れた～」 ・「疲れるねえ～」と笑顔で ・伸びをしながら大欠伸
		48. レベルが上の曲に挑戦する楽しさ(16-21)	レベルが上の曲を弾けるようになってきた	<ul style="list-style-type: none"> ・進度よりずっと先の『バラード』やレベルの高い『月の光』を暗譜で途中部分まで ・『貴婦人の乗馬』のスケールが連続する最後の部分を弾き始める
			憧れの曲を弾くことで自分の可能性を探っている	<ul style="list-style-type: none"> ・父が好んで弾いているモーツァルトの『ソナタ (K. 331)』を弾き始める ・楽譜を出して両手でテーマの部分を弾き始め ・『バリエーションⅠ』も音を探りながら熱心に弾いて

				・手を止めて楽譜を読み取ろうと集中して考えてから、また弾き始め
		37. 難曲を弾ける喜び(12-17)	難曲を弾けるようになった喜びに溢れる気持ち	<ul style="list-style-type: none"> ・帰宅すると真っ先にピアノを弾き始める ・最初はピアノの音量が小さく絞ってあり殆ど聴こえない ・『幻想即興曲』をゆっくり譜読みしながら片手練習し、 ・『月の光』を繰り返し弾いて ・ピアノの音量が少しずつ大きくなり部屋中に響き
		53. 実力より高い曲に取り組む充実感(18-24)	難しさ自体を面白がり、自分の可能性に挑戦する楽しさ	<ul style="list-style-type: none"> ・『バリエーションⅣ』に進むと「あ、ここから分かんない、全然また」と言いながら階名を読み上げ ・「あ、そういうことか！」と一瞬分かったかのような発言 ・「あ～！う～！もう無理。死んじゃう」と呟く ・ページをめくり笑いながら振り向く
			弾きこなそうと取り組んだ満足感	<ul style="list-style-type: none"> ・『トリオ』の最後の2小節を「こうか！」と言い、力強く両手で弾き ・満足げな表情 ・「ずっと弾いてた～～」と笑顔で

カテゴリーⅣ【共に歌い弾く楽しさを享受】

カテゴリー	概念	特性	バリエーション	ローデータ
Ⅳ【共に歌い弾く楽しさを享受】	⑫ ピアノに 合わせ歌う 一体感	49. 共にハミング (16-21)	嬉しさで何回もハミングし、共に楽しむ	・『ソナタ』をハミングする ・口笛で『ソナタ』を吹いて ・何回も『ソナタ』をハミングする
		36. ピアノが歌を誘い出す (11-16)	ピアノが（A子の）歌を誘う	・傍に来て、メロディーを気持ち良さそうに歌う
		31. 楽しく踊れる豊かな表現 (10-14)	楽しく踊れるように弾く緩急自在なピアノ表現	・エネルギーに『蒸気機関車』を弾き始める ・踊りたくなるように『タランティラ』を激しいスピードで弾く
		24. 曲で楽しい雰囲気 (8-11)	心情を汲んで楽しい雰囲気の曲を弾いた	・『猫ふんじゃった』の最初の部分を少しだけ弾く
			楽しい雰囲気の曲は、A子のおどけた表現を引き出す	・「ねこ・ふん・じゃっ・た～」とリズムを変えて、おどけた感じで歌い ・すぐA子の歌に合わせて弾き始める
		23. 気持ちをピアノで励ます (8-11)	気まずさをピアノで受容し励ます	・B男の弾く曲に合わせて「ミ～ソ～ド～ミ～」と階名で歌い始め ・A子に合わせるようにピアノを弾き ・歌っているA子の声が大きくなる
	⑬ 連弾による音楽の生成	45. 心情を合わせ美しい表現 (15-20)	二人が心情を合わせ美しい連弾を弾こうとする	・「はいはいはい、じゃあやろう」 ・「だめだめ、Aちゃんがやるから」 ・同じ椅子に座り一緒に『風の谷のナウシカ』の連弾を始め ・二人は優しい音で表情豊かにピアノを弾いて
		54. 弾き合う連弾の面白さ (19-25)	一緒に弾きたい気持ちを快く受け入れる	・連弾用の『パヒュームメドレー』を2階の電子ピアノで弾き ・メロディーを楽しそうに歌いながら「どこやってんの？」

				<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノを中断せずに弾きながら楽譜の方に顎を突き出し、弾いている箇所を示す ・A子が一緒に椅子に座り弾き始める ・A子をリードしながら弾いて
			A子との演奏で難曲の連弾を楽しむ	<ul style="list-style-type: none"> ・弾き進みながら次のページをめくる ・複雑な楽譜を見て「なんだこりゃ」と呆れたように ・曲を止めることなく、二人は呼吸を合わせて弾こうとする
		55. 連弾により互いを理解 (19-25)	互いにピアノを弾くのを楽しみ理解し合う	<ul style="list-style-type: none"> ・『エンターティナー』『ゴリウオークのケーキウォーク』などを暗譜で中断なく弾き ・『進撃の巨人』を弾く ・「A、その曲好き」とまたいそいそとピアノに走って行き、一緒に弾き ・「いいね、ここ、好きでしょ？」 ・「B、好き」と答え ・「Aも好き」 ・メロディーを口ずさみながらステップを踏んで
	⑭ ピアノを通して周囲への配慮	19. 家族に配慮して弾く (6-9)	寝ている兄弟に配慮して暗いまま音量を下げピアノを弾く	<ul style="list-style-type: none"> ・A子とD男がまだ布団に横になっているので、暗い中でピアノの音量を下げ
		51. 相手に気を配りピアノを楽しむ (18-23)	思い出の曲を表情豊かに弾き楽しむ	<ul style="list-style-type: none"> ・思い出の曲『アラジン』の楽譜を広げ、アップライトピアノで弾き ・思いを込め美しい音色で表情豊かに雰囲気を出して弾いて
			家族を気遣いながら、ピアノを楽しむ	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノを弾くのをピタッと止めて ・またピアノを弾き始め

カテゴリーⅤ 【囚われず表現し、思うがまま演奏する喜び】

カテゴリー	概念	特性	バリエーション	ローデータ
△【囚われず表現し、思うがまま演奏する喜び】	⑮表現力豊かな演奏を志向	27. 動物の形態を表現して楽しむ (9-12)	動物の形態をピアノ曲で表現して家族と共に楽しむ	<ul style="list-style-type: none"> ・『エンターティナー』を軽快にスピードを上げて弾く ・ニコニコして母を見ながら付点を効かせて「象の欠伸」の雰囲気を出してゆっくり『エンターティナー』を弾き ・「速く」とアドバイス ・笑いながら嬉しそうに『エンターティナー』を、ネズミが逃げるような猛スピードで弾いて見せ
		57. ピアノが恋人 (19-25)	ピアノは大切な存在と認識される	<ul style="list-style-type: none"> ・「B君はピアノが恋人だ」 ・「1回モードに入るとそのままずーっと弾く」
	⑯曲をアレンジして楽しむ	39. アレンジでオリジナルな演奏 (12-17)	曲を自由にアレンジしオリジナルな表現を楽しむ	・『エンターティナー』のリズムやテンポを変えてアレンジし、色々なパターンを試すようにして弾いている
		41. 複雑なアレンジで楽しむ (13-18)	曲を複雑にアレンジして楽しむ	<ul style="list-style-type: none"> ・『エンターティナー』に付点を効かせたり、左手の伴奏を変えたりしてアレンジして弾いて ・『楽しき農夫』は伴奏部分に分散和音を使い複雑な演奏にアレンジ
		44. 魅力的なアレンジが(A子に)認められる (15-20)	アレンジを加えオリジナルな表現を楽しむ	<ul style="list-style-type: none"> ・『風の谷のナウシカ』の連弾曲を、ピアノを背にして後ろ向きになり、手を逆にして笑いながら弾いて ・『風の谷のナウシカ』を暗譜で楽譜通りに弾いた後、色々な弾き方を試みアレンジを加え ・アレンジした連弾を聴いていたA子は「つまんないから、アレンジしているんだ。カッコいい方がいいよね」
	⑰心の赴くま	47. 色々な曲を弾ける楽しさ	得意な曲を自由に弾いて楽しむ	・電子ピアノを弾き続けながら後ろを向き

	まに弾ける満足感	(16-21)		<ul style="list-style-type: none"> ・電子ピアノを弾く手は止めず ・合格した中でお気に入りの曲を思い出すままに次々と 20 分ほど弾いて
		28. リラックスして心のままに表現 (9-13)	リラックスして心のままに表現して弾く	<ul style="list-style-type: none"> ・リラックスして笑顔でピアノを弾き続けて ・『猫ふんじゃった』を弾いて ・今まで合格した曲をレパートリーを弾くように次々暗譜で弾き
		56. ピアノを自力で自由に弾く醍醐味 (19-25)	様々なジャンルの曲を自力で自由自在に弾いて楽しむ	<ul style="list-style-type: none"> ・リクエストに応え、テレビドラマの主題曲『ガリレオ』を弾く ・コンサートのように全部暗譜で次から次へと、流れるように軽快なピアノ演奏が続いている

備考：親のかかわり特性表

「ピアノ遊び」のカテゴリーⅠ 【ピアノで遊び、表現する意欲】

「ピアノ遊び」の 概念	親のかかわりの 特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
①ピアノに興味を 持ち鳴らしたい	カ. 弾いて遊びを 示す(2-3)	弾いてみせる	・『カエルの合唱』を母が弾き始める
	キ. 肯定的な受け 止め(2-3)	肯定的に反応する	・激しい音ではあるが、母は「力強い感じだね」と言う
②一緒にピアノで 遊びたいという意 欲的行動	ア. 一緒にピアノ を弾く(1-1)	一緒にピアノを弾こうと 抱く	・B男を抱きあげ、「B君と一緒に、ハッピーバースディ 弾こうかなあ～」と言いながらピアノの椅子に座る
	イ. 褒める(1-1)	ピアノを鳴らすことを褒 める	・「B君上手いんだよ。この間、B君ジャンジャンって 弾いてた」とB男を誉める
	ウ. 優しく受容 (1-1)	激しい行動も咎めず受け 止める	・咎めることなく優しく笑顔で受け止め
	エ. 膝に抱いて弾き 歌う(1-2)	抱いてピアノを弾き歌う	・母に抱かれてピアノの前 ・母が「どんぐりころころ」とメロディーを弾きながら 歌う ・B男は母の膝の上で鍵盤に両手を載せ
	オ. 優しく声かけ (1-2)	子どもに声をかける	・「Aちゃん、体中で（弾いている）」と笑いながら言う ・「B君も、のってきたなあ～、Bちゃん次なあに？」 と声をかける
	ク. 関心を示す (2-4)	子どもに楽しく反応	・母は「B君歌ってまーす」と言って、A子と歌う ・母は「B君もやってきた」と言い
		気持ちを汲んで遊びに誘 う	・母はB男に笑いかけ「Bちゃんも弾きたいかい？じゃ あBちゃんも一緒に弾く？」と抱き上げる
	ケ. 関心を持ち褒め る(2-4)	子どもに優しく反応し褒 める	・母は「あっ、上手上手、いいねー、力強いねえ～、お ー、はいはい、そうかー、B君うまいねー」と褒める が驚いて「すごーい」と褒める
③聴いてまねて弾 き遊ぶ	なし	なし	なし
④自身の気持ちを ピアノで表現	ヤ. 気持ちを理解し 愛情を示す (17-22)	嬉しさを理解し愛情を示 す	・「B君、完成の曲？」と笑いながら聞く ・母は「船が完成して嬉しくて、ピアノ弾いたのかと思 った。気分良くなっちゃったんでしょ、出来上がって」 と言う ・母は「それで弾きたくなっちゃった、可愛い」と笑う
		ハミングして褒める	・母も「牧歌」をハミングして「いいじゃん」と言う

「ピアノ遊び」のカテゴリーⅡ 【ピアノ技術の競合】

「ピアノ遊び」の 概念	親のかかわりの 特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
⑤ピアノ技術向上 への願望	なし	なし	なし
⑥ピアノ技術向上 への競い合い	ユ. 子どもに任せ見守 る（4-6）	自分達で解決するのを見 守る	・母は二人の喧嘩を見ていたが、止めることはせずに黙 って
	サ. 子どもの表現を肯 定的に解釈（4-6）	激しい表現に肯定的解釈 をする	・母が「音がとっても大きく聴こえるんだけど、何でだ ろう、Aちゃんの指の力が強くなった」と言って音量 を下げる
	シ. 危険に的確な注 意（6-8）	危険なことは注意	・母は驚いて大声でA子に注意 ・母はA子の所へ行き、布団をピアノから離し「気をつ けなさい、Aちゃん危ないよ」と静かに言う
	テ. 気持ちを汲む （9-13）	子どもの側に立つ発言	・母はA子を擁護するように「（A子は）疲れちゃった」 と呟く
⑦ピアノ共有への 交渉	なし	なし	なし
⑧ピアノ技術向上 の認め合い	ス. 共に歌い共感 （9-12）	ピアノに合わせて歌い共 感	・母はB男の曲に合わせて歌い「聴いていると仕事が進 みそう」と言う ・母はそれに合わせてゆっくりメロディーを歌う ・母が曲に合わせて「キャ！」とネズミの声を入れ
	リ. 力量を認め称え る（9-12）	ピアノ技術を認め称える	・「凄いねー！Bちゃん、ピアノ弾けて凄いね～」と言 う
	フ. 子どもを理解し 兄弟間の調整 （12-17）	子ども達の長所を理解	・母が「大丈夫だよ。Aちゃんが見本になってるんだか ら」と励まし ・母が「優しいね～」とA子に言う
		子どもの真意を兄弟に伝 える	・母はB男がピアノで兄弟を抜くという気持ちはないと A子に話す
	ホ. 音楽的成長を褒め る（13-18）	関心を持って聴いている	・母が「なんかBちゃん、オリジナル？」と言う
		表現を褒める	・母は「凄いね！」と感心したように言う

「ピアノ遊び」のカテゴリーⅢ 【憧れを抱いて努力する充実感】

「ピアノ遊び」の 概念	親のかかわりの 特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
⑨憧れを抱き達成 への期待感	ニ. 気持ちに寄り添 い応援（11-15）	弾きたい気持ちに寄り添 い応援	・ 母が、「B君も弾いてみて、昨日の・・・」と言う ・ 母は洗濯物を干しながら、「弾きたいの?」と聞き ・ 母は「待ってるの?」と笑いながら優しく言う
	ヌ. 気持ちを汲んで 明るく励ます （11-15）	気持ちを理解し、明るく 心を通わす	・ 母は健気なB男の姿に「かわいい!もうムズムズって いう感じ?」と言い身体をよじるジェスチャーをし、 持っていた洗濯物でB男に「いないいないばあ」をし て笑う
	ノ. ピアノの楽しさ を共有したい （11-16）	優しく説明する	・ B男と一緒に腰掛け譜読みに付き合おうとする ・ 父はB男を懐に抱くようにして楽譜を指さしながら優 しく説明する
		一緒に弾き面白さを知っ て欲しい	・ 真剣に弾いているB男の左手の甲に父が左手を重ね、 歌いながらタイミングを合わせてピアノを弾き、「面 白いでしょ」とB男に言う
		楽しさを知って欲しい	・ 父は楽譜をめくりながら「楽しいね。これ（ピアノ名 曲選集）ね」と笑顔で言い
	ハ. 子どものペース を尊重（11-16）	子どものペースに合わせ 弾く	・ 父は「ゆっくりやろうか」と言って、B男が右手で弾 くメロディーに父が左手のメロディーを合わせて一 緒に弾く
	ミ. ピアノを共に楽 しむ（15-20）	子どもに関心を持ち一緒 に弾こうとする	・ 帰宅した父がピアノに直行しB男の座っている椅子に 一緒に腰かける
曲を楽しむ		・ B男の後ろに立っている父は「いい曲だなあ～」と嬉 しそうに笑って	
⑩忍耐強く挑戦を する持続性	タ. 関心を示す （9-13）	関心を持つ	・ 母があまり聴いたことがない曲なので何の曲か聞く
	チ. アドバイスで励 ます（9-13）	アドバイスをして励ます	・ 「1個1個読めば分かるよ」と母が励ます
	ツ. 頑張りを労う （9-13）	頑張りを労う	・ 母が「分かってきたでしょ」と応える ・ 母は「ずっと弾いてたね」と感心したように言う ・ 母は「その位弾いてたかな」とB男を労う ・ 笑いながら「のびてます、のびてますB様」と母が言 う
	ヘ. 歌って応援 （12-17）	応援して歌う	・ 母が応援するかのよう『月の光』のメロディーをラ ララと歌う
⑪憧れの曲を夢中 で弾く充実感	ヒ. 子どもの気持ち に同意（11-16）	子どもの気持ちに同意す る	・ 父も「疲れるよね～」と応じ、B男の身体を後ろから 包むようにして弾いている

			・ 父も「疲れるね～」と言って楽譜を閉じる
	㊦ 関心を持ち褒める (11-16)	関心を持って褒める	・ 父が「(月の光) 弾けるの? Bちゃん。カッコいいじゃん」と言いながらピアノに歩み寄り ・ 父が「あぁいい感じだ。カッコいいね」と言う
		一緒に楽しんで弾き褒める	・ 父は微笑みながら一緒に弾き続け「いい感じ、凄くいい感じ」と嬉しそうに言う

「ピアノ遊び」のカテゴリーⅣ 【共に歌い弾く楽しさを享受】

「ピアノ遊び」の 概念	親のかかわりの 特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
⑫ピアノに合わせ 歌う一体感	モ. 共にハミングし 歌う（16-21）	曲に合わせてハミングを する	・ 母が片づけをしながらB男が弾いている曲をハミング で歌う ・ それに合わせて母もまたハミングをする ・ 母も合わせてハミングで歌い
⑬連弾による音楽 の生成	ム. 子ども目線で楽 しむ（15-20）	ふざけて子どもとピアノ を取り合う	・ 父が「やるか、じゃあ、パパがやるか、やるか」とふ ざけてピアノを弾こうとする ・ 父は笑いながらA子に席を譲る
	メ. 子どもを見守り 適切に援助 （15-20）	子どもが弾こうとするの を援助	・ 母はそれを見てB男が連弾を待っているとA子に言う
		子どもが弾くのを見守り 援助	・ 父はピアノの椅子の背に両手を乗せ、二人が弾くのを 見守りながら楽譜をめくる
		スキンシップで励ます	・ B男の指が縫れそうになると父はB男の髪の毛を撫で る
		楽しくアドバイス	・ 父は「ここをもっとゆっくりするとカッコいいよ」と 楽しそうに笑いながらアドバイスをする
⑭ピアノを通して 周囲への配慮	ユ. 兄弟間への気配り （18-23）	弾けるように兄弟を調整	・ 母がD男に「あっちの部屋でやったら」と言って

「ピアノ遊び」のカテゴリーⅤ 【囚われず表現し、思うがまま演奏する喜び】

「ピアノ遊び」の 概念	特性	バリエーション	ローデータ（下線部分）
⑮表現力豊かな演奏を志向	セ. 動物表現のリクエスト（9-12）	リクエストをする	・「じゃあ、あれ、象の欠伸」とリクエストする
	ト. 一緒に盛り上げ楽しむ（10-14）	一緒になって盛り上げ楽しむ	・母も一緒にリズムを歌い身体を動かし「そうだ、そうだ、始まって来たよ。蒸気機関車だ」と言って ・母も曲に合わせ「ラララ」と歌い笑う
	ナ. アイコンタクトを交わす（10-14）	アイコンタクトで意思を通わせる	・ピアノを弾いているB男と顔を見合わせる
⑯曲をアレンジして楽しむ	マ. 感情豊かに褒める（15-20）	弾き方に驚き褒める	・母が「凄い！モーツァルトみたい！」と驚く
⑰心の赴くままに弾ける満足感	ミ. 親を超えた子どもの成長が嬉しい（19-25）	高度な連弾曲に関心を持つ	・余りに難しそうな曲なので母が、「パパ、パパ、今の曲って誰が弾くの？」と聞く
		子どもが上達し一緒に弾く連弾が大変であり嬉しい	・「あれ～、パパと弾くやつ？」と笑いながら父が答える ・父も「弾けないの、難しい、すごい難しい。」と困ったように笑いながら言う ・母は一瞬哑然として「うふふふ～、う～ふふふ～ほほ～」と複雑な笑いをする
		子どもの成長が嬉しい	・父も「ずっとやってんだよね」と嬉しそうに言う

謝 辞

本研究は17年という長い年月を要し、14年間のフィールド観察と、Grounded Theory Approachの質的研究法の分析により、「ピアノ遊び」を通した主体的表現形成の要因を明らかにし、理論仮説を生成することができました。その間、本当に多くの方々にご協力いただき、ご指導を賜りました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。この研究が、未来からの使者である子どもたちの成長の一助になれば望外の喜びです。

聖徳大学大学院児童学研究科の増井三夫先生には、私が満期退学した後もそれまでと変わらず、ゼミの度に圧倒される大情熱と真剣勝負のご指導を賜りました。心より御礼申し上げます。また、有働玲子先生、福沢周亮先生にはご専門のお立場から貴重なご示唆をいただきました。そして大学院博士後期課程の増井ゼミの4人姉妹である砂村京子先生、桐川敦子先生、黒澤寿美先生、山崎幸子先生には、カンファレンスにお付き合いいただくだけでなく言葉に尽くせないほどお世話になりました。つつがなく成稿できたことを、聖徳大学のすべての関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

そして14年もの長い期間、観察対象児家庭として研究にご協力くださったY家の皆様の存在がなければ、本研究は成立しませんでした。それぞれのご実家のご両親様にも大変お世話になりました。Y家の4人のお子さんたちが、現在素晴らしい青少年に育っていることは、私の研究への確信となっております。また、ピアノ教室のすべての生徒さんご家族の皆様にも多大なご協力を賜りました。本当にありがとうございました。

カンファレンスにご協力下さった先生方には、貴重なご示唆を賜りました。またアンケートにご協力下さった127名のピアノの先生方と保護者の方々のご意見は、今後の研究に生かして参ります。大変にありがとうございました。更に尽力して下さった亀井地素子さんの友情に感謝します。

学問の素晴らしさを教えて下さり、東京学芸大学大学院時代から、日本女子大学、聖徳大学へと導いて下さった小川博久先生、そして小川ゼミの皆様、長い間見守って頂きありがとうございました。新山真由美先生には、挫けそうになる度に激励を頂きました。そして小林千佐子様との出会いが全ての始まりでした。1995年に、「ピアノ遊び」を学問的に裏付けるために大学院進学という思いがけない人生の目標を示して下さい、以来ご心労を掛け続けて参りました。深く感謝申し上げます。

最後に家族の皆さん、突然の研究生活の開始から20年以上常に支え続けてくれ感謝しています。その間に子ども達は成長し結婚し、3人の孫娘も誕生しました。先日5歳と3歳の孫から、「おばあちゃま、おべんきょうがんばってください。」との覚えてたの文字で書いた手紙が届き感動しました。

本研究を新たな人生の門出と位置付け、今後は「ピアノ遊び」を通して未来の人材の育成・輩出に寄与できるよう、更なる努力と研鑽を重ねて参ります。末筆になりましたが、ヤマザキ製本所の社長様ご夫妻には、温かい対応をして頂きありがとうございました。

全ての皆様のお力添えとご厚情に深く感謝申し上げ、ご健勝とご繁栄をお祈り申し上げます。

2016年10月

奥村直子